

艦隊これくしょん—黒き亡霊の咆哮—

ハチハル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死は生に誘われ、生は死へ導かれる――
ゲーム「艦これ」の提督だった青年は、憧れていた艦娘たちの司令官となった。

彼の前に立ちはだかるは、過去に囚われた亡霊。

これは、一人の青年が流れ着いた並行世界の物語。

彼は艦娘と共に戦い、何を得るのか。

神々の戦いの前に、何を見出すのか。

第2章、護国騒乱編。

それは、決別の物語。

※本作品には、紀奈様のご承諾により、「艦これ」二次創作オリジナル艦娘である「三笠」が登場します。

目次

序章―プロローグ―

壹 呉爾羅

貳 深海棲艦と人類

第1章 並行世界着任編

第1話 着任、孤島にて

第2話 響く青

第3話 破壊神、記憶の欠片

第4話 原初の艦娘

第5話 再会・前編

第6話 再会・後編

第7話 二人の決意

第8話 到着、横須賀鎮守府

第9話 面会と演習見学

第10話 親友の娘

第11話 距離

第12話 戸惑い、そして

第13話 その男は

第14話 悪しき黄金

第15話 炎と黄金

第16話 小さき来訪者

第17話 白浜に立つ

第18話 亡霊来襲

第19話 想いと影

第20話 因縁の対決

1

5

8

25

41

55

69

80

92

106

118

131

146

159

170

186

198

209

221

232

241

252

	第21話	仲直り	265
	第22話	孤島の6水戦	277
	第23話	戦う理由	294
	第24話	送り出す者	307
	第25話	初陣、救出	319
	第26話	Marcus	334
	第27話	変わっていくもの	348
第2章 護国騒乱編			
Task	00	始まりの地	362
Task	01	八重山列島の戦い・始動	370
Task	02	八重山列島の戦い・剛敵	384
Task	03	八重山列島の戦い・陰影	398
Task	04	八重山列島の戦い・青花	406
Task	05	八重山列島の戦い・変化	419
Interlude	01	辿り着く地で	433
Task	06	八重山列島の戦い・傷跡	444
Task	07	想いは果てず	455
Task	08	不安、心の壁	466
Task	09	歪んだ心	477

序章―プロローグ―

壱 呉爾羅

かつて、日本を襲った1体の怪獣がいた。その名は、「ゴジラ」。人の手によって安住の地を追いやられた彼は、日本に上陸し、東京を尽く焼き払ったと言う。戦後、僅か9年のことだ。街には、人々の悲鳴が響き渡ったと言う。

その彼は、人の手で作られた新兵器によって、東京湾に姿を消した。ある者は言った。

「人間が住処を奪っておきながら、人間の都合で人間が奴を殺す。なんて身勝手なんだ」

その日を境として幾度となく、日本や世界は怪獣たちの脅威に晒されることになった。しかし、そこにはゴジラはいなかった。

やがて人々は怪獣を打ち倒すことに成功し、歓喜していた。これで、我々の未来は安泰だと。

それを、許さない者がいた。2体目のゴジラだ。実に30年が過ぎた頃だった。

彼は東京を、日本を、世界を再び恐怖に陥れた。人々は必至で抵抗したが、ついに倒すことは出来なかった。彼の命は、彼の自滅という形で、静かに幕を下ろす。それに歓喜した者もいれば、心の底から涙した者もいた。

日本はそれから、新たに4体のゴジラを目撃した。3体目については、全くの無害だった。寧ろ、人間を助けようとする怪獣の中でも稀な個体だったと言われている。

合わせて6体の荒ぶる神々のうち、もつとも厄介なのが4体目だった。

どの個体、どの怪獣と比べても残虐非道極まりない、真の破壊神とも言うべき存在だった。彼は全てのモノを破壊しつくす。クニを護る聖獣たちも、ついに彼を倒すことは出来なかった。

ある者は、かつて戦争で散った人々の怨念だと言った。

それを聞いたある者は、日本に帰って来た残留思念だと言った。本当のところは、誰にも分からない。彼には、人の数だけ様々な解釈のしようがあった。ただ一つだけ言えるのは、それが怨念・怨霊の類だということだ。人々を恨み、崇る存在。

それが何故なのかも、今では誰も分からなくなってしまった。一度倒された筈の彼は、再び復活してしまったのだ。戦争という、人々の想いが混ざり合う、愚かとも言うべき場所の前に。

再び復活した彼は、かつてとはまた別の存在となっていた。成り果てた、と言うべきなのだろうか。

彼は気まぐれに戦場に姿を現しては、人々の争いを踏みにじっていった。人々が持つ、正義や悪——そんなものは一切関係無く。

その姿は人々に、どのように映ったのだろうか。

己が「正義」を振りかざし、戦争を潰して酔いしれているのか。

戦争を憎み、それを行う人々を根絶やしにしようとしているのか。

人々の記憶に今再び、刻み付けようとしているのか。

ある人は言った。

「もう、あの頃のゴジラではないのか」

その存在は、人々の無念の想いを吸い上げているように見える者もいたと言う。倍以上に大きくなってしまった姿が、その証拠なのだ。そうだ。

その話を信じるとするならば、彼は「太平洋で散っていった人々の怨念」から「戦争で散っていった世界中の人々の怨念」に変わったとしても言うべきなのかもしれない。

だが、かの老人は言った。

「ゴジラの本質は、何も変わっちゃいない」と。

ある女性は、その老人に聞いた。——その老人が、何十年も前と変わらない姿でいることにある種の恐怖を覚えながら。

「本質、ですか……？」

「艦娘、は知っているか？」

女性は、首を縦に振る。確かここ10年ほどで実用化された、対深海棲艦用の兵器だ。

「それが、なにか関係が……？」

老人は、につこりと柔和な笑みを浮かべる。あの時と、何も変わらない、優しい笑みだ。

「彼女たちが、それを何よりも物語っている」

女性は、意味が分からなかった。いや、その言葉を聞いて理解出来る者が何人いるだろうか。

問いただしても、老人とて答えられないだろう。

ある者は、歓喜に震えた。

「人間どもに、戦争の愚かさを伝えてやってくれ」と。

ある者は、怒りと憎しみに震えた。

「大切な家族を私利私欲で奪ったお前を、殺してやりたい」と。

怨霊は、世界中から注目を浴びた。しかし誰も、彼を理解することは出来なかった。

時に残虐非道な行いをするかと思えば、呑気に昼寝をする姿さえ見られた。それを「可愛い」という者も現れたが、決まってそういう人は袋叩きにあった。

何せ、何万もの命を奪ってきた破壊神だ。そうそう、忘れられるわけが無い。日本では特に、その傾向が顕著だった。

その巨大な体躯が持つ真つ白に濁った瞳は、何を見るのか。そこに、一切の感情移入は許されない。

彼は一度人の前に姿を現せば、しつこく蹂躪するのだ。

何度も、何度も、何度も――。

そこに、目的など何も無い。あるとすれば、人々への恨みだけ。

何度、人々が彼のことを考え、議論しても答えは出なかった。出るはずも無かった。

住処を追われ、人の街を襲ったゴジラ。

どこからともなく現れ、核のエネルギーを求め、同族を守るゴジラ。人の手で保護され、密接に関わりあいながら、人懐っこく成長したゴジラ。

同族の骨を求め、繰り返し日本にやって来て、やがて海に帰ったゴジラ。

古代の覇者、全生物のトップに君臨していた、自らの生存を賭けて戦うゴジラ。

かの怨霊は、そのどれとも違った。

海で目覚めた彼は、全てを否定し、全てを壊す。

彼は、何処から来て、何処へと向かうのか。

それが分かる者は、どこにもいない。もしかすると、当のゴジラですら分からないのかもしれない。

ただ一つ、人類が共通して出した答えは。

彼をこのまま野放しにしておいては、人類はやがて破滅してしまうだろう。ならばその前に、倒してしまわなければならない。

——— 深海棲艦もろ共に。

式 深海棲艦と人類

深海棲艦。そう呼ばれている正体不明の生物群がいた。

彼らは突如として現れ、2年で人類から制海権を奪い取ってしまった。

既存の兵器は全く効かず、核兵器にまで頼ったことがあったが、一時的に殲滅出来ても、すぐに別の群団が現れて補ってしまふ。放射能汚染も物ともせず、我が物顔で悠々と航行している姿が目撃され、この方法も挫折することになる。

あまりにも数が多く、世界各地に散らばっているからだ。しかも、活動領域は海。人類にとつて、始まりの場所であり、いつ何時も欠かせない領域。そこが、奪われてしまったのだ。

第3次世界大戦中、彼らによって小さな島々から構成される国々は、再編を余儀なくされた。人々は強制的に移住させられ、無人島になったところさえある。特に、東南アジア・オセアニアでよく見られた光景だった。

日本も例に漏れず、離島を中心として避難が行われた。戦時下体勢に元々あったため、北はアメリカと共に奪取していたクリル列島のうち、択捉島まで後退。南では小笠原諸島を放棄。沖繩方面では、一部の住民を除いて沖繩本島に県民が集められた。

深海棲艦はその生命力と制圧力により、人類に打撃を与え、大戦すらも終結に向かわせてしまうほどの影響力を見せた。

世界は何としても、深海棲艦に対抗する必要があった。しかし、明確な答えを誰も見つけられずにいた。

そこに一つの解決策を見出したのが、日本だった。

かつての軍艦たちの記憶を宿した、武装を施された乙女たち。彼女たちは、手始めに小笠原諸島を奪還して見せる。

この報が世界中を駆け巡った時、多くの人々が歓喜に沸いた。艦娘を自分たちの国にと、希望する者も現れた。

しかし、艦娘の真実を知る者たちはそれを断り、それでも尚諦めきれずに真実を知ったものは、再び独自の道を歩んでいくしかなかった。

た。

誰かが、去り際に見送りの日本人にこう言ったという。

「貴方たちはあの亡霊で、一体何を為そうとしているんだ」

そんな人間たちを余所に、深海棲艦は海の占拠を続ける。

彼らの存在は大戦を終結させたが、同時に新たな戦争の火種ともなった。

人間同士の戦争の。

シーレーンが破壊され、国境再編が進むことに異を唱える者たちは、当然の如く現れた。時には過激な行動により、激しくぶつかり合う。

深海棲艦と戦う力を得た日本の国民は思った。

こんな時に、内輪揉めをしている場合じゃないだろう。

誰しもがそう考えたわけでは無いが、しかし追いつめられていた人々の多くが、そんな想いを持っていた。

しかし、そんな彼らに対して、日本人は何もしなかった。何も出来なかった。手を差し伸べることをしなかった。

深海棲艦、そして怪獣という脅威の前に、彼らは自分たちのことで精一杯だったのだ。

少女は、その矛を穿つ。

「勝手は！ 榛名が！ 許しません！」

少女は、夜の海を切り裂く。

「魚雷次発装填済みです。これからです！」

艦娘は、海を航海する。

深海棲艦によって奪われた海を、解放するために。

深海棲艦は、海を航海する。
その目的は、彼らにしか分からない。

彼らは、海を航海する。
己が内に秘める、譲れないものを守るために。

そして彼女は、黒き亡霊の咆哮を前に、何を思うのか。
彼らは、黒き亡霊の咆哮に、何を恐れるのか。

彼ら彼女らの戦いが、始まる。

第1章 並行世界着任編

第1話 着任、孤島にて

2015年5月5日。白瀬拓海しらせたくみは、強く照り付ける日差しに目を細めながら、飛行機のタラップを降りた。視界に入るのは、長い滑走路とこの字に曲がった島に囲まれた青い海、そして点在するいくつかの建物だ。

「どうだ。驚いたか？」

声が聞こえて、拓海はタラップの方を振り返って見上げる。

視線の先には、薄く笑みを浮かべて飛行機から降りて来る日焼けで肌が黒くなっている男がいた。

「どうだ……って、お前。どんな裏技使ったんだよ……」

拓海は呆れ半分、驚き半分でタラップを降り切った男に言う。

彼は、鳴川光樹。拓海と同じ年で、今年同じ大学に入った友人だ。彼は、色んな場所を旅行することを趣味の一つとしている。

「裏技も何も、チャーターしたんだよ。アメリカの友達に、お願いしてさ」

「お前、一体何人友達いるんだよ……」

「数えたことないな。それより、もっと近くで見てみないか？ 海」

目を白黒させている拓海を余所に、光樹は荷物片手に海岸へ向かう。

ここは、アメリカ合衆国の離島、ウエーク島だ。

かつて第二次世界大戦では日本軍が一時占領し、「大鳥島」とも呼ばれたこともある。

人口は200人ほど。その内訳は、米軍の軍人と現地の島民となっている。

諸事情から観光は出来ないと拓海は聞いていたが、ゴールデンウイーク前にウエーク島の話になった時に、光樹が突然、行こうと提

案してきたのだ。

日程が決まってからは、とんとん拍子。何が何だかわからないまま、飛行機を乗り継いでいるうちに、この島に着いてしまったのだ。光樹は以前から行動力があり、世界のあちこちに行っていたようだが、まさかこんなことになるとは想像していなかった。持つべきものは友達——とでも言うべきなのだろうか。

鳴川光樹とは、高校時代にブラウザオンラインゲーム「艦これ」を通して知り合った。

元々お互い別の高校に通っていたが、自身が出ていた高校サッカーの選手権大会の時に、ストリートライブで「艦これ」の曲をキーボードで弾いていた光樹と出会った。

それから「艦これ」のことや色んなことを話しているうちに、親友と呼べる仲にまでなり、偶然にも大学が同じになって、こうして一緒に行動している。

軽く溜め息を吐きながら後を追うと、光樹は荷物を放り出し、浜辺で海と戯れていた。

「拓海もこっち来なよ。気持ちいいぞー」

海水をばしやばしやと踏みながら、光樹は大きく手を振ってくる。

「ま、折角来たんだし……。少し遊んでいくか」

拓海は一人呟いて笑うと、光樹のいる方へトランクを引きながら走って行った。

10分ほど浜辺で遊んだ頃、そろそろ島内を回ろうかと光樹が提案してきた。拓海はそれに乗り、放置していた荷物の所に戻っていく。足に付いた砂を払い、靴下と靴を履き直し、荷物を整理する。

手早く準備を終え、光樹と共に海を見たとき、拓海は妙な違和感を覚えた。

「なあ、光樹」

「どうした？ 行くぞ、拓海。あんまり時間はないんだからさ」

「それは分かってるけど。海の向こう、なんか変じゃないか？」

拓海は目を細めながら、コの字の湾を指差す。

光樹も湾を見るが、首を傾げる。

「気のせいじゃないか？ 至って穏やかじゃないか？」

「そう……かな」

釈然としないまま視線を下ろし、荷物に手を伸ばす。

荷物を担ぎ上げて浜辺から上がろうとしたとき、滑走路の方から焦った声で叫ぶアメリカ人が目に入った。

「光樹、あの人が何て言ってるんだ？」

あまりの慌てように、拓海は同じく荷物を担ぐ光樹に翻訳を頼む。

「えーつと……。逃げろって感じのことを……」

光樹は訳しながら、もう一度湾の方を振り返る。それから目を見開くと、焦ったように拓海の肩を叩いた。

「拓海、逃げるぞ」

「は？ 何を——」

聞き返しながら海を見たときには、既に遅かった。

大きな波が、拓海と光樹の目の前に覆いかぶさってきていたのだ。

二人はなす術も無く呑み込まれ、流されていく。

「ぶはっ！」

拓海は海面から必死に顔を出しながら、光樹の姿を見つける。

彼も同様に流されているが、拓海と違って溺れかけているのか、懸命に手をバタつかせている様子が見える。

光樹の方へ泳いでいこうとするが、波の戻る力が強いのか、全く進むことが出来ない。

「こう、き……」

何度も抵抗を試みるが、ついに叶わず、拓海も海に沈んでいく。

ふと、拓海は島に立つ不思議な風貌をした、男性の老人を見かける。しかしその男が誰なのか、考える間もないまま力尽き、海に呑み込まれていった。

波打つ音が聞こえてきて、拓海は目を覚ます。

「ごほっ、ごほっ！」

激しく咳き込んで海水を吐き出しながら、拓海は照り付ける太陽と白い砂浜に目を細めた。

身体に怠さを覚えつつ、ゆっくりと上半身を起こし、頭を振る。

「確か、ウエーク島で波にさらわれて……」

海水に濡れて肌に吸い付く衣服に不快感を覚えながら、拓海は辺りを見回した。

照り付ける太陽が眩しい、真っ青な空。一直線に伸びる海岸線と、それに沿う真っ白い砂浜。透き通った青い海。見たことの無い、3階建てで黒っぽい灰色の無骨な建物。その向こうに海が見えるところからすると、どうやらここは別の島らしい。

一体、ここは何処なのだろうか。まるで見当が付かない。ただ、何となく見たことのあるような気がする。

「光樹は……」

彼もまた、波にさらわれていた。この島に流れ付いているのなら、探さなければならぬが、身体が重くて上手く動かない。

「だはっ！」

声を漏らしながら、大の字で仰向けに寝転がる。

口から息を吐き出し、背中に砂の心地良い感触を覚えながら、拓海は空を見上げた。

「全く、なんでこうなるんだよ」

思わず、行き場の無い愚痴が突いて出る。

ウエーク島は、あんな波が起るような場所だっただろうか。それとも、どこか遠くで地震が起きて、その津波に呑み込まれてしまったのか。

漂流してここに打ち上げられたのだろうか、そもそもこの場所が何処なのかもまるで見当が付かない。人が無いところからすると、無人島だろうか。

荷物は無事だ。中身も欠ける物は無い。パスポートもある。しか

し——。

「助けが来るまで、どうやって過ぐせば……」

幸い食べ物と飲み物もあるが、500mのペットボトルと携行食品しか入っていない。仮に助けを呼べたとして、これではとてもじゃないがやっていけないだろう。

それからどのくらい、時間が経過しただろうか。

いつの間にか眠りに落ちていた拓海は、誰かが身体を揺すり自分を呼ぶ声に意識を取り戻す。

「大丈夫ですか！ 聞こえますか!？」

若い、自分と近い年頃の女性の声が聞こえる。しかし、どこかで聞いたことのあるような声だ。と言うか、聞き慣れた声だ。

一体、誰だろう——。

そう思いながら目を開けると、こちらを覗き込む少女と目が合った。

流れるような長く艶っぽい黒髪に、茶色がかった瞳。肩を剥き出しにして赤い筋の通った巫女服のようなものに袖を通した少女の顔は、よく整っていて一目で見ても美少女だと分かる。

頭には、髪を留める2本のピンと黄色いカチューシャがあり——

「はあっ!？」

びくりと身体を震わせて驚く少女をよそに、拓海は飛び起きる。

真正面から向かい合い、拓海はしゃがんでいるその少女の頭の前から足元まで目を凝らす。

「夢?」

目を擦りながらも一度見てみるが、少女が目の前から消えるようなことは無かった。

今度は、自分の頬を自分で何度もつねったり叩いたりしてみる。しかし間違いなく、頬には痛みが伝わっていた。

「夢じゃない……………」

もう一度、少女の全身を眺めてみる。

少女が、拓海が突然始めた行動に混乱している中、拓海は自分の目が間違っていないことを確かめた。

——どう考えても、あの子以外にあり得ない。

「き、君……。戦艦、榛名……。だよな?」

拓海の問いに少女がピクリと動きを止めると、整った目鼻立ちの顔を驚きに染めていく。

「は、はい。私は金剛型戦艦3番艦、榛名です。私を、ご存じだったのですか……?」

間違いない。

パツチリとした茶色混じりの瞳、頭の電探のような形のカチューシャ、流れるようによく整った黒い長髪、巫女服をアレンジしたような衣装、それに赤いスカート——。

戦艦榛名。

ブラウザゲーム「艦これ」で拓海が溺愛していた、紛れも無い彼女の本物だ。

拓海は自分の目を疑った。いや、既に何度も確かめているから、これが現実であることはとうに受け入れていた。恰好も間違いない。声も間違いなく、あの声の妖精さんと全く一緒だ。

しかし、コスプレでも何でも無く、どう考えても本人としか思えない女の子が、自分の目の前にいることが、拓海は信じられずにいた。

目の前にいるのは、榛名。一度話し出すと止まらなくなってしまったほど、愛してやまなかった艦娘だ。

改二実装日にはレベル99で即改造。ケツコンカツコカリが導入されてから、初めてユビワも渡し、あつという間にレベル150にした。制限があるとき以外は、ほとんどの海域出撃でも欠かしたことがないほどだ。

旅行でも、榛名フィギュアやストラップを必ず1個か2個は持ち歩く。

親友である光樹にすら「ちよつとキモいぞ」と言われてしまうほど、溺愛していた子だった。

そんな子が、すぐ目の前にいる。

それだけで拓海は、たちまちテンションが最高潮に達した。

時間を掛けてこれが現実だと認識すると、拓海は考えるよりもまず先に、身体が動いていた。

「榛名ああああ!!」

「きゃあああッ!」

押し倒さんばかりの勢いで拓海は榛名に飛びつき、がっちり抱きしめる。

驚きのあまり硬直している榛名の髪からは、汗とシャンプーが混じったような香りが漂ってくる。その匂いで、拓海は確かにこれが現実なんだと、我を忘れた頭の中で認識していた。

「榛名……榛名が、本当に目の前に出て来るなんて!」

命からがら助かったこともあってか、拓海は急に感極まって涙声になる。

そこで我に返ったのか、榛名が腕の中でモゾモゾと身動きを始めた。

「榛名……?」

不審な動きを始めた榛名に、拓海は声を掛けるが彼女は答えない。

やがて、腕を振りほどき――。

「勝手は!」

腕を解かれてバランスを崩した拓海の胸を突き飛ばす。

「榛名が!」

右手を目一杯挙げると、拓海の左頬に思いきり叩きつける。

「許しません!!」

「ふがつ!」

抵抗する術も無く、拓海は榛名の張り手を受けると、右肩から砂の上に倒れ込んだ。

それから自分が張り飛ばされたのだと分かるまで、拓海は波の音を3度聞きながら茫然としているのだった。

「ほんつとうにー…ごめん!!」

その後何とか起き上がった拓海は、顔を真っ赤にして落ち着かない

表情をしている榛名に向かって、誠心誠意を込めた土下座をしていた。

「初対面の人に抱き付かれるなんて、榛名、思ってもみませんでした」襟元を直しつつ、榛名は拓海から視線を外したまま呟く。

これは、完全にやってしまったパターンだ。こちら側が一方的に知っていたのはいいとして、初対面の相手に抱き付くなど、言語道断だ。興奮し過ぎて、完全に我を失っていた。

後味の悪い想いをしながら、拓海はもう一度頭を下げる。

「本当に、ごめん！ まさか、本物がいるなんて思わなくて……」

つい、言い訳がましい言葉が口を突く。

ただ謝るだけでなく、どうしてこんな行動に走ってしまったのかを分かってもらいたい一心だったが、流石に往生際が悪かっただろうか。

そんな風に思っていると、頭の上から榛名の声が降って来る。

「本物って——。そう言えば、ここの砂浜に倒れていらっしやいましたよね。一体、どうされたんですか？ 見たところ、旅行をされていたようですけれど」

頭を上げると、榛名が旅行用トランクを脇に見つつ、拓海を真っ直ぐ見つめていた。

榛名の口調から察するに、彼女は元々ここに居たようだ。どういう事情で、この無人島としか思えない場所にいるのかは、分からない。視線に気まずさを覚えて拓海は目を逸らしつつ、ここに至るまでの経緯を、順を追って説明した。

「このパスポート、本当に本物ですか？」

あらかたの説明が終わった頃、榛名が手渡したパスポートを片手に尋ねて来る。

開いているページは、最後の出国スタンプが押されたところだ。スタンプには、「3. MAY. 2015」の日付が記載されている。防水性の高いトランクのおかげで、滲んでいるところは全く無い。

「そうだけど……。って言うか今日って、2015年の5月5日だよね？ ほら、子どもの日の——」

榛名の反応に戸惑いつつ、拓海は今日の日付を確認してみる。一日や二日のずれはあるかもしれないが、一応合っているはずだ。スマートフォンの内臓時計も、間違いなくそれを示していた。

「あの、大変言いにくいことなんですが」

「ん？ どうしたの？」

「今日は2048年の、5月5日ですよ？ 子どもの日も確か、18年前に廃止されている筈ですが……」

——何だって？

まるで意味が分からなかった。

今から、33年後ということだろうか？ まさか、自分はタイムスリップをしてしまったのだろうか。いや、そもそも何故、自分がタイムスリップを——。

途端に混乱して、拓海はパスポートと自分のスマートフォンを何度も見比べる。どこにも、間違っているところなんて無いはずなのだが。

「それに今は戦時下ですから、国民の海外旅行はまず認められないと思います。何より、海の上を飛ばないといけない日本の場合は、危険ですので」

戦時？ 海外旅行が出来ない？ 海の上が危険？

「ちよつと待って。戦時下って、今、日本ってどっかと戦争してんの？」

ロシア？ 韓国？ アメリカ？ 中国？ いや、まさか。あり得ない」

話に全然ついていけない。そもそも自分が知っている日本は、すぐにでも戦争になるような状態になっていただろうか。ましてや、ロシアやアメリカなどと戦争などもっとあり得ないし、例えたとこで力の差は歴然だ。

榛名も拓海との間に大きな隔たりがあることに気付いたらしく、困った顔をしている。

「ええっと。日本が戦争をしているのは確かですが、日本ではありま

せん」

「そ、それじゃあ、戦争する相手って」

「深海棲艦です」

榛名から発せられた言葉は、普通ならば到底信じられない様なものだった。

しかし、拓海は心のどこかで納得していた。いや、目の前に榛名という「艦娘」がいる時点で、何となく予感はしていたのだ。その予感が、無情にも当たってしまった。

「それ……マジ？」

「本当です」

大真面目な顔で頷く榛名に、拓海は半分放心状態になる。

深海棲艦。

ゲーム「艦これ」のプレイヤーならば、誰もが聞き慣れている敵の総称だ。

どこからやって来たのかは分からない、艦娘に近い形態を取った謎の生物群。そんなものが、現実の世界で海を闊歩しているというのだ。

それ自体は、信ずるに値するだろう。彼ら——いや、「彼女ら」と戦う力を持った艦娘の一人が、こうして目の前にいる。それだけで、証拠になろうというものだ。

それなら何故、深海棲艦は現れたのだろうか。自分がタイムスリップしている間に、現実のものとなってしまったのか。彼女らに対抗するために誰かが、艦娘を作ったのだろうか。

「えつと……。深海棲艦、って言葉を聞いて何となく腑に落ちたよ」

「あの、無理に信じなくても……」

「こっちにも色々事情があつて、それで知ってたんだよ。だから、さ。この33年で日本に何があつたのか、教えて貰えないかな？」

榛名は、拓海の質問に快く答えてくれた。どこの馬の骨とも知らない、こんな相手に、だ。

そのことに感謝しつつ話を聞かすが、それはどれも信じられないこと

ばかりだった。

まずは、深海棲艦のことについてだ。

深海棲艦は2027年、つまり21年前に初めて確認されたのだそうだ。発見国である日本がそれを無視した結果かは分からないが、10年後までに太平洋の制海権が完全に喪失。その3年後の2040年には、人類は完全に制海権を失ったという。

一通りのざっくりとした説明だが、拓海はこれだけで十分に驚いていた。発見国である日本もそうだが、様々な兵器を持っていながら、世界はなす術が無かったのだ。

世界を牛耳っていたアメリカですら、ウエーク島やハワイなど、数々の本土から離れた領土を手放すしか無い事態に追いつめられていた。

他にも驚かされたことが幾つかあったが、その一つがああ「ゴジラ」に関することだ。映画の中だけだと思っていたゴジラが本当に現れ、世界を恐怖に陥れたというのだ。

初確認は1954年で、2体目は1984年、3体目は1996年。そして4体目が2002年、5体目が2003年に現れ、2014年には6体目が現れた。

現在では再びゴジラが確認されており、2043年に出現。東京が集中的に被害を受け、東京湾沿いの千葉と神奈川も大なり小なりの被害を受けた。これにより首都としての東京は完全に消滅、全機能が大阪に移転。大阪が都になった代わりに、東京は府になった。

これは、かつて現れた4体目のゴジラではないかと言われている。これだけでも眩暈がしそうだったが、さらには「特生自衛隊」が作られ、実際に超兵器の数々が作られた。「特生防衛軍」となった今でも、対怪獣用に特化した巡洋艦が就役している。

もう一つが、国際関係。

ゴジラによる不安や情勢の変化により、2030年に世界を三つに分けた「第三次世界大戦」が起こる。日本はアメリカと共に「環太平

洋連合軍」として戦い、数々の戦果を挙げるが、その間に深海棲艦が勢力を拡大。「環太平洋連合軍」は7年後に大戦を離脱した。

世界でも深海棲艦による情勢変化によって、2041年に戦闘の自然消滅によって終戦を迎えた。それでも合計で11年、世界は戦い続けていたようだ。

最後の一つが、艦娘。

こちらは2040年に第1世代で艦娘第1号の「三笠」が完成。それに合わせて、「特生防衛軍」の下部組織として通称「艦娘隊」、正式名「特生防衛海軍」が設置。対深海棲艦専門組織となった。

しかし、2046年に深海棲艦による「宿毛湾泊地襲撃事件」が発生。現地にいた第1世代艦娘は、「敷島」と「三笠」を残して全て轟沈。全体的な戦力としても大ダメージを受け、直ちに第2世代艦娘の開発が始まった。

そして今年——2048年1月を境に第2世代艦娘が次々と完成し、各拠点に配置されて艦隊を急造。初の本格的な攻略作戦として、この島の奪還に取り組んでいたようである。

これらの話を、榛名や他の艦娘たちは座学として教え込まれたのだという。個人差はあるが、第2世代の艦娘たちはかなり短時間で、覚えることになったらしい。

そのことを考えると、これだけのことを幾つかの項目に分け、ざっくりとしながらも話せるというだけで十分すぎるほどだ。

拓海は榛名の話を聞きながら、革製のカバーをかけたメモ帳に記録していった。

話の密度はとても濃く、この33年のことを掻い摘んでメモするだけでも相当に大変だ。

もう少し話を聞きたかったが、西の空の向こうに雨雲の塊が見える。話はここまでだろう。

「———ありがとう。よく分かったよ。もっと詳しい話は、また後

で聞くことになると思う」

「すみません。少し、おしゃべりが過ぎましたか？」

拓海が礼を言つてメモ帳をトランクにしまうと、榛名が胸に手を当てて申し訳なきさそうに尋ねる。

「いや、全然。寧ろ、自分が今置かれている状況をあとちよつとで整理出来そうだよ」

「まだ他に、何かあるのですか？」

「うん。この島がどこか、聞いてもいい？ それと、あの黒っぽい灰色の建物のことも」

拓海は、未だに日が差す海岸から榛名の背後にある建物を指差す。

もつとも、3階の屋上が監視塔のようになっていているのを見るに、大よその予想はつくが。

榛名が、後ろの建物に振り返りながら拓海の問いに戸惑いつつ、答える。

「この島は南鳥島です。あの建物は、この島の要塞になりますね。第三次世界大戦のころに建設されました。結局、大戦中は使用することは無かったと聞いています。1ヶ月前に奪還作戦が開始されて、この島を奪還した後、ここには『南鳥島泊地』という名称が与えられる予定だったのですが——」

「見事に孤立、ここに置いて行かれた、と」

「はい。うう……」

拓海の的を射た指摘に、榛名は顔を赤く染める。

——可愛い。

……などと考えている場合ではない。拓海は首をぶんぶんと振ると、両手で頬を二回叩き、自分に鞭を打つ。

「その、いくつか質問してもいい？」

「はい、榛名に答えられることでしたら、何でも」

——ん？ 今、何でも……じゃなくて。

「ごほん。ええっと。その話しぶりだと、榛名は第2世代の艦娘ってことでいいのかな？」

「はい。現在実戦配備されている艦娘はほぼ全て、第2世代と考えて

もらって構いません。他には特型駆逐艦の子たちや川内型軽巡の皆さん、高雄型重巡の皆さん、一航戦の方々がいらっしやいます」

拓海は「ふむふむ」と、二度相槌を打つ。

その話から考えると、第2世代の艦娘たちはゲーム「艦これ」の凶艦に登録されている子と一致しているのかもしれない。

もつとも、実際に確かめてみないと、分からないことではある。

「なるほど。となると、第1世代の子たちは前線から退いたんだと思うけど、その残った子たちは今、どうなってるの?」

「現役ですよ。もつとも、ここ2年ほどは出撃が無いのですが。『原初の艦娘』と言われる三笠さんも、今は横須賀にいらっしやると聞いています」

「へえ。会ったことは、あるの?」

「いえ。私はまだです。金剛お姉さまはお会いしたそうですが……。通じるところがあったのか、話が弾んだそうで、興奮しています——。どういう方かは分かりませんでした。ただ、とても綺麗な方でしたらっしやるといことは聞いています」

その話に、拓海は僅かに苦笑いを浮かべる。

軍艦時代としての金剛と三笠は、どちらもイギリスのヴィッカーズ社であるそうだから、何か通じる場所があるのだろう。

金剛は一体、どんな話をしたのだろう。

ゲームの金剛と言われて思いつく台詞は、

「HEY! てーとくー!」

「紅茶が飲みたいネー」

なんて台詞ばかりだ。

三笠は三笠で、一体どんな子なのか気になる。ゲームにはいなかったが、どれくらい美人なのだろうかと思うと、いつか会ってみたくなくなる。

「そっか、ありがとう。まあ、何というか。自分の状況は大体整理出来た」

「お役に立てましたでしょうか?」

「うん。おかげさまで。——俺、並行世界から飛ばされてきたみたいだ。しかも、2015年の昔から」

拓海は榛名から聞いた話を繋ぎ合わせて、そう結論付ける。そう考えないと、話の辻褄が合わなくなってしまふのだ。

もつとも、あの波のことや何故この島に流されてきたのか、という疑問は残ってしまうが、この際問題ではないだろう。

「その、本気で仰られてるんですか?」

「本気も本気だよ。——ってそうだ。自己紹介、まだだったよね」

「そう言えば、まだ伺っていませんでしたね」

「俺は白瀬拓海。18歳でこの春——と言うより、2015年の4月に大学生になったばかりだ。よろしく」

拓海の自己紹介を聞いて頷くと、榛名も居住まいを正して一つ咳払いをする。

「改めまして。私は『特生防衛海軍』呉鎮守府の第3艦隊・第2戦隊所属の金剛型戦艦3番艦、榛名です。直属の司令官は第2戦隊の磯貝風介少将ふうすけになります。よろしくお願いします」

「——磯貝……」

どこかで聞き覚えがあるような名前だ。気のせいだろうか。主に某作品で、だが。

「あの、本人は凄く自分の名前のこと、気にされているので……ご容赦ください、ね?」

拓海の呟きを別の意味に受け取ったらしく、榛名が苦笑気味にこちらを覗き込んでいる。

確かに、変な名前かもしれないが——。いや、今はよそう。

「ああ、ごめん。——それより、君のことはなんて呼べば良い?」

「先ほどのように、榛名、でお願いします。私の方は、どのようにお呼びしますか?」

「うーん……。とりあえず、好きなように呼んでくれれば良いよ」

「そうですか? ええっと……。それでは、白瀬さん」

やはり、ゲームでは溺愛していたせいだろうか。

好きな子に、たとえば苗字だったとしても呼ばれると、嬉しさや照れ

臭さが込み上がってくる。

「ああ、うん。その……よ、よろしく、です、ます、榛名」

そのことを意識した途端、緊張してきて日本語がおかしくなる。

「ふふっ。はい！ よろしくお願いします。白瀬さん」

榛名はそんな拓海を前に、朗らかに笑いかけるのだった。

自己紹介が終わったところで、榛名が南鳥島要塞に案内してくれると言うので、拓海は荷物の整理をする。

その途中でふと気になったことがあって、榛名に聞いてみることにした。

「そういえば、さ。この島って、他に誰がいるの？」

「神通さん旗艦の、第6水雷戦隊ですね。その指揮下に、第6駆逐隊所属艦が5隻います」

第6駆逐隊と言えば、暁型の4人が浮かぶ。この世界では、違うということなのだろうか。

「それだけ？」

「……はい。司令官の皆さんは、横須賀や呉にいらつしやるので。今回の作戦では、私たちの艦隊は横須賀に集められたので、恐らくはそちらにいらつしやるのかと」

つまり、榛名たちは孤立してからどのくらい経ったのかは分からないが、ずっとこの場所で孤軍奮闘してきたというわけだ。司令官も居ない中、よくやっていると思う。

「通信とか、物資とかは？」

「通信は、この島と私たち以外には届きません……。全部試しましたが、全く繋がらない状況です。深海棲艦に、ジャミングされているようです……。物資は、本隊の撤退前にこの島に落とされた物だけです」

詳しい話はこれから聞かなければ分からないが、相当に困窮した状況なのは間違いないだろう。何とか状況を打開して、外と接触を図る必要がある。

「その、榛名。一つ提案があるんだけど、いいか？」

荷物を纏め、担ぎ上げた拓海は榛名と向き合う。

「いいですけど……」

司令官とは音信不通。榛名と水雷戦隊の指揮を執ってくれる者は誰もいない。このままだと全員共倒れするかもしれない。

そしてゲームをやって来た身として、これは願っても無いチャンスでもあるし、似た様なものの経験もある。

拓海は、一人の憧れの少女を前に、今後の彼の命運を定める言葉を放った。

「俺に、部隊の指揮を執らせてくれ」

第2話 響く青

「俺に、部隊の指揮を執らせてくれ」

拓海からの提案に、榛名は不意打ちを受けたような驚いた表情をしていた。

流石に、単刀直入過ぎただろうか。しかし、このままではどうなるか分かったものではない。

榛名たちを信用していないわけではないが、少しでも状況の打開に繋がるのなら、拓海はそれに掛けてみたかった。

「やっぱり……だめかな」

「だめというわけでは……」

榛名は戸惑いの色を隠せず、拓海の胸元の辺りに視線を泳がせている。信じようにも信じきれない、そんな顔だ。無理も無い。

実際に指揮を執ることになったとしても、「艦これ」のゲームのような運任せというわけにはいかない。

きちんと作戦を立てて、現場で臨機応変に対処しつつ、敵を叩く。拓海がやってきたサッカーでも、同じことが言えるだろう。キャプテンを務めたこともあるから、自信はあるつもりだ。

「その、失礼ですが。艦隊——艦娘の指揮経験は、無いですよね？」

「それは……。あったというか、無かったというか」

ついゲームの方のことを思い浮かべてしまい、曖昧な答えを発してしまふ。榛名も首を傾げている。

「いや、ごめん。こっちのこと。指揮経験は無いけど、似た様なことならやったことはある。このまま、黙って何もしないわけにはいかないし」

気を取り直して言うが、榛名の反応は芳しく無いようだ。

流石に初対面で、しかも流れ者にいきなり指揮を執らせてくれ、と言われて「そうですか」と頷いてくれるわけではない。

これは一から説明し直して、何とか納得してもらおうしかないだろうか。

そんなことを考えていたときだった。

「あの、榛名さん？ そちらの方は？」

か細くもどこか一本筋の通った声が聞こえて、拓海は榛名の背後を見る。

そこには、暗い橙色のワンピースに身を包んだ少女がいた。跳ね上がった前髪からは額が見え、後頭部は緑色のリボンが結ばれている。

線も細く、儂げな印象を与えるその少女は、紛れも無く神通だった。

「神通さん。その、この島に漂流してきた方みたいで——」

どう説明していいか迷っているのか、榛名は困りきった表情だ。

神通は榛名の傍まで歩いて来ると、拓海を見上げる。

「すみません。お名前をお伺いしてもいいでしょうか」

目の前に現れた、もう一人の「本物」に目を白黒させていたところでハツと我に返り、拓海は自己紹介をする。

「えと。白瀬拓海。君は——」

「第6水雷戦隊旗艦、神通です。榛名さん。それで、どうされたのですか？」

神通も会釈を返すと、榛名に声を掛ける。

「それがですね——」

榛名が話を始め、途中で拓海が付け加える形で神通に、今に至る経緯を話す。

一通り聞き終えた神通が目を閉じて何事か考え、それから一人納得したように頷くと、拓海の間を真っ直ぐと見上げた。

「白瀬さん、でしたね？ 今から、要塞の中までご案内します。ここは危険ですので、中でお話しましょう」

それだけ言うと神通は踵を返し、要塞の方へ歩き始める。

拓海は意図を測りかねず、榛名と顔を見合わせつつも彼女の後を追って行くことにした。

「晁ちゃん、おっそーい！」

「ちよつと！ レディーに向かって何てこと言うの！」

「はわわ！ 喧嘩はだめなのです！」

「電、ここ私に任せなさい！」

神通と榛名の後を追って要塞に入り、1階の作戦会議室に案内される。

部屋の中を覗くと、見覚えのある少女たちが自由奔放に騒いでいるのが見えた。

全体的に痴女かと思うほど露出度が高く、背の高い銀髪の少女は島風だろうか。会議用の左右に長いテーブルの周りを走り回っている。

その後ろで手を振り回し、頭に帽子をちよこんと乗せて追い回す青っぽい黒髪の幼い少女は暁か。

二人を止めようとあたふたして、右往左往しているのは電。

やたらと自信満々に無い胸を張り、その電を励ますのは雷だ。

やはりというか、何というか。要塞の中を歩いている途中に声が聞こえた時点で、彼女たちがいるという予感はしていた。

榛名、神通に続いて島風や暁たちが、自分の目の前にいる。

拓海はその事実を前にしながら、本当はまだ夢を見ているんじゃないかと思つた。画面の向こうにいたはずの子たちが、走り回っていることが未だに信じられない。

「その人は誰だい？」

後ろから声が聞こえて振り返ると、そこには薄い水色の髪を伸ばした、暁と変わらない見た目の小さな少女が拓海を見上げていた。

「あ、響ちゃん。これから説明するから、先に入つててちょうだい。榛名さんも、お先にどうぞ」

「ん。ハラショー」

「分かりました」

神通が中に入るように促すと、響は視線を外して電と雷の傍に歩いていく。榛名も後に続いて行くと、島風と暁の仲裁に向かった。

「それでは、白瀬さん。お話ししますので、どうぞこちらに」

「あ、ああ。分かったよ」

啞然としていたところに声を掛けられ、拓海は我に返り、神通に導

かれて席に着く。

拓海は部屋の奥の方、壁に留められた黒板に向かって右側の一番端に座らされた。

部屋の中は薄暗く、窓は無い。8本ほどある蛍光灯のうち、黒板寄りの2本が点けられているおかげで、互いの顔が見えないということは無かった。

左隣には榛名が座り、向かいには左に向かって暁、響、電、雷、島風の順で座っている。

神通は黒板の前に立ち、この島の地図と思われる大きな紙を張り出していた。

「さて、皆さん。よろしいですか？」

地図を張り終えた神通が振り返る。

「暁はいつでもいいわよー！」

「おっそーいー！」

そんな声が聞こえると、神通は頷いた。

「では。改めまして自己紹介を。では白瀬さんから順番に、お願いします」

神通に呼ばれて、拓海は慌てて椅子から立ち上がる。

まさか、いきなり自分に振られるとは思っておらず、油断していた。

「あ、えっと。初めまして。白瀬拓海です。よろしく」

「第3艦隊・第2戦隊所属の、榛名です」

「同じく第3艦隊の第6水雷戦隊・第6駆逐隊の暁型1番艦、暁よ。レ

ディーとして扱ってよねー！」

「同じく、暁型の響だ。よろしく」

「電です。よろしく、なのですー！」

「雷よ。困ったことがあったら、私に頼ってもいいのよー！」

「島風です。駆けっこなら、誰にも負けませんよー！」

「改めまして。第6水雷戦隊の旗艦、神通です」

一通り自己紹介が終わったところで、神通に事情を話すように言われ、拓海はここに至るまでの経緯と、自分が知っている2015年以前の歴史を掻い摘んで話した。

「私たちの知らない日本から来た、ということなのですか？」

事情を話し終わると、開口一番に電が拓海に尋ねる。

「恐らくは、そういうことになるでしょう。そこで、なのですが。榛名さんから窺っていると思いますが、現在この島が置かれている状況について、説明してもよろしいでしょうか？」

「是非、お願いします」

一も二も無く拓海は了承すると、神通は黒板に貼った地図に歩いていく。

それから何か文字が書かれた紙が貼りつけられた磁石を、次々と地図の上に配置していった。

「私たちが現在、深海棲艦に包囲されているということは、白瀬さんもご存知かと思います。私たちはこの1ヶ月、脱出の機会を窺っているのですが、ご覧の通り包囲が厚く、事態の解決に至っていません」

神通が示す地図の上には、「駆逐イ級」や「軽巡ホ級」と書き込まれたマーカーが置かれている。

これが海岸から約2km離れたところを、1、2km感覚で包囲しているようだった。

「その敵艦隊の間を抜けていく、というのは出来ないのか？」

「敵の艦隊の間をすり抜けようとすると、それに敵が反応し、挟み撃ちにされてしまいました。敵艦を何隻沈めても、即座に新しい艦が補充され、脱出するに出来ない状況です」

神通が赤いインクのマーカーペンを持ち、敵艦隊の間にバツ印を書きこんでいく。

新しい艦が補充されるということは、この包囲の外側にも別の敵艦がいる、ということだろうか。そう考えると、例え抜けられたところで逃げ切れるか疑問だ。

「皆は、今までどうやって戦ってきたの？」

「遊撃、ですね。艦隊行動を取って敵を沈めたとしても、すぐに敵の増援がやって来て……。中には重巡洋艦クラスや戦艦クラスもいて、中々抜けるには厳しい状況でした。ですので、偵察を兼ねて、各自で

無理しない程度に。この配置図も、皆の情報を総合したもので、
で、抜けはまず無いかと。それと、包囲網の向こうから時折、敵艦載
機が複数飛んできて、爆撃も受けていました」

「島には、その配置以上に近づいてきたことは？」

「そう言えば——ありませんでした」

神通の答えに、拓海は唸る。この包囲には、何か意味があるのだら
うか。

艦娘を孤立させる目的なのか、あるいは近づけない理由があるの
か。

近づけないと言っても、拓海の頭の中にある深海棲艦の形だと、南
鳥島の浅い海の上を航行出来ないとは、とても思えない。

「ねえ、ちよつといいかしら？」

暁が手を挙げて、神通と拓海を交互に見ていた。

「はい、暁ちゃん」

「どーして、暁たちが今更こんな話をするのよ？ それに、その男の
人、部外者じゃないの」

他の駆逐艦たちも同意しているが、その表情は気まずそうだった。
皆が思っていることをズバツと言ってしまうとは、流石は暁だ。

「えーつと、その……ですね。こちらの方が、私たちの指揮を執ると
言っています——」

遠慮がちに言う神通に、暁が椅子を鳴らしてその上に立ち上がり、
口をパクパクさせていた。

「ちよつ、何を言ってるのよ!?!」

「ちよつと暁！ 前が見えないわよ！」

「雷！ でつ、でも!」

「いいから。座って」

一人大きさに驚く暁は、雷と響に言われて渋々座る。

電はぽかんと口を開け、島風は——どこから持ってきたのか、
連装砲ちゃんを机の上で遊ばせていた。

「本気で言っているのかい？」

暁を宥めた響が、斜め向かいの拓海を見て呟く。こちらを試すよう

な視線だ。

「本気だよ。君たちはずっとここで、攻めあぐねていたんじゃないか？　ずっと防衛戦一方で」

拓海の言葉に、皆は押し黙る。

「それに、こういうこと、一度でいいからやってみたかったんだよね」
その気持ちに、嘘は無い。

画面の向こうだと思っていた子たちが、今こうして目の前にいるのだ。指揮を執ってみたくなるのは、一プレイヤーとしての性みみたいなものだ。

「でも、君が思っているほど、艦隊指揮は甘くはないよ」

響の反応も、当然と言える。

拓海は視線の向きを変え、黒板の前に立つ神通に話しかけた。

「普通はね。——神通さん。ここ一ヶ月の天気は、どうだった？」

「天気、ですか？　基本的に、穏やかでした。雨は、ここ一週間は降っていないかったと思います」

「ありがとう。それで、なんだけど。要塞に入る前に、西の方に雨雲が広がっているのを見たんだ」

拓海がそこまで言うと、神通が「あつ」と声を漏らす。

一方、暁は頭にクエスチョンマークを浮かべている。榛名は気付いているようだったが、他の艦娘は大よそ同じ反応だった。

「この雨を利用する。そうそう。この包囲網で、中心的な役割を担っている敵艦はいる？」

「島の南に、戦艦ル級フラグシップの艦隊がいます。白瀬さん、まさか」

神通が地図に書かれた南鳥島の南海岸、そこから2km離れた地点を見やる。フラグシップの他に、戦艦ル級エリート2隻、重巡り級、軽巡ホ級、駆逐口級がそれぞれ1隻ずつの艦隊だ。

拓海は席を立ち、地図の前に歩いていく。

「皆を見てて考えたんだ。この面子で、どうやって包囲網に穴を空けるかって。——雨が降り出した後、皆は要塞のすぐ南にある海岸から出撃。雨脚にもよるけど、あの雲の具合だと艦載機は飛んでこないと

思う。その間に、皆は敵の艦隊に急行。途中で島風が離脱し、足の速さで敵の裏を取って攪乱する。直後に水雷戦隊を二手に分けて、敵艦隊の気を引いて砲雷撃戦。そして——榛名」

「は、はいー」

急に名前を呼ばれて、榛名が背筋をピンと伸ばす。

「敵のル級フラグシップの守りが甘くなったところに、少し離れたところから榛名が止めの砲撃を加えて欲しい」

捲し立てるように説明し終え、拓海は深呼吸する。それから皆の方を見ると、彼女たちは呆気にとられた顔で拓海をじつと見つめていた。

——流石に、安直過ぎただろうか。

そんな風に思っていると。

「い、いいんじゃないの!?!」

暁が、上擦った声を発した。

それを皮切りに、島風と雷が次々に声を上げる。

「てゆうか、その口振り。何で私が速いこと、知ってるのよ?」

「そもそも、私たちのこと、まだ何も話してないわよね?!」

神通もこれには同意らしく、二人を宥めながら戸惑った表情を向けて来ていた。

榛名は無表情にじつと拓海を見つめ、響は関心を示している。電だけは、この何とも言えない空気にどうしていいか、混乱しているようだった。

暁はいいと言ってくれたが、この反応だと、やはり駄目か。

そう思っただけで諦めかけていたとき、榛名が不意に立ち上がった。

「私は、この作戦で行ってみてもいいと思います」

その言葉に、一同は押し黙る。

「この作戦で、脱出は難しいかもしれませんが——。包囲網に隙を作れば、敵のジャミングが崩れる可能性があります。深海棲艦は一定数以上集まるとジャミングを発しますが、今回その発端は、ル級フラグシップです。これを叩けば、別の敵艦に代替されるまでの間だけでも、横須賀との通信が回復出来るかもしれません。少なくとも、今の

ままじりじりと追いつめられたままよりは、良いと思います」

意外な人物からの発現に、暁たちは顔を見合わせていた。

神通もふつと笑うと、暁たち駆逐艦に目を向ける。

「——私も、榛名さんの意見に賛成します。確かに、少しでも可能性があるなら、それに掛けてみたいですよ」

その言葉が後押しになったかのように、暁たちは次々に意志を表していく。

「暁は……。やってみてもいいわ」

「私も賛成」

「出来れば敵の船も助けたいですが、それ以上に皆を助けたいのです」

「ここはこの雷さまにまっかせなさい！」

「私は駆けっこ出来るなら、何でもいいよ」

拓海は榛名たち艦娘を見渡して、頭を下げる。

「皆、ありがとう。——神通さん。敵の両翼の艦隊は、こっちに気付いてからのくくらいで来る？」

「えっと。全速力で、大体2分くらいです。天候次第では、もう少し遅れると思います」

「はやっ。——それじゃあ、こっちも全速力で仕掛けよう。敵の左翼は神通さん、暁、響。右翼は電と雷。島風は変わらず裏から攪乱。その隙に、榛名の砲撃。接敵してから、1分で決められますか？」

艦娘たちが、ギョツとした様に拓海を見つめる。

仮に雨が小康状態だとして波も穏やかなら、あまり時間は無い。迅速に敵を叩き、通信経路を確保しつつ、両翼から来る敵に備えなければいけない。撃破次第、敵が侵入したがないという圏内まで撤退する必要がありそうだ。

「なるほど。電撃作戦というわけか。面白そうだ」

「ひ、響!？」

「何だい、姉さん。ひよつとして、怖くなったか？」

「こ、ここ、怖くなんかないわよっ！へっちやらだし！」

暁は響の指摘に見栄を張るが、身体が震えていて隠しきれない。

「やりましょう」

「じ、神通さん!？」

暁に追い打ちを掛けるかのように、神通が同意を示す。暁の顔が、絶望めいたものに染まっていく。

「選択肢は、もう限られています。やれるだけ、やってみましょう。それに、暁ちゃんならきつとやり遂げられると思うわ」

神通のフォローに、暁がピクリと反応して胸を張る。

「とと、とーぜんよっ。このレディーに怖いものなんてないわ!」

「ふふっ。頑張りましょうね。皆さんも、いいですか?」

神通が改めて全員に確認を取るが、特に異を唱える者はいなかった。身体が小刻みに震えている駆逐艦が一人、いるのみだ。

「それでは、白瀬さん。臨時の第6水雷戦隊並びに、戦艦榛名の司令官代理をお願いします」

神通の敬礼の後に続いて、残りの艦娘たちも立ち上がって敬礼する。

拓海も見様見真似ではあるが、彼女らに対して、敬礼をした。

「それじゃあ、作戦開始は雨が降り次第だ。その時にまた、ここに集合ということだ。雨はあと1時間くらいで降り始めると思うから、その時までに準備をしておいてくれ」

榛名たちの顔を見て、拓海も表情を引き締める。

目の前にいる7人の命が、自分の手に掛かっていることを、この時になって初めて拓海は実感していた。

彼女たちだけでも、元の場所に送り届けよう。

拓海は、胸の内で密かに、誓うのだった。

会議がお開きとなった後、拓海は神通に案内されて要塞内部の戦闘指揮所に連れてこられていた。

部屋には何台かのコンピュータが配置され、前面には巨大なスクリーンが配置されている。

些か埃っぽいが、一応掃除はされているようだ。神通たちが時間の

ある時に、やっていたのだろうか。

「――説明は、以上になります」

そう言って神通は、インカムを拓海に手渡す。

「ありがとう」

コードの垂れ下がったインカムを受け取ると、拓海は実際に装着して頭の収まり具合を調整する。

神通が手渡したインカムは、戦術データリンクシステム・クロックス・CROCSに使われるものだ。

衛星通信や量子通信、レーザー通信などの通信手段を用い、司令部と艦娘たちを繋ぐシステムなのだそうだ。

小型カメラを艀装に搭載したり自立飛行カメラユニットで戦場を映像共有したりし、司令部側と艦娘側の索敵情報を交換するのだそうだ。

また、コンピュータの画面上には、実際の作戦海域マップ上に艦娘の位置をリアルタイムで示すことも出来る。

他には艀装の緊急自動回避モードや、コンディションモニターングといったものが行われるが、こちらはコンピュータにソフトをインストールしなければ使えないらしい。

今回は状況が状況のため、インカムによる音声通信しか行われな

い。
発電機が老朽化しており、システムを使うにしても、精々通信を維持するくらいにしか割けないのだそうだ。

そうなる現場海域の状況把握は、自分で紙面上にて駒を動かすしかなくなる。

目視という手段もあるが、インカムは有線タイプであることに加え、例外外に出たとしても視界情報はあまり頼りにならない。

神通は大丈夫かと気を遣ってくれていたが、自分から言い出した以上、このくらいはやらないといけない。

それに海戦では無いものの、盤上で駒を戦わせた経験もあることから、拓海はあまり不安には思っていないかった。

拓海は雨が降るのを待つ間、要塞の中をあちこち見て回ることにした。

1階は作戦会議室と戦闘指揮所の他に、武器保管庫と数々の空き部屋。空き部屋は数えてみただけでも、10以上はあっただろうか。

2階は1階より一回り小さく何も無い代わりに、フロア一帯がトーチカのようになっており、窓が無い。このフロアに入った雨水の侵入を防ぐために、1階からの階段を登り切ったところには密閉度の高いドアが置かれ、排水管が敷設されていた。

3階は15平米ほどの狭さで、東西南北に吹き抜けの窓が開いている。恐らくはここから、島の遠方を監視・観測するのだろう。この屋上には、気象観測用の機器が置かれているらしい。

神通に聞いたところによると、地下1階があり、そこらは避難壕兼、補給物資の保管庫だそうだ。

2階から3階へは梯子で昇り降りするようになっており、拓海はその梯子を伝って行く。

一通り見て回ったが、一番頑丈そうなのは1階部分だった。重要施設が集中しているから、当然と言えば当然だろう。2階と3階も頑丈に出来てはいるが、1階ほどでは無い。

それよりも、外壁や内壁を覆っている建材が、一体何で出来ているのか、拓海は気になっていた。

コンクリートでは無く、金属としか形容しようが無い硬い物質だ。他の艦娘たちに聞いてみるが、知る者はいないようだった。

あまり気にしても仕方が無いかと思いつつ、拓海は3階の西の窓から空を見上げていた。

照り付ける日差しによって、真っ青に広がる空。本土ならばまずあり得ないだろう、この気温の高さ。そして、西の方に見える灰色の雲――。

「やあ、何を見ているんだい？」

振り返ると、後ろにいつの間にもやがて響が突っ立って、拓海を見上げていた。

自分の腰ほどしかない背の、響の青い瞳はまるで水面のようだ。今にも自分の顔が映りこんでしまいそうで、拓海はそれを悟られないように外へ視線を戻す。

「雲を、眺めてた」

響がフロアのどこからか木箱を持ってきて、それを拓海の隣に置くと、その上が上がって吹き抜けの窓の外を覗き込む。

「まだ、時間があるように見えるな。趣味なのかい？」

その問いに、拓海は僅かに逡巡する。

「いや——。今の自分みたいだな、って思ってた」

「何だい……？ それは……」

「過去の罪に怯えて、日の当たるところに逃げる。だけど、それでも雲は俺を追いかけ続けて、責め立ててくる——そんなところだ」

響は答えない。

拓海は、今の彼女の表情を確かめるのが、どうにも怖かった。

分からないと首を傾げているだけならいいが、呆れられたり蔑まれたりしたら、どうしよう。そんな思いが駆け巡る。

「——この1ヶ月、神通さんは皆で遊撃したって言ってたけど。この半月は、そのほとんどを神通さんと榛名さんでやってきた」

響の言葉に、拓海は思わず隣に視線を向ける。初耳だ。

響は真っ直ぐ水平線の方を見たまま、続けた。

「私たち第6駆逐隊が、早々に疲弊してね。補給も満足に出来ず、動くだけで精一杯だった。いざという時のために、資源は残しておかないといけないから、尚更だ。だけど、敵の迎撃をしたり、突破口を探したりしないわけにはいかない。だからあの人たちは、何かの衝動に掻き立てられるように、たった二人で毎日海に出て行ってた」

そう語る響の瞳は、どこか沈痛そうだ。

「榛名さんは、対空砲撃と長距離射撃。神通さんは相手の懐に飛び込

んで、近距離での砲雷撃戦。多勢に無勢な上に、神通さんに至っては相当無茶な戦い方をした。私たちは出ようとするんだけど、二人に強く止められて。私たちは、何もすることが出来なかった。そんな戦い方をしたから、二人ともボロボロになって。榛名さんなんて、大破して昨日までずっと仮説入渠ドックに入ってたんだ」

響の瞳から、涙が零れ落ちた様な気がした。いや、気のせいでは無いだろう。

「もう、これ以上二人が辛そうな顔を見るのは、嫌だ。あれじゃいつかきつと、轟沈してしまう。まだ、艦娘になって半年も経ってないのに。これじゃあ、二人が護ろうとしてくれた私たちの方が、もつと辛い……。だから島風も暁も、ああやって騒いでたんだ。ああしなきゃ、気が紛れないから。今日だって、貴方が来なかったら、またたった二人で海に出てただろう」

響は、自分を責めているのかもしれない。

二人にただ守ってもらうだけで、後方でじつと仲間たちと待機しているしかなかった自分が、悔しかったのかもしれない。

そう思うと、ほんの少しだけ心の重荷が取れたような気がした。

——自分は、なんて卑怯な男なんだろう。

自嘲気味に笑いながら、拓海はそれを紛らわせるように、響の頭に左手を乗せる。

帽子越しに、彼女の小さな頭の感触が伝わって来た。

「なら、今度は響たちの番だな」

「えっ……っ？」

響が、涙に濡れた目を拓海に向ける。

「駆逐隊の皆で、榛名と神通の分まで、この戦いで頑張れ。この作戦は、響たちに掛かっているからな。そんなでもって、きちんと伝えよう。

“ありがとう” って」

「私たちが……」

「何も、二人の分まで無茶しろって言ってるんじゃないよ。皆で、作戦を完遂してしっかりゴール決めて、生きて帰って来いって言ってるんだ。俺は海の上じゃ、戦えないからさ」

「あ……」

響は目元の涙を、服の袖でごしごしと拭う。それから顔を上げ、拓海に笑顔に向けた。

クールなイメージの彼女にしては珍しい、屈託のない笑みだった。

「――落ち着いたか？」

その笑みに眩しさを感じつつ、拓海はそつと声を掛け、彼女の頭に乘せた手を下ろす。

少し照れくさそうに笑って頷くと、響はキリツとした表情に切り替え、敬礼する。

「駆逐艦、響。私は、貴方の指揮下に入ると、もう一度ここに誓おう。よろしくお願ひする。白瀬拓海司令官」

「ああ、こちらこそよろしく。響」

拓海も微笑みながら、敬礼を返す。

敬礼を解き、二人で小さく笑い合ってから、響が2階に降りるための梯子の方を見る。

「隠れてないで、出て来たらどうだ？」

響が溜め息を吐くと、梯子の方からもぞもぞと動く気配がする。

一体誰だろうかと見ていると、2階の方から暁、電、雷たちが次々と上がって来た。

梯子を登りきって横に並んだ三人は、三者三様の表情だ。

暁は、顔を真っ赤にして「レ、レディーが……」とか何とか呟いて身体を小刻みに震わせている。

電も頬を赤らめて、居心地が悪そうに目を左右に揺らしていた。

雷は腕を組み、頬つぺたを膨らませて「何で私に頼ってくれないのよ」などとぼやいている。

「……姉さんたち。盗み聞きするくらいなら、もっと堂々と出て来たらどうだ？」

頭を抱えんばかりに言う響に、暁も雷も答えない。

代わりに、電が恥ずかしそうに目を逸らしながら、口を開いた。

「だって、その……。お二人が良い雰囲気だったので、邪魔したく無

かったのです」

「単に、今後のことについて話してただけだよ。それに——」

響が視線を上げ、拓海の方をじつとりと見つめる。

「な、何だよ……」

「司令官、ここに本命がいるんだろう？」

響から落とされた爆弾に反応し、暁と電と雷が露骨な反応を示す。

「な、何ですって!?! わ、悪いけど暁はレディーだから、駄目よ!」

「はわわっ! 誰なのです、誰なのです!?!」

「い、い、い、雷さまはこの程度じゃ驚かないわよ!」

驚いているじゃないか、というツツコミは置いておいて、拓海は慌てて響の方を見る。

「ちよっ、何を言って——」

「でも、いるんだろう? この島に」

確信を持った目とニュアンスで、響は拓海の間をじつと見つめる。

言葉の意味するところを何となく察したのか、暁たちが胸を撫で下ろしたように溜め息を吐く。

その反応はその反応で、何となく傷つく。

——というのは、ともかく。

「まさか、気付いてるとか言わないよな」

「そのまさか、だ。目が泳ぎ過ぎだよ。司令官。榛名さんのことを、じろじろ見過ぎだ」

凶星を突かれて、拓海は何も言い返せなくなる。

そんな拓海をよそに、響の言っていることを理解した暁たちは、何やら黄色い声でひそひそと話し込んでいた。

「響、幾らなんでも今、言わなくていいんじゃないか?」

「お礼だよ。司令官」

「こんなお礼が、あってたまるか」

しれっと言ったのける響に、拓海はよろよろと窓際に寄りかかる。

——こんなんで、やっていけるのかな。俺……。

第3話 破壊神、記憶の欠片

それから1時間が経過した、ヒトヨンマルマル。

南鳥島上空を雲が覆い、雨が降り始めた。

拓海と艦娘たちは一時、作戦会議室にて集合し、動きを確認する。

「それじゃあ、皆の健闘を祈ってるよ」

拓海という言葉を合図に、艦娘たちは直ちに、艀装を背負って海に出て行く。

敵の包囲網に隙を作るための作戦が、今ここに始まった。

早速、7人の中で最も速度の出る島風が先行し、索敵に入る。

続いて神通以下、第6水雷戦隊が続き、さらにその後ろを榛名が航行していた。

空を灰色の雲が覆い、そこから雨と風が吹き付ける。

波は思いの外高いが、作戦の実行には大して影響しないだろう。

榛名は5人の背中を見つつ、拓海の顔を思い出す。

出会う方は最悪だったが、話してみるうちに悪い人では無いということには分かった。

何故、自分のことを知っていたのかは定かでは無いが、この人なら何かやってくれるかもしれない。そんな予感がした。

島に取り残され、後半には駆逐艦の子たちを動かせない状況に陥つた中、榛名は神通と共に敵の掃討を行っていた。

少しでも皆を安心させたかったし、自分が動くことで事態が良くなることを信じ、動き続けた。

それで、無茶を重ねてしまった結果なのだろう。

榛名は数日前に、敵艦載機の攻撃と戦艦の砲撃によって、大破してしまった。その時、神通も中破し、悲痛そうな顔をしながらも助けてくれた。

要塞に何とか逃げ帰った時には、駆逐艦の皆も心配させてしまっ

た。

自分の未熟さが招いた結果なのに、これでは余計、自分がしてきたのは何だったのかと考えてしまう。仲間を泣かせてしまうまで無茶をして、何の意味があるのだろうか。

その後、榛名はドラム缶風呂形式の簡易修理ドックに入り、何日も入渠していた。資材が少なく、フル稼働で修理できるほどではなかったためだ。普段なら、高速修復材が無くても一日か二日程度で直せていた筈だ。

自分が大破してしまった所為で、神通には一人で戦って貰うことになつてしまった。

彼女は自分以上に、敵と近距離で戦っていた。修理速度も比較的早いから、入渠が終わり次第、すぐに海に出て行ってしまう。

榛名は、自分が情けなくて仕方が無かった。

自分の判断の甘さが孤立を招き、駆逐艦を疲弊させる。そして自分も無茶を押し通した所為で大破し、戦線離脱をせざるを得なくなる。結果、神通にまで負担が掛かってしまい、彼女も損傷を繰り返す。

完全に、悪循環に陥っていた。このままでは、隊の壊滅もそう遠くない。

そんなことを思つて途方に暮れていたとき、拓海と出会った。

やっと入渠が終わり、見張りも兼ねて外に出ると、東の海岸に彼が仰向けて倒れていた。

見るからに、漂流してきたとしか思えない恰好だった。

周りには深海棲艦もいる。怪我をしていないかと思うと、居ても立っても居られず、榛名は彼に駆け寄った。

近くで見ると、日の光で乾いてはいるものの、やはり濡れた跡があった。身体に異常は無いようだが、しかし意識は無い。

もしもの時のことを頭の片隅に置きつつ、声かけをしてみると、彼はすぐに起きた。

無事だったことにホッとするのも束の間、気が付いた拓海に抱き付かれる。

全く初対面の相手に、まさかそんな事をされるとは思わず、反射的に彼の頬を張ってしまった。

叩いてしまったこと自体は申し訳なく思うが、しかし抱き付くとは幾らなんでも、度が過ぎているだろうと思う。

それから会議室に入って、拓海が話していた作戦は、確かに一理あるかもしれないと思った。寧ろ、何故今まで気付かなかったのだろう、とすら思ったくらいだ。

作戦自体は、そこまで「凄い」と言えるものではないかもしれない。しかし各艦の特性を把握した上で、この作戦を提案してきた。

榛名は、この人物に自分たちを託してみたい、と思った。

——彼なら、私の「提督」になってくれるかもしれない。

「——さん。榛名さん」

前を航行していた電に声を掛けられて、榛名は意識を現実に取り戻す。

「どうしたの？ 電ちゃん」

「もうすぐ作戦海域ですよ。大丈夫なのですか？」

電は前進を続けたまま、後ろを行く榛名を心配そうに見ている。

「うん。ありがとうね、電ちゃん。頑張りましょうね」

努めて笑顔を向けると、電も安心したように笑う。

「はい、なのです！」

そう言って、電は前を向いた。

——作戦海域は、目の前だ。

雨で視界が悪い中、敵の目標艦隊をある程度目視出来る位置にまで来ると、神通が水雷戦隊を二手に分ける。

右の方、敵艦隊の左翼には神通と暁、響。左舷方向、敵の右翼には雷と電が向かう。

既に敵艦隊は交戦に入っているようで、その相手は攪乱役となった島風だ。

榛名も速度を落とすし、砲撃準備に入る。

背部の35・6cm連装砲を4基積んだ艤装が動き、X字に展開する。肩越しに2基、腰の横から2基が顔を出す形だ。

展開が完了すると、砲を回転させ、前方の敵艦隊——戦艦ル級フラグシップに向けて照準を合わせる。

あとは、タイミングを待つのみだ。

島風が6隻編成の敵艦隊の周りを、連装砲ちゃんと共に自由に動き回り、注意を引く。

これに気を取られた軽巡ホ級と駆逐口級が向きを変え、艦隊の行動を乱した。

僚艦が、支援するか連れ戻すかでもたついていたところに、両翼から水雷戦隊の砲撃が加わる。

左翼の戦艦ル級エリートと、右翼の重巡り級がそれぞれ反応し、神通たちと雷たちに砲撃を加える。

神通たちは砲撃を避けるために散会し、再び陣形を戻して砲撃と同時に魚雷を装填。射線確保をした上で、海中に叩き込む。

魚雷の航跡が見えないまま敵は回避しようとするが、遅い。

次々と爆発が起き、2隻は損傷する。

体勢を崩したところで、島風と担当する敵を交代。援護しようと射撃準備をしていた、ル級のフラグシップとエリートの両方の攪乱に入った。

その間に、混乱状態に陥っていたホ級と口級に魚雷を撃ち、撃沈する。

間髪入れずに踵を返すと、島風の援護に向かった。

体勢を立て直そうとしていた、ル級エリートとリ級を神通たちが砲撃で損傷を与え、妨害する。

雷と電が、島風が相手をしているもう1隻のル級エリートとル級フラグシップに接近し、砲撃を加えていく。

2隻が混乱し、互いの距離が離れたところで、島風たち3人が離脱。電が無線で榛名に向かって、叫んだ。

「今なのです!!」

——来た!

電の声を聞いて、榛名は直ちに九一式徹甲弾を装填、ル級フラグシップに狙いを定める。

ここで、失敗するわけにはいかない。

「主砲!・砲撃開始!!」

榛名の声高に叫ぶと同時に、4基の主砲が火を噴く。

全8門から撃ち出された徹甲弾は、油断して背中を見せていたル級フラグシップに殺到していく。

徹甲弾は次々と目標に突き刺さり、炸裂。内側から敵を食い破っていった。

たまらずル級フラグシップは爆発を起こし、叫ぶ間もなく海中に沈んでいった。

「主砲、直撃弾!・目標の撃沈を確認しました!」

榛名が無線で報告すると、拓海から指示が飛んで来る。

《よし!・全艦、南の海岸まで撤退!・榛名はそのまま、島風と一緒に神通さんたちの撤退を掩護してくれ》

「了解です!」

そのやり取りの直後、直ちに神通たちが撤退を開始する。

島風が連装砲ちゃんと共に残った3隻を攪乱し、榛名が砲撃を加えて撤退支援を開始した。

神通と暁型の4人が抜けると、島風も離脱する。

敵はル級エリート1隻が、未だ戦闘の意志を残していることを確認して、榛名がさらに砲撃を加えた。

敵の攻撃が防がれるのと同時に、榛名の脇を水雷戦隊が抜け、榛名も全速力で後退。交戦海域を離脱する。

両翼の敵艦隊が援護に来た時には既に、榛名たちは海岸付近まで撤退を終えていた。

島の南の海岸に着くと、榛名は敵の追撃がないか確認する。

この時には雨も強くなり始め、視界が悪くなっているが、敵影は認められない。頭に装着した電探にも、特に異常は無かった。

「敵影、認められません。白瀬さん、通信の方はどうですか？」

榛名が無線に問いかけると、奥から答えが返って来る。

《うん。衛星通信が、さつき横須賀に繋がった。第1・第3艦隊が、支援輸送機に先行してこつちに向かっているみたいだよ。——作戦、成功だね》

その言葉を合図に、駆逐艦たちが「やったー！」と声を上げて跳び上がり、喜びを露わにする。

神通も胸を撫で下ろして、駆逐艦たちと笑い合っていた。

「ありがとうございますー！ 白瀬さん」

《いや。俺は何もしてないよ。こつちからは、無線しか聞こえてなかったし。榛名たちが頑張ってくれたおかげだよ。——ありがとうございます》
「いいえ。白瀬さんのおかげですー！」

拓海の最後の言葉のニュアンスに、何となく違和感を覚えたが、特に気にすることなく榛名は称賛の言葉を贈る。

《俺がしたのは、作戦の提案と、最後の撤退指示だけだよ。大したことなんて、何もしてない。頑張ったのは、榛名たちだ。俺を褒めるよりもまず、自分たちのことを誇ってくれ》

「——はい。ありがとうございます……！」

その言葉に素直に従い、榛名は礼を述べた。

確かに、作戦を成功させたのは自分たちだ。

油断は出来ないが、今この瞬間だけは、小さな成功を喜ぼう。

拓海の言った通り通信網は回復したらしく、榛名たちにも通信があった。

第3艦隊の、第1艦隊との兼任をしている司令官からだった。

彼は今、低速飛行をして艦隊の後を追う支援輸送機に搭乗しているらしい。あと1時間もあれば、来るとのことだった。

通信を終え、待機のために島に上がろうとしたまさにその時、異変が起こった。

最初に気が付いたのは、暁だった。

「ねえ、あつちの海、なんか盛り上がってない？」

そうやって暁が指差すのは、島から1km離れた辺りだった。

確かに、あの辺りだけ海面がやけに盛り上がっている。その事に違和感を覚えていた時だった。

海面から、その正体が姿を現す。

最初に長い尾のような物が空に向かってしなり、一気に海面に叩きつけられ、ここからでも確認できるほどの大きな水柱が立つ。

直後、何か刺々しい山のような物が海面から顔を覗かせた。

そのまま、迫り上がっていくと、巨大で真つ黒い生物が上体を起こす様子が、見て取ることが出来た。

視界が悪くてはつきりとは見えないが、そのシルエットから榛名は心に何か、ざわついたものを感じる。

「何よ、あれ。新手の深海棲艦？」

先に砂浜に上がっていた暁が、どこか呑気な声で言っているのが聞こえる。

いや、あれは——深海棲艦などでは無い。

そう、確信した直後。

黒い生物が頭を上げ、空に向かって咆哮した。

大気を震わせ、今にも裂かんとするザラついて濁った、耳を劈き^{つんぱ}そうになる鮮明な声。

その声に怯えて、神通や駆逐艦たちが口々に言い始める。

「いったい、何なんでしょうか……」

「おうっ!？」

「レ、レディーがこの程度で……」

「姉さん、震えてるって。——でも、これは……」

「な、何なのよ。この声」

「はわわわっ!？」

不意に南海岸近くにある、要塞の非常扉が開き、中から拓海が飛び出してくる。

彼の顔には、驚愕の感情が貼り付いていた。

「あの、白瀬さん。あれは、一体——」

神通が尋ねようとした瞬間、光が瞬き、雷鳴が轟く。驚いて全員が音のした方向——黒い巨大生物に注目する。

荒れた海の上に、その生物に向かっていく深海棲艦の影が見えた。それを前に、生物の背中が青白く光る。

光が一瞬、消えたかと思うと——。

巨大生物が口から青白い光を発射し、近づいてきていた深海棲艦の群れに向かって、光の束を発射した。

深海棲艦たちは瞬く間に焼き払われ、直後に巨大な爆炎と煙が上がる。

キノコ雲の形に上がる雲を見て、榛名がポツリと呟いた。

「原爆——？——」

ふと、あの日の呉で見た記憶が、榛名の脳裏を過ぎる。

そして、現地の人々には聞こえていなかっただろう、多くの怨嗟の声——。

再び発せられた、真っ黒い巨大生物の咆哮が、榛名の心を揺さぶった。

「——きゃああああッ!!」

——怖い。

——怖い、怖い、怖い、怖い、怖い……!!

身体が震え、全身から沸き立つ悪寒に必死に堪えながら、榛名が裏返った声で悲鳴を上げた。

神通たちが驚いて、榛名の元に駆け寄る。

拓海も慌てて、自分の靴やズボンの裾が濡れるのも構わず、神通たちの後に続いた。

——あれは、いったい何？

真っ白になりかけた頭の片隅で、榛名は考える。

キノコ雲、恨みと憎しみに満ちた咆哮——。

何故？ 何故、今になって？

しかしそんな疑問もすぐに吹き飛び、榛名は悲鳴を上げ続ける。

それしか、自分の心を守る手段は無かった。

「あれが、ゴジラ……ですか？」

神通の問いかけに、拓海は頷いた。

現在拓海は、要塞の中の空き部屋の一室に、神通と共に床の上に座っていた。

目の前には、急場しのぎで敷かれた段ボールの上で、榛名が寝息を立てている。段ボールは、榛名をこの部屋に連れ込んだ際に、暁たちに頼んで持つてきて貰ったものだ。

榛名の目尻には、僅かに涙の跡が残っている。

拓海は胡坐を搔いて彼女を見下ろしつつ、隣の神通と言葉を交わす。

「神通さんは、聞いたことあるかい？」

「話だけでしたら……」

「そうか……。俺も、東の海岸で榛名と会った時に、聞かせて貰ってはいたんだ。メモはしたけど、正直、半信半疑だった。あんなデツカイ怪獣が、まさかいるわけが無いって。——だったら、特生防衛軍は何なんだって話になるけど」

「そうですか……」

「神通さんは、あの時何か感じた？ その、榛名じゃないけどさ」

神通はゆっくりと首を縦に振る。その表情は、恐怖と困惑が入り混じったようになっていた。

「私も、榛名さんほどではないですが……。あの怪獣が叫んだ時に、自分の根本的な何かを揺り動かされてしまったような、そんな気持ちで

した。曉ちゃんたちも、多分私と同じだと思います。明らかに、怯えていましたから」

「そっか……」

榛名が悲鳴を上げた後、1 kmの沖合では深海棲艦とゴジラの激戦が繰り広げられているようだった。

北や南の方から深海棲艦がゴジラの方へ向かい、砲撃を加えているように見えたのだ。

南東の奥の方からも、深海棲艦の大群がゴジラに突っ込んでいくのが見えた。

おまけに何かに弾かれたように、雨脚が強くなっているにも関わらず、大量の艦載機までもが飛んでいるのも見えた。

しかし、ゴジラはそんな攻撃は全く物ともしていなかった。

尻尾で敵を薙ぎ払い、艦載機共々、熱線で丁寧に焼き払って行く。

そして、熱線が当たって爆発する度に発生する、あの灰色がかかった白いキノコ雲。

遠目にはハッキリと見えなかったが、あれは多分、怨霊ゴジラだ。

この世界に来るよりも以前、一度だけそんな特徴を持ったゴジラが出て来る映画を見た覚えがある。

シルエットもかなり大きい、あの執拗な攻撃も含めて、特徴がかなり一致していた。

映画の通りなら、あのゴジラは少なくとも、今から1000年ほど前の戦争で死んだ人々の集合体なのかもしれない。

そうでなければ、榛名のあの動揺ぶりも説明出来なかった。

艦娘たちは、自分が軍艦だった頃の記憶を持っている。それを元に、艦娘は生まれたのだそうだ。

神通と話す中で、拓海はそれを知った。

向こうの世界のゲームでも、そういつたことに言及する艦娘は当たり前のようにいたから、あまり驚きは無かった。

呉の空からも、原爆による雲が見えたのだと言う。そうになると、当

時大破着底したままだっただろう榛名が、見ているも不思議では無い。

榛名は、その時の記憶が呼び覚まされたのだ。

拓海の話聞いて、神通は納得したように静かに頷いた。

「確かに、そう考えると自然なのかもしれません。皆が震えたのも、そのゴジラが怨霊だと考えると、分かる気がします。——白瀬さんは本当に、私たちの知らない世界から、来たんですね」

「まあ、ね……。まだ、実感が湧いてないところもあるけど。でも半分、これも現実なのかって受け入れ始めてるよ」

拓海は苦笑しながら、榛名を見つつ答える。

そう思えるのも、榛名や神通たち艦娘が「生きている」からなのかもしれない。

画面の向こうで決まった音声を返すのでは無く、生身で話し、考え、悩み、喜怒哀楽の感情を表す。

それらの反応は、生きていなければ中々得られないものだ。

そしてそこには、拓海の知らない彼女たちが、沢山いる。そう考えると、これが夢だとは到底思えなくなっていた。

ゴジラが、襲って来た深海棲艦を振り返りにした後、南鳥島の通信は完全に回復した。

低電力で賄わなければいけないのは相変わらずだったが、使える無線は全て使えるようになったのだ。

ゴジラ出現の報を受けた第1・第3艦隊及び輸送機は、警戒を厳として南鳥島に上陸するようだ。

しかしゴジラの方はと言うと、南鳥島をじっと見つめた後、何故か南東方面の方に向かって行った。

泣き崩れて、榛名が明らかに戦えない状況でこっちに来られたらどうしようかと思ったが、ゴジラは南東に進路を変え、去って行った。

取り敢えず助かったことに安堵し、榛名を運び込んだ後、2階に上がってその方向を見てみた。

視界も悪く、当然ながら見えなかったものの、幾つかの爆音とゴジラの咆哮は、島まで聞こえて来ていた。別の深海棲艦と、交戦していたのかもしれない。

「まさか、榛名さんがそんな過去をお持ちだとは、知りませんでした」
榛名を見つめながら、神通が呟く。

「その時にはもう、沈んでたんだっけ」

「よくご存じですね。私は、その2年前を最後に記憶が途切れていまして……。この姿になってから、件の日のことは伺っていましたが……」

重苦しい空気が、その場を支配する。

あれだけのことがあれば、こんな風になってしまうというものだ。明るくて元気なイメージを抱いていた榛名が、あそこまでの動揺を見せた。

拓海が勝手に作り上げた幻想の部分もあるかもしれないが、それでもシヨックを隠し切れなかった。

隣で神通が立ち上がり、心配げな表情を浮かべながら榛名を見下ろす。

「白瀬さんは、榛名さんが目覚めるまで傍にいてあげてください」

「俺で、いいの……?」

「私たちの中では一番、白瀬さんが榛名さんのことをお任せ出来ると思います。あの日のこと、あの怪獣のことは、多分、白瀬さんの方が詳しいと思いますので」

「そんな、俺は……」

何も、拓海自身もそこまで詳しいわけでは無い。

「あの日」のことは、歴史の教科書や各種メディアに載っていることくらいしか知らない。

それにゴジラの方も、あの映画で語られていたことくらいしか分か

らないし、そもそもこちらの世界で、同じような出来事だったとも限らない。

「本当に、俺で？」

不安に思っただけで神通を見上げると、彼女はくすりと笑う。

「白瀬さんなら、変なこととはしないでしょうから。それに、白瀬さんの気持ちは、他の皆も知っていると思いますから。作戦会議の時、事あるごとに盗み見していましたよね？」

どうやら、響だけでなく神通にまでも気付かれていたらしい。

それにその話しぶりからして、暁型や島風たちにまでも気付かれているようだ。

「参ったな……。まあ、ずっと憧れてた子ではあったし」

「白瀬さんの世界にはいなかったのに、ですか？」

神通の指摘に、拓海は冷や汗を覚える。

そういえば、向こうには榛名たちがゲームキャラクターとして登場することを、全く話していなかった。

「あ、いや、その。榛名みたいな子が、タイプっていうか。えっと、その——」

「そうなんですか……？」

慌てて言い繕うあまり、しどろもどろになってしまいが、神通は首を傾げる。

しかしそれ以上の追撃が無い当たり、一応誤魔化すことは出来たようだ。

「は、榛名は、ど、どうなのかな？」

話題を僅かに逸らそうと、榛名の方に視線を移す。

榛名はすっかり落ち着いたようで、すやすやと寝息を立てていた。冷えた身体を温めるためにストローブを置いてはいるが、風邪を引かないかが心配だ。

「それは、ご自分でお聞きになってください」

「そりゃ、そうだよな」

微笑む神通に、拓海はやや気落ちして肩を落とす。

少し期待してしまった自分が、恥ずかしい。

ややあって、神通は部屋の出口に向け足を踏み出した。

「それでは、私はこれで失礼します。そろそろ、輸送機の方と定時連絡がありますので。皆さんの到着する頃になりましたら、また呼びに来ます」

「分かった。お疲れ様、神通」

「いえ。こちらこそ、お疲れ様です。白瀬提督」

「えっ……？」

ニコリと神通は一礼すると、拓海が何か言う前に部屋を出て行く。

拓海は、神通が出て行った出口を、ただ口をポカンと開けて見ているしかなかった。

第4話 原初の艦娘

南鳥島より北西の太平洋上空を、特生防衛軍の44式対特殊生物大型輸送機が、黒い巨体から左右に伸ばした翼で飛行していた。

その輸送機に先行して、特生防衛海軍の第1・第3艦隊が先行している様子が見える。

特生防衛軍拠点用・強行支援輸送機――。

特生防衛海軍^{艦隊}を含めた、各地の拠点に向けて飛ぶ、人員もしくは物資の積載能力と飛行能力を兼ね備えた輸送機だ。

外装には軽量かつ防衛性能の高い素材が使われており、深海棲艦の艦載機による攻撃ならば耐えられる造りになっている。機体塗装が黒いのは、このためだ。

「南鳥島、見えました」

操縦桿を握るパイロットが、前方の窓から目視して、確認の声を出す。

現在時刻は、ヒトロクマルマルを過ぎている。島の周辺は、若干雲が残るものの雨は既に上がっているようだ。

「やれやれ。やっと到着か」

操縦席の後ろから、一人の男性が顔を覗かせた。

如何にも中老といった容貌の男は、オールバックに纏めた髪には若干の白髪が混じっている。

特生防衛海軍の、真っ白く所々に装飾が施された制服に身を包み、その男は溜め息を吐く。

「第6水雷戦隊、それに榛名が無事で良かったよ。どちらも、俺の不幸で孤立させてしまったからな……」

榛名からの通信で、全員無事だということは、南鳥島の再奪還作戦が開始されたのと時を同じくして、知っていた。

ジャミングの起点となっている敵艦を排除し、通信の回復に成功したそうだ。

その指揮を執った者がいるらしく、二十歳にも満たない漂流者だというから、驚きだ。

「戦隊から榛名ちゃんが孤立したと聞いて、磯貝少将、怒ってましたもんね」

男性の反対側から、くすりと大人しめに笑う少女が顔を出す。

「三笠……。今、それをここで言うか？」

「でも、事実でしたよね？ 提督？」

三笠と呼ばれた少女は、男にからかうような視線を向けた。男は何も言い返せず、困ったように頭を掻く。

「あの少将、榛名への執着の仕方が、ちよつと変だから……。アイツの方が、可愛いと思えるくらいにはな」

渋い顔をしながら、向かい側の三笠を見やる。

特生防衛海軍、横須賀鎮守府所属第1艦隊オプシヨン艦、敷島型戦艦4番艦「三笠」――。

それが、三笠という少女の立場だ。

第1世代にして、人類初の艦娘。後の艦娘たちの、モデルケースとなった少女だ。「原初の艦娘」とも呼ばれている。

金剛型姉妹とよく似た、巫女のような服。その上に袖を通した、黒を基調とする軍服には肩に金色の装飾が施され、袖には3本の黄色いラインが入っている。

金のベルトを巻いた茶色っぽいスカートから伸びる、ダークブラウンのタイツを履いた脚は、スラリとしていて健康的な印象を与える。膝には、単装砲2基が配された膝当てが巻かれ、船底のように銀と赤の配色がされたハイヒールを履いていた。

ふんわりと柔らかい、ミディアム調の髪が肩から胸元に伸びている。後ろ髪は腰にかけて長く伸びており、襟足の辺りをスクリュー型の髪留めで纏めていた。

そして唾付きの白い軍帽を被り、焦げ茶色の澄んだ瞳を男性に向ける三笠は、年相応の可愛らしさと、眉目秀麗さを兼ね備えていた。

そんな彼女だが、艦娘として生を受けてから8年、現在の対深海棲艦戦においては完全に旧式化してしまっていた。故に、オプシヨン艦

という立場に甘んずることになっている。

低速な上に主砲口径も小さく、敵の砲雷撃戦に耐え得るだけの能力は既に無い。

背中の艤装を持ってきていないのは、その所為だった。代わりに、鞘に納めた華美な軍刀をいつも持ち歩いている。

三笠自身、その辺りのことは痛感していたようだった。

艦娘としての類稀なる実戦経験を元に、演習では実力を発揮していた。大型戦艦相手に一步も譲らない姿勢は、第2世代艦娘たちから畏敬の念を持って見られている。

しかし三笠とて、艦娘だ。

海の上を歩き、敵を屠る。それが本来の役目だった筈だが、時代がそれを許さない。

男も、三笠のそんな思いをひしひしと感じていた。

何せ生まれた時からの付き合いで、自らの専属秘書艦として苦楽を共にして来た。分からない筈が無い。共有した時間は、恐らく妻や娘よりも遥かに長いだろう。それだけ、三笠のことを大切に生きてきた、という自負もある。

だからこそ、三笠をもう一度海の上で走らせたい。そう願って、研究も重ねている最中だ。

「提督……？ 私の顔に、何か付いてますか？」

じつと見つめすぎたからだろうか。三笠に、怪訝な顔を浮かべられてしまう。

「あ、ああ。何でも無い。すまなかつた」

「それは、別にいいですけど……。『アイツ』って確か、提督のご親友でしたよね？」

三笠が話題を戻し、男はそれに頷く。

「その通りだ。今は全く、行方が分からないんだけどな」

男はその人物の顔を思い出して、溜め息を吐く。

未だに、生きているのか死んでいるのかも分からない、彼にとって共通の話題を持っていた親友だった。

「確かにその人の方が、榛名ちゃんを大事にしてくれそうですね」

男の事情を既に知っている三笠は、同意を示す。彼女もまた、磯貝少将のことを思い出しているのか、その顔は苦いものだ。

「いざとなったら、無理矢理にでも引き離さないとな……」

磯貝少将——フルネームは磯貝風介。20代にして少将となった、新進気鋭の人物だ。

指揮能力自体は極めて優秀とされるが、一方でストーカー気質なところが有り、隊内でも問題になっていた。特に、榛名への執着心が強すぎることで有名だ。

艦隊が再編されて早々に噴出した問題であり、上層部の知るところとなっている。

しかし積極的に処分を下すという事は無く、磯貝少将の上司である彼に、その全てが委ねられている。

磯貝少将の抵抗も強いいため、男にとっては頭の痛い問題となっていた。おまけに、自ら男に積極的に協力しようという動きも無い。

八方塞がりになってしまい、思わず愚痴を溢したくなってしまいうような状況となっていた。

「島に着いたら、榛名ちゃんの様子も見てみましょう。神通ちゃんから、トラブルがあったという連絡も受けていますし」

「近海に出現した、ゴジラに関するという問題か……。恐れていたことが、ついに現実になってしまったな」

とにかく、今は目の前の問題を一つひとつ片付けていく他に無いだろう。正直、あまり考えたくない問題ばかりだが——。

男の内心を知ってか知らずか、パイロットのはきはきとした声が聞こえてくる。

「もうすぐ、南鳥島に着陸します。席に座って、シートベルトを着用してください。艦隊の方は、どうされますか？」

「全艦を島の南東、4 kmから5 kmの海域に向かわせてくれ。先日の衛星画像で、敵の大艦隊が観測されているからな」

「了解しました。——こちら、10号機。第1艦隊旗艦・大和、第3艦隊旗艦・金剛、聞こえますか? ——」

我に返ってパイロットに要件を伝えた後、パイロットは無線を飛ばす。

艦隊からの報告により、周囲の深海棲艦は一掃されているようだから、着陸には特に影響しないだろう。

男と三笠は座席に戻り、自身の身体をシートベルトで固定した。

南鳥島は、目の前だ。

同時刻、南鳥島要塞内。

拓海は、眠り続ける榛名をかれこれ1時間くらい見守っていた。

榛名には、身体を冷やさないように、旅行用のトランクから取り出したタオルケットがかけられていた。

眠りに就いてからは落ち着いたようで、特にうなされることも無かった。

あの時目にした、榛名の異常なまでの怯え様。

他の艦娘たちの反応も含めて、拓海はあのゴジラと何の関係があるのだろうか、と考えていた。

ゴジラの中に宿る怨霊と艦の繋がりというだけなら、神通の言う「根本的な何か」にまで訴えかけられないだろう、と思う。

「——考えても、仕方が無いか」

今いくら思い悩んだところで、その答えが何なのかを知っているわけでは無い。そんなことに時間を費やすくらいなら、榛名を見守っていた方がいいだろう。

——榛名には、笑っていてほしい。

しかし彼女は艦娘だ。兵器として戦うことを望まれているし、それが彼女の存在理由だ。

戦うことで傷つくし、さっきのように心乱されることもある。

それなら、せめて陸の上にいる間だけでも、明るい顔でいてもらいたい。

だが、顔は笑っていても心では泣いている、なんてこともあるかもしれない。

「どうしたもんかなあ……」

頭を抱えつつ、やっぱり自分は榛名のが好きなのだと、自覚する。

ブラウザ上で初ドロップした、あの日。初めて改二に改造した日。運が蔓延る海域で、たくましく戦う彼女を見守った日。

そしてこの島で、直に彼女と触れ合った時——。

拓海は、決意する。

榛名の笑顔を守る、「提督」になりたいと。

部屋のドアが開く音がして振り返ると、神通が中を覗き込んでいた。

「あれ、どうしたの？ 神通さん」

「あの、輸送機がもうすぐこちらに到着するそうです。白瀬さんの紹介がありますので、お出迎えの準備を」

榛名に心配げな視線を送りながら、神通が告げる。

もうそんな時間かと立ち上がるとうとする。

「私も、連れて行ってください……」

振り返ると、榛名が拓海の半そでシャツの袖を掴んで、彼を見つめていた。

目が覚めていたらしい。しかし、その顔色はあまり良くなさそうだ。

「でも、もう少し寝てた方が——」

拓海の言葉に、榛名は首を横に振る。

「榛名は、大丈夫です。少し寝て、気分が良くなりましたから」

「だったら——」

「でも、少しだけ……。少しだけ、白瀬さんや神通さんたちの傍にいきせてください。今、一人になるのは——怖いです」

状態を起ここしてタオルケットを胸元に寄せると、榛名は少しだけ俯く。

震えてはいないが、怯えている雰囲気は感じられた。

「いいかな？ 神通さん」

拓海は神通の方を見て、尋ねる。

「そうですね——。気分が悪くなったら、すぐに部屋に戻ってください。誰か一人、付けますから」

「ありがとうございます」

榛名は頭を下げると、タオルケットを畳んで拓海に手渡す。

「これ、白瀬さんがかけてくださったんですよね？ 白瀬さんも、ありがとうございます」

「あ、ああ、うん。どういたしまして」

適当な言葉が見つからないまま、拓海はそれを受け取る。別に、自分がかけたとは一言も言っていないのだが——。

傍のトランクに視線を移して、これで気付いたのか、と納得する。

タオルケットを片付け、拓海は榛名を支えつつ立ち上がる。

握った手の平が僅かに震えたのを感じて、やっぱりまだ、怖いのだと実感する。

「大丈夫。俺が、ちゃんと付いてるから。具合が悪くなったら、遠慮なく言ってくれ」

「——はい。ありがとうございます……！」

目を真っ直ぐ見て励ますと、榛名が寸瞬置いて、笑顔を取り戻す。「輸送機の音が聞こえて来ましたね。白瀬さん、榛名さん。行きましょう」

要塞の外から、航空機のエンジンのものと思しき轟音が響いてくる。

拓海と榛名は頷くと、神通の後を追って部屋を出て行った。

拓海の少し後ろを歩く榛名を見て、思う。

——やっぱり、榛名は笑顔がよく似合う。

要塞の北側から外に出ると、丁度西の滑走路に、黒々とした塗装が施された航空機が着陸しようとしていた。

あれが、神通の言っていた輸送機のことなのだろう。拓海たちは、周囲に気を配りつつ輸送機の方へと歩いていく。神通が呼んで来たのか、駆逐艦も全員揃っている。彼女たちは後ろの方で、榛名のことを心配してあれこれ話しかけていた。

輸送機が駐機状態になると、機体の横からタラップが下ろされ、内側からドアが開く。

そこから、凜とした佇まいの少女が姿を現した。

軍帽を被り、腰には軍刀が携えてある。黒い軍服のようなものを着込み、如何にも武人然とした恰好をしているが、足元には艤装のようなものが見え、彼女が艦娘だということが窺える。

拓海は、あのような格好をした艦娘がいただろかと頭の中を探るが、心当たりが全く無い。

この世界には、話に聞くように自分の知らない艦娘がいるのだろうか。

そんなことを考えていると、少女がタラップから降りてくる。

「長旅、お疲れ様です。第6水雷戦隊旗艦神通、お迎えに上がりました」

拓海たちの正面に立った少女に向かって、神通が敬礼をする。それを見てハツとしたように、榛名や暁たちも続いて敬礼した。

拓海も慌てて、神通たちが続く。

少女はニコリと微笑むと、敬礼を返す。その所作だけで貫録のようなものを感じられる、流麗で自然な敬礼だ。

「ありがとう。皆、初めまして、だよね？」

「はい。お初にお目にかかります」

敬礼を解いて答える神通を脇に見ると、彼女の表情はどこか緊張の色を浮かべていた。榛名たちも同様だ。

それほど、偉い立場にいるのだろうか。少女の服に散りばめられている装飾に、何か意味があるのかもしれない。

「いいよ。そんなに緊張しなくても。初めまして。私は敷島型4番艦の三笠です。よろしくね」

三笠と名乗った少女は、くすりと上品に笑う。

初対面相手に、砕けている——とまでは行かないが、それでも三笠はリラックスしていた。

それに対して、どう接するべきか手探り状態の神通たちはどこか困った表情を見せている。

「無理に、とは言わないわ。でも、私だって同じ艦娘だから、仲良くしてね?」

「は、はい」

しかし、神通は恐縮しきつたままだ。

榛名や、元気な駆逐艦の子たちは、既に緊張を解いているようだったが。

三笠は、そんな神通を見ると傍に歩み寄り、彼女の鼻を突いた。

「むー。可愛い子が、そんな顔しないの。折角の美貌が台無しだよ?」

至近距離で言われて、神通の顔が一気に紅潮する。

拓海の後ろでは、

「こ、これがレディーよ……!」

「ほう。これはいいな」

「私の、私の魅力が霞んじやう……」

「神通さん、大丈夫なのですか?」

「おっそーい!」

と相変わらずな声が聞こえる。

「あら、可愛い。よろしくね。神通ちゃん」

「は、はい。よ、よろしく、お願いします……」

三笠の笑顔に当てられて、神通は顔を真っ赤にしながら答える。

神通の顔を見て二度頷くと、三笠は拓海の方に視線を移す。

「それで、この人は?」

「わ、私たちの指揮を臨時で執ってくださいだった、白瀬拓海さんです」

頬を赤らめつつ紹介する神通に預かる形で、拓海は三笠に一礼する。

「初めまして、白瀬拓海です」

「初めまして。提督から、話は伺っています。そうですか、あなたがこ

の子たちを——」

そう言つて、拓海より少し背の低い三笠は、彼を見上げて微笑む。美貌から発せられるその笑みに、少しドキリとさせられる。

「あの、白瀬さん……？」

後ろから声を掛けられて、びくりと肩を震わせて振り向くと、榛名が拓海の顔を覗き込んでいた。

責められているのかと思つたが、榛名の表情を見てみると、どうやら心配しているだけのようだ。いつの間にか、三笠に見惚れてしまつていたらしい。

危ないところだった。

「ああ、いや。ごめん。大丈夫だよ、榛名」

拓海は内心を悟られないように、努めて笑顔を作つて答える。

「あなたが、榛名ちゃん？」

三笠は拓海の前を通つて、榛名に向かって歩きながら、声を掛ける。「はい。金剛型戦艦の、榛名です。金剛お姉さまがいつも、お世話になつています」

榛名がはきはきと答えると、三笠が微笑みながら頭を振る。

「ううん。私の方こそ、いつもお世話になつているわ。同郷の子は、あまりいないもの。そうそう、あなたの姉妹もこの辺りに来てるから、後で一緒にお茶しましょう？」

「はい、喜んで——！」

三笠の誘いに、榛名は満面の笑みを浮かべて答える。

そこでふと、拓海は思い至つた。

「あれ？ そういえば、『三笠』っていう名前……」

元いた世界の方で、聞いた覚えがあるような気がするが——。

拓海の呟きに、三笠が榛名の隣に立つたまま答える。

「気付きましたか？ 私は、横須賀にある『記念艦三笠』の記憶を受け継いでいます」

「ああ、どうりで——」

以前、光樹と共に記念艦巡りをしていたときに見たことがある。

旧日本海軍で名を馳せ、戦後まで残ることとなつたあの戦艦の名前

だ。

「覚えて頂いていて、光栄です」

「そりゃあ、知っていますよ。見に行つたこともありますし」

「そうなんですか？ それは何というか……恥ずかしいですね。がっかりしませんでした？」

三笠は、少し照れたように笑う。

「がっかり——と言うと、船底が埋められて艦としての機能を失っていることだろうか。それとも、後に復元された構造物のことだろうか。」

そんなことを聞くわけではないが、しかし拓海は首を横に振る。

「いいえ。立派でしたよ。今まで見た見た記念艦の中で一番、俺は好きです」

「ありがとうございます。そう言つて頂けるだけで、嬉しいですよ」

そう言つて、三笠は頬を緩ませる。

「ちよ、ちよつと！ 私たちにもちちゃんと、挨拶してよね！」

拓海と三笠が話していると、ついに我慢できなくなったのか、暁が割り込んで来る。

頬つぺたを膨らませて、羨ましそうに二人を見つめていた。

三笠は困つたように笑うと、膝を屈めて暁と同じ目線に立つ。

「ごめんなさいね。三笠です。よろしくね」

「あ、暁よ！ 一人前のレディーとして扱つてよね！」

「うん。よろしくね、暁ちゃん」

三笠が右手を伸ばして、暁の頭を撫でる。すると、暁は両手をバタバタと動かした。

「ちよつと！ 暁は子どもじゃないわよ！」

三笠は驚いて手を放しつつ、暁の可愛らしい仕草に苦笑する。

「姉さん。そんな顔して、嬉しそうじゃないか……。妹の響だ。よろしく」

「雷よ。困つた時は、私に頼つてもいいのよ！」

「電です。よろしく、なのです」

「島風型一番艦、島風です。駆けっこなら、誰にも負けませんよ！」

暁に突っ込みを入れる響に続いて、駆逐隊の面々が自己紹介をしていく。

「はい、よろしくね。響ちゃん、雷ちゃん、電ちゃん、島風ちゃん」
三笠が一人一人と握手をしたり頭を撫でたりしているうちに、拓海は榛名に声を掛ける。

「榛名、気分はどう？」

「大丈夫です。皆のおかげで、良くなりました」

「そっか……。俺で良ければ、悩みだけでも聞いてあげられるから」

拓海の言葉に、榛名が暫しの間彼をじっと見つめる。

「——どうした？」

「あ、いえ、その……。また、あの怪獣が出て来たらどうしようって……。また、あんな思いをするかもしれないと思うと、怖くて……」

そう言つて、榛名は俯く。

拓海にとつて、榛名が暗い表情をするのは、どうにも心苦しい。

しかしあの神出鬼没さを考えると、またいつか何処かで、もう一度向き合わなければいけない時が来るのかもしれない。

その時、榛名は耐えられるのだろうか。

「——逃げて、いいんだよ？」

口から、そんな言葉が零れ落ちる。

言つてしまつてから、拓海は密かに眉をしかめた。「あのこと」が、つい脳裏を過ぎってしまう。自分の軽率さが、恥ずかしい。

だが榛名は強く首を振り、気丈に拓海を見つめる。

「いいえ。多分、逃げたくても、逃げられません。その時は、その時ですから……。多分私は、あの怪獣——ゴジラのことを知らなくちゃいけないんです」

そう語る榛名の瞳は、強かった。

目の前にある、途轍もない「恐怖」という壁に、自ら立ち向かうという榛名。

それが彼女にとって、どれほどのものかは、榛名のみぞ知るところだろう。

そんな榛名に対して、自分が内に抱えるものが、とてもちっぽけな

ものに見えてしまう。

榛名に対して、劣等感を抱いているわけでは無い。ましてや、疎んだり嫉妬したりする気など全く無い。寧ろ、その逆だ。

「俺も、あれが何なのか、知りたい。そこに、俺が探しているものは無いかもしれないけど……。そこに、榛名がいるのなら、俺も一緒に行きたい」

「私と、一緒にいいんですか……?」

榛名の問いかけに、拓海は頷く。

拓海が探していたものは、この世界には無い。だったら、自分の好きな人——榛名の探しているものを、一緒に掴んでみたい。

拓海は逡巡しつつ、榛名と正面から向かい合う。

「俺は、榛名がいいんだ」

榛名は、とても困った顔をしていた。拓海の顔が、酷いものだったからなのかもしれない。拓海自身も、その自覚はある。

「白瀬さん、あなたは一体——」

榛名がその問いを口にしようとしたとき、間に割って入るように三笠が顔を覗き込ませた。

「二人とも深刻そうな顔をして、どうしたんですか?」

まるで計っていたかのようなタイミングに、拓海は思わず三笠を見る。

しかしその表情を見るに他意は無いようだ。

「ああ、いや。こつちの話というか——えっと」

拓海は焦って誤魔化そうとするが、それが拙かったようだ。

三笠が何かを察して、悪戯っ子のような笑みを浮かべて迫って来る。

「何か悩み事があるなら、聞きますよ?」

「そ、そうじゃなくて……。三笠さんって可愛いよねっていう話を——そう、だよな? 榛名」

助けを求めるように榛名に視線を送ると、榛名は口を真一文字に結んで律儀に首肯する。

「ありがとうございます。お世辞でも、嬉しいです。でも、『榛名がいい』とか何とか言って言っていないませんでした？」

楽しそうな顔をして詰め寄って来る三笠を見て、どうやら勘違いさ
れているらしいと思に至る。

別に告白でも何でも無く、割と大真面目な話だったのだが――

どう対応したものが困っていると、誰かがタラップから降りてくる
靴音が聞こえる。

「そこまでしておけよ、三笠。からかうのは、俺だけでいい」

靴音の主、中老の白い軍服に身を包んだ男が、三笠を咎めながら歩
いて来る。

その顔は――。

――あれ？

「提督、今日はやけに素直ですね？」

「誰かさんが、散々俺のことをからかってくれるからな。で――

――」

中老の男は呆れ顔で三笠の肩に手を置くが、拓海の方を見た途端、
その表情を驚愕のものに変えるのだった。

突然変わった空気に、周りの榛名や三笠、暁も、戸惑ったように二
人を見つめている。

――まさか、そんなことが有り得るのだろうか。

拓海と男は、顔を強張らせたまま口を開いた。

「――光樹……………？」

「お前、まさか拓海か――!?!」

第5話 再会・前編

「鳴川光樹、階級は少将。特生防衛海軍・横須賀鎮守府所属、第1艦隊司令長官並びに、第3艦隊の臨時司令長官を務めている。——榛名及び、第6水雷戦隊。諸君の生還を、歓迎する。久しぶりだな。生きていてくれて良かった」

輸送機の横で、白い軍服に身を包む鳴川光樹が、拓海に向けて名乗り、榛名たち艦娘に気遣う言葉を掛けた。

続いて三笠が彼の横に立ち、再び自己紹介をする。

「改めまして。第1艦隊オプシヨン艦、鳴川少将直属秘書艦の、三笠です。以後、よろしくね」

拓海は呆気にとられながら、数時間前とはすっかり変わってしまった、元の世界の親友を見つめていた。

あの時、確拓海は光樹と共にウエーク島から流された。溺れていた様子も、僅かながら覚えている。

この島に流れ着いた時には、彼の姿は無かったから、半ば諦めかけていた。

それが、ここに来てまだ3時間くらいしか経っていないというのに、向こうはすっかりと老け込んでいる。

髪型も体格も変わっていて一瞬分からなかったが、よく見てみると確かに光樹としか思えない。若い頃の優しげな顔が、よく印象に残っていたからだ。

「色々話したいことはあるが、事務連絡から済ませる。まず、この島の1帯からは、偶然も重なって我々特生防衛海軍の勢力圏に、加わることとなった。よって、南鳥島奪還作戦の完了を、ここに宣言する。無事、南鳥島泊地を設置することが出来そうだ。皆、お疲れ様」

すっかり貫録を持っていた光樹は、榛名たちに目を配り、微笑む。作戦が無事終わったことを告げられて、彼女たちは安堵の色を浮かべて、喜び合っていた。

「水を差すようですまないが、もう一つある。この島の近辺に展開し

ていた深海棲艦についてだ。衛星からの情報により、この島は先月の作戦失敗後、二重に包囲されていたことが確認されている。神通からの報告からして、島の全面に展開していた第1包囲網は、ゴジラによって破壊されたものと推定される。そして第2包囲網——今回の敵全体を統率していた奴のことだが——

光樹は一度言葉を区切り、一人ひとりの表情を確かめていく。皆どれも緊張の面持ちをしているが、先の言葉を待っていた。

「これを特防海軍は、コードネーム『泊地棲鬼』と呼んでいた。この敵の艦隊が、泊地棲鬼諸共、全て殲滅されていることが、先ほどの第1・第3艦隊からの報告で明らかになった。恐らくこれも、同個体によるものと考えられる。放射能汚染の程度が分からないため、敵の被害状況は詳細不明。両艦隊とも近づけない状況だ。こちらについては後日、専用の機器を用いて調査を行うことになった。その際、ここを拠点に使うことになるだろう」

——泊地棲鬼。

拓海の記憶では、ゲームの中で初期のイベントボスを務めていた敵だ。拓海自身は戦ったことがないため分からないが、他のボスと同様、強力な敵だったと思う。

そんな敵が、艦隊ごと殲滅された。あのゴジラによって。

「それと、今日から明日にかけて、周囲の警戒と施設の修理を兼ねて、第1・第3艦隊と共にここに泊まることになった。修理は、主に発電系統だな。他のライフライン系統の点検・修理も行う。補給物資も沢山持つて来てるから、安心してくれ。今晚は少し騒がしくなるが、よろしく頼む。何か質問はあるか？」

光樹が一同に向けて言うと、島風が真っ先に手を挙げた。

「鳴川司令官と白瀬さんって、どんな関係なの？ 随分、仲良いみたいだけ」

周囲に連装砲ちゃんを従えている島風に、光樹が逡巡してから、納得したように頷いた。

「ああ、そういえばいきなりで、皆に話してなかったな。俺と拓海は、大学時代の同級生だ」

「白瀬さんが、提督の言っていた——」

簡潔に言う光樹の隣で、三笠が事情を知っているかのように頷いている。

——三笠に、自分のことがどれだけ知られているのかと思うと、急に不安になって来た。

「あれ？ でも、しれーかんって、幾つだっけ？」

雷がすぐに気付いたようで、頭に疑問符を浮かべている。暁たちや神通、榛名も大体似た様な反応だ。

「50だよ。どう説明したら、いいかな——。ある日拓海と旅行に来てたら、波にさらわれて、それぞれ同じ世界の別の時間に飛ばされた、ってところなんだけど。分かるか？」

あまりにザックリとした答えに、皆の反応は芳しくない。

三笠が若干呆れながら、光樹に言う。

「提督、今のだと短すぎて流石に分かりませんよ……。せめて、何時、何歳の時かくらいは答えてあげないと」

「ん？ あ、ああ、そうだ……。すまん。——俺とこいつが同級生なのは話したが、旅行に行っていたのは2015年の5月の頭だ。どっちも大学が上がったばかりで18歳だった。その時に波にさらわれたんだが、俺は同一の日に、こっちの世界に来た。並行世界間を移動した、ってところか。そういえば拓海、お前今幾つだ？」

光樹に問われて、まだ言っていなかったことを思い出す。

「まだ、18だよ。俺も光樹と同じ場所で、全く同じタイミングの時に流された。だけど辿り着いたのは、33年後の同じ日だな。——どうなってるんだ？」

「それは、俺も全く分からん。こっちの世界に来て33年経ったら、あの日のまんまのお前がここにいるんだからな。何かの間違いかと思っただ」

拓海と光樹たちの話を聞いて、榛名や神通、三笠は一応の理解を示していた。

一方暁型の面々は、あんまり分かっていない顔だ。特に暁は、混乱しているのか頭から煙を出している。

島風は——話に興味を無くしたように、連装砲ちやんと遊び始めていた。

——元々話を振ってきたのは、島風じゃないか……。
という愚痴は脇に置いておく。

「さて、そろそろ第1・第3艦隊の連中が帰って来ると思うが——。ああ、既に上陸してこつちに向かっているな。俺はこの後の作業の指示がある。拓海たちは、彼女たちに挨拶だな。手が空いてからでいいから、手伝ってくれると助かる。物資の方優先で、人員が少々足りてないからな」

光樹は話を切り上げると、神通たちと敬礼を交わす。

「それじゃあ、俺たちはここで一旦、失礼する。行こうか、三笠」

「はい、提督」

光樹は踵を返すと、輸送機の方に三笠と共に歩いて行く。

いつの間にか、遠くを歩いていた親友の背中を、拓海はただ黙って見ている事しか出来なかった。

光樹と三笠が去った後、拓海たちは要塞の方へ戻るために島内を歩いていた。

要塞の北側に差し掛かった時、向こうから走って来る影が見える。目を凝らして見ると、榛名と色違いの恰好をした少女が3人、こちらに向かっている。

「はーるーなー!!」

中央の栗色の長髪を持った少女——金剛が、大声を上げながら拓海の斜め後ろを歩いていた榛名に飛びついた。

「お、お姉さま!?!」

駆逐艦との話に興じていた榛名は、完全に不意を突かれ、金剛に為すがままにされる。

「うー。榛名、心配したデース。無事と聞いて、早く会いたかったデース」

そう言つて榛名に頬擦りをする金剛の目には、安堵の涙が浮かべら

れていた。

後からベリーショート少女、比叡と眼鏡の少女、霧島が追い付く。

「金剛お姉さまったら……。でも榛名、私たちも心配したんだよ?」

興奮気味の金剛に苦笑いを浮かべつつ、比叡が榛名に話しかける。

隣に立つ霧島も、眼鏡の位置を整えながら頷いた。

「ええ。榛名が戦闘中に行方が分からなくなっただけからの、金剛お姉さまは見ていられますでしたから……」

「比叡お姉さま、霧島……」

金剛を抱き留めつつ、榛名は比叡と霧島を見て微笑む。

再会を分かち合う様子をから、4人はかなり仲が良いと分かる。

そんな彼女たちを見て、拓海も自然と頬が緩んだ。

「白瀬さん、どうされました?」

横に進み出て来た神通が、拓海に声を掛ける。

「兄弟とか姉妹とかって、いいもんだなって思ってたさ。そういえば、神通さんも姉妹がいたよね?」

「はい。鳴川少将の話聞く限り、川内姉さんも那珂ちゃんもいると思いますよ——」

神通は、周りに視線を向けて、探す素振りを見せる。やはり神通も、自分の姉妹のことが心配のようだ。

拓海も辺りに目を向けてみると、東の海岸の方から、川内と那珂が歩いて来る様子が見えた。

神通の肩を突き、二人の方を指差してみる。

「あの二人じゃないかな?」

「あ……。本当、ですね……」

「ここは俺に任せて、行ってきなよ」

そう勧めてみるが、神通は戸惑ったような視線を向けて来る。

「でも、大和さんとの挨拶が……」

大和——。確か、第1艦隊の旗艦を務めているという艦娘の名前だ。

「大丈夫。俺が済ませておくから。神通さんは、行っておいで」

しかし、神通は迷ったように向こうとこちらに視線を彷徨わせてい

る。

真面目な性分なのだろう。旗艦としての任を務めようとする辺り、そういう一面が感じられる。

そこに、腰に手を当てた暁が前に進み出た。

「行ってきなさい。暁が付いてるから大丈夫よ」

「暁ちゃん……」

響や電と雷も、同様に頷く。

「一緒にいられるときは、尚更一緒にいた方が良い。いざってときに会えなくなるのは、悲しいからね」

「私も、同感なのです」

「ここは雷さまに、任せてよー」

島風も連装砲ちゃんと戯れながら、神通の背中を押す。

「私は姉妹なんていないから、分からないところはあるけど。でも、一人は寂しいから。行った方がいいと思うな」

「——だってよ。行ってゆっくりしてきなよ、神通さん」

拓海も後に続いて、笑いかける。

神通は逡巡した後、頭を下げた。

「——はい。ありがとうございます。皆さん。行ってきます」

頭を上げた神通は、そう言っ嬉しそうに笑うと、川内と那珂の方へ走って行った。

「ふふっ。皆さん、再会できて良かったですね」

脇から声がして、視線を向けると、赤い傘を差した背の高いポニーテールの少女がいた。榛名や神通の方を見ながら、穏やかな笑みを浮かべている。

スラリと伸びた背とその表情が、見る者に大人びた印象を与える。

「や、大和さん!？」

彼女を見るや否や、暁が緊張した面持ちになった。

「暁ちゃん、久しぶりですね。駆逐隊の皆も。——そちらの方は？」

見ない顔ですけど」

大和は駆逐艦の面々に微笑みつつ、拓海に視線を移す。さほど、こ

ちらへの興味があるわけでは無いようだ。確認というところだろう。外見は、恐らく拓海と同じくらい。身長は榛名や金剛より高く、靴の分を差し引いても拓海とほぼ同じ目線くらいだ。

左脚に目をやると、横に白いラインが一本入っただけのソックスが履かれている。改装はまだ、行われていないということだろうか。

「初めまして。白瀬拓海です」

取り敢えず礼をして、名乗っておく。

それ以上は、何も自分から言う必要は無いだろうと思っていたが、暁が自分より背の高い大和を必死に見上げて、補足を始める。

「この人が、暁たちの指揮を執ってくれたのよ！ 島風がぱーつと行って、暁たちがバツってやって、榛名さんがドーンって！」

至極真剣な表情で、暁は身振り手振りを交えて話す。その仕草が可愛らしくも面白く、拓海は笑いを噛み殺す。

響が暁の頭に手刀を入れて、溜め息を吐く。

「何よ、響！ 痛いじゃない！」

「それじゃあ、半分も伝わらないよ。姉さん。この島に流されてきた司令官が、孤立していた私たちに作戦を提案してくれたんだ」

暁の頭を擦りつつ、響が一言加える。後続くように、電と雷もそれに補足を始めた。

「第1包囲網の中心艦隊に、まず島風ちゃんが陽動に出て、その後から電たち水雷戦隊で挟み撃ちをしたのです」

「それで、榛名さんが敵の旗艦を狙い撃ちしたわ。雨に紛れてやったけど、正直敵艦が来ないかヒヤヒヤしたわ」

確かに、雷の言う通りだと拓海も思う。

タイミングが少しでも遅ければ、敵の増援に辿り着かれて危ないところだったかもしれない。

「最終的に成功させたのは、水雷戦隊の皆と榛名なんだけだな。俺、必要無かったんじゃないか？」

「そんなことは無いよ。司令官」

響が真に迫った顔で、拓海を見上げて言う。

暁や電、雷が、驚いたように響を見つめた。拓海も思わず、響の方

を凝視する。

すると、大和のくすりと笑うような声が聞こえた。

「ふふっ、すみません。皆、この方を信頼してるんだなって思って。〃司令官〃ですか。良かったですね、白瀬さん」

「ああ、いや。自分はそんな器じゃあ……。それに、ただの民間人ですし……」

拓海の言葉に、大和が首を横に振る。

「そういう意味ではありません。私たち艦娘にとって、安心して指示を任せられる、精神的な支柱は必要です。そんな信頼出来る人のことを、私たちは〃提督〃や〃司令官〃と呼ぶんです。勿論後者には、役職的な意味もありますけれど。——響ちゃんは、貴方のことを信頼してくれてるんです。そうですね、響ちゃん？」

「ま、まあ……。そういうことに、なるかな……」

ニコニコと笑う大和に見つめられ、響が恥ずかしそうに帽子で目元を隠し、俯く。

——響が、自分を信頼してくれている？

「でも、自分は大した指示何て何も——」

それがどういいう意味か汲み取れず、拓海が言い淀むと、大和が呆れたように肩を落とす。

「もうっ、白瀬さん？ 作戦が、どうこうっていう問題じゃありません。響ちゃんは、貴方の事を〃好き〃って言ってるんです」

「ちよつと——！」

大和から放たれた言葉に、響が顔を真っ赤にして見上げる。

「な、なんですって!!」

「はわ、はわわわっ!!」

「響、やっぱりそうだったの!?!」

些か直球すぎる言葉に、暁たちも顔を赤くして響を見つめる。

一気に注目を浴びた響は、赤い顔のまま両手を振る。

「そ、そうじゃなくて。別に好きって言ってるわけじゃ……っ」

「分かりますよ。響ちゃんは、異性としての〃好き〃じゃないことは出来ることなら、〃自分たちの指揮官になって欲しい〃ということでは

すよね?」

響が、大和の言葉に必死で首肯する。

一方の暁たちは、ホツとした表情をしていた。

それにしても、心臓に悪いことを言ってくれる。拓海まで、固唾を呑んでしまっていた。

これでは肩透かしをくらって、操り人形になったような気分だ。

「そう思ってくれてるなら、嬉しいけど……。どうなんだ? 響」

「や、大和さんの言う通りだよ。嘘は無い。それに司令官、こういう事に興味があるって言ってたじゃないか」

「それはまあ、そうだけど」

未だに響は、顔を赤くしたままだ。これ以上聞くのは、止しておいた方が良くのかもしれない。

そう思っ大和に視線を向けると、彼女は意味有り気に微笑んでいる。

「今なら、第6水雷戦隊の司令官職は空席です。鳴川少将が、直接指揮している形になりますね。『新米少佐』になることが出来れば、彼女たちの『司令官』になれるかもしれませんよ?」

新米少佐は確か、ゲームの方では着任したばかりの提督の階級だった筈だ。

こつちの世界のものも、階級なのだろうかと思ひ、尋ねてみる。

「それって、何ですか?」

「特生防衛海軍に限って使われる、『代将』に近いニュアンスの役職ですね。大尉以下の人や、艦娘の司令官職に適正があると判断された場合に与えられるものです。確か、金剛さんたちの戦隊の司令官は、第1世代の頃にそうやって昇進されたと聞いています」

特別な状況の時に与えられる、臨時の階級といったところか。

話に聞く磯貝少将も、そうやって上がって来たことに、拓海は驚く。簡単に将官となることは出来ないだろうが、艦娘たちの指揮官となれる可能性があるということだ。

「でも、民間人がそうなったという例って、無いですよ?」

「現状は、まだですね。民間人が艦娘の指揮を執って、戦果を挙げるな

んてことは、普通ありませんし。その分、白瀬さんはチャンスがあります。仮になったとしても、周りからの視線は厳しいかもしれませんけど」

その辺りは、大和に同意だ。

どこからともなく、素性の分からない若造がやって来て、いきなり艦娘の指揮を執る。彼らとて、プライドを持って職に当たっている筈だ。

余程のことが無い限り、居場所はまずないだろうと思う。

ふと、傍に立つ暁たちや金剛姉妹と談笑する榛名を見やる。

彼女たちは、自分の無茶な要求に答え、信頼まで見せてくれている。

そして榛名のことやゴジラのことなど、この世界で気になることが、拓海の中で少しずつ増え始めていた。

特生防衛軍や榛名たち艦娘隊の傍にいないければ、分からないこともあるだろう。それに、自分が生まれたわけでは無いこの世界では、他に行き場が無い。

「———そうですね。でも、その『新米少佐』を狙ってみるのも、悪くないかもしれませんね。それで、この水雷戦隊の指揮を正式に執ってみるのも良いかもしれない。というか、執ってみたい」

決意を表した拓海に、響たちが目を見開く。

「そ、それは本当かい？ 司令官」

「い、いいんじゃないかしら？ 暁は別に良いわっ」

「司令官になったら、私に頼ってよね！」

「電ちゃんだけには、やらせないのです」

どうやら、反応は悪くないらしい。ここに、神通がないのが少し申し訳ないが。

島風は——。いつの間にか、川内姉妹の方に遊びに行っていたようだ。

「上々、みたいです。白瀬さん」

「みたいです」

榛名を指揮出来ないのは、少しばかり残念ではあるが、そんなことで悩んでも仕方が無い。

大和が、拓海に向かって右手を差し出して来た。傘は、左手に持ち替えられているようだ。

「いつか正式な司令官として、ご一緒出来ることを心待ちにしています。白瀬さん」

拓海も応じて、大和の手を握る。

「ええ、こちらこそ。精々、頑張ってみます」

拓海の手を握り返す大和の手は、暖かかった。気温のせいか、少し汗ばんでいる。

そのことで、艦娘たちは確かに生きているのだと、拓海は再び実感するのだった。

第6話 再会・後編

大和との挨拶を終えた後、拓海たちは比較的軽い物資の搬入を手伝うことになった。

他の艦娘たちも手伝っており、文字通り人海戦術と言えた。

この島に来たのは、2個艦隊。総勢56名の艦娘がいるのだ。作業も捗るといものだろう。

それぞれの艦隊には、主力戦艦や空母が集中配備されているようだ。武蔵や長門、赤城や加賀など、層々たるメンバーが集まっている。ここまで大規模なのは、榛名たちの救出と、泊地棲鬼の大艦隊攻略のためといったところか。

一晚、艦隊は島に泊まっていくと聞いてどうするのかと思っただ、使える空き部屋は全て使うのだそうだ。

2階や3階には段ボールを貼りつけて、一時的に雨風を凌げるようにするという。なるべく要塞内に入れるように、廊下や他の空きスペースなども使用するらしい。

今回は臨時だから仕方が無いが、いつか準備が整った時に、ウェーク島やミッドウェー諸島の攻略拠点にもなるらしい。そんな時に、先の大戦の遺物をそのまま流用しては、手狭になってしまうことが容易に想像出来る。

それを回避するために、後々本格的な改装工事と備品の搬入が行われるとは、光樹の談だった。

日が落ち、夕食を済ませた後、拓海は再び要塞の3階に来ていた。

今度は、南の窓の方から海を臨む。

頬に当たる仄かな風が、心地良い。

「何だ。ここにいたのか、拓海。探したぞ」

振り返ると、自分が知っている頃よりも遥かに老けた光樹の姿があった。

「そりゃ、悪い。半日も経ってないのに、何だか疲れてさ」

「この島に来て、あれよあれよとイベント続きだからな。誰だって疲れるだろうさ」

光樹は肩を竦めると、歩いて来て拓海の左隣の窓縁に肘を置く。拓海から見る光樹の横顔は、拓海も知らない、色んな経験をしてきた人物の顔だった。

疲れているようでいながら、何かの目標に向けて活き活きと進んでいる、そんな大人に見える。背も少しだけ、伸びているような気がする。

「こうなっている理由はまあ、さつき聞いたからいいけどさ……。お前、何があつたんだよ？ これじゃあまるで、浦島太郎になったような気分だ」

大きな溜め息を吐き、疑問を光樹にぶつける。

一緒に流されたと思つたら、33年後の未来で、親しかった親友は年を重ねている。

わけが分からなくて、ストレスが溜まりそうだ。

「話せば、長くなるかな。なんせ、33年だからな。気が付けば、もう50だ。俺も、この島に流れついて、自分が生まれてない世界だと知って、驚いたよ。何もかも違うんだからさ」

「お前が、生まれてない……？」

「この自衛隊の人に助けられてから、本土に行った時、調べて貰ったんだ。そしたらさ、俺の祖父母に当たる人物が全員、死んでたんだ。1954年、東京でね」

「ゴジラ……」

頭の中に、元の世界で見た1作目のゴジラの記憶が過ぎる。

光樹の話が事実なら、彼の父母はそもそも生まれてないということになる。光樹が生まれる要素が、どこにも無いということだ。

「ああ。その後はゴジラの出現は無かったが、怪獣の出現は相次いだ。そこで、1964年に対怪獣専門組織だった防衛隊を特生自衛隊に昇格。以後、怪獣の脅威から日本を守り続けて来たところだ。2015年時点での成果は、散々なものだったみたいだけどね」

「2体目以降と、その他の怪獣か」

「ああ。1984年にそいつが出現。で、2体目はデストロイアとの戦いで死亡。3体目が成体ゴジラになった。この時期にゴジラの骨が発見、3体目を警戒した機龍開発が始まる。しかし開発が終わる前に3体目が死亡。4体目——例の怨霊が現れた」

拓海もゴジラ映画は一通り目を通してはいるが、ゴジラに関連した歴史がそもそも違っていることに、驚く。

「3体目って、『ジュニア』だよな?」

『ジュニア』——ゴジラジュニア。ゴジラと同族で、生まれた直後には『ベビーゴジラ』と呼ばれていた個体だ。人間の手で、保護された過去を持つ。

「殺されたんだよ、4体目に。小笠原諸島でその死体が打ち上げられていた。当時は、機龍関係やデストロイア以前の出来事による予算逼迫で、十分な迎撃が出来なかった。メーサーの運用予算すら下りなかった有様だ。3体目が、あまりに何もしてこないことでの油断もあったろうがな。護国聖獣も確認されるが、叶わず。最終的には、この怨霊は倒すことに成功。そして、翌年と翌々年に5体目がゴジラの骨を求めて上陸。2014年には、当時最大のゴジラだ。こっちは、日本にはノータッチだったけどな。この辺りは、拓海も大体知ってると思う」

「——それでよく持ったな、日本……」

光樹の口から語られる話に、拓海は内心舌を巻く。

幾つかの映画の世界が一つになったような状態で、ずっと日本は戦ってきたのだ。戦果が散々でも、国が残っている時点で誇っても良いような気がする。

「6体目ってことは——富士山の麓に街は無かったか?」

「『ジャンジラ』だったか。開発計画はあったが、取り潰しになってるな。ゴジラを強く警戒した、特生自衛隊と政府からの圧力が掛かっている。代わりに、浜岡がムートーの襲撃を受けているな。事件後は、特自と米軍に接收されている。で、サンフランシスコでゴジラとムートーが戦闘。俺が流れ着いたのは、この翌年だな」

ゴジラが、日本各所に既に現れていたのなら、無理も無いのかもし

れない。計画が立ち上がった時期は知らないが、2体目が現れた後ならば納得が行く。

日本の代表的な富士山の麓に、都市を作るだけでも様々な障害があるというのに、止めにゴジラだ。慎重にならざるを得ない。

「それじゃあ、他の原発の方はどうなってるんだ？」

「新規建造は下火になっていったな。何せ、『どうぞウチに来てください』って言うてるようなもんだからな。スーパーXシリーズがあったとはいえ、限界もある。向こうの世界に比べたら、遥かに原発への警戒感は強いな。おまけに今は、深海棲艦の対応で手一杯だから、使うにしても効率化しなくちゃいけない。こんな時に、ゴジラが来たらヤバいつてんで新エネルギーの開発もしているが、民間に行き渡るまでは、まだ遠いな」

「なんつーか……。皮肉だな。ゴジラが出て来たってのは、かなりデカイみたいだ」

そのおかげで、という言い方も変かもしれないが、核への危機意識が強まる。一方でエネルギー問題もあるだろうから、難しいところだ。

「それも日本に限るがな。他の国は、対岸の火事だと思っている。今まで襲撃が無かったのを幸いにしてな。このご時世だから、新しく導入する国も出て来るぐらいだ。特に、再編された国々で目立っているな。こういう国は、人口が流入した分、エネルギーもいる。それを賄うためなんだろう」

日本にばかり集まる怪獣。そして、深海棲艦によって噴出するエネルギー問題。供給能力を欲している国からすれば、渡りに船なのだろう。

自分の国には、ゴジラは来ないという気持ちだが、更にそれを加速させる。

「で、お前は今の今まで何をしてたんだよ？　微妙に機密に触れてる気がするけど」

「そりゃ、こつちに飛ばされてすぐに特性自衛隊に入ったからな。そ

の10年後に、6体目のゴジラ戦で実戦デビュー。その2年後に、深海棲艦の発見だ」

思い切りの良さに呆れる反面、あちこち旅行に引き摺り回されたことを思い出して、納得する。だが、最後の方の言葉が少し引つ掛かった。

「ちよつと待て。発見って……」

「そ。俺が見つけた。証拠も揃えて上層部に訴えたが、見事にスルー。早めの対策が出来なかったせいで、今の有様だ。その後、第3次大戦に従軍。途中で深海棲艦が現れて、俺の対抗兵器開発案が、通つたわけだ。幸いこつちじゃ、過去の対ゴジラ兵器のノウハウが使えるそうだったからね。利用させてもらった」

「——それ、ますます言っちゃいけないことなんじゃないか？
よりもよつて、艦娘の生みの親がお前かよ」

あまりにもペラペラと大事な情報を言ってしまう光樹に、拓海は頭を抱えたくなる。

「この島にいるやつで知ってんのは、俺と拓海と、三笠くらいだろうさ。他の子たちは、機密漏洩しかねないから、知らんな。お前だから、言うんだぜ？」

「それで、いつも三笠といっしょなわけか……」

話しているところを見たのは僅かだが、あの気安い会話と三笠の光樹への信頼具合からして、長い付き合いだろうとは思っていた。

「まあ、な。おかげで、蔑ろにし過ぎて妻と娘には頭が上がりないよ」

「——オイ!？」

朗らかに笑う光樹に、拓海は思わず声を上げてしまう。

——馬鹿なんじゃないんだろうか。

「でも、ほら、三笠って可愛いだろう？ 頼り甲斐もあるし」

「……お前、それ絶対家族の前で言うなよ?」

「悪い、もう言っちゃった」

「馬鹿かよ!？」

もう、どこから突っ込みを入れたらいいか分からない。普通、手遅

れなんじゃないんだろうか。というか、こつちで家族が出来ていたのか。

「それは重々分かってるさ。おかげで、会う度に愚痴を言われるからな……。そこに三笠も加わって来るから、余計タチが悪い」

「お前なあ……」

よくもまあ、楽しそうに笑えると思う。

彼らには彼らなりの事情があるだろうから、それ以上は突っ込まない。

「——で、艦娘がどうやって生まれた、とかは聞かせてくれないのか？」

話を戻すと、光樹が苦い顔をして頭を搔く。

「それなんだが……。俺が作ったっていう話自体は、信頼出来る相手にはしてもいいことになってるが、それ以上はストップが掛かってる。その先は自力で調べてくれ、としか言えないな」

「何だよ、それ……」

「まあ、こんなこと言ってる時点で、臭ってるようなもんだが。こつちのクビもあるからね」

光樹は親指を立てて、首を横に真一文字になぞる。

「そういや、あの怨霊ゴジラのことも聞いてなかったよな？ 沖にいた奴って、明らかにそれだったけど。倒されたんじゃないのか？」

「それもノーコメントだ。悪いな」

「いや、いいけどさ」

きっぱりと言う光樹に、拓海も引き下がるしなくなる。

「世間じゃ、情報が錯綜してるんだよね。2002年のゴジラだ、とか7体目の个体か、とか。よく、怨霊ゴジラって分かったな？」

光樹の問いに、拓海は頷く。

「熱線吐いた後の爆発が、キノコ雲だったんだよ。あと、シルエツトかな。首が前に突き出て、ずんぐりむっくりな、さ。榛名は悲鳴を上げるし、神通や暁たちなんか震えてたな。忘れようとして振る舞ってるみたいだし。ゴジラとの間に、なんかあるんじゃないや——って、お前は答えられないんだっけ」

「こんなやつで、すまん。それに、こういうのは自分で調べて貰った方が、面白いと思ってるよ」

「そんなとこだらう、と思った」

しかし、光樹も随分と意地の悪いことを言う。

肝心なことを教えてくれないとは、生殺しにされたような気分だ。

「————どうやったたら、調べられる？」

そんな風に尋ねると、光樹は拓海を見て瞬きを二度繰り返し、それから溜め息を吐いた。

「それ、まじで言ってるのか？」

「大マジだ。榛名のあの怯え様を見て、ほっとけるかっての」

「はあ……。そうだな……、特別ヒントだ。東京府旧首都区——23区のことな。それと三菱重工。特生防衛軍のお得意先だ。旧首都からなぞってみるといいな。知ったら知ったで、口封じがあるだろうから、その辺は覚悟しとけよ？」

光樹の意外な譲歩に、拓海は思わず彼を見返す。

ノーコメントと言っていた割に、素直すぎないか。

「お前、それ言ってるのか？」

「拓海が榛名大好きだったのは、よく知ってるからな。俺だって、三笠がいる。同じ立場だったら、やっぱり知りたがったろうよ」

光樹の口から出て来る言葉に目を白黒させていると、2階から誰かが上がって来る音がする。

振り向くと、その音の主は他でも無い、三笠だった。

「三笠さん……」

「三笠」で良いですよ。白瀬さん」

三笠はそう言って笑いつつ、拓海と光樹の間に立って、窓の外を見る。

「さては、三笠。さっきの話、聞いてたな？」

参ったような顔で、光樹が三笠に話しかける。

三笠はくすりと笑うと、光樹を横目で見やった。

「提督、ちよつと口が軽すぎませんか？ 一人前の幹部として、それはどうなんです？」

「別にいいだろう。こいつは親友なんだから」

「良くありません。何かの拍子で、漏れたらどうするんですか？ 提督だって、自分で言っていたじゃないですか」

「世間のことがあるからな。隠していなかったら、今みたいな艦隊は作れなかったよ」

二人だけの会話に置いて行かれ、拓海は混乱する。

言っている意味が、まるで分からない。

「それ……、俺の前で話して良いことか？」

拓海は、今聞いてはいけないことを聞いているような気がして、横槍を入れる。

「ん？ ああ、いや。すまない。確かに話すことじゃ無いな」

それもそうだと言わんばかりに、光樹は話を切り上げる。

「すみません、白瀬さん。こんな提督ですけど、普段は口が堅いんですよ？」

「……本当か？」

三笠は苦笑して言っているが、どうにも信用出来ない。この世界での光樹のことをよく知らないのだから、尚更だ。

「ええ。私との関係だって、上手く隠してるみたいですし」

「何ですか、その不穏な言い方は……」

さっきの話からして、どうにも気になる。

すると、三笠が悪戯っぽい笑みを浮かべて、光樹の顔を覗き込んだ。

「人目はばからず、私の事を抱きしめちゃうくらいですから。ね？」

提督」

「おいつ、こらっ！ 誤解を生むようなことを言うな！ いや、間違っていないけど違うっていうかだな!？」

爆弾でも放り込まれたかのように慌てだす光樹に、拓海は白い目を向ける。

これは、あれだ。もしかしなくても、もしかするヤツだ。

「まさかとは思うが、愛人とか言うまいな……?？」

「正解です。白瀬さん」

あつけらかんと言ってしまう三笠の言葉に、眩暈がしそうになる。

自分の親友は、こんな奴だったかと思うと、溜め息が出た。出ざるを得なかった。

「ちよっ!? そうじゃなくて、娘とか相棒とか、そういう一言じゃ語れない関係であつてな?」

「でも、私のことが好きなのは事実ですよね?」

「そ、それは……」

慌てる光樹に言う三笠の横顔を見て、拓海は確信する。

これは、完全に三笠にからかわれている。光樹の反応を見て、楽しそうに笑う顔が、何よりの証拠だ。しかし、そこに嫌味めいたものは感じられない。

「奥さんとは決着付きましたけど、娘さんはどうするんです?」

「ぐ……。頭の痛いことを言ってくれるなよ……」

頭が痛くなりそうなのは、こっちも同じだ。

結婚している上に、娘がいる。もう、これはアウトなんじゃないだろうか。

「勘弁してくれよ……。妻のことだけでも、命が幾つあつても足りないかつたんだからさ……」

「いいえ。ちゃんとしてください。大体、提督が自分で言ったんじゃないですか。『自分で何とかする』って」

光樹が抗議の弁を述べるが、三笠にぴしやりと言われてしまう。

もう、どっちが上司でどっちが部下なのか分からなくなりそうだ。

「なあ、光樹」

「何だよ、拓海……」

どつと疲れた表情の光樹が、面倒くさそうに応じる。

「ちよつと、表でPK戦やろうか。お前、キーパーな」

「ボールが無いだろ。ってか、当てる気満々だよな、それ」

「殴られないだけ、マシだろ?」

「どっちも変わんねーっての」

そんなやり取りの後に、沈黙が訪れる。

何も、本当にボールをぶつけてやろうというわけでは無いが、しかし光樹の馬鹿さ加減には呆れを覚える。

光樹の身の回りの話を終わらせたところで、その場はお開きとなった。

拓海が下に降りようとした去り際、三笠から声を掛けられる。

「白瀬さん。榛名ちゃんのこと、お願いします」

「それは……もちろん」

三笠の意味有り気な表情に首を傾げるが、敢えて聞くのは、はばかられた。

それが何を意味するのか知らないまま、拓海は1階に戻るため、2階へ続く梯子を下りて行った。

拓海が去って行った後、3階には光樹と三笠の二人が残される。

夜の海に目を向けながら、光樹が呟いた。

「お前も、意地が悪いな。三笠」

「あれ以上は、白瀬さんが自分で知るべきだと考えたんでしょ？」

三笠の問いに、光樹は薄く笑う。

「それもあるけどな。勿論、機密だからってのもある。どこで聞かれるか、分かったもんじゃないからな」

「どうせ知られるなら、いっそ全部、言ってしまったら良かったのでは？」

「————どうだろうな……。俺は、真実を知ったあいつに、責めて欲しいのかもしれないな。その癖、怖いんだよ。自分のしでかしたことが」

光樹は、吐き捨てるように言う。

そんな彼の腕に、三笠が肩を寄せて空を見上げた。

「白瀬さん、怒るでしょうね」

「ああ。だろうな。おまけに、あいつのお気に入りの榛名は、もろに影響を受けている。第1世代では、見られなかった傾向だ。あれで、潰されなきゃいいが……」

「白瀬さんなら、大丈夫ですよ。ちゃんと、榛名ちゃんのこと、受け止めてくれます」

「どうだろうな……」

光樹も空を見上げて言った。

三笠が、疑問の目を光樹に向ける。

「あの日、ウエークから流されるまで、拓海は自分の内に何かを抱え込んでいた。あの様子からして、誰にも打ち明けられないようなことを、だ。自分のことを受け止められないような奴が、そんなことを出来るのか、少々疑問だな」

「——光樹君。白瀬さんのこと、舐めてませんか？」

「……そうか？」

「あの人は、強いですよ。もちろん、自分のことで強がっているのかもしれないですけど——。でも、好きな人のことなら、どんな無茶でもやってのけそうな……。そんな人です。貴方と似ています」

「言うほど、似てる気はしないけどな」

光樹には、そんな自覚など無い。ただ目の前のことに夢中で、走って来ただけだ。

その結果が、こんな有様となると、自嘲せざるを得ない。

「似てますよ。違うとすれば、頭を使うか身体を張るか……。でしょうか」

「……なるほどな」

高校の頃に見た、キャプテンとしてコートを走り回る拓海の姿を思い出す。

あちこちに指示を飛ばし、状況に合わせて身体を張って対応する、献身的なプレイ。それが周囲の選手たちよりも、一際目立っていたように思う。

そして、研究に軍での指揮と走り回っていた自分の姿を重ねる。

「提督も、どうかご自愛くださいね？」

「ありがとう……」

微笑みながら呟く三笠に、光樹も答える。

確かに、三笠がいれば、どんなことも乗り越えられてしまうように思えてならない。

南の空に瞬く星を見上げながら、光樹は決意と覚悟を改めて固める

の
だ
っ
た。
。

第7話 二人の決意

光樹との話を終えた後、拓海は用を足しに行く。

南鳥島に流されて、数時間。

親友は、歳を取った姿で目の前に現れた。

正直、今でも信じられない気持ちだ。

話も聞いているし、頭ではきちんと理解しているが、心情的にはあり得ないと思ってしまうのだ。

ついさっきまで一緒だった同い年の友人が、玉手箱を開けたかのようにならなくなって、現れる。こんなことが、あるのだろうか。

50歳になっていた光樹は、確かに話し方からして本人に違いなかった。

樂觀的——とは言い難い状況ではあったが、ポジティブ思考なのも、拓海をあちこちに引き摺り回していた頃と変わらない。

その明るさに、拓海はいつも救われていた。危うく、試合に支障が出かけたことがあったのには目を瞑るとして、国内外問わずに連れて行ってこれたことは、本当に感謝している。

そんな光樹だが、一方で彼との間には時間の壁が感じられた。

こっちはまだ半日も経っていないのに対し、向こうは33年。

この間に彼が何を思っただろうか。特生自衛隊に入り、大戦を戦い、艦娘を生み出したのかは知らない。

そこに、白瀬拓海という人間はいなかった。

自分とでは無く、他の誰かとの歴史なのだ。

そのことが、余計に寂しく感じてしまう。

光樹は光樹で、何かを抱えているようだった。

お偉方に止められているのもあるかもしれないが、話しぶりからして仮にそれが無くても、話すことを拒否したように思う。

それだけ、何か後ろめたいことがあるのかもしれない。

「あいつも、俺と同じか……」

自分の内に抱えるものを思っただけ、拓海は自虐的な笑みを浮かべた。

用を済ませて男子便所を出ると、出入り口で榛名が立っているのが見えた。

辺りを伺っている様子を見るに、誰かを待っているのだろうか。

「あ、白瀬さん。ちよつと、いいですか？」

便所の出口に立つ拓海を見つけて、榛名が声を掛けて来る。

どうやら、探していた相手は自分だったようだ。

「どうしたの？ 榛名」

洗った手を、トランクから持ってきたハンカチで拭きつつ、近づく。すると榛名は右手で、出口を指差した。

外で、話したいらしい。

榛名の後を付いて行くと、彼女は島の東側の海岸、その砂浜の手前で海を望みながら立ち止まる。

辺りに静かに響く波音を聞きながら、拓海も榛名の隣に立ち止まった。

周辺は、要塞の建物の北出入り口前に置かれた仮設照明のおかげで、白波が見える程度には明るかった。

「私、あのゴジラが何なんだろうって、ずっと考えていました」

榛名が、ぼつりぼつりと、話し始めた。視線はやや俯きがちに、白波の方に向いている。

拓海は、無言で話の先を促した。

「白瀬さんにも、ゴジラのことはお話しました。でも、話として知っている程度でした。写真や映像も、見たことはありません。1月に目覚めて、4月の作戦のために色々なことを覚えて、訓練していたので、精々それが精一杯でした」

「それであそこまで話せるなら、大したもんだと思うけど」

それがどれほど忙しかったかは知るところではないが、しかし短期間で覚えて訓練も重ねたとなると、並大抵の努力じゃないと思う。

「私が消えてからの歴史が、知れたかったです。私が守った国は、ど

んな道を辿ったんだらうって。怪獣がいたこともショックでしたし、また戦争をしたことも、驚きました。そしてその歴史を知って、今度は私たちが深海棲艦と戦う番になりました。今まで皆さんが守ってくれたこの国を、今度は自分が守ろう——そんな気持ちを奮い立たせるために」

「随分、大きなものを背負ってるんだな」

それを背負うには、少女の背中はあまりに小さい。

「そんな矢先で、失敗してしまいました。自分が、情けなくて恥ずかしいです」

「情けないわけ、ないだらう」

榛名が、驚いたように顔を上げる。

「それに、恥ずかしがることもない。確かに、榛名は失敗したかもしれない。でも、神通さんと一緒に駆逐艦の子とこの島を守り抜いた。おかげで、俺はこうして生き延びて光樹と再会出来たんだ。誇れとは言わないけど、もう少し自信持って胸張っても、いいんじゃないか」

これは、紛れも無い事実だ。

榛名は、この島を守り抜き、務めを立派に果たしてみせたのだ。誰にも文句を言われる筋合いなど、ありはしない。

榛名は拓海を暫し見つめると、くすりと微笑んだ。

「——ありがとうございます。そう言っていただけで、榛名、嬉しいです」

それから榛名は、視線を海に戻す。

「あのゴジラが現れて、私は忘れていた記憶を呼び覚まされました」
「それって」

「——はい。広島の前爆です……。大破着底して、間もなくの頃でした。あの場所から、雲が見えて……。沢山の人の悲鳴が聞こえて来たんです。大気を伝つてと言うよりも、頭の中に直接響いて来て……。私は、何でこんなところにいるんだらうって。守りたかった人たちが、あんな近くで——」

榛名は腕を伸ばし、握る拳を震わせている。

「あの声で、やっと思い出したんです。どうして、こんな大事なことつ

……！」

「忘れるな、ってか……」

『お前は、自分たちを忘れたのか』——そんな風に、まるで私を恨むみたいに問いかけてくるんです」

榛名の肩が、震えだす。瞳からは、雫が一筋、流れ落ちた。

——恨み。

あのゴジラはやはり、あの戦争の怨念なのだろうか。

こうして榛名を脅かすところを見るに、そう思えてならない。

しかし何故今になって、出て来たのだろうか。

榛名の言葉通りなら、あれはいつたい、何を恨んでいるのだろうか。ますます分からなくなる。

そんなことを考えていると、榛名が拓海のシャツの袖を掴んだ。

視線はこちらに向けていないが、支えを必要としている、今にも折れてしまいそうな目をしていた。

そつと肩に手を置いて引いてみると、抵抗は無く、榛名の頭が拓海の頭に収まった。

「あの怪物が何なのか、榛名は多分、知るべきなんだと思います。でも、でも……！ あの声を思い出すと、怖くなるんです！ 頭の中が、おかしくなりそうになるんです……！」

そう言って、榛名は涙腺を決壊させた。

色んなものが入り混じった感情を、吐き出すかのように。

近くを通りかかった艦娘たちの何人かが、驚いたようにこちらを凝視していた。

暫く胸を貸していると、段々榛名の震えが収まっていく。

「落ち着いたか？」

声を掛けると、榛名が頭を拓海の胸から離し、後ろに下がって目元を拭う。

「すみません、お見苦しいところを……。……見られちゃいましたか？」

「駆逐艦の子たちがね。暁たちでは無かったよ」

「そこは、嘘でも見られてないって言ってください」

榛名は顔を覆って、恥ずかしがる。耳も、赤くなっている。

顔の火照りを何とか抑えた榛名は、ふと、拓海に尋ねる。

「落ち着いて聞くことが出来ませんでしたけど、白瀬さんはどうして、私のことを知ってらしたんですか？ こちらの方では無いんですね？」

「あー……」

恐らくは、島に流れ着いた時のことを言っているのだろう。

我を忘れて榛名の名前を呼び、思わず飛びついてしまったことを思い出す。

「その節は、ごめん……」

後から冷静になってみると、恥ずかしくなってくる。我ながら、随分と軽率だったなと思う。

「それはもう、気にしていませんけれど……。確か、私たちはいない世界なんですよね」

こちらが何故、一方的に知っていたのかは、誰にも言っていない。知っているとすれば、先にこちらの世界にいた光樹くらいなものだろう。

「そうだな……。榛名は、向こうじゃ自分が架空の登場キャラクターだったって言ったら、驚くか？」

「きやらくたー、ですか？」

「登場人物のことだよ。小説みたいな、物語のやつ」

そう言われて納得する榛名を見て、最初からこっちの言い方においた方が良かったか、と思う。

勉強の範囲からは、漏れてしまったのかもしれない。

ここは、向こうが知っていそうな言葉を、なるべく使うように気を付けるべきだ。

「向こうの世界の日本じゃ、擬人化ものが流行っててさ。その中に、第二次大戦当時の軍艦を擬人化して登場させる、デジタルゲーム……。オンラインに繋げて、コンピュータ上でやる遊びがあったんだ。ここ

まで、分からないことは？」

「大丈夫です。デジタルゲームのことも、戦術リンクの関係で、知っています」

一応、こちらの世界にもデジタルゲームはあるらしい。

戦術リンクを作っているくらいだから、無い方がおかしいのかもしれない。

「オーケー。そのゲームは、全員女の子で、集めた子たちで深海棲艦と戦って行くっていうゲームなんだよ。それに出て来る子たちが、ちようど榛名たちと全く同じ姿形、性格なんだよね。声も、かなり似てるかな」

榛名が、目を瞬かせてきよとんとしている。流石に、言っていることが突飛過ぎたか。

「ごめん。分からなかった？」

「いえ……。ということは、金剛お姉さまや神通さんも……。ですか？」
「うん。そのまんまだね。こっちで言う世代的には、第2世代に当たるのかな」

「それは、何というか……。不思議な感じですね」

実感が伴わないのも、仕方が無い。

拓海も、自分がどこかの世界では「架空の人物だ」などと言われたら同じような反応になるだろう。

「そのゲームで、初めての戦艦として、榛名を手に入れたんだ。出て来た瞬間、一目惚れして、それからあつという間にうちの主力艦。頻りに艦隊の旗艦にして、出撃してたな。もう、可愛くって可愛くって改造もして、真っ先にケツコンしたっけな」

「へっ……!?!」

榛名が再び、顔を真っ赤にする。

そんな顔をされると、こっちまで恥ずかしくなる。

説明が足りていなかったのは、こちらの落ち度ではあるが。

「ああ、いや、その。これ以上の成長は出来ないってくらいに熟練しきったときに、条件を満たして絆を深めることで、更に強くなれるってシステムなんだ。練度を数字で表示していて、その上限を一度だけ

解放出来るってこと」

「あ、そ、そうなんですね。びっくりしました。つい、てつきり……」
すぐさま訂正すると、榛名がホツとしたように胸を撫で下ろす。
それはそれで、何だか悔しい。

「ま、ベタ惚れだったのは確かだけど。要するに、こっちの世界に来た時には、とつくに榛名のこと好きになってたってことだな」

回りくどく言うのが面倒臭くなって、つい口を滑らせる。
しまった、と思つて見ると、榛名が表情を無くしていた。

「こそ、それはどういう……」

引かれていると思つたが、どちらかというど動揺していると言つた方が近いようだ。

どつちにしても、当然の反応ではある。

「ゲームの榛名とは、違いますよね……？」

これもまた、当然の反応だ。

「それは、そうなんだけどき。元々、ゲームで榛名に惚れてたせいかな。こっちの世界で本物の榛名を見て知つて話して、榛名のが大好きになつちまつたんだよ。これ以上、無いくらいに。艦娘としての能力もそうだけど、榛名っていう女の子のことがね」

「あの……えつと……」

榛名はと言えはいいか分からないのか、視線を左右に振つて言葉を探している。

そんな彼女を見て微笑みつつ、拓海は榛名に宣言する。

「だから、まずは『新米少佐』になつて、司令官職を目指すことにするよ。それで、いつか榛名を指揮出来るように頑張るよ」

「えつと、それは……ですね」

「嫌、か？」

「嫌じゃないですけれど……」

榛名は、何か言いたそうに口籠もる。

「どうした？」

「い、いえ！ 何でも無いです。頑張ってくださいね！」

「ん……？ ああ、うん。ありがとう」

ガッツポーズをしてエールを送る榛名に、拓海は戸惑いつつも礼を言う。

あまり、聞かない方が良くいことなのかもしれない。

「時間があれば、だけど……。調べたいことも、あるんだよね」

「本土の方で、ですか？」

「艦娘と、ゴジラのことをね。榛名の怯え様から、何かあるんじゃないかって」

「あ……」

拓海の言葉に、榛名は口を閉じる。

あまり触れて欲しくないだろうが、気になるものは気になる。

夕食の時に見ていて思ったが、神通たちがあからさまにゴジラのことと触れようとしもないのも、それに拍車を掛けていた。

神通たちの場合は榛名への気遣いもあるだろうが、榛名ほどでは無いにせよ不安げな顔をしていたのだ。こっそりと聞いてみたが、当の本人の彼女たちでさえその原因が何なのか、分からないと言っていた。

余計、気になってしまう。

「何か分かったら、真っ先に伝えるよ」

「はい、ありがとうございます……!」

榛名はそう言って、嬉しさと気恥ずかしさが混じったような顔で、微笑んだ。

明くる2048年5月6日。

拓海は朝食を済ませると、仮設の休憩所でくつろいでいた光樹に声を掛けた。

「おう、お早う。拓海。ゆっくり眠れたか？」

「あんまり、だな。部屋は艦娘たちとは別だったけど、やけに壁の向こうがうるさくて」

「駆逐艦か。あと、川内だな……。加賀に怒られて反省してたんだか

ら、大目に見てやってくれ」

挨拶代わりの言葉に、光樹は紙コップのコーヒーを口に含みつつ苦笑する。

傍のテーブルには、ポットと安物のコーヒーパックが置かれている。これを飲んでいようだ。

光樹に勧められ、拓海も向かい側の椅子に座って頂くことにする。「ほんと、不思議なくらい、みんなキャラが一緒だな。光樹、なんかやったのか？ って、これもだめか」

「そんならなら、大丈夫だ。生まれた時から、皆こうだったよ。俺は、その辺について特に何もしてない。ああいう性格決定も、よく分からないんだよな」

「オイ、開発者」

開発者がそんな適当で、いいのだろうか。

「仕方が無いだろ。本当に分かんないんだからさ。第1世代の時点で、不明だったんだ。生まれて半年も経って無い子たちの研究なんて、したところで捗らないよ。お上からは、そっちの予算は下りなくなつたし。時間と金の無駄と思われたんだろうね。まあ、大方同意ではあるけど」

「へえ……」

本当に、開発者でも分からない様なことがあるとは。

そんな艦娘を生み出したのが、「艦これ」もやっていた光樹だから驚きだ。

「で、要件は何だ？ 俺に、言いに来たことでもあるんだろう？」

流石に、察しが良い。

拓海は苦笑しつつ、本題を切り出した。

「俺、〃新米少佐〃になることに決めたよ」

「おお。お前も、提督になるのか」

「まだ、なれるところまで来てないよ。——大和から聞いたけど、〃新米少佐〃って民間人からも、なれるんだってな？」

「まあな。このご時世だからな。人員が不足したり、司令官が戦死することもあり得る。そういうのを想定して、制度が設けられた。命名

は、俺がさせてもらったけどね」

そう言うと、光樹はくつくつと白い歯を見せて、歳に似合わぬ子供っぽい笑みを浮かべる。

「お前……」

「まあまあ。そんなくらい、俺が口利きしてもいいだろ？ 話を戻すが、

“新米少佐”になるためには、民間人の場合、緊急事態下などで戦果を挙げていることが求められる。この辺は、お前はクリアしてるな。その次に、戦果が認められた者は、横須賀鎮守府にて艦娘隊司令官になるための訓練や知識習得、演習が行われる。これは最短で1ヶ月、最長で1年の期間が設けられる。優秀な奴は、早めに確保したいって意志の表れだな。これをクリアすれば、晴れて“新米少佐”となるわけだ」

「そんなんで、いいのか？」

「驚くことに、な。艦隊運用もそうだが、特生防衛軍は艦娘の運用上、彼女たちと一定以上の信頼関係を築ける者を望んでいる。特防軍内部级や、中々いないことも多い。どちらかと言えば、ゴジラを始めとした怪獣の方を目的に入る奴が多いからな。そしてその期間は、その民間人が、司令官職に就けるだけの能力を持った人間かどうかを試す部分もある。ただ、前例は無いからな。制度自体ここ2年で出来たものだし、評価基準も定まっていない。お前が行けば、向こうからしたら都合の良いサンプルとして歓迎されるだろうな」

サンプル、の部分に皮肉めいたように語感を強めながら、光樹が説明の説明が終わる。

「狙うは、第6水雷戦隊か？」

光樹に問われて、神通たちのところは指揮官がまだいなかったことを思い出す。

「今は、光樹の指揮下なんだっけ」

「ああ。ただ、神通たちはここに設置される南鳥島泊地の所属になるから、そうなる中々俺の指示も回り辛いんだよ。司令官がいないと」

「中間管理職が欲しいと」

「ありていに言えばな。お前なら、あの子たちを任せても良いって思えるしな」

裏を返せば、適当な司令官が見つかっていないということか。

確かに、扱いは難しそうではある。だが、だからこそあの子たちと戦ってみるのも良いだろう。純粹に、神通たちのことをもつと知りたいたいというものもある。

ならば、行動あるのみだ。

「じゃあ、早速、その研修に行きたいんだけど」

拓海の言葉に、光樹が空になった紙コップを置いてにやりと笑う。「言うだろうと思ってたよ。本日ヒトマルマルマルに、第1・第3艦隊がこの島からそれぞれの鎮守府に向かった後、ヒトヒトマルマルに、ここを輸送機が出発する。あと、3時間くらいだ。席も、ちゃんと確保したし、向こうにも連絡を取っておいた。国籍と住所周りのことと一緒に、手続きはしやすいようにしておいた」
流石というべきか、手が早い。まだ言ってもいないうちから、用意していたのか。

職権乱用をしていないか、少々心配になる。

「大丈夫か？ それ……」

「安心しろ。信頼出来る上司にも、話は通しておいたから。それと、もう一つ——。榛名、出ておいで」

光樹が物陰に声を掛けると、そこから榛名が顔を覗かせる。

それから彼の手招きに応じて、おずおずと拓海の隣の椅子に座った。

「榛名が、どうしたんだよ」

「彼女には、暫らくお前の傍に付いていて貰うことになった」

「え？」

「大事なことを、さらつと言つてのける光樹の言葉に、拓海は耳を疑う。」

「本人の希望で、お前に付いて行くこと。それと、お前との関係性の良さが望めることや、呉鎮守府でちよつとした事情があつて、暫らく行動を共にして貰うことになる。その間、書類上は第2戦隊から、第

6 水雷戦隊への出向扱いということにしておく。——不満は、あるか？」

「いやいや！ 全く無い。是非、そうさせてくれ。是非！」

拓海は、二つ返事でこれを了承した。

もつとも、榛名と一緒にいられるということ、半ば勢いの部分はある。

「それで、呉鎮守府でのことは、聞いても？」

「人間関係のいざこざって奴だな。現状、艦隊にも影響が出かねないということ、榛名にはすまないが、こういう対応をさせて貰うことになった。お前なら、不安は無いしな。金剛たちも、了承済みだ。あいつらも、相当心配していたからな」

「そんなに、マズいのか……」

「まあな。横須賀に行ったら、書類にしたものを渡す。それほど分厚くは無いから、半日もあれば読めるだろ」

それって、結構な量だよな。と、心の中で突っ込む。

普段、どんな仕事量をこなしているのだろうか。

「榛名、本当にいいんだな？」

光樹の確認に、榛名は表情をきりつとさせて頷く。

「はい。白瀬さんの調べ物も、お手伝いしたいですし、私自身も知りたいいことがありますから」

「——そうか。あまり、無茶はしないように」

やや間を置いて光樹は一瞬瞳を伏せるが、すぐに榛名と視線を合わせ言う。

「はいっ！」

榛名の元気の良い返事が、休憩所にこだまする。

「その、よろしくな。榛名」

小躍りしたい気分を抑えつつ、拓海は隣の榛名に声を掛ける。

榛名も微笑んで、拓海に応じる。

「はい、よろしくお願いしますね！ 白瀬さん」

場がお開きになろうとしたところで、光樹が拓海と榛名を引き留め

る。

「そういや、言い忘れていたことがあった。榛名をお前に付ける件」

「何だよ？」

拓海が問うと、光樹がにやりと口元を歪めた。

嫌な予感がする。

「お前が生粋の、榛名大好き野郎だからだ」

「ちよっ——!?!」

よりにもよって、誰が聞いているか分からないところで話すか。

咄嗟に廊下を確かめると、運の悪いことに暁と響、それに金剛が近くを通りかかったところだった。

「こっ、このレディーを差し置いて……!」

「そうか、そうだな。分かっていたよ。うん」

光樹の爆弾に、二人が明らかに大ダメージを受けていた。

時間と場所を、弁えて欲しいものだ。

「ワオ！ タックー、目の付け所が良いデスネー！ 私の自慢の妹デ

スヨー！ 榛名、良かったデスネー！」

タックーとは何だ、タックーとは……。

金剛の独特なネーミングに困惑する。

「そこんとこ、どうなんだい？ 榛名。こいつ、お前のこと好きみたいなんだぜ？」

追撃を加えるように、光樹が榛名に言葉を投げる。

「その、榛名は……。昨晚白瀬さんから、伺っています……。」

言いながら思い出したのか、榛名が段々顔を熟れたリングゴのように真っ赤にしていく。

その一言が同時に3人を沈める、止めの一撃となった。

これを聞いた暁がポロポロと涙を溢し始めて、響が泣きつく姉の頭を撫でる。その響も、拓海には見えないように顔を背けて、何故か零れる涙を必死に堪えようとして失敗する。そんな状態で他の駆逐艦たちが偶然通りがかってしまい、拓海が理不尽ないじめっ子認定されたところを、金剛や榛名と共に必死に説明するのだった。

そんな様子をニヤニヤと見つめていた光樹は、騒ぎを聞きつけた三笠に見つかり、正座をさせられて説教を受けていた。

あの二人、本当に上司と部下の関係が逆転しているのではないだろうか。

第8話 到着、横須賀鎮守府

南鳥島から、約3時間。

拓海たちの乗った輸送機は、厚木の防衛軍基地に着陸した。

この基地は空軍と海軍、それに特防軍の所有する航空機を捌くため、かなり広大になっていた。国内では、おそらく最大の基地なのだろうだ。

その基地から迎えるの車に乗り、一路横須賀市へと向かう。車は、7人乗りのワゴンタイプだった。

右の窓際に拓海、その隣に光樹が座り、後ろには榛名と三笠が座っていた。

先に島を出発した艦娘たちは、後から来た別の輸送機に乗り、既に父島経由でそれぞれの鎮守府に戻っていた。

途中に深海棲艦と出くわしたが、敵の砲撃が届かない高度を飛んでいており、輸送機の装甲が艦載機の攻撃も弾いたため、特に問題は無かった。

敵部隊の規模は直ちに影響は無い程度だったため、そのまま無視する。

光樹が念のため、南鳥島に配置された第6水雷戦隊へ、警戒して置くように暗号化電文を送っていた。

一応光樹の部下が一人残されているが、あまり役には立たないだろうと言うのは、彼の談だ。そんな状態で、本格的な戦闘が起こらないことを切に祈る。

第6水雷戦隊には司令官がおらず、光樹が直接指揮する形になっているのは、やはり人員を確保出来なかったところによるらしい。

第1世代の半数以上が喪失した時、特生防衛軍本隊に移動となった者もおり、この5カ月の慌ただしさもあって、中々見つからなかったようだ。他にも、単純に相性の問題もあった。

そこに水雷戦隊の安否不明が重なり、選出が遅々として進まなかったという。

不運に不運が重なった結果、こうなってしまったということだ。

第3艦隊の司令長官が兼任になっっているのも、同じような理由による。もつともこちらは、6水戦以外には司令官がいるため比較的楽と、光樹本人は言っていた。

しかし、その負担は相応のものがあるのではないかと思う。あまり、無理はしてほしくないものだ。

横須賀へと向かう車内では、これから行う国籍と住所登録についての説明が行われた。

国籍については、第3次大戦下から続く「戦時国籍法」によって、特に日本人を優先して柔軟な対応が出来るため、所定の手続きを行えば問題ないとのことだった。

しかし、緊急事態下で作られたために穴もあり、外国人からの抗議など様々な問題を生み出してしまったているらしい。

住所は、旧戸籍法が深海棲艦とゴジラの出現による被害や混乱に伴って破綻はたんしてしまい、それに代替するものとして利用されているようだ。

現状は民間人であるものの、国内に居住場所を持たないことと認定カリキュラムのため、横須賀鎮守府に住所を持つこととなった。

車に揺られること約1時間、拓海たちは横須賀市内に入り、そのまま新市庁舎へと向かった。

旧庁舎は2年前にゴジラによって破壊されてしまい、移転していた。

手続きは光樹が軍関係者としての口添えや助けもあり、あまり時間は取られなかった。

住所登録の際に、横須賀鎮守府内でのより詳細な光樹に教えられ、とつくに受け入れ準備は整っていることには驚いた。

市役所を出て鎮守府に向かう途中、横須賀市内を車で見て回ることもなかった。

光樹が見せておきたいから、と言ったことによる。そう語っていた彼の顔は辛そうだったが、聞くことは憚られる。

自分に、そんな資格などないと思ったからだ。

自分の記憶にある横須賀市とは、随分と街の様子が違って見える。建物の無い、空き地となっている場所も散見されていた。見たことの無い商業ビルやマンションなども、立ち並んでいる。

5年前にゴジラの襲撃を受けた影響らしい。しかし、鎮守府やその近くにあった海軍の施設だけは、無事だったようだ。

光樹が言うに、当時の街は東京ほどでは無いが、酷い有様だったという。

5年でこれだけ復興できたのは、奇跡のようだとも言っていた。

しかし拓海にとっては、これだけの復興を果たしているのを見ると、あまり現実味が湧かない。

拓海にとっては、榛名や艦娘たちと何か関係がある、という程度の認識しかない。どこか、画面の向こうの存在のようには、未だに思えないのだ。良くて、「何でいるんだろう」くらいの認識だ。

そういったことよりも自分の目の前にあるもの、内に抱えるものの方が、彼にとって重要なことだった。

市街地を巡ってから、車は横須賀鎮守府へと向かう。

車が正面ゲートに差し掛かったところで、拓海は既視感を覚えた。

「あれ……。このゲート、見たことあるような……」

「かつて、米軍が使っていたものだ」

拓海という言葉に、左隣に座っていた光樹が答える。

「かつて……?」

「深海棲艦の混乱で、米軍が破棄したんだよ。もともと、脱出しようとした横須賀艦隊は壊滅してしまったが……。その後、特生防衛軍が接收。後に艦娘の運用施設になった。当時の面影は、このゲートくらいしか無いな」

入場手続きを終えた車が、ゲートを潜り抜けていく。

拓海は、米軍施設の中を見たことは無い。交流施設を除いては、そもそも一般人は入れない場所で、前にここを訪れた時は記念艦「三笠」目当てだったからだ。だから精々、ゲートの前を通り過ぎたという記憶しか無い。

鎮守府の敷地は、比較的新しい建物ばかりだった。

米軍の施設ではないことを示すかのように、日本語の看板もちちらほらと見える。

「今いるのが、楠ヶ浦町だ。南側は、艦娘の息抜き用の施設がほとんどだ。まあ、そう言いつつここにいる職員や司令官も普通に使えるんだが」

窓の外に目を凝らしていると、横から光樹の説明が加わる。

確かに、2車線道路の脇には映画館やゲームセンターなどの娯楽施設が散見される。途中には、「甘味処 間宮」の看板もあった。

艦娘のためといいつつ、司令官なども使っているという点が、何とも適当に感じられる。

艦娘隊としての施設は、主に北側と隣の泊町に集中しているようだ。

北側に差し掛かると、訓練用の施設や図書館、宿泊棟が目につくようになる。これらの施設は全て、司令官などの隊員用に置かれているとのことだ。

楠ヶ浦町を抜けて泊町に入って直ぐ、一際目立つ威容の建物の前に到着する。

その建物は、ここに来るまで見たどの建物よりも、横に伸びて広々と土地を占有している。

地上4階建て、外壁を茶色く塗った三角屋根の連なるそれは、一際大きな存在感を持っていた。

榛名や光樹と共に車を降り、その建物を見上げる。

目的地に送り届けた車は、役目を終えてどこかへと走り去って行った。

光樹が拓海の隣で建物を見上げつつ、言う。

「ここが、横須賀鎮守府の本庁舎だ。司令官執務室や幹部級が使う施設が、主に入っているな。——行くぞ。中の受付で、残りの手続きを済ませる。それが終わったら、お前が泊まる部屋に案内する。荷物は、あの車の運転手が先に届けておいてくれるはずだ。必要書類は、持っているな？」

「う、うん」

左脇に抱えた、推薦書が1枚入った封筒を確認する。

書いてあるのは、「この者を新米少佐認定カリキュラムに推薦する」といった旨のものだ。拓海と光樹の直筆サイン、それに光樹の印鑑が押されている。

拓海たちは、鎮守府の本庁舎の中へと入る。

自動ドアを潜ると、外見と変わらない威容の内装と、張り詰めた空気が3人を出迎える。

「拓海、そんなに肩を張らなくていい。内装を初めて見た連中は、決まってお前みたいな反応をするからな。気持ちは分かんなくてもないが」

光樹はそう言って、慣れた様に正面の受付に進んで行く。

拓海も後を追って、受付のカウンターに向かう。

受付で書類を受け取ってもらうと、居住場所と名前の記入を、差し出された紙に書くように求められる。連絡先として使うためのようだ。

拓海は、先ほど市役所で登録したばかりの住所を記入して、名前も書き入れる。

それで受付が終了すると、受付嬢がまた明日の午後1時以降、ここに来るように言う。受付をした後で、2階の会議室でカリキュラムの責任者と会うことになるそうだ。

30分ほどで手続きを終えると、本庁舎を出てそのまま来客用の宿泊棟に案内される。

司令官などが泊まる宿泊棟に近い場所にあるそれは、10階建ての

ビルだった。拓海はその3階の、305号室に泊まることとなる。同時にそこが、彼の仮の居住地でもある。

部屋の中は、20平米程度。

中を覗き見ると、冷蔵庫やレンジなどの生活に必要な家電が取り揃えられている。トイレとユニットバスも完備されていた。ベッドやクローゼットなども置かれ、至れり尽くせりといったところだ。

「何で、こんなに揃ってんだよ……」

あまりの歓迎ぶりに、何かあるのかと若干警戒しながら、光樹に尋ねてみる。

「3階は、長期で泊まる連中のためにあるフロアだからな。台所は無いから料理は出来んが、それ以外での不便はまず無い筈だ」

「俺みたいな奴を、想定してってことか……」

「そうだ。因みに、宿泊代は気にしなくていい。カリキュラムを終えられれば、軍の方で払ってくれる」

「嫌に現実的だな……」

「ここは夢の国じゃないぞ。どつちにしろ、金は取られるが」

それじゃ、夢の国も何も無いじゃないか、という野暮な突っ込みは控える。

というか、きちんとカリキュラムを終えて新米少佐になれなければ、その分だけのツケが回ってきてしまうということだ。

それは何としても避けたい。

「こりゃあ、いよいよ腹を括らなきやいけないか……」

落ちれば即、借金の人生が待っている。そんな無様な終わり方は、したくない。

「今更言うかよ。南鳥島で俺に言った時点で、決まってたようなもんだ。諦めろ」

「親友に言うことか？ それ……」

「お前には、期待してんだ。当然だろ。ほら」

光樹が、カードを投げ渡してくる。

拓海はそれを落とさないように、受け取った。カードには、黒い横線と印字が施されている。

「この部屋の鍵だ。絶対無くすなよ。再発行が手間だからな」

そう言つて、光樹は拓海と榛名をその場に残して踵を返した。

「お、おい。どこ行くんだよ」

「仕事だ。お前のことで、これから打ち合わせがあるからな。荷物は、ベッドの傍に置いてある筈だ。それじゃあ、また明日。行くぞ、三笠」
拓海の問いにぞんざいに答えると、光樹はそのままエレベーターホールへと歩いて行く。

「それでは、白瀬さん、榛名ちゃん。また今度ね」

「ああ、うん。お疲れ様」

「はい。またお会いしましょう」

二人にニコリと微笑んだ三笠は小さく手を振ると、光樹の後を追つて小走りで去つて行った。

用を終えると、さっさと行つてしまった光樹に唾然としつつ、部屋の中を見てみることにする。

その時の光樹の様子が一瞬変だったように思うが、それが何なのかは分からない。微々たるものだから、気のせいかもしれない。

部屋に上がる前に、拓海は榛名の方を振り向く。

「榛名は、この後予定とかつてある？ もう、夕方だけど」

部屋の奥に見える窓の向こうを見ると、外は夕陽に照らされている。

「少し、鎮守府を回つて見たいと思います。ここは、艦娘として目覚めて以来ですから」

「……ん？」

榛名の言葉が、少し引つ掛かる。そんな話、聞いていただろうか。それとも、記憶違いだろうか。

「ちよつと、質問いいかな……？」

「はい。大丈夫です」

拓海の反応に、榛名が戸惑った表情をしつつ頷く。

「艦娘としての榛名は、ここで生まれたの？ この横須賀で」

「はい。私も金剛お姉さまも、他の皆も、ここの工廠施設で生まれました。その後直ぐ、各地に派遣されて、そこで訓練を積みました」

「それって、全員？」

榛名は、こくりと頷く。

こちらの世界では何人の艦娘がいるかは知らないが、その全員がこの横須賀で生まれたということか。

各地に配備されたことはともかくとして、何故横須賀なのだろうか。

「他の鎮守府じゃ、艦娘は生まれてないの？」

「はい。私が聞く限りでは、なるべく多くの戦力を集中的に生み出すため……と。———そう言えば、横須賀以外では艦娘の建造は出来ない、という通達がされているのを、呉で聞いたことがあります」「じゃあ、工廠は無いっていうのか？」

その問いに、榛名は首を横に振る。

「いえ。工廠自体はあって、装備開発や艦娘の改造は出来るのですが———。そもそも、建造用らしい施設は見当たりませんでした」

「榛名は、目覚めた時どこにいたの？」

「どこというのは……。あ、地下です。泊町の工廠の、地下です。カプセルのような容器の中で目覚めて、その後直ぐに艀装を渡されました。その階は、辺り一面に似た様な物が沢山、おいてありましたね。多分、私と同じように他の子たちも入ってたんだと思います。他にも階層があったそうですけど、目隠しされて地上に上がったので、どれくらいあるのかは……」

「……初耳だぞ、それ」

榛名の話に、頭を悩ませながら拓海は呟く。

まさか、艦娘の生まれに関して重要参考人がこんなところにいたとは。

それどころか、話が本当なら拓海の周りには、同じ様な艦娘がごろごろといたことになる。

肝心な部分を見落としてしまっていたことに、拓海は自分を恨む。これでも、人が気付かない様なところを見つけるには自信があっ

たのだが。

「あの、すみません。お気を悪くされましたか……?」

榛名が自分を心配そうに見つめていることに気付いて、拓海は首を振って否定する。

「いや、榛名を責めてるんじゃないよ。ただ、自分の間抜けっぷりに、愕然としてただけだよ。その工場には、行けるのか?」

「地上階だけでしたら。地下は、関係者以外は立ち入り禁止とのことで、艦娘と言えども入れません。専用の認証キーが無いと、降りられないみたいで……」

「階段とかは、無いの? 非常用の」

「あるにはあうそうですけれど、場所は関係者しか知らないみたいですよ。それ以外は、エレベーターで認証キーを使わないと、行けなくなっています」

鎮守府か軍の誰かは分からないが、そこまで嚴重にして隠しておきたいということらしい。

「誰かの伝手で行くことは、出来ないの?」

「磯貝少将のお友達が試してみたんですけど、悉く駄目だったそうです。建造出来るように申請もされていましたが、それも門前払いだったそうで。それどころか、次の機会に申請した場合には、処罰されると脅されてしまったみたいです」

人から聞いた話のためか、榛名の話には確実性が無い。

しかし嚴重なセキュリティから考えて、妙に納得出来てしまう。

「いきなりそれって、随分と重いんだな? 何を隠してるんだ……?」

光樹も、横須賀も……」

これも光樹から聞いたことだが、横須賀鎮守府は特生防衛軍の中央本部でもあるらしい。特生防衛軍本部とは別に、ここに独立して置かれているようだ。

「多分、皆さんも同じようなことは思っていると思います。ですが、ここまで秘密にされてしまったては、誰にも探りようがないみたいで……」
「他に探るような奴がいても、仮に上手く行きそうになったとして、そこでお縄……なんてこともありそうだな……」

自分で言っていて、空想めいた話だと思いが、しかしそれを否定しきれない。

「そう言えば、カプセル以外には何か見てないか？」

付け加えるように質問した拓海に、榛名は否と首を振る。

「艀装を渡されてから、すぐに目隠しされてしまったので、分かりません。関係者の方が、私が出て来たのを見て喜んでいたのは覚えていますが……。あとは機械音ばかりでした」

「榛名がエレベーターに行くまで、誰かの声は？ それと、エレベーターの場所も聞きたい」

「先ほどの声以外は、全く。敢えて黙っているような、そんな感じでした。エレベーターは、関係者用のものが1基あるようですが、目隠しされていて場所までは……」

不意に、二人の話を中断させるように、横須賀市街地から5時を告げる短い音楽放送が流れる。日没まで、あまり時間は無いようだ。

他にも聞きたいことが沸々と湧いてきてしまうが、これではただの質問攻めになってしまう。それに、聞いたところであまり有益な回答は得られそうに無い。

この件に関しては、また今度ということにした方が良さそうだ。

「ごめん。質問ばかりで、引き留めちゃったみたいだ。お詫びとかいるなら、何でも言ってる」

「いえ、榛名は大丈夫です。でも、そうですね。榛名と少し、鎮守府を回っていきませんか？ それに白瀬さん、今まではお弁当だったり支給品だったりしたから良かったですけど、ここではどうされるつもりなんです？」

今更、夕飯をどうやって確保するか考えていなかったことを思い出す。特にお金の面で。

一応、ドル紙幣も日本円も持っているが、両替や使用は出来るのだろうか……。

「ごっつて、両替は出来る？ あと、日本円は1万円くらいしか無いんだけど」

ポケットから財布を出しつつ、榛名に中身を見せる。

財布は、革製のコンパクトなタイプだ。

「両替は鎮守府でも出来ますけど……市街に出た方が早いですね。そのくらいなら、あまり心配は無いかと。日本円に関しては、問題ないと思いますが……どのくらい持つか……」

「まじかよ……。ドルと合わせても、多分3万円くらい。切り詰めても、2、3ヶ月くらいか……?」

以前見た、某番組を思い出しつつ、溜め息を吐く。しかし、そこまで切り詰められるような生活が出来るような気はしない。

「新米少佐のカリキュラムを受けるのであれば、その間収入はあると思いますので、あまり心配しなくてもいいかと……。新米少佐になれば、収入はぐっと上がるそうですし」

榛名の補足に、拓海は右肩をガクツと落とす。

「そ、そういうことは早く言ってくれ……」

取り敢えずの収入源は、確保出来そうだ。

次は、食事をどうするかだが――。

「もし宜しければ、間宮さんのところで、夕飯もご一緒にませんか？」

他の所よりも、安くて美味しいお食事が出来ますよ」

「榛名は、お金とかどうしてるの?」

「艦娘ということで、特防海軍の経費から落とされますね。ですから、白瀬さんお一人分で済みますね」

榛名の分は、心配しなくて良いということか。どうせなら、奢ってみたいと思っただけはいたが、それはそれで財布が危なかったかもしれない。

「ってそれ、沢山食べるような子がいたら、お偉いさん、大変だよな……?」

「それはそうかもしれませんが――。あまり、そういうことは聞かないでほしいです」

拓海としては、榛名のことを言っているつもりは無かったのだが、榛名はむくれてしまう。

「ご、ごめん。悪気があったわけじゃ……」

アタフタしながら謝ると、榛名が視線をちらりと動かす。

「そう思っているなら、そうですね。間宮さんのところの、*“ビッグパフェ”*を白瀬さん持ちで、デザートに頼みましょう」

「ち、因みにおいくら……？」

「7,000円です」

榛名がこれ以上ないくらい清々しい笑顔で、さらりと述べる。

「となると、晩御飯は高くても3,000円以内か……」

血の気が引くのを覚えながら、拓海は財布の中を確かめる。今ある日本円のうち、その7割が飛ぶことが確定したわけだ。

拓海は、朝起きたら真っ先に、両替所に飛び込もうと決意する。

ここに、新米少佐になるための割と切実な理由がまた一つ、出来たのであった。

第9話 面会と演習見学

翌日の昼間、拓海は昼食を済ませると鎮守府本庁舎に真っ直ぐ向かう。

前日に予め、来るように言われていたからだ。

受付に着くと、首に掛けるタイプの名札を渡され、2階の会議室へ向かうよう指示される。

右手にある階段を登って直ぐの所に、「会議室」の掛札を見つけ、ノックする。

「どうぞ」

「失礼します」

中から声が聞こえ、拓海はドアを開いて入室した。

彼を出迎えたのは、光樹だった。

会議室は長机が長方形を描くように並べられ、左手の方に奥まで伸びている。

中を見渡すが、光樹以外に人影は見当たらないようだ。

「あれ、光樹だけ？」

「もうすぐ来るはずだ。こっちに来て、座っておけ」

光樹に、入ってすぐの所にある椅子を指差され、拓海はそこへ行く。

一番奥の机と、正面に向き合う席を見ると、そこに冊子が置かれていることに気付いた。それも、結構厚い。

「これ、何……？」

「カリキュラム用のテキストだ。1ヶ月分のスケジュール表もあるから、後で読んでおくように」

「おう……」

数えてみると、全部で3冊。「歴史」「艦娘基礎」「応用マニュアル」の3タイトルだ。しかし少ないせいかわ、その分1冊ごとの厚さは結構あるように感じる。

正直げんなりするところではあるが、決めた以上ここで何を言っても仕方が無い。

席に着いてから暫くすると、奥の扉が開いて、一人の男性が入って来る。

背は光樹よりやや小さく、年齢は彼よりも上だろうか。

拓海が椅子から立って礼をすると、男性は向こう側の机の前に立ちつつ穏やかな笑みを浮かべた。

「初めまして。白瀬拓海です。よろしくお願ひします」

「君が、白瀬君か。まあ、掛けてくれ」

皺を刻み込んだ顔を柔和に緩ませ、よく響きつつも落ち着きのある声で言う。

拓海はその言葉に甘え、席に座ると同時に、向こうも席に着く。

「私が、認定カリキュラムの担当責任者を務めることになった、笠川大輔だ。階級は大将、艦隊総司令官を任されている。以後、よろしくお願ひする」

大輔による自己紹介が終わった後、拓海はカリキュラムの説明を受けた。

これから受けることになるのは、「座学」「身体トレーニング」「戦闘指揮訓練」の3種類と、「認定試験」がある。

「座学」では事前に渡されたテキストを使い、特生防衛軍や艦娘と深海棲艦の歴史、艦娘の仕組みや運用などについて学ぶ。

「身体トレーニング」では基礎的な筋力トレーニングやフィジカル。

「戦闘指揮訓練」では、実際に艦娘を使って演習形式の訓練を行う。概要としては、以上のようなことを教えられることになる。

簡単に纏めると項目は少ないように思えるが、中身は濃い。

特に、艦娘の運用部隊らしく彼女たちのことについて学ぶことが、中心となる。

「認定試験」については、担当者の判断で任意のタイミングで行うことが出来る。担当責任者の許可があれば、1年の期間のうち、1ヶ月に2回までは受けられる。

先に3つの項目を学んだ上で、実際の出撃で指揮を執り、その際に試験を行う。戦闘内容と、戦果を加味した上で認定の成否が判断され

る。

「以上の通りだが、何か質問はあるかい？」

「いえ、特には」

「そうか。その名札は、身体トレーニング以外は、常に首に提げておくように。民間人扱いの君にとって、許可証代わりになるからね」

拓海は、自分の胸元に視線を落とす。

この名札は、鎮守府内を歩き回る上で必要な物ということだろう。どこかの施設に入る際に、使うことになるのかもしれない。

「ところで、君は何故、このカリキュラムを受けようと思ったのか聞かせてくれるか？」

大輔は優しげな笑みを湛えたまま、単刀直入に尋ねる。

拓海は一度考えを整理しつつ、相手を見据えて答えた。

「最初は単純に、興味があっただけでした。でも、あの時孤立していた南鳥島で榛名や第6水雷戦隊の皆と出会って、彼女たちを何とか手助けしたいと思ったんです。出会った時、皆は限界寸前でした。榛名や神通さんは、自ら進んで無茶を重ねていましたし、駆逐艦の子たちはそんな二人を見て辛そうでした。いや、表面上は取り繕ってましたけど、辛かったんでしょうね。だから、この状況に穴を空けたいと。一度でもチャンスがあるなら、それに賭けてみようと思えました。それで、彼女たちが笑って帰って来られるように、自分が指揮出来る立場になろうと、決心した次第です」

南鳥島に流れ着いた直後のことを思い出して、拓海は一息に語る。
しかし大輔は肩を揺らして笑うと、拓海を見透かすように見つめた。

その視線の凄味に、拓海は思わず唾を呑む。

「それで、本当のところはどうなんだい？ 意中の子でもいるんじゃないかい？ その子のために、司令官になりたい、とかね」

凶星を突かれて、拓海は何も言えなくなる。

まさか、簡単に言い当てられるとは思ってもみなかった。

そんな拓海の顔を見て、大輔は笑んだまま言う。

「どうしてだつて顔をしているね。若い子の考えることなんか、私にはお見通しだよ。司令官志望で入って来る子の大半は、そういう者ばかりだからね。どっかで見かけて一目惚れ、とかそんなところだ。彼らは仕組み上、特防軍から入ろうとするが、この時点で何人も脱落者は出る。そして無事入れたとしても、他部隊行き。特防^{艦娘}海軍^隊に入れても、階級の制約だつたり席が空いてなかったりで、なれないことも多い。君は制度上、例外的に艦娘隊には入れるが、事情が変わって司令官の席が、空いていないこともあるかもしれない。それでも君は、やっつけていけるのかい？」

確かに、残っていた席が全て埋まって入れたとしても、すぐには就けないかもしれない。

本来望んでいた場所と違うところに、行ってしまうこともあるだろう。

しかし――。

「――守りたい子がいるんです。出撃して帰ってきて、どんなに辛く、苦しく、悲しくても、最後には笑っていて欲しい子が。そして、その子と一緒に戦って、彼女の弱さも、自分の弱さも一緒に克服していきたい。目の前に拵めるチャンスがあるなら、それをしない手は無い。本当は、深海棲艦のことも国のことも、世界のことともどうだつていいのかもしれない。でも、自分が戦わなきゃ、彼女を守れない」

一度、言葉を切って拓海は思い浮かべる。
ずっと憧れていた、あの子のことを。

「――俺は、榛名の一番になりたいんです」

場の空気が、しんと静まり返る。

拓海は言ってから、段々と恥ずかしくなってきた。

穴があつたら入りたいとは、こういうことを言うのだろう。

暫し目を瞬かせていた大輔が、不意に肩を揺らし、笑いを堪えようとして声が漏れだす。

「失礼。あんまりに、青臭いと思ってね。ここに来て、榛名か。なるほど、なるほど。確かに、彼女はモテるからね。隊員たちからの人気も

高いよ。しかし、ここまで言う奴は——私は、初めて見たな。いいね。私は嫌いじゃないよ。気に入った」

何とか笑いを収めつつ、大輔は拓海を見る。

「というか、榛名はモテるのか。」

「しかし、榛名狙いとなれば——。ライバルは多いかもな。精々、頑張ってくれ。君に害を為すような奴がいれば、相談に乗ろう。改めて、これからよろしく、白瀬拓海君」

「は、はい……！」

拓海は認められたと分かって、嬉しさを噛み殺しつつ礼をする。

本人がこの場にいらなくて良かった、と思う。聞かれていたら、間違いなく赤面物だ。

「君の友人は、中々面白いな」

「きよ、恐縮です……」

大輔に声を掛けられた光樹が、頭を垂れる。

いつの間にか、自分と光樹が友人であることを知っていたようだ。大方、光樹が自ら言ったのだろう。

「約30年越しの再会か。初めて聞いた時は、わけが分からなかったが——。そもそも君の経歴の時点で、不思議はないわけだから。何せ、祖父母が全て死亡しているというんだからな。君の親戚ともDNAが一致していたしな」

「どうやらこちらでは、光樹の祖父母以外の親戚は生き延びていたようだ。と言っても、彼の父母は生まれていない。祖父母の兄弟か、さらに遠い親戚辺りがこちらの世界にもいたのだろう。」

様子からして、こちらの事情も既に把握している。彼が、光樹の言う「信頼できる上司」なのかもしれない。

「ま、それはともかく……だ。青葉、隠れてないで入って来たらどうだ？」

大輔が溜め息を吐きつつ、奥の方で自身に近い扉を見て声を掛けた。

するとドアノブが動き、廊下から髪をポニーテールに結わえたセーラー服にハーフパンツといった出で立ちの少女が、ビデオカメラを片

手に入ってきて来る。

「い、嫌だなあ、笠川司令官。ただちよつと、聞いちゃったただけですつてば」

「何て言いつつ、しっかりカメラ回して、音だけ撮ってただろう。入り辛くなつて、仕方ないからカメラで録音してたな？ 入ってたら入ってたで、適当な場所に陣取って隠し撮りか」

「う……。別に良いじゃないですかあ。折角、良い台詞も撮れましたし」

頬を引きつらせて苦笑いする青葉に、大輔が頭を抱えて言う。

「俺が、浅羽少将に小言を言われるんだよ。データは消してもらおうぞ」「ちえ。仕方ないですね。でも、次は逃しませんよ?」

青葉はそう言いながら、カメラを操作する。

「はい、消しましたよ?」

「どれ、見せてごらん」

大輔に言われて、青葉は顔を引きつらせてから、渋々と渡す。

それを受け取った大輔が、カメラの操作ボタンを押しながら検め、苦い顔をした。

「全く……。案の定、消していなかったな。そっちは消させてもらつたぞ。それに、写真の方……。これは浅羽の……。彼にバレてもいいのか?」

「だ、駄目ですつ!!」

突然、青葉が顔を真っ赤にして、大輔からカメラを取り返し、胸元に抱える。

大輔はそんな青葉を見ながら、柔らかく微笑んだ。

「冗談だ。私からは何も言わんよ。写真はバレたくなかつたら、バツクアップでも取って消しておきなさい。全く、とんでもない朴念仁に目を付けたな? 青葉」

意味深げな目を向けられ、青葉は慌てた様子を見せる。

「か、笠川司令官! それをこの場で言わないでください! 皆さん見て——」

そこで青葉は、ようやく拓海と光樹の方に視線を向け、赤くなつた

顔をますます沸騰させた。

「こ、こほん。私は重巡青葉。浅羽富紀少将指揮下の第3戦隊所属です。鳴川司令官、お久しぶりです。それと白瀬さん、初めまして」「白瀬拓海です。よろしく」

青葉の自己紹介に応じて、拓海も名乗っておく。もつとも向こうは、ドアの向こうから聞いていたのか、知っているようだ。

青葉本人が触れられたく無いようなので、さっきのことについて尋ねるのは、止める。

しかしあの態度からして、考えるまでも無いだろう。

「さて、丁度良い頃合いだし、演習でも見に行こうか」

大輔もそんな空気を弁えているのか、おもむろに拓海たちに提案する。

待ち時間にスケジュール表にぎつと目を通したが、カリキュラム自体は明日の午前からスタートだ。今後の予定は、特に無い。

光樹が左腕に巻いた腕時計を見て、答える。

「今の時間ですと……そろそろ第5水雷戦隊の曙と清霜が、三笠との演習を始める頃合いですね」

それを聞いた大輔は、早速立ち上がる。

「なら、急がないとな。私が、車を出そう。ちやうど4人だからな」

「宜しいのですか？」

「構わんさ。ほら、早速行くとしよう。白瀬君、テキストとスケジュールは、そこに畳んである紙袋に入れると良い。では、私は一足先に行ってるよ。庁舎の正面玄関前で待っていてくれ」

矢継ぎ早に告げると、大輔は青葉を伴って会議室を出て行く。

大輔を見送ってから、拓海は光樹に話し掛けた。

「何て言うか……、怖い人だな」

率直な感想が、口を突いて出る。

自分の時と言い、青葉の時と言い、相手を見透かすような目をしている。あの目で見られると、自分の見られたくないものまで見られそうで、恐ろしい。

「同感だな。まあ、あれのおかげで、そうなったんだらうけどな……」
「何だよ？ それ」

振り返ると、光樹が眉を顰めて険しい表情をしていた。

「亡くしてるんだよ。ご家族を。2002年の、怨霊ゴジラ襲撃の時にね」

大輔の運転する車に乗せてもらい、泊町の東の港に到着する。

車を降りて4人は早速、コンクリートで固められた護岸まで歩いて行く。

その場所は、港を広く見渡せる場所だった。

辺りには、拓海たちと同じように見学をしに来た様子の、艦娘や鎮守府の関係者と思しき人が何人かいる。

「鳴川君、演習は始まっているか？」

大輔に尋ねられ、光樹は腕時計を確認する。

「そろそろですね。ただ、戦闘距離が半径500mほどですから……。中継用の小型カメラユニットが飛んでいますので、それを中継して手元で見た方がいいかもしれませんね」

光樹はそう言って、懐からスマートフォンよりも一回り大きい画面の端末を二つ取り出し、一つを大輔に渡す。

「確かに、こっちで見た方が楽かもしれませんがねー。ここからだど、戦闘の様子は見えても、あんまり面白くないですし」

「おい、青葉」

思ったことを率直に言う青葉に、光樹が咎めるように声を掛ける。しかし大輔は端末を受け取りつつ、笑って返した。

「いいよ、鳴川君。私も、青葉と同意見だ。私と青葉、鳴川君と白瀬君で見れば、いいんだな？」

「はい。そうなります。すみません、お手数お掛けして」

「元々、私が見ようと言い出したからね。構わないよ。それに、私に娘がいたら、こうやって見たかもしれないしね」

大輔は青葉の頭を撫でつつ、端末の操作を始める。

一方、撫でられる側の青葉は、恐縮して固まっているようだった。拓海も、光樹が脇で操作を終えた端末を覗き込み、上空を飛ぶカメラユニットから中継される戦闘海域を覗き込んだ。

映像が二つある様子から、ユニットは2機飛んでいるようだ。

それぞれに、大型の使い込まれた艦装を装備した三笠と、光樹の言っていた曙・清霜のコンビが映り、相対していた。

「戦闘、始まります」

光樹の言葉とほぼ同時に、辺りにカウントダウンの乾いた音が聞こえる。

カウントダウンがゼロになり、開始を告げるブザーが鳴り響いた。

ブザーは、開始を待っていた曙と清霜の耳にも届く。

「行くよ！ 清霜！ 作戦はさっき言った通りに」

「分かった！ 曙ちゃん！ 戦艦にだって負けないんだから！」

声を掛け合いつつ、二人は速力を上げて前進を始める。

今回の演習は、司令官が居ない状況下で行われる。

よって指示は無く、個々の判断と実力、そして2人以上ならば連携が求められる。

相手は、自分たちよりも長く戦ってきた、戦艦三笠だ。

旧式とは言え、彼女の實力は本物だ。

演習で何度か戦ったことがあるが、曙はその度に、苦汁を舐めてきた。

当たったと思っただけの魚雷を器用に避けられ、砲撃で返り討ちに遭う。気が付けば、模擬弾のペイントで、体中がカラフルになっていたことは、今でも忘れられない。

曙は気を引き締め、清霜と共に海を駆け抜ける。

「敵艦発見！ 主砲模擬弾、装填！」

「こっちも装填完了！ 単縦陣で、右回りに砲撃開始！」

清霜の声を受け、曙が先頭を走りつつ合図する。

二人は有効射程まで近づき、三笠から飛んで来る砲撃を全速力で躲しながら、右手に構えた12.7cm連装砲で砲撃戦を開始した。

30.5cm連装砲2基から放たれる砲弾を回避しつつ、曙と清霜は反撃する。

しかし回避運動のために正確には当てられず、三笠の周りに水柱が上がるだけだ。

当の三笠はそれに臆することもなく、副砲からの砲撃を織り交ぜて装填時間をカバーしつつ、繰り返し主砲を撃ち込んで来る。

曙たちは、三笠の後ろを取ろうと必死に走るが、彼女たちに合わせて体の向きを変え、全く隙を見せない。

「これじゃ、罅が明かない！ 清霜、魚雷を装填して。私と二人で、時間差で撃つよ」

「了解！ 模擬魚雷、装填！」

二人の両足に装着された魚雷発射管に、模擬魚雷が装填される。

この魚雷は演習での安全性を考慮して、酸素魚雷では無く、通常の雷跡が見える物だ。弾着時には、ペイントで被弾箇所が判定される。跡は見えない方がいいのだが、文句も言っていない。

「魚雷発射！ 撃てっ!!」

曙は主砲で牽制しつつ、魚雷発射管を前方に稼働、三笠の方に向けて魚雷を撃ち出す。

「続いて清霜、魚雷発射！」

遅れて、清霜も海中に魚雷を叩きこむ。

曙から放たれた6本の魚雷が海中を進み、その後を清霜の魚雷8本が追いかける。

魚雷を撃たれたことを確認した三笠は、直ちに最大戦速に移行し、回避運動を始める。

「遅いわっ！」

三笠の進路を予測し、曙は主砲を撃ち込む。この砲を躲そうとすれば、間違いなく直撃コースだ。

三笠に向かって殺到する、14本の魚雷は角度もずらしてあり、避けるのは容易では無いはずだ。

曙は、勝ちを確信した——が。

三笠が軍刀を鞘から一気に引き抜き、撃たれた砲弾を叩き斬り、空中で爆発が起きる。

続いて撃ち込まれた主砲も同様にして迎撃しつつ、魚雷の間を軽々と擦り抜けたり飛び越えたりしながら、瞬く間に全弾を回避してしまう。

「何あれ！ ずるーい!!」

曙の後方で、清霜が愚痴を言う。

しかし、曙も同感だった。まさか軍刀を迎撃に使い、あの見るからに重そうな艤装で軽々と動いてみせるとは、思ってもみなかった。

「清霜！ 次弾装填するよ！ このまま——っ！」

直後、曙と清霜の周辺に三笠から放たれた主砲が弾着し、水柱を上げて二人の視界を奪う。

「何これ、見えな——きやああっ！」

その隙を突かれて、清霜が被弾する。

副砲も次々と打ち込まれ、清霜の服と艤装があつという間にペイント弾塗れになって行く。

「清霜、戦闘不可ですー。曙ちゃん、後は任せたよ」

涙目になりながら言う清霜に、曙は力強く頷く。

「大丈夫よ。ここは私に任せて！」

曙は、砲弾の雨を抜けてジグザグに進みながら、三笠を指す。

こうなったら、近接距離で一撃必殺を狙うしか無い。

両足の発射管に、魚雷を装填しつつ、全速力で進む。

「うっ！」

左足の魚雷発射管に主砲が直撃し、使用不能になる。

それでも構わず、曙は前進を続け、ついに三笠を捉え——。

「……いない!?!」

三笠がいた場所には、誰の姿も見当たらない。

戸惑うのも束の間、曙の首元に軍刀の刃が当てられた。よく見ると、刃は模擬戦用に保護されている。

「なっ!?!」

視線を下ろすと、艤装を身に付けたままの三笠が片膝を付き、曙を捉えていた。

三笠はそんな曙を見て微笑み、黒髪を海風に揺らしている。

「良い連携ね。正直、ヒヤツとしたわ。でも、攻撃の手を緩めちゃだめよ？」 油断したところで、不意打ちを貰っちゃうからね。今みたい」

「低速艦でそれだけ動けるなんて、聞いてないわよ……」

およそ戦艦らしくない動きに、曙は啞然としながら感想を述べる。

「これでも、実戦だとかなりキツイの。艦隊行動を取るにも、遅すぎて皆について行けないし、敵も強くなってるからね。本当は、海に出たいんだけど」

「それだけ動けたら、まだまだ戦えるんじゃないの？」

「うーん。艤装も、ガタが来ちやつてるからね。次の改造が無いことには、厳しいかも」

三笠に悪意が無いのは重々承知しているのだが、それでも嫌味に聞こえてしまう。

それは、自分がまだまだ弱いからなのだろう。

彼女が現場復帰ということになれば、あつという間に置いて行かれるかもしれない。曙は、そんな危機感を持った。

その後、漏れなく曙も、三笠のペイント弾の餌食になった。

戦闘終了のブザーが鳴り響く。

拓海は中継から目を放すと、思わず感嘆の溜め息を吐いた。

「なんつーか……。お前のこの三笠、凄いな……」

「前線から退いてるって言っても、一応現役だからな。いざって時の三笠の引き出しには、ほんと驚かされるよ」

光樹も苦笑いをしつつ、同意を示す。

カメラユニットからの映像を見る限り、三笠の取った行動は「航行」では無く、脚を上手く使って走ったり跳ねたりしながら、3次元に動いていた。

艦装が有りながらこんな動きをするとは、考えもしていなかった。「私たちは『艦』ですからねえ。立体的に動くのなんて、元の艦のことを考えたら、有り得ないですし」

青葉が、活き活きとした表情で語る。

北の方で、三笠に連れられながら悔しげな表情で陸に戻る、曙と清霜の姿が見える。

遠目にも分かるほど、艦装も服も、ペイントでカラフルに染まっていた。

大輔も微笑みつつ、拓海の方を見る。

「君も、何れは艦娘を指揮した上で、三笠と演習で戦うことになるかもしれないな。その時は、しっかり味方をサポートするんだよ」

深みのある皺が、優しげな印象を与える。

しかしその言葉の裏では、自分の尻を叩かれているように思えた。

「は、はい——」

緊張しつつ返事をする拓海を見てから、大輔は光樹に視線を移す。

「鳴川君も、友人だからと言って、手は抜くなよ？」

「それは重々、承知しております」

発破を掛けられ、光樹は深々と頭を下げる。

「さて、三笠たちの様子でも見に行くとしようか」

大輔はそう言つて、拓海たち3人に目を配る。

それに拓海たちも同意し、演習を終えた三笠らの元へと港の護岸の上を、歩いて行くのだった。

第10話 親友の娘

拓海が横須賀鎮守府に来て3週間ほど経った、5月31日。
気が付けば、6月も目前となっていた。

この3週間は、横須賀から一步も出たことは無かった。
時間があれば、旧首都の方にも行ってみようと思ったが、いざカリキュラムが始まってみると、そんな時間などあつという間に無くなっていた。

民間人上がりとなるため、そこまで多くを求められるわけでは無いが、しかし現役の司令官たちに追い付くために、やらなければならぬことばかりだった。

元々ゲームをやっていたことが功を奏したのか、艦娘周りのことについては割とついて行けている。実際の艦娘を使うと言っても、他部隊から借りなければいけないし彼女たちにも任務がある。そのため、大半は座学と卓上演習だ。

他にも戦術リンクについてや、艦装など覚えることは多い。特防軍の歴史も、合わせて教えられているところだ。

フィジカルトレーニングは、体力には自信があつたのだが、思っていた以上にハードだった。おかげで、以前よりも持久力や筋力は上がっているような気がする。

毎日、朝8時ごろに始まり、夕方5時ごろに終わる。ずっとこの繰り返しだ。日曜日は休みだが、半日を自習に充てる。

こんなことが続くかと思うと焦る気持ちもあるが、着実にやっつけてくしかない。それでも、神通たちを待たせたくは無だし、半年以内には何とか着任したい。

もつとも、彼女たちが待っていてくれるとは限らないが――。

日本近海は、深海棲艦以外は特にこれといって重大な事態は無いようだった。

南鳥島沖で確認されたゴジラは、未だに行方が知れない。

深海棲艦の隙を見て、繰り返し調査は行われているようだが、発見報告は一つとして無いと光樹から聞いている。

沖合の泊地棲鬼などの残骸があった海域も調べられたが、放射能は既に拡散してほぼ無害になっているとのことだった。航行しても、問題は無い状態だと言う。

肝心の深海棲艦についてだが、残骸は霧散しており、影も形も無くなっていたようだ。

単に海中に沈んだだけかとも思ったが、倒された深海棲艦は例外無く消える現象が確認されており、その可能性は低いらしい。

生態を確認しようにも、このせいで中々実現出来ていない。後は鹵獲しか無いが、攻撃的な敵相手では厳しい状況だ。

5日前には、その海域へ調査に出ていた巨大な艦が、横須賀へ入港してきていた。

その日のカリキュラムが終わったついでで、泊町の西、海を挟んだところにある箱崎町と呼ばれる島に停泊しているところを見たのだ。

拓海的位置からは、銀色に鈍く光る船体と幾つかの武装しか見えなかったが、前後の甲板スペースが広く取られているように見えた。後で高い建物からその部分が見えたが、甲板にはミサイルか何かを発射すると思われる蓋が、何十枚もあった。

そして、後甲板にはどこか見覚えのある、クレーンのようなアームの先端にアンテナ状の物体がある装備――。

YGC-01、対獣高速汎用ミサイル巡洋艦 “やまと”。

数々の怪獣の危機の前に建造された、特生防衛軍の主力巡洋艦だろうだ。

第3次大戦頃までは、通常艦艇とほとんど変わらなかったが、5年前のゴジラ出現で大破、就役から12年目にして大規模改修を受け、怪獣戦に特化した兵器になった。

特生防衛軍の技術が盛り込まれており、メーサー兵器がその特徴の一つとなっている。後甲板に付いていたアンテナ状の物が、それなのだろう。

対ゴジラや、対深海棲艦防御を意識しているため、凶体が大きいにも関わらず特殊な装甲を装備。最大戦速時には、40ノットを優に超えるという。

わけが分からない話だった。

外国からは、ハリネズミとも言われているらしく、某国の駆逐艦よろしく全部乗せしていそうな勢いだ。

こんなモノが、計4隻も作られている。

過去にはメカゴジラやM・O・G・E・R・A.が存在したと言
うが、どこからそんな予算が出て来るのだろうか……。

2002年に息切れを起こしたことが、信じられないレベルだ。

これまでのことを振り返りつつ、拓海は自室で机の前に座り、伸びをしながら辺りを見回す。

この3週間で私物も僅かだが増え、すっかり住み馴れて来ている。

勝手知ったる我が家——とはいかないが。

今は昼食を終え、午後の自習に入るところだ。

早速テキストを開こうとしたところで、部屋に來客を告げるチャイムが鳴り響く。

誰かと思いつつドアを開けてみると、そこには光樹の姿があった。

「あれ、光樹？ どうしたのさ」

「よう、拓海。今、時間あるか？」

「いや、自習しようと思ってたところなんだけど——」

拓海がさも当然のように言うと、光樹が呆れたような顔をする。

「お前のことだから、そんなことだろうとは思った」

「で、どうしたんだよ？」

「取り敢えず、そのドアチェーン外してくれ」

「光樹はそれ以上言わず、頭を掻いている。」

拓海は首を傾げつつも、チェーンを外してドアを開ききった。

「あっ……」

視界に入ったのは三笠と、忙しくてあまり会う機会が無かった榛名の二人だった。

「こんにちは、白瀬君」

「こんにちは」

気安い感じで名前を呼ぶのは、三笠だ。

光樹や三笠とは会う機会も多く、いつの間にか友達感覚で呼ばれるようになったのだ。

光樹は咎めていたが、当の本人も身内しかいなくなると君付けで呼ばれていたし、それはそれで良いと思う。それに、悪い気分では無い。

「あの、白瀬さん……？」

三笠の隣に並ぶ榛名が、やや俯き加減で話しかけて来た。

しょんぼりとした空気を漂わせながら、気遣わしげに拓海を見つめている。

「その、このところずっと、根を詰めていらっしやるみたいで……。まだ1ヶ月も経ってませんけど……。大丈夫、ですか？」

榛名には、そういう風に映っていたらしい。

自覚は無かったが、振り返ってみると確かにきちんと休んだ記憶はあまり無い。精々、就寝時くらいだ。

ドア口の端に立つ光樹が、腕組みをしつつ拓海を見やる。

「俺も、同感だな。——まあ、そういうところは、昔からちっとも変ってないが」

「う……」

親友の確信を持ったような言葉に、胸がチクリと痛む。

何も言い返せないのは、凶星だったからだ。

「たまには、ゆっくり羽を伸ばせ。そんな調子じゃ、認定試験の前にぶっ倒れるぞ」

「そんな事を言ってもな……。他のところに行く暇何か、無いしな……」

部屋で寝るといいうのも一つの選択肢だが、結局落ち着かなくて、机に向かってしまいそうだ。

「なら、お前もちよっと、俺に付き合ってくれないか？」

『も』って……。どこに連れてくんだよ。遠出は御免だぞ？」

前の世界でのことを思い出して、拓海はややうんざりしながら言う。

そんな拓海を見て光樹は笑いつつ、首を横に振る。

「今日はそういうのじゃない。三笠や榛名と一緒に、俺の家に来ないか、と言ってるんだ」

「お前の、家……？」

光樹からの意外な誘いに、拓海は目を瞬かせる。

「そうだ。前々から、お前に見せたいと思ってたからな」

光樹の自宅は、横須賀市街から少し外れの所に建っていた。

自家用車2台分が止められるガレージを備えた、立派な2階建ての一軒屋だ。

とは言っても豪邸というほどでは無く、分譲住宅より一回り程度大きいくらいの、明るい茶色の外壁が特徴的な家だった。

光樹がガレージに車を止めた後、玄関から中に通される。

一步中に踏み入れると、奥行きのある廊下で拓海たちを出迎えた。和風モダンの廊下を進み、そのまま客間に通される。

こちらも廊下や途中で見えた部屋と同じく、統一された内装が施されていた。装飾は最低限に留められており、雰囲気壊さないような配慮が見て取れる。

部屋の奥からは外の景色が見え、窓の外は庭になっているようだ。青い芝と、揺れる木が垣間見える。

部屋を照らす淡いオレンジ色の光が、拓海たちを包む。

その光の下を歩き、拓海と榛名は、部屋の印象とはやや不釣合いな3人掛けソファの一つに座る。右に拓海、左に榛名という位置関係だ。

テーブルを囲むようにソファは配置され、拓海が座っている向かい側も同様に3人掛けだ。

対して、それらから見て直角に配置されたソファは1人掛け。三笠は、拓海から見て右手にあるソファの一つに座った。

「少し、お茶を入れて来るから待っていてくれ」

光樹はそう言つて、早々に客間から出て台所へ去つてしまふ。
感心しながら部屋を見回していると、三笠が頬を緩ませ、話しかけて来た。

「どう、気に入った？」

拓海は、一も二も無く頷く。

「ええ、びつくりしました」

外装も内装も、決して派手では無い。寧ろ地味だと言うべきだろう。

しかし、その地味さは訪れる者を威圧するのではなく、暖かく迎え入れてくれるように思えてならない。

隣にいる榛名も、呆けた様な顔で部屋を見ている。

「榛名ちゃんも、気に入った？」

「はい。こういう場所は、初めてです」

榛名の言葉に、拓海は少し驚く。

「あれ、鎮守府の方つて、和風な感じのところ、結構あつたよね？ 間宮さんのところとか」

「それはそうなんですけど……。狭いのに、広々とした感じと言いますか。鎮守府には、こんな所は無かつたと思います」

それで、拓海も納得する。

確かに横須賀鎮守府の敷地にも、和風の内装というところは無くはなかつた。

だが、どちらかという押し込められるような感覚に近かつたように思う。

「光樹君、娘さんが出来たときに、この家を建てたんだつて。貯金を奮発して。私は、その時はまだ港でコンクリート固めにされたままだつたから、どんな顔をしたのかは知らないけどね」

三笠は、自分の事のように嬉しそうに笑いながら、経緯を語る。

「アイツの娘さんは、学校とか通つてるんですか？」

流星に年齢をストレートに聞くわけにもいかず、適当にぼかして聞いてみる。

「確か、高校3年生だったかな。今は、ここにある大学目指して、受験

勉強中みたい」

受験勉強……。

拓海にとつてはついこの間の事のようなのに、懐かしく感じてしま
う。

光樹の娘が、受験勉強中ということなら、家にいるのでは無いかと
いう考えが頭を過ぎる。

「三笠さん——」

「また、さん付けしてる」

三笠の目が妙に座っている。

拓海は咳払いをして、話を続けた。

「——三笠。こんな時期に、光樹の家に良かったんですか？」

「それなら、大丈夫だと思うよ」

三笠は何でも無いような表情で、呆気なく言いきってしまう。

幾らなんでもそれはマズいのでは、と言おうとしたところで、不意
に階段を降りる足音が聞こえた。

誰かと思つて榛名と共に部屋の入り口を見ると、その足音の主が姿
を現した。

「あら？・三笠、お客さんかしら？」

茶色がかつた制服に身を包んだ、上品な物言いをする少女。

梳けば抵抗が無いだろう、するりと伸びるロングストレートの茶
髪。サイドの髪は、流れるように育ちの良い胸元まで伸びている。

髪と同じ色の目は、穢れを知らないかのように透き通る。

スカートから伸びる脚からは、血色の良い白い肌がソックスの間か
ら覗いていた。

彼女が、光樹の娘なのだろうと確信する。

目元の辺りが、何となく光樹に似ていたからだ。

少女は、部屋に入つて来ると向かいのソファアの傍らに座り、丁寧
にお辞儀をする。

それから頭を上げて、拓海と榛名を見据えた少女は、右手で髪を撫
でるような仕草を見せた。

——気のせいだろうか。

その仕草が、どこかで見たことがあるように思える。

この少女とは、初対面の筈だが……デジャブだろうか。

「どうしたの、白瀬君？　もしかして一目惚れ？」

「あ……。いや、そうじゃないです」

拓海は、即座に否定する。

確かに、彼女は美人だ。榛名といい勝負をしていると思う。

しかし、それはそれ。自分の想い人は榛名だ。

じつと見つめたのは、違和感があったからだ。いや、この時には違和感というよりも危機感と言わなければならない。拓海は、その少女が纏っているお嬢様のような雰囲気の内側に、別の物を敏感に感じ取っていた。

少女と拓海の視線が、交差する。

少女の瞳が、僅かに見開かれたような気がした。しかし少女は、何

事も無かったかのように、そのまま拓海を平然と見つめる。

「白瀬さん？　顔、青いですよ」

横から榛名に声を掛けられて、拓海はハツとする。

知らぬ間に、額や手には冷や汗が滲んでいた。その感触が、どうにも気持ちが悪い。

「ああ、ぐめん」

余程酷い顔をしていたのだろうが、拓海はそれを誤魔化す。

榛名は心配していたが、それ以上聞いてくることは無かった。拓海には、それがありがたい。

「お茶と菓子を持ってきたぞ——つて。何だ、もう出て来たのか？　後で呼びに行ったのに」

光樹がお盆に、グラスに入った茶と羊かんを乗せながら、少女に話し掛ける。

「父さん？　部屋には来ないでつて、何度も言ってるでしょう」

愛想の良い笑顔が、光樹に向けられる。しかしその顔は、決して笑ってなどいなく、威圧しているかのようにも見えた。

彼女が、光樹の娘なのだろう。

父親を笑顔だけで威圧出来てしまう娘など、拓海は少なくとも見た

ことが無いが。

当の光樹は、「す、すまん」と額に脂汗を浮かべて、テーブルにお盆を乗せる。

光樹はそそくさと、拓海の正面に座り、その隣に光樹の娘が席に着く。

「光樹、その子が？」

「ああ。俺の娘だ。自慢の娘だからね。お前に紹介しておきたかったんだよ」

「何だよ、それ……」

その言い方だと、娘を嫁に貰ってやってくれとでも言わんばかりだ。

拓海にはそんなつもりなど、鼻から無い。

「まあ、二人は初めてだったよな。自己紹介と行こうか。ここは、拓海からがいいかな」

光樹に指名され、拓海は娘に向かって礼をする。

「初めまして。白瀬拓海です。光樹の古い友人で、今は横須賀鎮守府で民間人の司令官着任のためのカリキュラムを受けています」

「貴方が、父の話していた方、ということですね。とても、一途な方だと伺っています。何でも、意中の子がいるからだとか」

「はい——仰る通りです」

柄にも無く丁寧な言葉で恐縮しながら、視線を光樹に向け、一睨みする。

——余計なことを、ペラペラと話さないでくれないか。

そう訴える目を見ると、光樹は「すまない」と言わんばかりに手を合わせる。

ここで責めても仕方が無いかと思いつつ、次の自己紹介を榛名に譲る。

「三笠さんと同じ艦娘の、金剛型戦艦3番艦、榛名です。鳴川少将には、お世話になっています」

「榛名さんのお話も、伺っています。南鳥島では、ご活躍されたそうですね。これからも、頑張ってください。応援しています」

「はい、ありがとうございます」

榛名と娘は、互いに笑い合う。

そして、娘の自己紹介の番が回って来た。

嫌な予感が当たらないことを願い、拓海はゴクリと唾を呑む。

——気のせいであってほしい。自分の勘違いであってほしい。

しかし拓海のそんな願いは、脆くも崩れさってしまった。

「父、鳴川光樹少将の娘、鳴川彩水さなです。17歳になります。本日は、わざわざお越しくださって、ありがとうございます」

彩水と名乗った少女は、まるでお手本のような、綺麗に整ったお辞儀をして見せた。

そして、和やかな空気が流れる榛名たちをよそに。

——拓海は、その少女の名を、絶望にも近い心持ちで受け止めていた。

あの髪を撫でる仕草、纏わり付くようできて、射抜くような鋭い視線。口元の笑い方。懐かしさすら覚える、艶めかしい話し方。

そして、自分にとって最も身近だった名前。

今、この場で口に出来るはずもない。でなければこの空気を壊してしまいかねないし、何より拓海が、話したくなかった。

未だに信じられない様な気持ちで、彩水を盗み見る。

それに気づいた彼女もまた、拓海と視線を交差させた。それも他に気付かれないように、相槌を打ちながら。

そして、その口元がゆつくりと音を発せずに、動いた。

唇の動きは最小限に、しかしはつきりと動く。

——久しぶり、お兄ちゃん。

拓海には、そうとしか見えなかった。いや、実際そう言っていたの

だろう。

姿形は、全くの別人だ。

しかし纏っている雰囲気や癖から、拓海は確信せざるを得なかった。

今、拓海の目の前にいる少女。

彼女は他でもない、かつて居た世界における、最愛の妹。

白瀬彩水、その人だった。

それからは頭が真っ白になり、拓海の耳にはどんな話も聞こえていなかった。

途中で話を振られ、曖昧に答えを返した程度だ。

信じられないような気持ちで彩水を見ると、彼女はその度に、拓海が見た覚えのある仕草を見せていた。

あれは、こちらに確信を得させようとしていたのだろう。

笑顔の奥に隠れる、無邪気さ。それは間違いなく、妹のものだった。

意味が分からない。

頭が追いつかない。

拓海がウエークから流された時には、彩水は日本で平穏無事に過ごしていた筈だ。

それが、何故親友である光樹の娘として、目の前に現れるのか。

真っ先に浮かぶのは、「転生」というキーワードだ。

創作物ではよく見かける、題材の一つだ。

しかしそれが当たっていると、彼女が死ぬ理由が分からない。

あの後、病気が事故にでもあったのだろうか。
分からない。

拓海にとってそれは、振り払おうとしていた悪夢が、今再び目の前に現れたことを意味していた。

途轍もない後悔。

口惜しき。

恥ずかしき。

情けなき。

——罪悪感。

忘れ、逃げようとしていたそれらが、一気に拓海に襲い掛かる。

本来なら、喜ぶところなのかもしれない。

だが、拓海はそうではなかった。

嬉しくないわけでは無い。再会したく無かったわけでも無い。

それでも、拓海は喜べなかった。

寧ろ心を大きく抉り、削り取られた。

その亡霊の前に拓海は、ただ黙ってその場をやり過ごすことしか、出来なかった。

その後2時間ほどで、お茶会はお開きとなった。

本来なら家を見て回りたいところだったが、体調が優れないことを言い訳にしてやめにしておく。

榛名にやや過剰気味に心配されつつ、拓海は光樹の車に乗り込んだ。
だ。

光樹と三笠が車外で、彩水と何事か話しているのを、窓の外に見る。

「……なあ、榛名」

「どうしました？ 白瀬さん」

榛名が、拓海の顔を覗き込む。

彼女は心底、拓海の体調を気にしているようだった。顔には、焦燥の色すら見て取れる。

「大丈夫、体調の方は平気だから」

「でも——」

「ただ、榛名にはちよつと聞いてほしいことっていうか……。相談したいことがあるんだ」

「榛名で良ければ、喜んで。でも、いったいどこで——」

「俺の部屋に来てくれ。3階は誰もいないし、ちよつと落ち着いて話したい」

別に、他意は全く無い。この状況で、ある方がどうかしている。

それよりも真剣に、話しておきたいことがあった。

あの時、自分の弱さを吐き出してくれた、榛名だからこそ。

情けないとか、格好悪いとか、そんなことは気にしていられない。

もう、誰かに話さなければ、拓海の心は限界寸前にまで追い込まれていた。

「分かりました。私も、白瀬さんの宿舎前で降ります」

「ありがとう……」

快く領いてくれた榛名には、感謝の言葉も無い。

その時、運転席と助手席のドアが開いて、光樹と三笠が乗り込んで来た。

「拓海、榛名。それじゃあ、送るよ。来客用宿舎と、艦娘用の宿舎でいいな？」

光樹は運転席でシートベルトをしつつ、エンジンを始動させる。

「すみません。私も、白瀬さんの宿舎前で降ります」

身を乗り出して来た榛名に、光樹はギョツとしたような目を向ける。

「それは、また……。いつの間にそんな関係——」

「そんなんじゃないよ。俺がちよつと、頼み事をしただけだ」

拓海が遮るように言うと、光樹は曖昧な顔で頷く。

「そう……。か。じゃあ、そうするけど——気が向いたら、俺にも話してくれよ？ 伊達に30年ちよつと、こつちでやってきてないんだし

さ」

「おう。ありがとうな」

「気にすんな。俺もお前くらいのは時は、色々悩んだもんさ」

そう言つて、光樹は車を出庫させ、公道に出る。

途中で彩水の姿が視界に入るが、拓海はそこから目を逸らす。

光樹の車は、彼の自宅を背にして、横須賀鎮守府へ向かうべく走り出した。

父の車を見送りながら、制服の少女——彩水は玄関先で溜め息を吐いた。

「もうっ、猫を被るのはホントに疲れちゃうなあ……。お父さんつてば、三笠ちゃん見る度にニヤニヤしちやつてさ。お母さんに陰口を言われる、こつちの身にもなつて欲しいよ」

一人誰もいない場所で子供っぽい愚痴を呟きつつ、彩水はスカートのポケットから、一つの石を取り出した。

欠けたお椀のような形をした石の真ん中は、緑色に染まっている。それが石本来のものなのか、後から塗られた物かは、彩水には分からない。

しかし、そんなことなど、彼女にとって問題では無かった。

「まさか、こんな所で会えるとは思ってなかったな」

彩水は、空に向けて石をかざす。

その時、緑色に染まっていた部分が、暗い影を帯びる。

「やつと、ここまで来れた。この石があれば、“私”を探せる。——

——だから、待っててね。拓海お兄ちゃん」

その少女の微笑みは、見る人が見ればどこまでも暗く歪で、不気味なものに見えただろう。

「私が、邪魔なもの……全部、壊してあげるから」

第11話 距離

光樹の車に送られ、拓海と榛名は来客用宿舎に到着した。

拓海が先に降りた後で、光樹と三笠からくれぐれも彼のことを宜しく、と榛名は言われた。

榛名も、拓海の様子がおかしくなったのには気付いていた。

家にお邪魔した直後には何の異常も無かったから、その途中か帰る時だろうと思う。

しつかりとした足取りでありながら、どこか危なっかしさを覚える拓海の背中をばらはらした思いで見つめながら、すぐ後ろを付いて行く。

エレベーターで3階まで上がり、彼の自室である305号室へと歩く。

その間、拓海は一言も話すことは無かった。

隣から顔を覗き込んでみたい気もしたが、影を感じる背中を見て、躊躇してしまう。

部屋の前に着くと、拓海はポケットから鍵を出して、ドアを開錠する。

玄関口にスイッチがあつたのか、薄暗い部屋に灯りが点き、拓海はこちらに振り返った。

「それじゃ、上がって」

外開きのドアを背中で抑えつつ、やや高めの視点から榛名を見つめる。

そこにあつたのは、穏やかで優しい笑みを湛える、拓海の顔だった。いつもと違うところと言えば、その笑顔に陰りが見えることだ。

「お邪魔します」

榛名は礼を言つて、部屋の中に足を踏み入れる。

ここから先は、今榛名の隣でドアの鍵を閉めている、白瀬拓海の世界”だ。

拓海の部屋に入った時の第一印象は、「綺麗だが寂しい」だった。

リビングには、真っ白いシートと布団が敷かれたベッド、白い座卓と何枚かの座布団。天井からは、備え付けの部屋干し用物干し竿が吊るされ、そこに幾つかの洗濯物が干してある。

他には、後から備品として導入された背丈の低い本棚に、テキストなどの本が入っているのみだ。

トランクなどの荷物が見当たらないが、それはクローゼットに入れているのだろう。

こうして見ていると、生活感は十分に感じられる。

整理整頓も行き届いていて、清潔な印象も受ける。

しかしその反面、空虚さのようなものも感じられた。

「おーい。榛名?」

「あつ……!」

無意識に部屋を凝視していたところで、拓海に声を掛けられ、榛名は体をビクリと震わせて驚く。

油断していたあまり、不意打ちを受けたような恰好になってしまった。

「い、いえっ。すみません!」

自分の失態に恥じらいを覚えて、榛名は拓海の視線から逃れるように頭を下げる。

あんな間拔けた声を聞かれたことが、どうにも恥ずかしい。

普段の自分なら、こんな真似はしない筈なのに。

「ごめん、驚かせたか……。——取り敢えず、座ろうか」

拓海は気を利かせたのか、話を逸らして、部屋の隅に積んである座布団を取りに行く。

黒いカバーを被せられた座布団を2枚、座卓で向かい合うように置くと、拓海は榛名に手招きをする。

榛名はそれに頷くと、手前の方に敷かれた座布団に腰を落ち着けた。

拓海の方も、榛名と向かい合って座る。

それから、二人の間に沈黙が訪れる。

拓海は、やや俯いたまま中々話し出そうとしない。

もどかしさはあったが、それでも榛名は待つ。

それが、自分に出れることだと思うから。

数分が経過して、拓海は意を決したように顔を上げた。

榛名も姿勢を正して、彼と目を合わせる。

拓海は、ゆっくりと言葉を選びながら、重い口を開いた。

「榛名は、『転生』って信じるか？」

「生まれ変わりってことですか……？」

「うん。今生きている人が、実は昔のある人物の生まれ変わりだったとか、そんなことを言うんだけど」

頷く拓海に、榛名は一考してみる。

前世で死した魂がもう一度、新たな命を得て再びこの世に生まれること。

信憑性のほどは分からないが、小耳に挟んだことのある話だ。人々の間でも、賛否両論が交わされるという。

「——そうですね……。私たち艦娘は、かつての軍艦の記憶を受け継いでいます。そういう意味では、あり得ない話ではないかと思えますが……」

艦としての記憶は、断片的だ。流星に、全ての記憶を持っているというわけでは無い。

それでもこうしてかつての記憶を持ち、それに様々な面で影響を受けているという意味では、艦娘は「軍艦の生まれ変わり」と言えるかもしれない。

「そっか……。言われてみれば、そうかもしれないね」

榛名の言わんとすることに気付いて、拓海は理解を示す。

それから視線を虚空に向け、卓上に両手を置く。

「アイツの……。光樹の、娘がいただろう？」

「鳴川彩水さん、ですか？」

あの上品で、気品に溢れた少女の顔を思い浮かべる。

そう言えば、雑談をしている時に、ちらちらと拓海の方に視線を向けていた気がするが、あれは何だったのだろうか。

断言することは出来ないが、少なくとも、拓海に対して興味を抱いているような目だった。

拓海は頷くと、一つ深呼吸をして、再び榛名に視線を合わせる。

「あの子は、俺の妹——白瀬彩水の生まれ変わりだ」

確信を持った目で、彼は言い切ってみせる。

榛名は驚いて、目を見開く。

「妹さんが、いたんですか？」

尋ねると、拓海は真剣な顔で頷く。嘘は吐いていないようだ。

そう言えば、拓海が肉親のことを自分に話すのは、初めてだ。少なくとも榛名には、彼からその辺りの話を聞いた覚えはない。

「ああ。俺の一つ下だよ。ウエークで流された時期には、東京の高校に通ってた」

拓海は、懐かしそうに目を細める。

一方の榛名は、生まれ変わることが本当にあるのだろうかと疑問に思う。

自分で言っておきながら、そう考えるのは矛盾しているのかもしれない。

「何故、妹さんだと思われたのですか？」

その疑問も含めて、拓海に投げかけてみる。

「癖、だな。俺の妹も髪が長くてさ、よく右手で自分の髪を撫でてたんだよ。ちやうど、光樹の娘がやったみたいに」

榛名は、光樹の家での記憶を手繰り寄せてみる。

確かに、初めて会った時や話している最中に、そんな行動を取っていたように思う。

榛名の様子を見つつ、拓海は続ける。

「その癖が、光樹の娘と全く一緒だったんだよ。目つきも、表面上取り繕ってたけど無邪気な話し方も、一緒。その所為かな。顔は確かに光樹に似てるんだけど、俺の妹ともそっくりに見えるんだ」

拓海は座卓に肘を付き、頭を抱えて俯く。

「おまけに、名前まで全く同じで『彩水』と来た。これ以上、どう間違えろって言うんだよ……」

拓海は、そう言って呻く。明らかに、参っている様子だ。

「そのことを、鳴川少将は、ご存知なのでしょうか？」

「いや、あいつは知らないだろうな。あの様子だと。直接会ったことは無いし、名前も出して無かったからな……」

「確かに彼の妹の名前を知っていたら、「彩水」という名前を付けるだろうか。」

付けるとしたら、響きが気に入ったからとか、その名前の人に何か思い入れがあるか——といったところかもしれない。

「癖や面影がそっくりで、名前も一緒……。それが、白瀬さんがご自分の妹さんだと思った理由ですか？」

「まあ、そんなところになるな……。今の話だと、そうそう信じて貰えないかもしれないけど——」

言い淀む拓海を前にしながら、榛名は少し気になって、尋ねる。

「白瀬さんって、妹さんのことをどう思われてるんですか？」

拓海は顔を上げて、目を瞬かせる。

「そりゃあ、大事な妹だよ。あいつがいなかったら、今、俺はここにいないだろうしな」

さも当然のこのように、拓海は言う。

それなら何故、彼は恐怖するような反応をしたのだろうか。

前世に何があったかは兎も角、再会を喜び合うのでは無いのか。

榛名が、姉や妹たちと艦娘として再会出来て、喜んだ時のように。

拓海が、30余年も老けた友人と再会を分かち合った時のように。

しかし拓海が示したのは、恐怖や怯えと捉えられる感情。

元いた世界で、二人の間に何かあったのだろうか。

そんなことを聞いてみたくて、榛名はそれとなく話しかけてみる。

「妹さんは、どんな方だったんですか？ その……仲は、良かったんですよね？」

「ああ、そりゃあもう。歳が近かったから、友達みたいな関係だったな。映画の『ゴジラ』何かは親の影響で見てたけど、それ以外のアニメだとかゲームだとかには、疎かったんだよな。中学の時に教えて貰って、その頃から時間があるときには、ちよつとずつ楽しむように

なっただって感じだ。で、高校の時に榛名たちが出て来る擬人化ゲームにハマって、今に至ってる」

そう語る拓海の目には、僅かに生き活きとした光が宿っていた。出会ってから初めて見た、懐かしむような微笑みだ。そこには、自分の知らない拓海がいるのだと感じる。

拓海は、話を続ける。

「昔は、気が付けば後ろに引っ付いて歩いてるような子だったな。よく笑って、よく泣いて何かあれば、『お兄ちゃん』ってさ。喧嘩もしたけど、頼られるのは嬉しかった。だからかな、サッカーを始めたのは。最初はアイツに見てほしかったんだけど、やっていくうちに、サッカーにのめり込んでいった。それから、アイツもくっついてくることは無くなっただけ」

彼の脳裏に浮かんでいようであろう、妹との思い出。

言葉の節々には、暖かさのようなのが感じられる。

「妹さんのこと、大切にされているんですね」

「そりゃあな。俺にとって、自慢の可愛い妹ってやつだ。中学や高校の時も、小学校の頃ほどでは無いにしても、よく一緒にいたもんだ。——それが、当たり前だって思ってたんだよ」

拓海は俯き、眉を顰めて唇を噛む。

「なあ、榛名……。お前にとって、姉妹ってなんだ？ 金剛や比叡、霧島は榛名にとってどんな存在だと思ってる？」

何かにすがろうとしているような、か細い声。表情は見えない。

だがこれは、彼にとって大切なことなのかもしれない。

「そうですね——。お姉さま方や霧島は、私にとって『絆』なのかもしれない」

「絆、か……」

「はい。色んな思い出を、一番近くで共有出来る——そんな存在です。戦うこともあります。私はお姉さま方や霧島がいてくれるだけで、安心するんです。この姿になってから、余計そう思います」

かつて姉妹で唯一取り残され、解体という形でその軌跡に幕を下ろした榛名。

彼女にとって、姉妹との再会は何物にも代えられないことだった。

「俺も、そんな風に思えたらどんなに良かったんだろうな……」

拓海は手を固く握り、誰に言うわけでも無く呟いた。

「白瀬さんは、違うんですか？」

榛名の問いに、拓海は視線を逸らす。

そして、静かな口調で告げた。

「俺にとってアイツは——『呪縛』だ」

拓海の言葉に、榛名は驚愕の表情を浮かべる。

「そ、それってどういう……」

「言葉のままの意味だよ」

思わず尋ねた榛名に、拓海は悲しげに笑う。

「何か、あつたんですか？」

ついに我慢し切れず、榛名の口が動く。

「あつたには、あつたな。でも、その質問には答えられそうにない……」

拓海は、歯軋りをするように口元を歪める。

そこには、後悔の念のようなものが見え隠れした。

「答えられないなんて、そんな——」

しかしこれは、拓海にとってこれ以上踏み込んで欲しくないのだろう。

彼の態度からは、そういったものが滲み出ている。

「悪い。自分から話しておいて、こんなのは無いのかもしれないけど……。こればかりは、話したくない」

拓海の口から出たのは、拒絶の言葉。彼は、申し訳なさそうな表情をしていた。

「そんなのって……酷いです」

榛名は、思わずそう溢してしまつてから、ハツとして拓海の顔を見た。

拓海は先ほどの表情を変えないまま、俯いている。

「はは……。そりゃ、そうだな。だけど俺は、こればかりは、榛名に對しても答えられない」

「白瀬さん、それで良いんですか？」

「良いんだ……。俺に、そんな資格は無い」

拓海は、吐き捨てるように言い切る。はっきりと感じる、拒絶の意志。

その言葉を聞いて、榛名は顔がカツと熱くなるのを感じつつ、すつくと立ち上がった。

「榛名……？」

「すみません。もう、帰ってもよろしいでしょうか？　この後、用事がありますので」

榛名はほんの少しだけ、嘘を吐く。

しかし拓海はそれを疑うことなく、首を縦に振った。

「すまん……。下まで送ってくか？」

「いえ。玄関までで十分です。白瀬さんは、部屋で休んでいてください。明日からまた、カリキュラムですよね？」

「それも、そうだな……。分かったよ」

拓海も立ち上がって、榛名と視線を合わせる。

榛名を見つめる彼の顔は、酷く情けないものだった。それが、榛名の心を突き動かす。

榛名は踵を返すと玄関に向かい、ブーツに足を入れる。

膝丈ほどもあるブーツを履き終え、部屋の鍵を開けて3階の廊下に出る。

それから拓海の方を振り返り、一礼する。

「白瀬さん、お邪魔しました」

「ああ、いや。俺の方こそ、時間を取らせてごめん」

拓海は遠慮がちに笑いつつ、首を振る。その顔はやはり、酷いものだった。

「それでは、また」

榛名はエレベーターホールの方に向けて足を生み出すと、二度と後ろを振り返ることは無かった。

後ろに、いつまでもこちらを見つめ続ける視線を感じながら。

1階でエレベーターを降りて外に出ると、丁度目の前に見た覚えのあるセダンの車が停車する。

助手席の窓が開くと、奥の運転席から車の主が顔を覗かせた。

「鳴川少将……？」

「何だ、結構早かったな。取り敢えず、後ろにでも乗ってくれ。艦娘宿舎まで送っていくよ」

「失礼、します」

有無を言わせない調子に圧倒されつつ、榛名はその言葉に甘えることにする。

後ろのドアを開け、後部座席に乗り込んだ。

車内には、光樹と榛名以外には誰もいないようだ。

それを察したのか、拓海が口を開いた。

「ああ、三笠か？　ちよつと、仕事を任せてある。つと、シートベルトは大丈夫か？」

「は、はい」

光樹に言われ、榛名は自分がシートベルトをしていることを確認する。

「大丈夫みたいだな」

光樹はそれを確認すると、窓の外に目を配らせつつ、車を緩やかに発進させた。

「ちよつくら遠回りするが、いいか？」

「お構いなく」

話したいことがあるのだろうと思い承諾すると、光樹は交差点を右に曲がらず、真っ直ぐ進んだ。

「で、何を話してたんだ？」

流れていく窓の外の景色を見つめっていると、光樹が話を切り出して来た。

初めから、聞くつもりだったのだろう。でなければ、こうして車を遠回りさせることも無い筈だ。

榛名は、どこまで話すべきかと思いつつ、言葉を選ぶ。

「白瀬さんの……妹さんのお話を伺っていました」

「そういえばアイツ、妹がいたんだったな。アイツ、結構なシスコン野郎でさ。語りだすと止まらなくなるんだよな。榛名も、そんな話を聞かされたのか？」

「いえ……。可愛がっているという話は聞きましたが、どちらかという……」

彩水という名の妹の話をしている時の拓海の顔を思い出して、榛名は言葉を途切れさせる。

「その様子だと、喧嘩でもしたか？」

「そういうわけでは、無いのですが……」

拓海は、何故大事にしていた筈の妹を差して『呪縛』などと言ったのか。

そして自分を拒絶した、あの目。

榛名はあの時、柄にも無く怒りを感じた自分に、驚いていた。

拓海が自分の前で弱音を吐いたからだろうか。

それとも、榛名の思う兄弟姉妹の考え方を否定されたからだろうか。

——違う。そのどちらでも無い。

では、何か？

そう自問するが、今の榛名には答えが見つけれなかった。

「アイツ、一番悩んでいることは、俺にも教えてくれなかったからな」「えっ?」

光樹の不意の言葉に、榛名は思わず声を溢す。

「他の悩み事は、よく相談に乗ったもんだ。でもな、一個だけ俺にも、誰にも話してくれなかつた事があつた。それは、俺も知らない。俺も聞いたことが無いからな。親友の俺にすら、話してくれない事なんだ。アイツにとつて、余程重大なことなんだろうよ」

「白瀬さんは、気にならないんですか？」

榛名の問いに間を置いてから、光樹は肩を竦めて笑う。

「気になりはするさ。でも人には、一つや二つくらい、誰にも話したくないことだつてあるだろうよ。俺だつてそうだ。だから、あんまり責

めてやるなよ？ アイツはアイツで、頑固なところがあるからな。アイツが自分でそう決めた以上、俺たちは背中を押してやることぐらいしか出来ないだろうよ」

光樹は、拓海のことをよく分かっているようだった。

対して自分は、彼と出会ってから1ヶ月も経っていない。

カリキュラムをやっている時の拓海は、いつも必死な顔で頑張っていた。それがここに来て、見たことの無い顔を覗かせる。

そんな顔に、失望してしまったのかもしれない。

「鳴川少将は、白瀬さんの妹さんには会われたことはありませんか？」

「いや、無いな。そう言えばアイツ、名前の一言も喋ってなかったな。よっぽど、大事にしてたんだろ。俺みたいにな奴に、取られちまわないようにさ」

そう言って、光樹は冗談めかして笑っていた。

車の後ろで榛名は、そんな彼を前にして、一つの決断を口にした。

「鳴川少将。私は、呉鎮守府に戻ろうと思います。——きやつ!？」

急ブレーキが掛かり、榛名の身体が前につんのめるが、シートベルトの安全機能で頭をぶつけずに済む。

運転席の方を見ると、光樹が顔を強張らせてこちらを見つめていた。

「おいおい。それ、本気で言ってるのか？ 磯貝の所に戻るってことだぞ?」

「それなら、金剛お姉さま方いるので、平気です」

「いや、まあ……。あいつらの守りは、ある意味硬いからな……。拓海の奴の傍にいないか?」

「ええ。今の白瀬さんは、その……。見ていらっしゃいませんから」

「そうなのか? っていうか、バツサリ切ったな」

光樹の眩きには、榛名は答えない。

「……で、いつあっちに戻るんだ?」

「今日にでも、厚木から飛行機に乗って戻ります」

「今夜か!? いくら何でも、急過ぎじゃないか?」

「良いんです。それに早く戻れば、お姉さま方の負担も減らせると思

いますので」

「それは否定しないが……」

榛名の意志は固かった。

別に、大それた意志があるわけでは無い。

ただ、これ以上拓海の傍に居たくないと思っただのは確かだった。

「——分かった。本庁舎に戻ったら、すぐに手配する。榛名は、宿舎に戻ったら荷物を纏めておけ。艤装は、迎えに行った時に持ちだすとするか。拓海には、挨拶していくか？」

「結構です。私が行ったことも、話さないでください」

はつきりと言うと、光樹が少々気圧されたように答える。

「そ、そうか……。じゃあ、アイツから聞いてきたときだけ答えるってのでもいいか？」

「はい。それで構いません」

気が付けば、艦娘用の宿舎前に到着していた。

光樹が車を宿舎前に停めつつ、後部座席に視線を向ける。

「ほら、着いたぞ。——調べ物の方は、いいのか？」

榛名は、南鳥島の要塞で言ったことを思い出す。

ゴジラのことと、艦娘のこと。自分が、どうやって生まれたのか。

横須賀から離れることで、それらの事柄からも遠ざかるような気がするが——。

「また、こちらに来た時に調べることになります。それに、艦娘には調べられる限度があると思いますので」

「まあ、将官ですら閲覧出来ないことになってる情報もあるからな。無理も無いか。——それじゃ、今晚の7時。ここで落ち合おう。それまでに、関西方面へのフライトに乗れるように手配しておく」

「ありがとうございます。宜しく願います」

榛名はそう言つて一礼すると、後部座席のドアを開け、車を降りた。走り去って行く光樹の車を見送ると、榛名は艦娘用の宿舎の入口へと向かう。

首を上げると、地上11階の建物が榛名を見下ろしている。

一部屋に3人まで入ることが出来、5個艦隊分の艦娘を余裕を持つ

て収容出来るほどの施設だ。

榛名はその建物の2階に、一人で部屋を借りていた。

呉から一人で出向して来て、少し寂しさを感じつつあった時期でもあるし、良い機会だったかもしれない。

榛名は一人歩きつつ、知らず眩いていた。

「白瀬さんの、バカ……」

第12話 戸惑い、そして

翌朝、拓海は身支度をしながら昨日のことを振り返っていた。

光樹の家で出会った娘のことは、正直思い違いであって欲しい。

自分の妹が、親友の娘として目の前に現れることなど、あり得ないことだと思う。

しかしその所作の一つひとつに、妹の面影を感じてしまったのだ。顔つきも違う筈なのに、そっくりに見えてしまう。

本当に妹だったとして、どう彼女と接すればいいか、今の拓海には分からない。

どんな経緯でこの世界に生まれたかということもあるし、昔の出来事のこともある。色々な意味で、拓海は掛けるべき言葉を持っていなかった。

そして、榛名のこと。

彼女には無様な姿を見せてしまった上に、話まで聞いて貰った。妹の話が中心だったが、彼女の話をしたのは、この世界では榛名が初めてだった。

少なくとも、こちら側では光樹と同様に、拓海にとって信頼出来る相手だ。そんな彼女を前にしても、拓海は踏み込んだ話が出来なかった。

帰り際の榛名の背中が、怒っていたように思う。肝心なことだけは、話さなかったのだ。当然のことだろう。

「話せるわけ、ないだろ……」

準備を整える拓海の自責の念の籠った声が、空虚な部屋の中に響いていた。

翌日、拓海はその日のカリキュラムを終えると、艦娘の宿舎に来ていた。

榛名に、一昨日のことを謝るためだ。

どの面を下げて行くのかと思いましたが、それでも謝りたかった。明らかに、自分に非があったのだから。

艦娘は通常、宿舎で寝泊まりしている。榛名も、この約1ヶ月はここに泊まっていた筈だ。

早速宿舎に入ろうとすると、自動ドアが開いて中から青葉が出て来た。

「あれ？ 白瀬さん、ご用事ですか？」

「ああ、うん……。榛名は、いるか？」

拓海が尋ねると、青葉がきよとんとした顔をしてこちらを見つめていた。

その間に妙な不安感を覚える。

「まだ、帰ってない？」

拓海が重ねて問うと、青葉は何やら一人で頷く。

「もしかして、聞いてないんですか？」

「何を……？」

「榛名さん、二日前に呉に帰りましたよ」

それを聞いた瞬間、拓海は目を見張った直後咄嗟に踵を返し、鎮守府の本庁舎に向かって駆け出していた。

本庁舎の建物に駆け込むと、拓海は真っ直ぐ受付の方に向かう。

自身の名札を見せつつ、拓海は前のめりになって、受付嬢に迫った。

「すみません、鳴川少将は!？」

血気迫る表情をして肩で息をする拓海に戸惑いつつ、受付嬢は事務的な表情を取り繕って答える。

「い、今のお時間でしたら、執務室にいらつしやるかと——」

「ありがとうございます！」

事情がよく呑み込めていない受付嬢に礼を言いつつ、拓海は階段を駆け上る。

そのまま4階まで上がると、廊下を進んだ先にある第1艦隊司令長官の執務室まで一直線に進んだ。

部屋の前に着ると、拓海は勢いよくドアを開けて中に入った。

白い壁紙に囲まれた執務室には木製の本棚が幾つも並べられてお

り、そこには大量の資料や書籍が治められている。

その一角、部屋の出入り口の正面に当たるところに、執務用の木製机が一つ置かれていた。

「おい！・光樹!!」

拓海はその机に座る人物——光樹に向けて、上擦った声を出した。部屋の主である光樹は仕事だったのか、書類の一つを手にしたまま驚いた様子で顔を上げ、拓海を見ていた。

「拓海——」

光樹は言いかけたところでふと何かに気付き、得心したように頷くと、書類を机に置く。

拓海は乱暴気味にドアを閉めると、机の前まで歩を進める。

「榛名が帰ったって、どういふことだよ!?!」

光樹は拓海を見上げると、息を一つ吐いた。

「誰から聞いた?」

「青葉だよ。艦娘の宿舎に行ったら、榛名は呉に帰ったって——」
興奮しているせいで、拓海の額から汗が一筋、流れ落ちる。

「言葉通りの意味だ。それがどうかしたのか?」

無然とした表情で、光樹は尋ねる。明らかに何か知っている様子だ。

そんな光樹を見て、拓海は無性に腹が立つてくる。

「呉って、あの磯貝少将がいるところだろ! 何で帰したんだよ!」

「向こうには、金剛型の姉妹もいるからな。あいつらがいれば、大丈夫だと判断した」

「書類じゃ、相当マズいって書いてただろ!」

拓海の張り上げた声が、室内に響く。

——磯貝風介。

横須賀に来た際に光樹から渡された資料によると、彼は15歳で防衛大学校に入学し、18歳で特生防衛海軍の所属となったらしい。それ以前の経歴は、一切不明とのことだ。現在は、25歳になるといふ。配属された時点で、既に高い身体能力と銃火器の扱いに長けており、指揮能力の面でもみるみると頭角を現していった。

そんな彼だが、今年に入って問題視されるようになったのが、艦娘・榛名への強い執着だ。

僅か1、2ヶ月の間にストーカー行為を始めとして、犯罪と言うべき行いが多々見られるようになった。

若くして優秀な指揮官であったため、特防海軍は彼への処分を先送りにしてしまう。それが榛名の所属する第2戦隊の指揮にも影響し、巡り巡って南鳥島での事態になってしまったそうだ。

現在でも、処分は保留され続けている状態だという。

拓海は書面を通してしか彼を知らないが、その印象は最悪と言っていいものだった。

「榛名は、自ら呉に帰ると言ってきた」

「は……？」

光樹から告げられた言葉に、拓海は口を半開きにする。

「は、榛名が……？ う、嘘だろ……」

「事実だ。それに、磯貝少将もこの数週間は手出し出来ない」

拓海は、目を見開いて光樹を凝視した。

「え……？」

「今から約2週間後に、石垣島攻略作戦——。深海棲艦に占拠された、石垣島周辺海域の奪還作戦が行われる予定だ。第2戦隊は、その主力の一角となる。榛名が向こうへ帰る際に、最後通告も出しておいだ。おいそれと手出しを出来る状況には無い」

「ちよ、ちよつと待て……。こ、攻略作戦？」

よく呑み込めず、拓海は眉を顰めて困惑する。そんなことは、初耳だ。

「石垣島を中心拠点として、先島諸島に深海棲艦が密集している。ここを中心に、沖縄本島や台湾への襲撃が行われていた。ここを叩けば、被害の軽減にはかなり役に立つ。同時に、周辺の島々の奪還も出来るからな。この攻略には、現有艦娘の半数近くを使うことになる」

「だからって、磯貝少将が何もしない理由には——」

「その点は同意だ。だがこんな状況で、もしものことがあればどうなる？ 部隊に動揺を与え、士気の低下にも繋がりがかねない」

「それが、手出し出来ない理由ってどういうのか？」

拓海の言葉に、光樹は首肯する。

だが、その後に光樹は口を開いた。

「——とは言っても、俺も安心出来るとは思っていない。ここ数か月の間に何度か彼と顔を合わせたけど、このままでは第2戦隊そのものも、危ないな。榛名が安否不明の時にはほとんど機能出来なかった上に、榛名が戦隊にいた時も、指揮に混乱があった」

「何で、解任しないんだよ。確か、第3艦隊の司令長官も兼任してたよな？」

「上から止められてたんだよ。今は最後通告を出すところまでは認めてもらえたとはいえ、彼の司令官職の解任には、未だに良い顔はしてないな」

難しい顔をして、光樹は拓海の問いに答えた。

「榛名は……、榛名は、そんなところに戻っても良かったのかよ」

拓海は俯き、声を絞り出す。

現状では、金剛たちが磯貝風介を抑えるのに期待するしか無いということだ。それだって、どこまで持つかは分からない。

「榛名が呉に戻ると言い出した原因は、多分お前だぞ。拓海」

拓海は顔を上げて、正面にいる光樹の顔を凝視する。光樹は腕を組み、感情の無い目をこちらに向けていた。

「俺、が……？」

「お前の妹について、榛名に話したそうだな」

「榛名から聞いたのか？」

「ああ。何を話してたかは聞かなかったがな。お前、結局榛名にも肝心なこと、話せなかったんだろ」

「——っ！」

凶星を突かれて、拓海は苦虫を噛み潰したように口元を歪める。

「やっぱり、そうか。拓海、何を怖がってるんだ？」

続けざまに、光樹が核心を突いてくる。

「それ……は……」

——今の関係が壊れてしまうから。

そんな懸念を言うことが出来ず、拓海は口を噤んでしまう。

「言えないなら、今は言わなくていいさ。そんなに俺に言えないことなら、聞かない。まあ——いつかはケリをつける。墓場まで持つて行くっていうならそれも構わないが、今のままじゃこの先、辛いぞ」

拓海は、光樹の目を覗き見る。

それは、心の底から自分を心配して気遣う色を見せる、親友の瞳があった。

「そうだな……。ありがとう。——少し、時間をくれないか」

「おう。作戦の発動前までなら、いつでも付き合おう」

光樹の頼もしい言葉に再度礼を言いつつ、拓海は踵を返し、光樹の執務室を後にした。

それから日付が変わってからの二日間、拓海はカリキュラムを受ける傍ら、悶々と考えていた。

榛名が横須賀を去ってしまったのは、光樹の言うように自分の所為なのかもしれない。

自身が心の内に隠していることを、打ち明けることが出来なかったから、彼女は出て行ってしまった。

気持ちだけ伝えておいて、悩みを打ち明けることは出来ませんという態度を取られては、怒るのは無理も無い。

だが再び榛名に会って、話すかと聞かれれば「ノー」と答えるだろう。

拓海にとってそれは、簡単には片付けられない問題だった。

そんな事を考えていた所為で、カリキュラムにはあまり集中することが出来なかった。ふとした瞬間に考え事をしてしまい、上の空になつてしまうのだ。

おかげで、何度も注意を受ける羽目にもなつてしまった。

二日目を終えた拓海は意気消沈しつつ、光樹の執務室を訪れていた。

拓海の様子を心配した光樹から、後で来るようにと伝言があったからだ。

部屋の適当な場所で待っていると、程なくして光樹が入って来た。「来てたか。そこにある椅子、使っていないぞ」

光樹は拓海を見るなり、部屋の壁際に設置された机とセットになっている椅子を指し示す。

光樹が執務用の机に着くと、拓海は椅子を持って来て、正面から向かい合うように座る。

拓海が座つたのを確認するなり、光樹が早速話題を切り出した。

「聞いたぞ。拓海、昨日今日と集中出来てないんだってな？」

「う……。もう知ってんのか」

鎮守府の最高責任者だけあって、流石に耳が早い。

「そりゃあ、お前のカリキュラムの報告だって、日ごとに上がってくるからな。やっぱり、榛名の事か」

「まあ、な……」

三日前に話をしたのだから、そのことに思い至るのは当然と言える。

拓海は曖昧に頷きながら、肯定した。

「お前は、どうしたいんだ？」

光樹が、単刀直入に尋ねる。その視線はどこか、親が子に語り掛けているようにも見えた。

「俺は……」

言い淀んで、ふと考える。

こんな情けない状態の自分が、今更になつて後を追いかけて、榛名と会つてもいいのだろうか。行ったところで、果たして榛名は自分と会ってくれるのだろうか。そんな不安が頭を過ぎる。

「この間、艦娘の宿舎に行つたって言ってたな。あの日、榛名に会いに行つたんだろ？ 何で、会いに行こうと思つたんだ？」

「——この前のこと、謝りに行こうと思つてたんだよ。榛名には、悪いことをしたから……」

「ならお前は、何を躊躇してるんだ？」

光樹の言葉に、拓海は目を見張り、それから顔を俯ける。

「俺は躊躇ってなんか……」

「ちよつとくらい、凶々しい方がいいんだ。謝りたいって言うなら、謝りに行けばいい。理由なんか、後から幾らでもこじつけられるさ」

「お前がそれを言うのか……」

艦隊の司令長官を務めるような人間が言う台詞に、拓海は嘆息する。だが、彼の言うことにも一理ある。

「つたく、お前はこういう事には意外とへタレなんだな。芝生の上にいる時の積極性はどこ行つたんだ」

光樹は半ば呆れ顔をしつつ、遠慮の無い物言いをする。

「へ、へタレって……」

「へタレだろ。少なくともフィールドの外じゃ」

拓海は反論しようとするが言葉が見つからず、閉口してしまう。

光樹は小さく咳払いをすると、拓海を正面から真つ直ぐ見据える。

「それで、拓海。もう一度聞く。お前は、どうしたいんだ？」

寸瞬ばかり間を置いて逡巡した後、拓海は小さく息を吸い、面を上げた。

「榛名に会いたい。会って、ちゃんと謝りたい」

真つ直ぐ光樹を見返して、はつきりと告げる。

正直、まだ割り切れない部分はある。肝心なことを語れなかったために、好きな相手を怒らせてしまった以上、どんな顔をして会えばいいか、拓海にはよく分からない。

ただ光樹とのやり取りを通じて、件の事は話せないにしても、ここですつまでも悩んでいるよりも、直に会ってみるべきだと思えた。

「よく言ったな、拓海」

「何か、上手い具合に誘導されたような気はするけどな」

溜め息交じりに拓海が言うのと、光樹がくつくつと笑う。否定しない辺り、やはり意図していた部分はあつたのだろう。

「それじゃあ、呉に行くということでもいいんだな？」

「ああ」

光樹から今後について問われ、拓海は首を縦に振る。

「なら——明日の昼頃に、厚木からフライトがあるな。9時になつたら、お前の宿舎前に迎えに行くが、それでいいか？」
「迷惑かけるな。忙しい時期に」

光樹の親切ぶりに申し訳なく思つて言うと、彼は首を横に振つた。
「こうなるのを見越して、引き継ぎも済ませておいたからな。明日の
カリキュラムのキャンセルは、こつちでやっておく。明日から2泊3
日くらいになるかな。予定が早まることもあるから、そのつもりで準
備をしておいてくれ」

幾つかの連絡事項を終えると、その場は解散となつた。

一方その頃——。

富士山の麓には、青々と葉を生い茂らせた木々が生える、樹海が広がっていた。富士山と密接な関わりを持つと言われる場所だ。

その樹海のとある場所に、今にも崩れ落ちてしまふような祠があつた。祠の近くには穴が開いており、その穴は地下へと続いていた。

奥へと進んで行くと、白っぽい岩石で覆われた白い空間が辺り一帯に広がる。洞窟は崩落してから何十年と経っており、床は夥しい数の岩で埋められていた。

洞窟の入り口へと繋がる坂を下りたところで、一人の男性の老人が、感慨深げにその場所を眺めていた。その手には、1本のロープが握られている。

「ははっ。流石に、誰も邪魔出来んだろ」

他に誰もいない洞窟で一人呟きながら、老人はロープを天井の適当な場所に一本通し、輪っかを作る。

「俺は、十分生きた。もう、あの時みたいに死に損ないにはならねえ」

老人の声には、どこか決心の籠った響きがあつた。

彼の頭の中で、何十年も前の記憶が呼び起される。当時まだ働き盛

りだった彼は、今のようこの場所を訪れたことがあった。

生きる事に疲れてしまい、死んでしまおうと思つて、この場所にやってきたのだ。

だが、男の自殺は失敗してしまう。

天井に縄を掛け、石像を踏み台にして首を吊ろうとしたときに、下を見た。足元には透明な床があり、その下には黄金色で三つ首を持った、巨大な得体の知れない生物が眠っていたのだ。動揺しながら周りを見ると、その首から伸びていると思しき頭部が三つ、洞窟の壁に存在していた。

あまりの恐ろしさに、男は腰を抜かして逃げ出した記憶がある。

その所為で、こんな歳まで生きる事になってしまったのだ。

家族を持たず、親戚との繋がりも断たれた男は、今度こそこの場所で人生の幕を下ろそうと考えた。あの時と違って、化け物はもういない筈。そう思つてのことだった。

男の予想は、見事に当たっていた。

当時と違うのは、壁や天井が崩落して、中が荒れているということくらいで、縄を掛けるのには何の問題も無かった。

震える手で何とか天井に縄を掛け、手頃な岩を持って来て、踏み台にする。息を一つ吐いてから首を掛けようとする、不意に辺りで変化が起こり始めた。

「じ、地震……？」

男は縄に手を掛けたまま、あたふたと周囲を見回す。

この縦なのか横なのかはつきりしない揺れは、地震なのだろうか。そう思っていると、洞窟内に金色の粉のようなものが舞い始めた。

「金粉……？」

お菓子などの上によく乗っているものを思い出して、男は眩く。

その間にも、金の粉は洞窟の中を舞い、密度を段々と濃くしていく。老人は嫌な予感を感じつつ、洞窟の入り口に向かってじりじりと後ずさりをした。

老人が坂に差し掛かった直後、岩が大量に落ちた床が抜け、同時に岩も下に向かって落ちる。

金の粉はますます密度を濃くし、床が抜けたことで生まれた巨大なスペースに、一気に収束する。やがて金の粉の塊が、直視すら出来ないほど強烈に眩しい光を放った。

「な……っ、な……っ！」

そこに現れたモノを見て、男は顔面蒼白になる――。

彼の視線。その先には、かつて怨霊ゴジラによつて倒された筈の、「千年竜王キングゴドラ」が、静かに目覚めの時を待っていた。

第13話 その男は

翌日、拓海は光樹に見送られて、広島へと向かうために厚木から出発する飛行機に乗り込む。

午後1時ごろには広島空港に到着し、そこから迎えの車に1時間ほど揺られて、呉市に到着した。

広島県呉市は、横須賀と同様に海軍の街とも言われる。

第3次大戦勃発を境に、現在の防衛海軍の一大拠点として発展。深海棲艦の出現と襲撃に伴い、中心市街地は内陸側に後退、代わりに軍の施設が港周辺をほぼ占拠するに至っていた。

特生防衛海軍第3艦隊が所属する呉鎮守府は、その一角に存在する。海軍施設から見て、西の方角に位置している。

規模は横須賀鎮守府ほどでは無いものの、艦娘隊の中心的拠点の一つだけあって、それなりに大きい。

その対岸にある江田島には、特生防衛軍の基地が設置されていた。車が鎮守府の敷地内に入るためのゲートを潜り抜けると、近場の駐車場で拓海は運転手に礼を言い、下車する。

車を見送ってから、予め渡された地図を片手にどこから当たろうかと周りを見渡していると、一人の銀髪の少女がこちらに向かってくるのが、視界の端に捉えられた。

少女は拓海から数歩離れたところで立ち止まると、微笑を湛えつつ話しかけてきた。

「白瀬拓海さん、ですよね？」

「どうも。お久しぶりです、翔鶴さん」

頭に日の丸が描かれた赤い鉢巻を巻き、赤いスカートを穿いて、白衣着物の上から黒々とした胸当てを装着している。

正規空母・翔鶴。第3艦隊の第5航空戦隊に所属している少女だ。

拓海が会うのは、南鳥島で軽く挨拶をしてから2回目となる。

「はい、お久しぶりです。お話は鳴川少将から伺っています。これから鎮守府の案内をすることになりますが、いいでしょうか？」

くすりと笑って応じつつ、翔鶴は拓海に尋ねた。

「そう……ですね。宜しく願います」

本当はすぐにでも榛名に会いたかったが、呉鎮守府は初めて来る場所だ。

無碍に断ることも出来ないので、翔鶴の提案に従うことにする。

翔鶴と並んで歩きながら、拓海は呉鎮守府を見て回っていく。

横須賀に建っているものと同じ鎮守府の本庁舎や、一回り小さく見える艦娘用の宿舎。出撃施設や入渠施設、工廠なども規模は横須賀よりもやや見劣りするものの、それぞれが独立して建てられていた。

対岸にある江田島は、特生防衛軍に接収されて軍用地となっており、民間人は入ることが出来ないようだ。

鎮守府からは特生防衛軍の港が見え、何隻かの軍艦が係留されている様子が見える。

その中には、YGC-02 “むさし”の姿もあった。横須賀にある巡洋艦 “やまと” の同型艦だ。 “やまと” 型2番艦というだけあって、その大きさには圧倒される。

鎮守府内ですれ違う艦娘がいないが気になって尋ねると、他の部隊は宿毛湾や佐伯などの泊地にいるとのことだ。現在、ここには第5航空戦隊しかいないということを知られた。

「榛名たちの部隊は、今どこに？」

呉は、榛名のいる第2戦隊もいる筈なのだが――。

「深海棲艦の警戒のための、遠征に出ています」

「そうだったんですか」

それでこの場にいなかったのかと、拓海は納得する。しかしそうになると、榛名と会えるのはもう少し先になりそうだ。

焦る気持ちはあるが、ここで動こうとしても空回りするのは目に見えている。

ふと翔鶴が「白瀬さん」と名前を呼んで、拓海に顔を向けてきた。

「あの、榛名さんにどのような用事なのでしょう？ 鳴川少将からは、こちらに用事があるとしたか、伺っていないんです」

どうやら光樹は、拓海に関する事情を話しているわけでもなさそう
だ。てつきり知っているものと思ったが、その辺りの細かいことは自
分で話せということか。確かに、第三者の口を借りるより自分で話し
てしまった方が手っ取り早い気もする。

そうと分かると拓海は翔鶴に、自分が榛名との間に問題を抱えてい
ることを、状況を含めて掻い摘んで話した。

「つまり白瀬さんは、榛名さんと喧嘩されているということですか？」
「ま、まあそうですね」

翔鶴の解釈は、中らずと雖も遠からずというところだったので、拓
海は曖昧に頷く。

「白瀬さんが、何に悩んでいらっしやるのかは存じませんが、そのこと
を誰かに相談されないのですか？」

細かい事情は伏せてあったが、話から拓海が何か悩んでいることを
察したようだ。翔鶴に問われて、拓海はゆっくりと首を横に振る。

「少なくとも今は、誰かに話すことは出来ません……」

翔鶴は、それに対して何かを聞いてくるわけでも無く、拓海をじつ
と見つめる。その顔を見て、またしても誰かを失望させてしまったか
と拓海は思う。

拓海は自身の抱える大きな悩みを、誰かに話したことは一切無い。
一番近しかった家族にさえも。周りにいる光樹を始めとした、拓
海の知人や友人にも気付いた者はいたが、その頑なな態度を受けて
か、聞いてくることは無かった。それでも、その悩みの所為で何人か
とは疎遠になってしまった。

今回もそれらと同じようなパターンで、距離を取られるだろうと思
い、内心溜め息を吐く。

いつそ吐き出そうと思うこともあった。しかしその度に、心の中に
影がチラつく。話してしまえば最後、自分の居場所は無くなってしま
う。

半ば洗脳にも似た思いが拓海の中を支配し、ついに拓海は今に至る
まで、誰にも悩みを打ち明けたことは無かった。

「すみません。翔鶴さんにまで、情けないところを見せてしまいましたね」

罪悪感から、拓海は頭を下げる。しかしそんな拓海に対して、翔鶴は首を横にゆつくりと振った。

「いえ。私は、情けないとは思いません」

翔鶴の言葉に、拓海は思わず垂れていた頭を上げて彼女の顔を凝視した。そんな拓海を見て微笑みつつ、翔鶴は風に揺れる髪を左手で抑えながら、続けた。

「私には、白瀬さんの悩みをどうにか出来る力はありませんから。白瀬さんが一人で向き合うと言うのなら、それでも良いと思います。ですが白瀬さんが一人で戦うと決めたなら、必要があれば私にもそのお手伝いをさせてください。そのための相談なら、幾らでも乗ります」

予想していなかった言葉に、拓海は呆気にとられる。てつきり、非難されるとばかり思っていた。

「何も、聞かないんですね」

「私には、どうやって白瀬さんの悩みを聞き出せばいいのか、分かりませんから。それに白瀬さんのことも、よく知りません。ですが、背中を押すことは私にも出来ると思うんです」

翔鶴の横顔が、ふと光樹と重なる。彼も翔鶴と同じように、拓海の抱えているものが何なのか聞いてくることは無かった。悩みに気付きつつも、直接踏み込むようなことはせず、いつも背中を押ししたり遠回しに助けられていたように思う。今回だって同じだ。

「……ありがとう、翔鶴さん」

拓海は、心の底から湧いてきた感謝の気持ちをも、目の前の少女に伝える。面と向かって不意に言われたことに、翔鶴は「そんなことは」と照れつつも、それを素直に受け取った。

「それに、榛名さんだって——」

「あ、翔鶴姉！」

翔鶴が何か言いかけたところで、やや離れたところから少女の声が聞こえた。

振り返ると、翔鶴とは色違いの紺と茶を基調とした服に身を包む、

ツインテールの少女がこちらに向かって駆けてきた。

「あら、瑞鶴？ 艦載機の整備は、もういいの？」

翔鶴は微笑を浮かべつつ、妹である瑞鶴を嫌な顔一つせず迎え、頭を撫でている。瑞鶴は擦ったそうにしながら、それを受け入れる。傍目から見ても、二人が仲の良い姉妹だということがよく分かる。

「うん。後は、妖精さんに任せてきたわ」

妖精——艦娘開発の過程で、偶然に生まれた小型生命体の総称だ。工廠での装備開発や艦装の整備、一部艦娘の兵装のコントロールなどの役割を持つ。艦装開発では、この妖精による貢献が大きかったと、光樹から聞いている。

「それに、今日はお客さんが来るって言って——て、何だ。白瀬さんか」

ニコニコと笑っていた瑞鶴が、拓海に視線を向けた途端、じつとりとした目になる。

「何だよ。不満か？」

「べつつにい」

あからさまな態度でそっぽを向かれ、思わず眉間に皺が寄る。

ゲームをやっていたおかげか、瑞鶴は悪い子では無いということは十分知っていたが、実際に会って話してみると、どうにも波長が合わない。

「こら、瑞鶴。白瀬さんに失礼でしょう」

翔鶴がやや困った顔で、瑞鶴の態度を咎める。しかし瑞鶴は態度を改めるどころか、ニヤニヤと笑いながら拓海を見やった。

「だって私、あの夜どっかの誰かさんが榛名と、良い雰囲気だったの見だし」

恐らくは、南鳥島に増援がやって来た日の夜のことだ。榛名が泣いていたところを偶然他の艦娘たちに見られたが、その中に瑞鶴がいたのだ。

瑞鶴と顔見知りになったその日のうちに、拓海は彼女から弄られる羽目になったのだった。

「あれのどっかが、良い雰囲気だってた……」

今更抗議することも疲れて来て、拓海は頭を抱えながら溜め息を吐いた。榛名の記憶のことや今後についてなど、大分真面目な話だった。それなのに、どうしてここまで言われなければいけないのか。正直なところ、拓海は辟易していた。

「もうっ、瑞鶴ったら……。白瀬さん、すみません」
「いえ……」

なるべく早いうちに、瑞鶴の勘違いを訂正しなければと思いつつ、拓海は苦笑する他に無かった。

「そういえば白瀬さん、何でこっち来てるの？」

話が落ち着いたところで、瑞鶴が思い出したように拓海に尋ねる。

「榛名に会いに、ちよつとね」

二度説明するのも面倒になってぞんざいに答えると、瑞鶴がムツと右頬を膨らませた。

「ちよつと、その説明は何なのよ。全然話が見えないじゃない」

「今言った通りだよ。瑞鶴にまで話すことじゃあ無い」

鬱陶しさを感じて、口を滑らせてしまう。こっちが切羽詰っている時に、呑気に聞かれたのが、頭に來たからだだった。

拓海は言ってしまったから、しまったと瑞鶴の方を見る。

だが時すでに遅し。

瑞鶴は拳を握りしめて、わなわなと肩を揺らして拓海を睨み付けていた。

「な、何よそれっ。私にも教えてくれたっていいじゃない！ どうして翔鶴姉ばかり……！」

彼女もまた、ハツとしながら翔鶴の方を見た。

拓海と瑞鶴の間に漂っていた険悪な雰囲気におろおろしていた翔鶴は、瑞鶴の言葉を聞いて固まっている。

その表情は、凍っていると言うよりも、ポカンとしていると言った方が正確だった。

「ごめん、翔鶴姉。少し、一人にさせて……。この後、磯貝少将のところにいくんでしょ」

表情を隠すように俯いて踵を返すと、瑞鶴は何処かへと走り去ってしまう。拓海と翔鶴は、その後ろ姿をただ見送ることしか出来なかった。

「えっと……どうしましょうか」

先ほどの自分の失態に顔を顰めつつ、隣にいる翔鶴に尋ねる。

「その、私たちは磯貝少将のところに行かないといけないので、暫らくはあの子を一人にさせるしかありません……」

翔鶴も困り顔ながら、拓海に応じる。

「“たち”ってことは、俺も行くんですか？」

「はい。何でも、白瀬さんと直接お会いしたいと……」

となると、瑞鶴には後で謝りに行くしか無いようだ。

いつもならしない様なミスに、拓海は溜め息を吐く。自分が思っていた以上に、苛立ってしまった所為だ。しかし、磯貝風介との面会もある。多分、榛名に関する事だろう。

拓海と翔鶴は、時間が迫っているということとその場は仕方なく、磯貝風介に会うために呉鎮守府本庁舎へと赴くことにしたのだった。

微妙な空気のまま、二人は本庁舎へと到着した。受付を通り、1階の面会室へと案内される。

白い壁と床、軽い素材で作られた机とパイプ椅子という簡素な部屋で、待たされること数分。拓海から見て斜め左前の方にある扉が開き、若い男性が入室してきた。

拓海は椅子から立ち上がり、後ろで立って待機している翔鶴と共に、その男性を迎えた。彼が恐らく、面会することとなった人物だろう。拓海は己の内に、警戒心と敵対心を秘めながら、相手に視線を向けた。

将官服に袖を通した男性は、髪を短く切って背筋をピンと伸ばし、油断なく構えている。その物腰は、本当に25歳なのかと思うほどだった。

翔鶴に目礼しつつ、男性は拓海を品定めするような目を向ける。そ

のまま机を挟んで正面に立つと、中性的ながらもやや低い声を発した。

「君が、白瀬拓海君かい？」

男性はこれでもかというくらいに、にこやかな笑みを浮かべる。こちらに安心させようとしているかのような、温かみのある笑みだ。

「えっと、はい……」

そんな笑みを向けられ、拓海はやや警戒を緩めて肯定する。

「そうか。君が……。私は、磯貝風介だ。第2戦隊の司令官を務めている。よろしく」

「よろしくお願ひします」

「立ち話も難だから、取り敢えず座ろうか」

磯貝に勧められ、拓海は彼と共にパイプ椅子へと腰を下ろす。

互いに座ったことを確認すると、拓海は磯貝の顔を見つめる。

油断も隙も無いが、相手を威圧するわけでも無い姿勢や表情。服の上からでも、よく鍛えていると分かる身体つき。拓海はそれだけで安心してしまい、いつの間にか自分の中にあつた警戒心が解かれていることに気が付かなかつた。

磯貝が折を見て、頬に笑窪を刻みながら口を開いた。

「鳴川少将から、話は聞いている。突然の事だから、驚いたよ。第2戦隊は高知沖まで遠征中だから、その間で良かった」

「すみません。押しかけるような形になってしまった」

拓海の謝意に、磯貝は頭を振る。

「お気になさらず。何でも、うちの榛名に用があるのだとか」

言い方に違和感を覚えて眉を顰めるが、拓海は気にしないふりをした。

「はい……。いつ頃、こちらに戻るのでしょうか」

「明日になりますね。宿毛湾泊地経由で、呉に戻って来る予定です」

つまり、今日中には会えないということだ。今から宿毛湾泊地に行くことも出来るだろうが、これ以上迷惑を掛けるわけにはいかない。大人しく、呉で待っているしかないさそうだ。

「そう、ですか……。それは残念です」

拓海が内心肩を落として溜め息を吐くと、向かいから鼻を鳴らすような音が聞こえてきた。

聞き間違いだろうかと正面を見ると、磯貝がこちらを敵意剥き出しの形相で睨み付けていた。不用意に警戒を解いてしまっていたために、拓海は怯んでしまう。

「お前、俺の榛名に何の用だ？」

飛び出して来た言葉と口調の変化に、拓海は啞然として開いた口が塞がらない。拓海の後ろでも、翔鶴が息を呑んでいる気配が感じられた。

「は……？」

吹き出すように迫る威圧感もあって、辛うじてそんな声を出すのが精一杯だった。

それに「俺の」とは、いったい何のつもりだろうか———と思っただとところで、磯貝に関する書類の内容が頭を過ぎる。

磯貝は右腕を机に置き、前のめりになりながら嘲笑う。

「俺の榛名に何の用だ、と聞いているんだ。さてはお前、榛名を無理やり連れ去って良くないことでも企んでるんじゃないだろうか？」

「まさか、そんな……」

はつきり言って、拓海の方から榛名に対して強引に何かするなどあり得ない。この男の頭の中はどうなっているのだろうか。被害妄想も甚だしい。

「知ってるか？ 榛名が自分の意志で、俺の所に戻ってきたんだよ。残念だが、俺を通さなくてもあいつは、お前に会うことは無い」

さも自信満々といった調子で、磯貝は言い放つ。

自分と磯貝の間には、明らかな認識違いがある。何をどうしてか磯貝は、榛名が自分のために戻ってきたと勘違いしているようだ。本当の所は拓海との会話によるすれ違いなのだが、それを話したところで今の磯貝が信じるとはとも思えなかった。

黙っている拓海を見て気をよくしたのか、磯貝は更に捲し立てる。

「知ってるか？ 榛名のあの髪の手触りの良さ！ 握った手の暖かさ！ 潤った唇！ あの愛らしい笑顔！ どれをとっても、素晴らしい

んだ！ 榛名はいつも、俺に笑顔を向けてくれる。そういう子なんだよ!! やむを得ず鳴川さんの手で横須賀に留まっていたが、ついに戻って来てくれたんだ！ あの子の意志で！ 俺のものになるために!!」

さっきの威厳は何処へやら、磯貝は自分に寄ったように笑い、天井を仰いでいる。彼のご高説を聞いているうちに、拓海は動揺を取り戻し、冷静になりつつあった。語っている内容が嫌悪感を伴うと同時に、この男は榛名のことを何にも知らないんだな、と思う。

拓海は年上や上官への言葉使いでは無く、相応の態度で望むことにした。僅かな怒りの灯火を抑えつつ、溜め息交じりに磯貝を見やる。

「第2戦隊の榛名」の間違いだろ？ 磯貝少将」

冷たい声音でぴしやりと言うと、磯貝が笑うのを止め、拓海を睨む。「何を言ってるんだ？ お前。戦隊は俺のもんだ。なら、榛名も俺のもんだろ？」

さも当然といった様子で、磯貝は答える。これでは榛名はおろか、金剛たち第2戦隊の面々までもが自分のものだと言っているようなものだ。

「艦娘は誰のものでも無いだろ。敢えて言うなら、艦娘隊のもんだ。あんたのような奴のもんになるとか、絶対あり得ない。秘書艦になることも無いな」

これは、カリキュラム内でも習ったことだった。

秘書艦制度は、提督側と艦娘側が信頼関係を結ぶために必要なものだ。純粹に秘書の役割もこなすが、同時に所属部隊との艦娘との仲を取り持つようなことも求められる。

艦娘が特定の誰かの秘書艦となることはあるが、これは双方の同意と信頼関係が必要だ。提督の側から一方的に指名出来るが、その後信頼関係が構築されていなければ、1年で解任される。この辺りは、上層部が臨機応変に対応することだった。

因みに、提督と秘書艦の信頼関係が深いものであったとき、その艦娘が専属の秘書艦になることもある。鳴川光樹と三笠の関係が、まさにそれだった。

さて、目の前にいる磯貝風介はどうだろうか。

以前光樹に尋ねたところ、磯貝が榛名を秘書艦に指名したことはあったそうだ。しかし磯貝の側はあまりに歪な恋愛感情、対する榛名は磯貝と距離を置きたがっていることが上層部の知るところとなり、指名は取り消しになったそうだ。

それでも秘書艦を置かないというわけにはいかず、便宜上第2戦隊旗艦の金剛が秘書艦を務めていた。その金剛も、磯貝には絶対に近づきたがらなかったという。

磯貝は榛名の側の態度を知らないのか、心底不思議そうな顔をする。

「お前は何を、寝ぼけたことを言っているんだ？　榛名が俺のものになるのは、当然だろう？」

まるで話になっていない。仮にも少将まで昇進した身ならば、自分のような一介の候補生が知っているようなことも知っている筈では無いのか。それとも知っている上で、根拠の無いことを言っているのか。その真偽は分からない。

だから拓海は決意を固め、ガタリと音を立てつつ、椅子から立ち上がって磯貝を見下ろした。

「アンタみたいな人がその程度とは、ガツカリしましたよ。いずれ、榛名の本心も貴方の知るところとなる。その時まで、精々首を洗って待っていることですね。——行きましょう、翔鶴さん」

拓海は挑発的な物言いを磯貝に向けてから、後ろで控えていた翔鶴と共に面会室を出て行く。その間拓海は一切、磯貝に視線を向けることは無かった。

閉じた扉の向こうで、磯貝が何かを蹴飛ばす物音が聞こえた。それも無視しつつ、動揺しつつ放しの翔鶴の手を引いて鎮守府の本庁舎を出た。途中で受付に、突然起こった騒ぎに詫びも入れておく。

外へ出た時には、既に午後の3時半を回っていた。

兎に角この間の件で榛名に謝り、磯貝少将のことについてどう尋ねようかと思案していると、彼の後ろで誰かが座りこむ音が聞こえた。

振り返ると、翔鶴が青い顔でへなへなと腰を抜かしている。そのままにしておくとも今にも倒れそうだったので、拓海は慌ててしやがみ、彼女の背中を腕で支えた。

「だ、大丈夫ですか、翔鶴さん!？」

「し、心臓が止まるかと思いました……。白瀬さんの方こそ、大丈夫なんですか?」

「いや、俺は大丈夫だけど……」

気遣われている筈の翔鶴の方が、拓海を心配する素振りを見せたので、何事も無かったように頷く。すると翔鶴が、只でさえ青い顔をさらに青くし、全身から力を抜いた。拓海の胸元に右側頭部を預けつつ、翔鶴がやつとの思いで口を開く。

「あ、相手は少将の方なんですよ? あんなことをしたら、後でどんなことになるか、とても想像が付きません……」

拓海があんな態度を取ってしまったことで、後々の彼の立場が危うくなってしまうことを心配してくれているのだろう。拓海は背中を支えつつ、問題ないと首を振った。

「大丈夫です。それよりも、あんな人間を軍に置いておくことの方がマズいと思います」

素人並ではあるが、拓海はそんな意見を口にする。

「それはそうなんですが……。あの方から直接、何かされるかもしれませんが……?」

「その時はその時で、自分で何とかします。ですから、今は大丈夫ということにおいてください」

拓海は苦笑しつつ、翔鶴が立ち上がるのを手伝う。

後で何をされるかと怯えていたら、何も出来なくなってしまう。それよりも今、この現状をどうにかする方が、拓海にとって大事だった。

翔鶴は拓海に礼を言つて一人で立てるようになると、尚心配そうな顔を覗き込ませる。

「磯貝少将は、腕つぶしはこの鎮守府では一番の方ですから……。もしかししたら、実力行使に出て来ることだって……。宿舎には誰もいませんし、そうなったら誰も白瀬さんを守つてあげられません。ですか

らいつそ、私と瑞鶴の部屋に泊まって——」

「さ、流石にそれはマズいでしょう」

拓海の身を案じるあまりに、翔鶴がとんでもないことを口走る。心身共に年頃の少女の部屋に、年頃の男子を泊めるなど色々な意味でよろしく無い。下手を打つと、後ろ指を差されることにもなりかねない。

翔鶴も自分の言ったことの意味をすぐに理解したのか、「で、ですよね……」と呟いて赤くなる。しかしそれでも首を振って、拓海のと鼻の先まで詰め寄ると、必死な顔で話す。

「でも、心配なんです。磯貝少将は、怒らせたら本当に怖い方です。艦娘には手を挙げませんから、やっぱり私たちの部屋に泊まって欲しくて欲しいんです」

純粋な厚意から、翔鶴が言ってくれていることが拓海にもよく分かった。そこまで言われると拓海には断れないし、自衛するにしてもそれも心許ない。

不承不承な部分はあるが、拓海は翔鶴の提案に素直に従うことにした。

途中で預けていた荷物を受け取り、拓海は翔鶴と並んで艦娘用の宿舎へと向かう。

艦娘ではなく、しかも男性である自分が艦娘しか泊まっていない筈の場所へ行くとは、何とも違和感のあることだ。気を遣わなければいけないことも、少なくないだろう。

拓海は胸の内に緊張を抱えながら、ふと聞いてみたいことが頭の中に浮かび、隣の翔鶴に声を掛けた。

「翔鶴さん。何で、ここまで良くしてくれるんですか？ まだ、2回しか会ってませんよね」

今日、この呉鎮守府で翔鶴と再会してから、常々思っていたことだ。南鳥島での初対面するときも、ここまでの対応は無かったような気がする。それがどうしてここに来て、急に好くしてくれるようになったのか、分からないのだ。

拓海の当然の疑問に思い至ったのか、翔鶴は小さく微笑む。

「榛名さんがこちらに戻った際に、白瀬さんがどんな方か聞いたんです。基本的に優しく頭も回るけど、ちよつと情けないところもある人だと。ちよつと怒り顔でしたけど、そんな風に言っていたのを聞いて、どんな人かなって思ったんです。南鳥島の時は、無難な挨拶しかしませんでしたから、お人柄まではよく知らなかったということもありません」

榛名から結構辛辣な評価を頂いていたこと肩を落とすが、楽しそうに笑う翔鶴を見ているとそんな気分も霧散してしまう。

「それで実際に再会してみて、どうでしたか？」

「はい。お話の通りの人でした」

「う……」

翔鶴が、屈託のない笑みを浮かべて真つ直ぐな視線をこちらに向けて、さらつと言う。思いの外それが、拓海の心にグサリと刺さった。

しかし翔鶴は「でも」と付け加え、先を続ける。

「榛名さんに対して一途みたいですし、それにさっきの磯貝少将とのやり取りで、少し見直しました。てつきり、白瀬さんも怒ってしまうと思っていたので」

「はは……」

翔鶴の評価がそれ程悪くないことに安堵しつつ、その時のことを振り返って苦笑する。

正直なところ、拓海にはあの対応が精一杯だったのだ。あのまま言葉の応酬を続けていたら、怒りのあまりに激昂してしまっていただろう。そうになると、相手にペースを握らせてしまうことになる。それだけは何としても防ごうとした結果の、あの対応なのだ。

艦娘用の宿舎に差し掛かった頃、翔鶴が「そういえば」と呟いた。「白瀬さん、後で瑞鶴とちゃんと仲直りしましょう。私も、瑞鶴の気に障るところがあれば謝ろうと思っていましたし……」

拓海にとっては、ここに来るまで考えないようにしていたことだった。

しかし瑞鶴も、翔鶴のように自分に興味を持って話しかけてくれたのかもしれないのだ。態度にイラついてしまったことも事実だが、それによって彼女の好意を蔑ろにしてしまった。これは、自分の方に問題がある。

「そうですね。仲直り、しましょう」

同意しつつ拓海と翔鶴の二人は、艦娘用の宿舎へと足を踏み入れたのだった。

宿舎の2階に、翔鶴・瑞鶴姉妹の部屋はある。

普段は二段ベッドを使用しているようで、3人目が入って来ることは無かったと言う。今回泊まらせてもらうにあたって、拓海が寝袋か敷布団で良いと言うと、翔鶴によって敷布団で寝泊まりすることがその場で決まった。

翔鶴が部屋の前に立ち止まって開錠し、扉を開ける。

「はい、白瀬さん。いらっしやい」

「お、お邪魔します……」

緊張の面持ちで部屋に入ると、そこには質素な空間が広がっていた。

質素と言っても決して貧乏さを感じるようなものでは無く、白い壁と木の床や柱、部屋の一角に設けられた畳のスペースなど、和風らしい雰囲気だった。

部屋に入って左手側に二段ベッドがあり、そちらを見ると、一人の少女が凍り付いた目でこちらを凝視していた。

「あら、瑞鶴？ 戻ってたの？」

後ろからの翔鶴の間延びした声を聞き流しながら、拓海もまた、凍り付いた表情で瑞鶴を凝視していた。

そして拓海の目は、床に向かって抵抗空しく瑞鶴の身体を這って行く。

瑞鶴は今まさに、着替えの真っ最中だった。

入渠施設でお風呂に入ろうとしていたのか、彼女が使っていると思しき下段のベッドにはシャンプーやリンスなどが入ったプラス

ティックの桶が置かれている。

その傍らには、脱いだばかりの上着とスカート。ベッドの傍らには、脱いだ靴が揃えて置かれている。

そして当の本人はと言うと、パンツ以外何も着ていない——つまり半裸と呼ぶべき、あられもない恰好をしていた。

翔鶴が気付いた時には、時既に遅し。

拓海は、瑞鶴の身体を見てしまった恥ずかしさから目を逸らし。

瑞鶴は、拓海に自分の裸を見られてしまった恥ずかしさから、顔を真っ赤にしてわなわなと震え——。

「えっと……その……ごめん」

己むに己まれず拓海が言った言葉が、火種となるには十分すぎた。

「ごんの、馬鹿アツ！ 変態ツ！」

瑞鶴は部屋中に悲鳴を響かせて自分の弓を取り、拓海に向けて艦載機を発射。放たれた矢が5機の爆撃機に姿を変え、拓海に向かって襲い掛かった。

その後の瑞鶴の見事な爆撃っぷりと、必死の形相で逃げ回る拓海の様子とは、呉鎮守府の職員たちの間で語り草になったという。酒の肴にする者までいるぐらいだった。

一方の拓海と瑞鶴はと言うと、第5航空戦隊の司令官・芝浦兼統大佐に呼び出され、こっぴどく怒られたという。

この出来事のおかげで二人は何故か打ち解けてしまい、喧嘩してしまった話に関してはお互いの謝罪という形で収まるのだった。

第14話 悪しき黄金

山梨県、青木ヶ原樹海。この辺りでは、6月4日ごろに小規模な地震が観測されていた。

地面が陥没したという報告があり、一部エリアでは立入が規制されている。

この地震の際、役所に駆け込んで来た老人が「黄金色の怪獣を見た」と証言しているが、そんな話が信じられるはずも無く、窓口の担当者に一蹴されていた。

早朝の立ち入り規制エリアの中に、一人の長髪の少女が灰色の石を片手に佇んでいた。

まだ肌寒く感じるのか、衣替えの時期にも関わらず冬服に袖を通し、ある一点を見つめてている。その視線の先には陥没した地面があり、奥へと続く洞窟の入り口となっていた。

少女はくすりと不気味に笑うと、その洞窟へと歩を進める。急な勾配に足を取られないように気を付けながら、坂を下った。

短い坂を降りると、そこには白っぽい岩壁で覆われた空間が広がっている。その中に、少女は目的のものを見つけた。

「やつと会えたね。千年竜王……」

少女の視線の先には、黄金の鱗に身を包まれた、三つ首の怪獣が静かに眠っていた。その眠りは深いようで、突いたり叩いたりしても、起きる気配は無い。

「さあ、目覚めなさい。千年竜王。貴方は今から、私の奴隷^モとして、働くのよ」

少女はほくそ笑み、手にしていた灰色の石を高々と掲げた。すると石の周りから黒い煙のようなものが湧き出し、黄金の竜へと集まっていく。

竜はその黒い煙を受けて苦しみだし、身動きして逃れようとする。その度に、洞窟を小さな揺れが襲う。しかし少女は動じることなく、竜へと石を掲げ続けた。

「大丈夫。苦しむことはないわ。貴方は私の元で、存分に暴れるのよ」
美貌に似合わぬ気味の悪い笑みを浮かべたまま、少女は竜に向かって優しく語り掛ける。

しかし竜はそれでも抵抗を続け、ついには三つ首全ての眼をカツと見開き、悲鳴にも似た雄叫びを挙げた。その声に連動するように大地が鳴り、空気が震える。瞬く間に、樹海中へとその悲鳴は響き渡っていった。

「悪い子だね。いい加減、大人しくなつてよ」

少女の言葉と共に、石から出る黒い煙が一気に濃さを増す。煙は瞬く間に竜を蝕んでいき、やがて抵抗空しく、全身へと行き渡った。

竜は黒い煙をその身に取り込むと、見開かれた6つの眼の光が、不気味な赤へと変貌する。そして眼を少女へと向け、じつと彼女を見続けた。まるで、少女の指示を待っているかのように。

少女は石を掲げた手を下ろすと、笑みを貼りつけたまま、竜へと告げた。

「私は、鳴川彩水。千年竜王キングギドラ——。今からお兄ちゃんがいる呉に向かって、邪魔な物、全部壊して。お兄ちゃんを害するような奴がいたら、殺して構わないわ」

少女——鳴川彩水の言葉に答えるように一鳴きすると、千年竜王キングギドラは大地を引き裂き、呉へと向かうべく、以前よりも倍に増した巨軀を以って大空へと舞い上がった。

鹿児島県、桜島の北西に位置する近海では、巨大な何かが目から目を覚まそうとしていた。

海底には土が溜まり、その合間から無数のびっしりと生えた棘が垣間見える。海底である筈のその場所では、何か身動きし、その度に土が動いている。

やがて「何か」が4本足で立ち上がると、それに伴って土が身体を這うように滑り落ちた。光が十分でないために全貌ははつきりしないが、背中に反り返った棘をびっしりと生え揃えているそれは、怪

獣としか形容出来なかった。

怪獣は海の中で体に付いた土を振り落としつつ、東の方へと頭を向ける。そしてその遙か東から、何かが目覚めたことを察知すると、海底に向かって穴を掘り始めた。大きな地揺れと共に穴を掘ると、怪獣は瞬く間に地中へと潜って行ってしまふ。大量の土を巻き上げながら、その怪獣は地中奥深くへと潜って行くのだった。

日本本土では、国営テレビが桜島近海で中規模の地震が複数回起こったことを報道していた。桜島噴火を警戒するように、付近の住民へと呼びかけている。

アナウンサーがスタッフから新たなニュース原稿を受け取ると、血相を変えて、富士の樹海から謎の巨大生物が飛び立ったことを伝えていた――。

2048年6月6日、午前7時。

横須賀鎮守府の本庁舎にて、笠川大輔が部下である鳴川光樹と共に、石垣島攻略作戦に向けた書類の作成を、会議室にて行っていた。

そんな大輔の元に、書類を片手にした少尉が血相を変えて、ノックもせずに会議室に飛び込んで来る。

「か、か、笠川大将！ 緊急事態です！」

「どうした。そんな慌てた顔をして。ゴジラか、深海棲艦でも現れたのか？」

部下がこういう態度を取る時は大抵、ゴジラか深海棲艦による事件だった。大輔は今回も大よそ、その辺りの事態だろうと辺りを付け、光樹に目配せをして作業の中断と書類の片付けに入っていた。

だが部下からもたらされたのは、そのどちらでも無かった。

「い、いえ！ あ、青木ヶ原樹海より、黄金の巨大怪獣が飛翔！ 一時間前に、静岡と名古屋を襲撃したとの報告が、静岡、名古屋に展開する特防軍の部隊より上がってきました！ 特徴から、怪獣は過去に四度確認された、キングギドラの可能性が高いとのことですよ！」

寝耳に水の情報に、大輔は椅子からずり落ちかけ、光樹は目を見開いて少尉を二度見していた。

「キ、キングギドラ!？」

光樹が素っ頓狂な声を上げてから、少尉と大輔を見て、コホンと咳払いをして居住まいを正す。

「それは確かか？」

光樹の慌てぶりに苦笑しつつ、表情を切り替えて少尉を見上げ、情報成否を確かめる。

「はい。山梨県を始め、複数の目撃情報が上がっています。個体の特徴から今世紀初頭に現れた魏怒羅と推測していたのですが――」

少尉はそこまで言って、言葉を濁す。

大輔には、少尉の言わんとしていることがよく分かった。隣にいる光樹もまた、同様のようだ。

護国聖獣・魏怒羅。民間伝承に伝わる「護国聖獣伝記」に記載されていた3体のうちの1体だ。奮戦空しくゴジラに敗北したが、その怪物が眠っていた場所が富士の青木ヶ原樹海だった。

少尉の持ってきた空撮写真の姿も、倍に巨大化しているものの大輔の若い頃の記憶と合致する。樹海から飛び立ったという情報も、より説得力を増していた。

静岡や名古屋は、ゴジラや深海棲艦の脅威があるこのご時世でも、経済の一角を担う都市として機能し続けている。当然人も多く集まるわけだが、そんな場所を何故、護国聖獣である筈の魏怒羅が襲うのか、大輔には全く見当が付かなかった。

「少尉。その魏怒羅と思しき怪物は、空を飛んでいたんだな？」

光樹の質問に、少尉が首肯する。

「はい。羽を大きく広げて、飛んでいるようです。次の写真にも、写っている筈です」

大輔がもう一枚の写真を見ると、そこには空を飛ぶ黄金の三つ首竜の姿が映されていた。光樹も脇から見る形で、それを確かめる。

「確かに……。となると、千年竜王として覚醒している可能性が高いですね」

光樹の言葉に、大輔も異論無く頷く。大輔は書類を光樹に預けると立ち上がり、少尉と相對する。

「少尉、召集は？」

「特生防衛軍元帥より、緊急司令部が立ち上げられます。司令官に、笠川大將をご使命です」

「分かった。鳴川君、そういうわけだ。君は平常通りでいいが、万が一のために職員と艦娘たちが避難できるように、注意喚起をしておいてくれ」

大輔の指示に光樹は素早く立ち上がり、敬礼する。

「はっ。大將、お氣をつけて」

「ああ、君もな」

大輔が答礼すると、光樹は会議室を退出していく。これから早速、仕事に取り掛かるのだろう。

大輔も少尉を促し、鎮守府内にある特生防衛軍の緊急司令部用の建物へと急ぐことにした。

横須賀鎮守府本庁舎を出て少尉と共に歩きながら、大輔は幾つかの質問を投げかけた。

「キングギドラの現在地は？」

「岐阜市にて、現地部隊と交戦中とのことですが、状況は厳しいようです。既に、名古屋・静岡の部隊も壊滅しています」

「何故、情報が遅くなった？」

「現地部隊の混乱による情報の錯綜、キングギドラの移動速度の速さなどが挙げられます」

「予想進路は？」

「このままですと、大阪か呉に向かう恐れがあります。進行方向が西を向いているとのことですよ」

「分かった。ありがとう」

少尉に礼を言いつつ、大輔は苦虫を噛み潰す。今した質問は、どちらかと言えば確認の意味に近かった。そして、おおよそ予想通りの状況に、頭を抱えたくなる。

それに、呉には部下の親友もいる筈だ。

「アレは定期メンテナンスで、まだ使えないな——。少尉、厚木航空隊から戦闘機を発進させろ。それから『やまと』及び『むさし』に出撃命令だ。『やまと』は深海棲艦に注意しつつ、後方からギドラを追尾。無理はさせるな。『むさし』はいつでも迎撃態勢に入れるようにしておく」

「了解！」

少尉は命令を受けて敬礼をすると、一刻も早く命令を伝えるべく、駆け足で飛んで行く後ろ姿を見送りつつ、大輔も自分の持ち場へと向かった。

笠川大輔。彼は特生防衛海軍——艦娘隊において艦隊総司令官を務めると共に、特生防衛軍本隊に所属する、『司令官』でもあった。

一方、広島県・呉鎮守府。同日午前8時。

その港では拓海と磯貝、そして翔鶴が、第2戦隊の帰りを待っていた。

先ほどから、鎮守府内ではキングギドラが富士の樹海から出現し、西を目指して進行中との情報が流れ、慌ただしい雰囲気に含まれていた。既に大阪は襲撃を受け、出動した戦闘機4機が撃墜されたという報も入っている。このままだと、呉に着くのも時間の問題というところだった。

そんな中、広島県の北に位置する三瓶山が記録上初めて噴火活動を起こし、そこからマグマと共に地を割って4本足の巨大怪獣が姿を現し、呉に向かっていているというのだ。

各職員が避難準備をする危機的状況の中、拓海たちは第2戦隊を迎えるため、港に突っ立って彼女たちの帰りを待ちわびていた。

磯貝は戦隊の司令官という大義名分、拓海は磯貝への意地と榛名との再会目的、翔鶴はその付き添いと喧嘩が起こった際の仲裁役として、その場に留まっていた。

「何でお前までが、こんな所にいるんだ？ とつと尻尾を巻いて逃げたらどうだ？」

「貴方こそ、死んでは元も子も無いでしょう」

苛立ったように話し掛けてくる磯貝を、拓海は何でも無いといった風に受け流す。正直この状況にあつては、彼にまともに取り合うのも面倒だった。それに、拓海の中では既に、この磯貝という男を敵として認識していた。故に、馴れ馴れしくするつもりも無い。

「大体、お前と言う奴は——」

「あ、帰って来ましたね」

海の向こうから、第2戦隊と思しき6人の艦娘の姿が見える。どうやら今朝の情報を聞いたためか、全速力でこちらに向かっているようだ。

複縦陣を組み、全速力で呉鎮守府に到着した第2戦隊は、出撃ドックへと入って艦装を取り外し、メンテナンススペースへと回す。損傷も無く入渠の必要も無かったため、補給を済ませ次第、6人は相次いで建物の外へと出た。

メンバーは、出て来た順に旗艦金剛、比叡、榛名、霧島、伊勢、日向——。

磯貝が彼女たちを出迎えると、6人はそれぞれ事務的な表情で、敬礼をした。そこで榛名が後ろで翔鶴と共に待機している拓海に気づき、目を逸らす。

そんな様子にも気付かず、磯貝が身振り手振りを大きくして、彼女たちの帰還を喜んでいた。

「第2戦隊、只今期間したデース」

「おお、おお！ お帰り、皆！ 君たちが怪獣に襲われるんじゃないかと思つて、心配したよ！」

磯貝はズカズカと榛名の元に歩み寄り、肩をガシリと掴んでから、他の5人に視線を向ける。

肩を乱暴に掴まれ、身を縮こまらせている榛名の様子を、後ろにいた拓海は見逃さなかった。金剛たち僚艦も、磯貝の尊大な振る舞いに閉口し、微妙に顔を歪ませている。伊勢や日向に至っては、顔を背け

て小さく舌打ちしている。その様子だけで、磯貝と第2戦隊の艦娘の関係が、拓海にも簡単に分かってしまった。

「何か、凄く嫌な空気ですね……」

思っていた以上に酷かったことに驚きつつ、隣で苦笑いしている翔鶴に声を掛ける。

「私も、前々から気にはしていたのですが、金剛さんたちに止められて何も出来ませんでした……」

ぎこちない笑みを浮かべて、好意的な風に見せかけて演戯している金剛を見ると、気の毒に思ってしまう。彼女のおかげで、この第2戦隊という部隊はギリギリのところまで踏み止まっていたのだろう。

「これ、早く何とかしないと……」

「はい……」

拓海の言葉に、翔鶴も同意する。

最悪、殴つても磯貝の目を覚まそうかとも思ったが、あんな状態では無理そうな上に、上官を殴ったということで厳罰になってしまうだろう。

どうしようかと悩んでいると、磯貝がこちらに踵を返し、悠々とした足取りで向かって来た。

「どうだい？ お前も見ただろう？ 俺と榛名たちの信頼関係！」

「ええ、そうですね」

言外に「悪い意味で」と付け加えながら、拓海は無表情で彼を見上げる。それから後ろにいる金剛たちを盗み見る。

金剛は両手を合わせて謝るような素振りを見せ、比叡や霧島は心配げにこちらを見つめている。伊勢型姉妹は、不機嫌な表情をしたまま磯貝の後頭部を睨んでいた。

榛名はというと、拓海が目を合わせようとした途端に、あらぬ方向に目を逸らしてしまう。これは、かなり怒らせてしまったなど内心で嘆息していると。

「おい、何だ。お前のその態度は」

磯貝が眉根を吊り上げて、拓海の胸倉を掴む。サッカーをしていた頃、たまに胸倉を掴まれた経験のある拓海は動じず、真っ向から磯貝

を睨み返す。

「さて、何でしょうね」

向こうにいる金剛たちは、悪化していく空気に慌てた表情を見せ、翔鶴も止めるべきか否か迷って右往左往している様子が見える。

仮にも少将に取る態度では無いということは拓海も分かっていたが、この男に対してだけは、どうしてもそんな気分にはなれなかった。「——ッ！ 俺と榛名たちが、信頼し合っているのは分かっただろう!? それでも何故、お前はそんな態度が取っていられる？ さては、嫉妬したか？」

頭に血が上って捲し立てる磯貝が、嘲笑を浮かべる。一方の拓海は、そんな表情をする磯貝を見て、逆に頭が冷えていった。

「思い上がりも良いところですね。それよりも、良いんですか？ 避難準備をしなくて」

「はんっ！ その隙を突いて、榛名に近づくつもりだろう。それは、この俺が許さねえからな」

「——アンタ、いったい何のために、司令官になったんですか？」

呆れ半分で見上げながら拓海が問うと、磯貝が当然と言わんばかりに胸を張る。

「榛名を、俺のモノにするためだろう」

出て来た答えに、拓海は怒りでは無く、侮蔑の念を持った。この男は恐らく、後ろで金剛たちがどんな表情をしているのかにも気付いていないだろう。普段から、似た様な表情も向けられている筈だ。それなのに、この男は気付いていない。それが何とも、滑稽に映った。

「はあ……。昨日も言っただろう。榛名は、アンタのものじゃないと。こんな簡単なことにも、気付けないなんてな。司令官志望として、恥ずかしい限りですよ」

「きつさまあッ……！」

襟を強く握り締め、磯貝が怒りの形相で拓海を睨み付ける。磯貝の右手の拳が振り上げられたところで、不意に静止が入った。

「や、止めてください！ 磯貝少将！」

声の主は、翔鶴だった。必死な顔で腕を掴み、睨んでくる磯貝にも

怯まず、懇願する視線を送る。

「そうデース！ 止めてくだサイ！ こんな所で騒ぎを起こさないでくだサイ！」

金剛の必死の声を聞いて、磯貝は腕の力を抜き、拳を下ろす。それから襟を掴んだ左手で、拓海を突き飛ばした。

コンクリートの上に尻餅をつき、拓海はその痛みで僅かに顔を歪める。

「だ、大丈夫ですか、白瀬さん！」

翔鶴が慌てて、拓海の元に駆け寄る。

尻は痛みだけで、怪我は特に無い。手の平も、特に傷は無いようだ。「ああ、大丈夫。ありがとう」

そう言つて笑つてみせると、翔鶴は安堵したように溜め息を吐く。それから前の方を見上げると、磯貝が拳を握り締めつつ、睨んでいた。「チッ。何で、お前みたいな生意気なガキが、後輩になるんだよ。榛名たちは俺のもんだ。死んでも渡さないからな」

「そうですか。どうぞ、お好きに。ですがね——よつと」

手を払いつつ、拓海は反動を利用して一気に立ち上がる。それを、翔鶴が驚いたように見上げていた。

「俺は、榛名に謝罪しに来た。まさか、それを邪魔するなんて言いませんよね？」

磯貝の向こうで、誰かが息を呑む気配が感じられる。拓海はそれに気付きつつも、目の前の男を睨んだ。

「ほう。良い心がけだな。俺のモノを横取りしようとしたことを、謝るんだな？ だったら、精々謝り倒すがいいさ」

どうやら磯貝は、自分の都合の良いように拓海の言った言葉を解釈したらしい。どこまで行つても救えない男に溜め息を吐きつつ、拓海は磯貝の前を通つて、第2戦隊の面々と共にこちらのやり取りを見守っていた榛名の傍に近づいた。

「久しぶり、榛名」

「……」

精一杯の笑みを浮かべて言うが、榛名は眉根を寄せて、プイッと

そっぽを向いてしまう。やはり、例の件について未だに怒っているらしい。無理も無いかと苦笑すると、拓海は一步後ろに下がり、斜め45度に身体を傾け、頭を下げた。それを、驚いたように榛名を含めた戦隊の面々が見つめる。

「榛名、この間はゴメン！ 話まで聞いて貰ったのに、肝心なことだけは話せないで！」

「——許したら、話してくれますか？」

予想通りの問いが、拓海の頭から降って来た。だがこんなにも早く話してもらえとは思わず、拓海はチラリと目線を上げて、榛名の顔を窺った。

榛名は顔を背けながらも、目線だけはこちらの方を向けている。

だが、拓海への回答は。

「ゴメン、それは出来ない」

「そんな——」

榛名が、シヨックを受けた様に、顔を悲しげに歪ませる。

「簡単に、誰かに話せることじゃ無いんだ。両親にすら、話したことが無い。俺が、俺自身の力で、解決しなきゃいけない。だから、解決するまでどれだけ時間が掛かるか分からないけど……。それまで、待っていて欲しい。解決して、話しても良いと思えるようになったら、真っ先に榛名に話すから！」

決意と覚悟を込めて、頭を下げたまま拓海は告げる。これで駄目だったら、自分と榛名の関係はこれまでだろう。

「白瀬さん……」

榛名は正面から拓海の言葉を受け取り、近寄ろうと前に一步進み出る。それを見た磯貝が、慌てた様に拓海たちの所へ歩き出した。

「オイ、白瀬拓海！ お前——！」

磯貝が拓海の背後に近づき、肩を掴もうとしたとき、事態が動き出す——。

『避難命令が発令されました！ 住民の皆さんは、速やかに避難してください！』

屋外スピーカーから緊急警報のベルが鳴り、非難するように言う女性の声が聞こえる。

その時、上空から黄金の竜が舞い降り、北部の山からは赤茶けた肌と背中にびっしりと棘を生え揃えた怪獣が、呉の街へと出現した。

そして相對した二体の怪獣は、警報ベルの音を掻き消し互いを威嚇するように、大気を裂かんばかりの咆哮を、呉の街に響かせた。

第15話 炎と黄金

拓海や翔鶴、第2戦隊の面々は、目の前にいる2体の怪獣を信じられない様な面持ちで見上げていた。

防衛海軍基地よりやや北に着陸した、竜にも似た黄金の3つ首怪獣と、山を抜けて建物を破壊しながら呉市街を突っ切って、相対する赤茶けた4本足の怪獣。

磯貝や艦娘たちは、ゴジラ以外で初めて見る巨大怪獣に戸惑いの色を隠せていなかった。

「あ、あの黄金色が、キングギドラか!？」

事前に情報を得ていた磯貝が口をあんどりと開け、恐怖を顔に貼りつけながら、黄金の怪獣を指差している。翔鶴も、似た様な表情を浮かべている。第2戦隊の6人も無線で情報を得ていたため、割とすぐに片方については理解出来ていたが、やはり作る表情は同じだ。

「魏怒羅……。千年竜王……」

前にいた世界で見た映画を思い出して、拓海は黄金色の怪獣をそう呟いた。

3本の首それぞれに生える、曲線の多い角。胴に対して短く見え、木の幹のように太い首は、がっしりとした印象を与える。

キングギドラと聞いた当初は宇宙怪獣や未来怪獣を思い出したが、目の前にいるそれは、そのどちらでもなかった。

天・地・海——それら全てを制覇する最強と謳われた護国聖獣、千年竜王以外の何者でも無かった。自分の記憶よりも倍は大きいようだが、それでも間違い無い。

「白瀬さん、知っていらつしやるんですか?」

傍に居た榛名の問いに、拓海は無言で頷く。この状況で説明をしている余裕は、流石の拓海にもある筈も無かった。

拓海がキングギドラの正面方向に視線を滑らせると、鎮守府の建物の向こうにも、やはり見覚えのある4本足の怪獣がいた。

「あつちは、アングラスか」

暴竜アングラス。ある時はゴジラの敵として、またある時はゴジラ

の味方として、シリーズで存在感を示していた怪獣だ。やはりこちらも、体格は倍ほどあるように見える。

背中に時として武器にもなる、前方に反り返った棘を多数持ち、狂暴な顔は歯をむき出しにして、敵を睨んでいる。体色も、拓海の記憶の中よりも大分赤味が掛かっているようだ。

拓海以外の面々は、拓海の言葉に「まさか」という表情をしながら、アングラスを見上げている。

拓海が横須賀鎮守府内の図書館で調べた際に知ったことだが、アングラスは80年前に1体確認されて以来、日本での確認記録が無いようだった。現在の教科書では名前しか載っておらず、写真は自前で探すしか無い。そんな経緯があつてか、拓海以外の面々はあれがアングラスとは分からなかったようだ。それほどまでに、注目されていなかったのだ。

拓海たちが避難も忘れて茫然と見上げる中、戦いの火蓋が切つて落とされる。

先に動いたのは、キングギドラだった。

3つの首から、連続して黄色い光を帯びた稲妻のような引力光線が、呉市街の建物を破壊し、吹き飛ばしながらアングラスに襲い掛かる。

アングラスは前足を屈めて身を低くし、キングギドラの光線に耐える。その間に、口から炎のようなものが溢れ出していた。ギドラの光線をやり過ぎし、口に炎を限界まで溜める。

光線が途切れた瞬間、ギドラに向けて口を大きく開け、球体の形を成した炎を一気に吐き出した。炎の弾が、不意を突かれたギドラの胸に直撃、大爆発が起こる。ギドラは悲鳴を上げながら、衝撃で後ろに背中から倒れ込んだ。ギドラの背中に、建物が次々と押しつぶされ、埃が舞い上がり、破片が飛び散る。

アングラスが、火を吐いた。初めてそれを見た時、拓海は一瞬理解が追い付かなかった。

あの怪獣が火を吐く場面など、見たことが無い。というかそもそも、存在しなかった。だが、拓海の目の前で確かに吐いたのだ。

ギドラが倒れ込んだところに、海の方から多数のミサイルが撃ち込まれ、爆発を起こした。何事かと思えば拓海が海を見ると、巡洋艦「むさし」が低速で航行している。前甲板に煙の残滓が立ち昇っているのが見えることから、ミサイルを発射したのは「むさし」だろう。

止めを刺したかのように思われたが、それでやられるキングギドラではなかった。黄金に輝く球形のバリアを纏い、跳び上がる。「むさし」は次のミサイルも打ち込むが、バリアに阻まれる。

効かないと見るや否や、「むさし」の後甲板からクレーンのようなものも頭をもたげる。先端部分には、銀色のパラボラアンテナのようなものがあった。それは「43式ハイパーメーサー殺獣光線発射管」と呼ばれる、「やまと」型巡洋艦に見られる特徴の一つと言える武装だった。

アームが左舷方向に旋回し、キングギドラに狙いを定める。瞬間的にエネルギーがチャージされ、アームを伝って先端部分から高出力の黄色い閃光が放たれる。しかしその光線でさえも、ギドラの強固なバリアを貫通することは出来なかった。

ギドラは纏っていたバリアをそのまま前面に押し出し、メーサー光線を押し返しながら反撃に転じる。纏う者のいなくなったバリアが後部甲板に直撃し、メーサー発射管が破壊される。それに伴って小さな爆発が起きるが、船体にはさして異常は無く、戦闘行動は可能なようだ。

ギドラは「むさし」に向けて羽ばたこうとするが、それを邪魔するかのようにはアンギラスが尻尾に噛み付く。そのまま頭を振ると、力一杯ギドラを地面に叩きつけた。

衝撃で土が巻き上げられる中、ギドラはすぐに身を起こし、3つの口でアンギラスの身体に牙を突き立てた。ギドラの身体に黄色い閃光が奔ったかと思うと、それが一気にアンギラスの身体に流し込まれる。

直にギドラからの電撃を食らったアンギラスは声を上げ、身悶えした。電撃がギドラの牙を伝い、アンギラスの全身へと流し込まれる。その度に、アンギラスの全身にも黄色い閃光が迸った。

「い、嫌っ！」

背後から声がして振り返ると、こちらに背を向けた榛名が後退りながら、正面にいる人物を睨んでいた。金剛たちもそれに気が付き、その人物へと視線を集める。

「ど、どうしたんだ榛名。俺と逃げないのか？」

周りの視線を集めていた人物——磯貝が、榛名に手を差し出しながら疑問を顔に浮かべている。

「お姉さまたちは、連れて行かないんですか!？」

「何を言ってる。この鎮守府はもう、お終いなんだ！俺は、榛名さえいてくれればいい！他の連中なんか知ったことか！だから、一緒に逃げよう」

アンギラスとギドラの戦いを脇目で見ながら、焦ったような表情を浮かべる磯貝。榛名は金剛と拓海の間まで後退ると、磯貝から目を逸らした。

「私は、貴方とは行けません。お姉さまたちを残していくと言うのなら、私も残ります」

「バ、バカな！そこにいるガキや足手纏い共と、一緒に残るつもりか!？」

はつきりとした拒絶の意志を受けた磯貝が、足を一步踏み出し、興奮して叫ぶ。彼が口走った言葉に、その場の空気が凍り付いた。

「どういう意味だ？ 磯貝」

射る様な目を磯貝に向けて、日向が言う。

「聞こえなかったのか？ 足手纏いだと言ったんだ。お前らは邪魔なんだよ！」

磯貝の怒鳴り声に、日向は声を詰まらせる。

「私たちは、貴方をどうにか信じてやってきたの二……。そんなのっ

て酷いデス」

「そいつあ、ご苦労なこつたな。行くぞ、榛名」

泣きそうな金剛に冷淡な声を返して、磯貝が榛名との距離を詰めて行く。比叡や霧島、伊勢などの他の艦娘たちは、ショックを受けたままその場に棒立ちになっていた。

そんな彼女たちの表情を見て、拓海は磯貝の歩みを遮るように榛名の前へと進み出ていた。

「何だ、お前。まだいたのか」

磯貝は、ゴミでも見る様な視線を拓海にぶつける。自分の背後に榛名を隠しつつ、拓海は磯貝と正面から向き合った。

「言つたら。榛名はアンタのものじゃないって」

「フン。お前こそ、榛名を自分のものにしてるんじゃないだろうな？ ええ？」

「確かに榛名は俺の想い人だ。だがな、アンタみたいに自分の玩具にしようとしてるんじゃない。榛名は、俺にとって守るべき存在だ」

悪意ある視線を受け止めながら、拓海は言い放つ。それを聞いた磯貝は暫く呆けた顔をしてから、腹を抱えて心底可笑しそうに笑い始めた。

「くくくつ。守るべき存在だあ？ てめえには何の力も無い癖にか。思い上がりも良いところだな」

磯貝は腰に右手を当てると、そこに隠し持っていた物を取り出し、拓海の眉間に向けた。彼が両手で保持していたそれは、黒い拳銃だった。今にも吸い込まれそうな暗い銃口が、拓海の目に入る。

「なっ——！」

拓海は息を吞んで拳銃を見つめつつも、その場から頑として動かなかった。

「度胸だけはあるみてえだな。だが、お前に何が出来る？ 自分が盾になって、立派に死のうっていうのか？ それで守ってるつもりとは、笑わせるな」

銃を固定したまま、磯貝は鼻で笑う。

「それこそ笑わせないでくれよ、磯貝。俺は、死にたくなんかないよ」

「へえ。随分と正直だな。なら、そこをどけ」

「嫌だね。俺は榛名の笑顔を守るって、決めたから。榛名に悲しい顔をさせる奴に、任せてたまるか」

言っていて、恥ずかしくなる。穴があつたら入りたい。無くても、どこかからスコップでも何でも持ってきて、穴掘って埋まりたい。こんな事は、言葉に出して言うべきでは無いと、周りから浴びせられる視線を感じて思った。だが、ここできちんと意志を言葉にして、はっきりさせなきゃいけないとも思った。

しかし磯貝は眉をピクリとも動かさず、引き金に指を掛ける。「そうか。なら、お前は死ぬ」

磯貝の指に力が入り、今まさに引き金が引き絞られようとしている。

——ここまでか。

そう思って目を閉じた時、強い地響きが拓海たちを襲った。足元が大きく瞬間的に揺れた直後、コンクリートに亀裂が入る。

顔を上げると、キングギドラがコンクリートの地面に凹みを作つて二本の足で立ち、三本の首は拓海たちを見下ろしていた。

拓海はさつきまで戦っていた筈のアンギラスの姿を探すと、ギドラの遙か後方で蹲っていた。度々電気のような光が体表を駆けていくのを見る限り、先程の攻撃で痺れているようだ。

それからギドラに視線を戻すと、三本の首が赤く不気味に光る目を細めている。

(あれ? キングギドラって目が赤かったか……?)

内心で首を傾げていると、拓海に向けて銃を構えたままの磯貝が、恐怖に震えた声を出して訴えた。

「お、おい! 早くそこをどけ! でないと、殺すぞ!!」

磯貝がその言葉を口にしたとき、ギドラが目を見開き、前屈みになりながら真ん中の首を彼に向かって突き出した。

突然迫って来た影に、磯貝は上を見上げて表情を硬直させる。及び腰になり、銃を放り出して逃げ出そうとしたときには、既に遅かった。ギドラの口が大きく開かれ——。

「たっ、助け——」

最後まで口にする前に、磯貝が上からギドラの口に覆われる。ギドラは磯貝を口にしながら頭を上げ、もがいていた磯貝に止めを刺すように上下の尖った刃で噛み切る。磯貝の右脚が血を撒き散らしながら地面にボトリと落ち、身体はギドラの喉の奥へと消えていった。

ゴクリと喉を鳴らし、磯貝が呑み込まれる。ギドラは再び、足元にいる拓海たちに視線を戻し、頭を近づけて来た。

磯貝が死んだことへの反応をする隙を与えず、ギドラは赤い瞳でじつと見下ろす。

金剛は「Shit……」と呟き、比叡が金剛の腕にしがみ付いて怯える。霧島や伊勢、日向もギドラを見上げたまま、動けなくなっていた。拓海と榛名は、互いに気を遣いながら後退る。翔鶴もこちらに来て、不安げに上を見ていた。

ギドラが次の獲物に狙いを定めたかのように、口を開く。ある者は目を閉じ、ある者は目を見開く。

その場にいる誰もが、もうお終いだと思った。

その時、ギドラの右脇腹に灼熱の火の玉が衝突した。黄金の鱗で覆われている筈の脇腹が焼け焦げ、ギドラは不意の衝撃に耐えきれず反対側に倒れ込んだ。一番左の首が港からはみ出し、飛沫を上げる。

「今だ！ 皆、逃げるぞ!!」

隙を見逃さず、拓海が艦娘たちに向けて声を張り上げた。弾かれたように、榛名や金剛たちが西に向けて駆け出す。この先には、西のゲートがあつた筈だ。そこを抜ければ、一時的にでも逃れられるだろう。

アンギラスは倒れたギドラを睨み、咆哮した。

彼が拓海たちを助けることになったのは、偶然だった。眼中にあるのは、敵と定めたギドラのみ。それ以外は眼中に無い。足元で建物が壊れようが、人が踏み潰されようが、アンギラスには関係のないことだ。ただギドラの隙を窺い、灼熱の火球をぶつけただけ。

鎮守府前の海を航行する「むさし」からは、アンギラスも敵として認識されていた。だが、あからさまに人へ害意を向けているギドラと、ギドラだけを敵としているアンギラスとでは扱いに差がある。艦長はギドラを最優先目標とし、アンギラスはその次の攻撃目標としていた。このままギドラを野放しには出来ない。「むさし」は低速で航行を続け、ギドラの生死を判断しようとしていた。

気を失っていたギドラが目を見開き、黄金に包まれた巨体を起こす。ギドラは3つの首に二つずつある目を使い、前方にアンギラス、後方に「むさし」がいるのを見る。完全に挟まれている形だ。

ギドラは一声鳴くと、自分が不利であることを悟ったかのように踵を返し、太平洋の方へと向けて飛び立った。「むさし」から機関砲の攻撃を受けるが、バリアを張って意に介さず、そそくさと逃げるように去った。

「むさし」は深追いをせず、目標をアンギラスに切り替える。機銃や5インチ連装主砲を向けられたことで、アンギラスも次なる敵に目を向ける。だがアンギラスとの間には、呉鎮守府の建物が障害物として存在していた。即座に切り替え、「むさし」は再びミサイル攻撃へと移る。

前甲板の43式垂直発射システムから、ミサイルが数発発射される。ミサイルは一定高度まで上がると向きを瞬く間に変え、アンギラスに向けて殺到した。

ミサイルはアンギラスの刺々しい背中に直撃し、爆発を起こす。その威力に、アンギラスは悲鳴を上げ、バランスを崩した。下顎が呉鎮守府本庁舎の屋根に激突し、その部分が崩れ去った。間髪入れず、次の攻撃が加えられる。

十数発が撃ち込まれたが、アンギラスの息の根を止めることは出来なかった。

攻撃が絶えた隙に立ち上がり、アンギラスは息を大きく吸い込む。「むさし」を睨んで口を空けると、先程吸い込んだ息を高温の熱風に変えて、一気に吐き出した。

瞬間的な強風が吹き、鎮守府の建物の一部に火を点ける。風はそのまま、〃むさし〃の艦橋付近に直撃した。艦橋を破壊する力までは無かったが、その熱風が艦橋周りに設置された電子機器に深刻なダメージを与えた。途端に〃むさし〃のシステムがダウンし、レーダーでアングラスを追いかけることが出来なくなる。

無力化したのを認めると、アングラスは興味を無くしたように山の方へと振り返り、元いた場所へと帰るべく歩き出した。

その後アングラスは三瓶山付近の地中へと潜り、キングギドラは海中へと姿を消した。アングラスはどうもマグマの中へ潜ったようで、直ぐに追えなくなった。キングギドラの方も防衛海軍の新型潜水艦の追尾を振り切って、行方を暗ませる。

呉での戦闘経緯について、光樹は他の司令官たちと共に、大輔によって開かれた会議で聞かされることになった。事態が終わってから約1時間経つてからのことだ。

光樹は鎮守府の本庁舎にある自分の執務室へと戻り、革椅子に腰を下ろして天井を仰ぎ見て、一息吐いた。気が付けばもう、正午だ。この緊急事態に翻弄された所為か、いつも以上に疲れた様な気がする。「提督、お身体は大丈夫ですか？」

聞き慣れた声と共に、湯飲みに入ったお茶が差し出される。視線を机の向かいに向けると、光樹の秘書艦である三笠が優しげな笑みを浮かべて立っていた。

「ああ、何とか。――2年前を思い出すな」

「宿毛湾ですね……」

三笠の顔に、影が差す。その悲しげな顔は、あまり思い出したくなかったと言わんばかりだった。

「すまん。嫌だったか」

「いいえ……。私も、同じように思っていましたから」

そうやって、三笠は首を振った。

「宿毛湾泊地襲撃事件」では、当時宿毛湾に集結していた第1世代艦娘たちの9割ほどが、深海棲艦の犠牲となってしまった。対深海棲艦において大打撃を受けた事件でもある。その時光樹は佐伯湾において襲撃を免れ、反対に三笠は宿毛湾で多くの仲間が死んでいく様を目の当たりにした。この事件は二人の心に、小さくない傷跡を残している。

今回も、そんな状況と似ているように光樹には思えた。

自分は安全なところでいて、親友や部下たちが戦場となった呉にいる。多くの市民が巻き込まれ、磯貝風介も殉職した。鎮守府の建物にも被害が出ている。拓海や艦娘、他の連中が生きていたことに安堵するが、同時に出てしまった犠牲の事を思う。

「――三笠、磯貝が死んだよ」

なるべく感情を殺して、光樹は淡々と告げる。彼は軍人として、確かに優秀だった。信頼に足る能力も持っている。その反面、榛名への依存度は酷いものだった。その所為で、部隊が一つ運用出来なくなってしまう。最終的な評価は、お世辞にも良いとは言えない。それを反映するかのように、磯貝の階級は死後も少将のままだった。

それでも、人が死ぬというのは心に軽くは無い荷を載せる。そんな微妙な感情が、光樹の言葉にも表れていた。

「そう……」

三笠も微妙な表情で、応じる。三笠は磯貝のことを「最低の男」と断じていたことがあるために、光樹と同様素直に悲しめないでいるようだった。

「キングギドラに喰われたそうだ」

そして、室内に沈黙が訪れる。

二人とも、喜んでるわけでは決して無い。寧ろ、その死を悼んでいるくらいだ。だが、彼という人物がなまじ酷かったために悲しむことが許されない、そんな雰囲気があった。

「……飯、食わなきゃな」

「そうですね。一緒に一緒に」

光樹の眩きに、三笠も同意を示す。

軍人は戦場だろうが椅子の上だろうが、体力がいる。食べられるときにキチンと食べておかなければ、後で響くだろう。それに、この沈んだ空気を少しでも紛らわせたいという気持ちもあつた。拓海にまで、情けない顔は見せられない。

光樹と三笠は並び立つと、昼食を採るべく執務室を後にした。

第16話 小さき来訪者

呉市でアンギラスとキングギドラが激突した戦いは、「呉市街戦」と呼ばれることとなった。

呉市街地と防衛海軍基地、特防海軍呉鎮守府の本庁舎などが、主だった被害を受けた。また、特生防衛軍の巡洋艦「むさし」がレーダーなどの精密機器の損傷やハイパーメーサー喪失。死者、行方不明者は1000人を超えた。また、特防海軍関係者では唯一、第2戦隊司令官・磯貝風介少将が死亡するという結果になった。

拓海はその日の内に横須賀へと戻り、翌日からカリキュラムを再開することにした。

キングギドラに食われ、右脚を残して死んだ磯貝。拓海も、榛名や金剛たちと共にその光景を目に焼き付けることになった。

人はあんなにも、呆気なく死んでしまうのか。初めて人の死を、目の前で見たと拓海はそう思った。

ついさっきまで自分と相對していた者が、今はもういない。その事実と衝撃が胸に残る。

艦娘たちは今の姿のなる以前、軍艦だった頃にもつと多くの死を見せつけられてきたのだろう。あの瞬間の彼女たちの苦しげな表情が、それを何よりも物語っていた。

もう何も失いたくないと、半年前に再び海へと駆け出した少女たち。彼女たちは、あんな人間でもこの手で守ると誓っていた。それが、ある意味で深海棲艦以上の脅威によって、無慈悲に奪い去られた。自分たちは恐怖で、一步も動くことが出来なかった。そのことによる罪悪感が、彼女たちを苛んでいた。

そんな彼女たちに、拓海は声を掛けることが出来なかった。悲しげに呟く彼女たちに、相槌を打つことしか出来なかった。そして、自分と彼女たちの間に、大きな隔たりがあることを知った。

危険に晒された外で傷つきながら、人を、国を守るために戦う少女たち。安全な場所で、何年も穏やかな日向で過ごし、来て来た自分――

だ。だがもう、自分はその守られた場所から一步外に出ているのだと実感する。司令官として戦うと決めた以上、何時何処でどんな風に死んでもおかしくはないのだ。そしてそれは、艦娘たちも同じ。だから指揮という形で艦娘たちを守り、支援し、共に戦っていける司令官になろうと思った。

榛名を呉に残し、拓海は横須賀に帰ってからの4日間、今まで以上にカリキュラムに励んでいる。

榛名とは未だ、和解には至っていない。だが、4日後にまた会おうということになった。その時にまた、腰を据えて話そうということだろう。何を考えているのかは分からなかったが、怒っているというわけでは無かった。軟化したかというところではある。彼女にも少し考える時間が必要なだろうと思い、その場で突っ込んだ話はしなかった。

決意を改めて固め、カリキュラムに集中した時間はあつという間に過ぎた。

今日も朝からカリキュラムを始め、夕方ごろまでの日程だ。この数日と同じように朝早く出かけ、気が付けば昼休憩の時間になっていた。

昼休みの時間が終わるまでまだ余裕があつたが、午後からの講義を受けるべく本庁舎に赴く。

正面玄関を潜ろうとした際、よく見知った人物と偶然に会った。

「おう、拓海。もう戻るのか？」

その馴染み深い声の主は、他でも無い光樹のものだった。光樹は、もう次の準備に移ろうとしている拓海を見て、驚きとも呆れとも取れる表情をしている。

「そうだけど。光樹と比べたら、俺なんてまだまだだし」

一昨日、カリキュラムの一貫で組まれた演習で拓海は光樹の指揮する部隊と戦った。互いに水雷戦隊という条件ではあつたが、拓海は一方向的な展開の末、相手に掠り傷一つ与えられず負けてしまった。他の

司令官相手ではどうにか戦えるようになっていたが、光樹の場合は違った。

砲、魚雷、速力その他諸々を巧みに利用し、自軍水雷戦隊がかき乱されていく。そんな光景を前に何も出来なかったことを思い出して、拓海は苦笑を浮かべた。

「そりやそうだろ。こちとら30年は軍人やってんだ。俺を負かしたかったら、ここにいる司令官全員、倒せるようになるんだな。筋は悪くないんだ。そのまま追い付いて来いよ」

「それって結構骨が折れるよな……」

艦娘隊の司令官たちは、ほとんどが第1世代の頃から務めている経験者ばかりだ。年齢層としては比較的若いのが、それでも彼らの実力に拓海はまだまだ追い付いていない。

「そう言いつつ、お前は本当にやってのけそうだからな。期待してるさ」

確かに光樹の言う通り、やって出来ないということは無。今すぐには無理でも、長い目で見れば出来るんじゃないかという気がしてくる。

光樹が薄く笑みを浮かべたところで、何か思い出したように表情を変えろ。

「そうだ。ちょうど、お前を呼びに行こうと思つてたんだつた」
「俺を？」

一体、何に用事があるというのだろうか。ここは鎮守府だから、カリキュラムか艦娘か、或いは深海棲艦か――。

そう考えを巡らせていたところで、光樹が広い玄関ホールを振り返り、きよろきよろと辺りを見回している。

「お前にお客さんだ。そろそろ降りてくるはずだが――お、来たか」

光樹は誰かを見つけると右手を挙げ、手招きをする。釣られて拓海も視線を移したその先には、背丈の低い一人の少女がいた。

少女は光樹の手招きに気付き、それから隣にいる拓海に視線を移すとパツと表情を綻ばせ、とてとてと階段を降り、駆けて来た。

「白瀬さん。お久しぶり、なのですよ！」

その少女——駆逐艦・電は拓海の元に駆け寄ると柔らかい笑みを浮かべた。

光樹と別れ、拓海は電と共に横須賀鎮守府内を適当に歩き回ることにした。

久しぶりに再会したとは言っても、一緒にいた時間は短かった上、そこまで親しくなれたわけでも無い。再会の挨拶は交わすことは出来たものの、それ以上の言葉が出てこない。というか、どんな話をすればいいか分からなかった。

左隣を歩く電に目をやると、彼女は周りを見つつも、ちらちらとこちらに視線を向けてきていた。表情から察するに、彼女も話題に困っているのだろう。お互いに妙な遠慮もあるせいか、二人の間には沈黙が漂っていた。

先に沈黙を破ったのは電だった。自分よりも遥かに背が高い拓海を見上げ、尋ねる。

「白瀬さんは、司令官さんになれそうですか？」

拓海は、電に視線を下ろしてみる。その質問にどんな意図があるのだろうか。だが彼女の純粋な瞳を見て、そんなものは無いと感じた。「なるさ。必ず」

短く、しかし力を籠めて拓海は宣言した。

ここは既に、拓海が過ごしていた世界では無い。それに1ヶ月の中で、この世界に関する知識もある程度は得ている。この国は1世紀近くも、多くの怪獣と戦い、人と戦い、深海棲艦と戦ってきている。

そんな世界に、拓海はあの時南鳥島に流された瞬間から、足を踏み出していた。そして、どうしようもない脅威にただ震える艦娘たちを見た。

艦娘に怪獣を倒す力などないが、この世界に来て色んな事を見聞きしていく中で、拓海はその覚悟を決めていた。

「それは、第6私水雷戦隊ちの司令官なのです？ それとも榛名さんのた

めなのです?。」

「それもあるけど――」。電たち艦娘を守る司令官になりたいから、かな」

簡単に言えば、そんなところだった。あれこれと言葉が浮かんで来るが、一言で表すなら「守りたい」という気持ちだ。拓海の答えに、電が驚いたように目を見開く。

「そ、そんな。どうやって私たちを守るのです?。」

「別に、矢面に立って戦おうってわけじゃないよ。後から見ている形になると思う。『司令官』って言うくらいだし。そんな立場でも、皆を守るための戦い方はあるんじゃないかって思ってたさ」

拓海は「皆」という言葉でぼかして、何を守るかまでは口にしなかった。脳裏に「笑顔」という言葉が浮かぶ。最初は、榛名だけが対象にあった。

今でも「榛名の笑顔を守る」と言うのは変わらないし、変えるつもりも無い。その範囲が、榛名だけに止まらなくなったというだけだ。しかし、電にそれを容易に言うのは憚られた。反論されるかもしれないし、何より気恥ずかしかつたからだだった。

「白瀬さんは、途方もないことを言っている気がするのです」

電の指摘は、当然と言えば当然だった。司令官の身でありながら、艦娘をどうやって守ろうというのか。拓海の内心を知らない電からすれば、とても想像が付かない。

そんな電との間の認識の齟齬を、拓海は僅かながら感じ取った。これは、変に隠し立てしない方が良くもいられない。やはり、きちんと言葉にすべきだと、考えを改めた。

「そんなこともないさ。皆には、笑ってて欲しいんだよ。もちろん、電も。だから、俺は戦う」

そう言っただけでやると、電はぽかんと口を開けて拓海を見上げた。それからやや間を置いて、くすりと小さく笑う。

「可笑しいことを言ってるのです。電たちは、戦うためにいるのですよ?。」

「軍のお偉方からしたら、そうだろうけどさ……。別に、笑ったって良

いじゃんか。電の笑った顔、すっごく可愛いぞ?」

「——はわっ!?!」

拓海の言葉を受けた途端、電が顔を沸騰したように真っ赤にさせる。直視出来なくなってしまうのか拓海から視線を逸らし、手を交差させてもじもじとし始めた。そのまま何も言わなくなってしまう、
またも沈黙が訪れる。

「その、黙られるとこっちも恥ずかしくなってくるんだけど……」

電の反応のおかげで、拓海も言い様のない恥ずかしさを覚えていた。他意は無かったのだが電には思いの外、破壊力があつたらしい。

「し、白瀬さんが変なことを言うからなのです!」

「そんなに変だったかな……」

拓海としては、嘘偽りなく言ったただけだが、電は隣で照れている。そんなところがまた、可愛らしいと思う。

「変なのです!・ 白瀬さんには、榛名さんがいるのです!」

「それは、そうだけど……?」

必死に主張する電に、拓海は首を傾げつつも同意する。妙に噛み合わない気がしたが、拓海は特にそれを気に留めない。

電は顔を赤くしたまま、半ば無理矢理に話題を変えた。

「し、白瀬さんと榛名さんは、どうなのですか? 仲良く慣れたのです?」

「そういえば『榛名がいる』って言ってたけど、よく知ってるな」

「当然なのです。見ていれば分かるのです」

そう言つて、電は微笑む。

果たして電にそんなことが分かる機会があつただろうかと、拓海は首を捻る。だが、これ以上尋ねると、火傷しそうな雰囲気や瞳の奥に感じる。これ以上は、止めておいた方が良くかもしれない。

拓海は諦めた様に溜め息を吐き、苦笑いを浮かべた。

「そうだな。榛名とは——ちよつと仲良く慣れたかなつて……思いたい」

「自信が無いのです?」

「色々あつたもんだから……」

この1ヶ月程を振り返って、拓海は肩を落とす。それなりに榛名とは話したが、当たり前障りのないことばかりだったし、先月末の失敗もある。正直、親しくなれたという実感が無い。

「何があったか、聞いても良いですか？」

小首を傾げる電を横目に、拓海は自嘲気味に微笑む。

「そうだな……。榛名に、悪いことをしちゃったんだよ」

拓海はそう言っ、光樹の家に行ったことは伏せつつも、榛名に悩み事を聞いて貰ったときのことを掻い摘んで話した。

電は一通り話を聞き終わると、徐おもむろに口を開いた。

「なるほどなのです。そういう事だったのですか」

「やっぱり、きちんと話さないと許してくれないのかな……。自分で解決出来てから、話すとは言っ、あるけど」

納得したように頷く電に、拓海は不安を口にする。みつともないかもしれないが、ここは電の意見も聞いておきたい。

「榛名さんが怒ったのはきつと、白瀬さんのことを知らないからなのです」

電の言わんとすることが分からず、拓海は怪訝な表情を浮かべる。

「俺のことを、知らないから？」

「白瀬さんが昔住んでた場所とか、どんな暮らしをしてきたのかとか、どんなものが好きなのかとか。そんな話を聞いて、白瀬さんの人となりをもっと知りたかったと思うのです。こちらに来てから、白瀬さんは自分の事を誰かに話しましたか？」

「「こちら」と言うのは、多分この世界に来てからということなのだろう。電の言葉を聞いて、拓海は今まで自分のことを話したことがあったかを振り返ってみる。

東京で育ったこと、学校生活のこと、家族のこと――。

よくよく考えてみれば、榛名に対して向こうの世界での妹のことを話した程度だった。それ以上となると、精々一言か二言で済ませていたかもしれない。そこに思い至ると、拓海は首を横に振った。

「そういや、榛名に家族のことを話したくらいだったな。まあ、それも肝心なところで話を拒否しちゃったんだけど……」

「それがきつと、良くなかったのです。榛名さんはきつと、白瀬さんのことを知りたがっているのです。自分のことは相手に知られてるのに、相手のことは全然知らないのは、結構怖いのです」

確かに拓海は、榛名の最後や、艦娘としての榛名のことを出会う以前から知っていた。一方で榛名から見れば、拓海という人物はどう映るか。性格やクセのようなものは分かるかもしれないが、今の拓海を作っているものが何なのか、今一よく分からないだろう。

目の前にいる電にしたって、同じだ。一方的に相手から自分のことを知られているというのは、何とも不気味な感覚を抱くかもしれない。自分が当事者だったら、やはり同じ印象を抱くだろう。

「電は、俺のことが怖いのか？」

電の言葉を受けて、拓海は尋ねてみる。

「今は、怖くないのです。あの窮地から、救ってくれましたから。でも、最初に会ったときはちよつと怖かったのです」

そう言つて、電は申し訳なきさそうに笑う。

「それは……そうだよな。あの時の提案も、今にしてみれば中々無茶なこと言ってるし」

出自も知らない人間が突然やって来て、部隊を指揮させてくれと言い出す。まず軍隊として、正気の沙汰ではないだろう。おまけに、指揮経験も無い。こんな人間に、果たして任せていいのだろうか。しかも、下手を打てば挟み撃ちに遭いかねない状況。そんな中で、よく首を縦に振ってくれたものだと思う。

「でも、私たちにとっては救いの手に見えたのです。一か八か、白瀬さんに賭けてみて良かったのです」

それは、喜んでもいいのか悪いのか。暗に信用しきっていなかったと言っているようにも聞こえて、拓海は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「はは——」。俺は今度、また呉に行く予定になってるんだ。その時に自分の事、榛名に話してみるよ。流石に、悩み事に関してはまだ話せないけど……」

「今は、それでも良いと思うのです。榛名さんと、仲直りしてください

ね」

「ああ。ありがとう、電」

もう一度、電の頭を撫でてみる。電は嫌がる素振りは見せず、甘んじてそれを受け入れ、気持ち良さそうな顔をしていた。

その後も拓海と電は、雑談を交えつつお互いの近況を話し合った。

拓海は、カリキュラムの様子や先日の呉市街戦のこと。電は、南鳥島でのことが専らの話題だった。

拓海が横須賀に発った後に入った工事のおかげで、あの無骨な見た目の要塞は大分使いやすくなったようだ。近海では今のところ、小規模な敵艦隊が散発するだけで、これといった大事は無いらしい。6水戦の面々が無事だと聞いて、拓海は安堵していた。

昼休憩の時間も半分が過ぎたところで、拓海が寝泊りしている部屋に行こうということになる。電たっての希望により、急遽決まったことだった。

来客用宿舎までやって来て中に入り、エレベーターを使って3階まで上がり、自身が泊まる305号室前までやって来る。

カードキーを差し込み、ランプが緑に点灯するのを見計らい、ドアを手前に引いて開ける。

「入って良いぞ」

「お邪魔します、なのです」

先に入るように促すと、電が興味津々といった様子できよろきよろ見まわしながら部屋に入る。拓海もドアを閉め、柵からスリッパを取り出すと二人分を並べる。

「サイズは大きいけど、これで我慢してくれ」

「ありがとう、なのです」

電は靴を脱ぎ、スリッパに履き替える。脱いだ靴は綺麗に揃えることも忘れない。

拓海もスリッパを履き、電の先を行く形で部屋の奥へと進む。後から電も付いて来て、リビングの手前で立ち止まった拓海と並んだ。

「これが、白瀬さんのお部屋なのですか」

「ご覧の通り、何も無いけどな」

呆けたように部屋を見回す電に苦笑しつつ、拓海も改めて自分の部屋を見る。

ベッドや机、棚などといった生活に必要な最低限の物は取り揃えてある。室内用の物干しが増えただけだが、1ヶ月ほど暮らしてきた割には随分とすつきりしていた。

余計な物は全てクローゼットにしまつてあるが、それも元々持っていた物だけだ。

我ながら少々寂しい部屋だと思いつつ、隣の電を見やった。

「どうする？ お茶でも飲んでいくか？」

立たせたままでは可哀想なので声を掛けると、電はハツと我に返つたような表情をして首を振った。

「いえ。この後、南鳥島にとんぼ返りするので、大丈夫なのです」

「とんぼ返りって……。確か、午前中に来たばかりだよな。あそこは本土から遠いし、泊まつていけばいいのに」

雑談中に聞いた話を思い返して、拓海は尋ねる。幾らなんでも、こちらに来て数時間でもう帰るとは、急過ぎないだろうか。

「元々、呉市街戦に巻き込まれた白瀬さんの様子を見に來ただけなのです。思ったより元気そうで、安心しました。無理を言った甲斐があつたのです」

電は頬を綻ばせて、拓海を見上げる。

「無理って、何をしたんだ」

「鳴川少将の部下の方に、無理を言つてお願いしたんです。取り次いでもらう関係で、少し時間は掛りましたが、こうして会えて良かったのです。神通さんたちも、白瀬さんのことを心配してました」

「それは……心配かけたな。神通さんたちにも、宜しく伝えておいてくれ。俺は元気だつてさ」

「はい、なのですー！」

電は飛び切りの笑顔で、気持ちの良い返事をした。

南鳥島の状況が、多少の無茶は利く程度の余裕はあるのかもしれない。だが、艦隊司令長官としての立場がある光樹のことを考えると、

ありがたい気持ちと申し訳ない気持ちになる。

「俺から、光樹に礼を言っておくよ。電がこつちに来てくれたこと。だけど、そう何度もやるなよ？ 呼び出しがあつたなら兎も角、調整にはアイツも苦労しただろうからさ」

横須賀にいて目にしていた光樹の仕事ぶりを思い出して、電に柔らかい声を意識しつつ注意する。

「ごめんなさいなのです……」

電の方も自覚はあるようで、肩を落とすし頭を垂れる。

「ああ、いや、別に責めてるわけじゃないよ。ごめん。忙しいのに、こつちにわざわざ会いに来てくれてありがとうな」

目線の高さを電に合わせて腰を屈め、拓海は彼女の頭を撫でてやる。すると、たちまち電は満面の屈託ない笑みを浮かべた。

「どういたしまして、なのです！」

昼休憩の時間と電の出発時間のあることがあるので、早めに宿舎を出て、横須賀鎮守府のゲートまでやって来る。

ゲート前には既に、ワゴンタイプで銀のボディの車が待機していた。車の横には、電を待つ軍の関係者が立っている。

「適当な場所で拓海と電は向かい合い、お互いの顔を見つめた。

「じゃ、気を付けて島に戻れよ。電」

「白瀬さんもカリキュラム、頑張ってくださいね。6水戦の皆と一緒に、応援するのです」

「そいつは、心強いな。ありがとう」

「それですね。その、白瀬さん……」

これでお別れかと思っていたところに、電がもじもじと視線を左右に揺らしている。頬を染め、物欲しそうな目を時折こちらに向けていた。

急な変化に戸惑いつつ、拓海は聞いてみる。

「どうしたんだ？ 電」

「……ギョツ、ってして欲しいのです」

それは、抱擁のことを言っているのだろうか。人目があるのが気になるが、電の表情は恥ずかしそうでありながら、真剣そのものだ。別に減るものでも無いし、素直に応じるべきだろう。

「分かった。こっかな」

拓海は片膝を地面に付け、電の小さくて華奢な身体を抱き寄せる。腕の中にすっぽりと納まった電は一瞬戸惑うが、喜色を浮かべつつ抱き返す。

潮の匂いがする電を抱擁しつつ、拓海はこんな小さな子が海を駆けて深海棲艦と戦っているのかと思う。体格は、小学校低学年くらいの子とあまり変わらないだろう。こんな子がかつての軍艦の記憶を持ち、艦装を携えているのかと思うと空恐ろしさを感じる。だが、電のような子にまで頼って戦わなければいけない。

そのことに嘆息しつつ、拓海は電との抱擁を解いた。

「ありがとう、なのです」

電が可愛らしい照れ笑いを浮かべて、拓海を見上げる。胸が締め上げられるような想いをしながら、拓海も笑みを返した。

「お互い、また無事に会おうな」

「白瀬さんもお元気で、なのです」

電は踵を返すと、とてととと車の方に駆けて行く。車の傍にいた関係者の男と何事かを話すと、こちらに手を振って来た。拓海も手を振り返しつつ、電がスライドドアから車の後部に乗り込む様子を見守る。

男が助手席に乗り込むと、車のエンジンが始動する音が響く。そのまま発進すると、車はゲートの方へと真っ直ぐ走って行った。

「俺も、頑張らないとな」

拓海は自分に気合を入れつつ、本庁舎へと向かうべく踵を返す。

電が来てくれたおかげで、今まで切羽詰まっていた気分も幾らか和らいだようだ。この具合なら、まだまだ大丈夫そうだ。

青々とした空を見上げつつ、拓海は歩みを進めて行くのだった。

第17話 白浜に立つ

日本国、沖縄自治州。今から対深海棲艦戦争の最中、10年前に日本政府主導で設置された区域だ。沖縄県域を範囲としており、深海棲艦の脅威が去るまでの緊急措置とされている。

設置当時の沖縄は本土から孤立しており、支援を受けられない状況にあった。在留米軍と防衛軍部隊も壊滅し、危機的な状況にあった沖縄は日本政府に助けを求めるが、同じく危機的状況にあった政府はこれを拒否。代わりに、那覇市に自治政府を設置して自治権を都道府県レベルから引き上げられることによって誕生した。

——実際には、沖縄まで手が回らなくなってしまった日本政府による切り捨ても同然だった。

以後6年間、沖縄は日本本国から完全に孤立してしまう。44式対特殊生物大型輸送機の登場と艦娘の本格運用開始まで、深海棲艦の目を何とか掻い潜ることでしか、外部との物流すら出来ない有様だった。

八重山列島・宮古列島・尖閣諸島は完全に敵の支配下に入り、自治の及ぶ範囲も沖縄本島と隣接する島々までに後退。壊滅した日米両軍を自治政府軍として再編し、本島南部に集中させ、北部にあった基地は破棄されたり難民キャンプとなったりした。

今でこそ沖縄本島は空路と海路が一応確保され、復興の兆しを見せているものの、4年前までの状況はかなり悲惨だった。

至る所で飢えによる暴動が起き、市街地は荒廃し彼方此方でスラムが形成された。自治政府軍も、稼働率は1%を下回っていたと言われる。日本政府からも事実上、見捨てられていた形だった。

そんな沖縄が本島南部に限定してではあるが、4年で陸海空軍の基地を整備し直し、主要な市街地も活気を取り戻しつつあるのは、奇跡と言っても良かった。

かつて悲惨な状況にあった沖縄は、今度は対深海棲艦の前線基地となろうとしている。

日本本国の主導により設置されていた、特生防衛海軍・通称艦娘隊のホワイトビーチ基地。第1世代艦娘の頃は非常設の基地として扱われていたが、石垣島攻略作戦に当たって、簡易ながら本格的な基地機能を有することになった。

元々は米海軍と日本防衛海軍の基地だったが、深海棲艦の出現に伴って両軍は那覇に移転。その後、開いた土地を艦娘用の基地として使うことになり、今年の1月頃から基地機能拡張の計画・工事が急ピッチで進められていた。

拓海と電が再会した二日後の、6月12日。ホワイトビーチ基地は作戦期日を間近に控え、工事の最終工程が慌ただしく進められていた。

足場は殆どが取り除かれ、真新しい建物がちらほらと見える。艦娘用の仮設宿舎として、大きめのプレハブが付近に多数設置されていた。プレハブは1階建てが使われており、多数の艦娘が泊まるとなると、どうしても数が必要だった。

基地内に敷かれた道路に、1台の軍用の小型自動車が停まり、後部のドアが左右同時に開かれる。車両から、一際目立つ長身の少女たちが姿を現した。

長髪の少女は、艦娘・長門型戦艦1番艦の長門。もう一人のショートヘアの少女は、同2番艦の陸奥だ。二人は車を見送りつつ、並び立って基地の建物一つひとつに目を向けていた。

「工事は順調みたいね。私たちが来る必要あったの？」

隣の長門と同様に基地を見回しながら、陸奥が口を開いた。

「……提督の指示に従わないわけにはいかないからな。重点的に確認するのは、私たち艦娘にも直接関わる。渡されたメモを見るに、そのところを見ておけということなのだろう」

「そんな大事なことをメモで済ませるの、鳴海提督らしいわね……」

手元のメモ用紙に目をやり、溜め息を吐く長門に陸奥も苦笑いで応

じる。

メモには、「戦術リンクの確認」「出撃カタパルトの確認」とだけ書かれてあった。明け方に呼び出されて何事かと思えば、何も書いていないのと同然なメモ用紙を渡されたのだ。本当ならば、何て人使いの荒い提督だと言いたいところなのだが――。

「それが終われば、明日まで好きに休んでいい、か……」

「大和や扶桑たちが聞いたら、怒るわよね」

長門は、自身が所属する横須賀鎮守府に帰った際のことには頭を悩ませる。今ごろ、大和たちはこの時期に二人が抜けた分、余計に忙しくなっているだろう。

「せめて、土産でも買っていかないとな」

現在でも沖縄は余裕のない状況だが、本土との交通が回復してからというもの、販売業でも回復傾向にある。那覇に行けば、丁度良い物が売っているだろう。

「さて、行くとしょうか。陸奥」

「そうね。長門」

二人は領き合い、メモに書かれた項目を実行に移すべく、動き始めた。

「こちら長門。陸奥、聞こえるか？」

長門は左耳に手を当て、無線通信を開く。繋げる先は、基地中央部にある司令部施設だ。

《こちら陸奥。ちゃんと聞こえてるわ。戦術リンク―CROCKS―、動作問題無し。長門の現在位置、出撃ドック、カタパルト前。艦装リンク、問題無し。コンディションのモニタリング、よし。自立飛行型カメラユニット、接続問題無し。100mの海上で滞空中。1kmの海上に、駆逐イ級を1隻だけ確認したわ》

無線の奥から、陸奥の声が返る。

今行っているのは、長門と陸奥が属する第1戦隊の司令官・鳴海武少将からメモで指示された事だ。

新しく設置した戦術リンクの動作や、出撃カタパルトの動作に問題が無いかを実際に運用し、確認する。そのためには、実戦と同様の形式を取った方が良さだろうということで、長門は出撃カタパルト前に立っていた。

陸奥の方は、司令官の代わりに司令部施設に向いていた。戦術リンクで扱う情報量は多いため、オペレーターも数名配置されている筈だ。

「イ級か。丁度良い。奴には、ここで消えて貰おうか」

不敵な笑みを浮かぶ長門に、陸奥の苦笑交じりの声が入る。

《もう。あんまり無茶しないでね？ 勝手に沈んじやダメよ》

「心配するな。私とて、一人で消えるつもりはないさ。一人残されるのもご免だ。陸奥がいないと、寂しいからな」

《なつ、長門っ——！》

無線の向こうで、陸奥の上擦った声がある。この様子だと、司令室では顔が真っ赤になった陸奥が見ることが出来るだろう。

長門は小さく微笑んだ後に顔を引き締めた。

「長門型戦艦1番艦、長門。出撃する!!」

長門の声を合図に、出撃ドックに警報が鳴り響く。長門が「出撃」と書かれた円形のデッキに足を踏み入れると、その部分だけを残して周囲の床が展開。鎖に吊り上げられるようにして、彼女の艦装が姿を現す。

艦装が腰の高さまで持ち上げられると、スカートのベルト部分に接続される。

《艦装、固定確認。長門との接続問題無し》

《カタパルト、射出準備!! 注水開始》

陸奥以外の複数のオペレーターが、プロセスを確認する声を発する。

再びけたたましい音量の警報が鳴り響き、海とドックとを隔ていた分厚いシャッターが上昇。同時に、下り坂のカタパルト1本の溝に、海水が満たされる。

《進路クリア。長門、いつでも行っていいわよ》

今度は陸奥の声が聞こえて来て、長門は頷く。

「了解。長門、発進！」

長門は注水されたカタパルトに歩を進めると前傾姿勢になり、両足の主機の駆動を開始させる。主機は唸りを上げて海水を巻き上げ、長門の身体を一気に前へと押し出した。

勢いよく発進した長門は、下り坂のカタパルトを、海水を散らしながら一気に駆け降りる。速度を殺さずシャッターを潜り抜けると、そこはもう、蒼く広々とした海だった。

カタパルトに不調は無く、その後の出撃でも戦術リンクシステムは問題無く作動した。確認された駆逐イ級も、長門の41cm連装砲の長距離砲撃によりあっさり撃破。特にこれといった問題も起こらず、長門はホワイトビーチ基地に帰還していた。

艦装を整備工廠に預けて外に出ると、陸奥が待ちわびた様に長門に駆け寄って来た。

「……何だ。どうした、陸奥」

奇妙なくらいにニコニコとした笑みを浮かべる陸奥を見て、長門は困惑の表情を浮かべる。

「お帰り、長門」

「あ、ああ。ただいま、陸奥……」

大したことも無く帰って来ただけなのだが、この違和感は一切何だろうか。いや、陸奥がこんな笑顔をしているときは、大抵自分が何かしでかしてしまった時だ——。そんな風に思っていると、陸奥が長門の左腕に抱き付いて、彼女の顔を上目遣いで見つめた。

「うふふ。長門は私がいないと、寂しいのよね？」

「——っ!?!」

悪戯っぽい笑みに変わった陸奥を見て、長門は自分の耳が熱を持ったのを感じる。陸奥は離れようとする長門の腕をがっちり固定し、甘えるように寄り添う。

「オペレーターの皆にも、聞かれちゃったわね。長門お姉ちゃん？」

「かつ、からかうのは止せ。陸奥」

「あらあら。何を恥ずかしがっているの？ 私との仲じゃない」

「べ、別に恥ずかしがってなど……！」

陸奥の甘え攻撃を、長門は邪険に出来ない。出撃前のことを言っているのだろうが、それはそれで事実であり、否定し難かった。

思えば、自分が可愛い物好きだと陸奥に知れてしまった時にも、こんな風にかかわれて大変な思いをしたものだ。

そんな長門の反応を一頻り楽しんだ陸奥は、微笑んだまま腕の拘束を解き、一步後ろに下がった。

「私だって、一人は嫌よ。戦わずに沈むのも嫌だけど、戦って沈むのも嫌。だから、生きて帰るわ。長門のことも一人にしないわ」

陸奥は、どこか遠くを見るように目を細める。それは恐らく、長門もよく知っているものだ。記憶の遙か遠く、この身体を得る前の頃の事だろう。

「……そうだな」

これから先、今以上に厳しい戦いが待っている。直近だと、石垣島攻略作戦だ。もうあんな思いはしないと胸に誓いつつ、長門は陸奥と共に歩き出した。

「ねえ、長門。彼のこと、どう思う？」

「彼？ —— ああ、白瀬拓海のことか」

暇を持て余した二人は、作業の邪魔にならないようにと誰もいない波止場に来ていた。

不意に陸奥に話を振られるが、すぐに長門は拓海のことには思い至る。

「この間、彼の演習艦になってたでしょ」

「武蔵との演習か……」

長門は、拓海の顔を思い出して溜め息を吐いた。

拓海は先月から、横須賀鎮守府で「新米少佐」となるべくカリキュラムを受けている青年だ。

長門が演習で拓海の指揮を受けたのは、つい5日前だ。

「やはりと言うか、まだまだ背中を預けるには足りんな。あれは中々の冷や汗ものだ」

「武蔵に機動戦を仕掛けて、最後は近接戦で一本取らせたのは、流石だと思っわよ？ あれで長門、初めて武蔵に勝てたじゃない。武蔵も驚いてたわ」

「それでもだ……。寿命が縮むかと思ったな」

1対1だったため、常に動き続けて砲撃を加えていくというのはまだ分かるものの、相手に悟られないように近づく時には、どうなるのかと思った。悟られてしまえば、こちらが46cm主砲で手痛い反撃を受けてしまう。ある意味で、命がけの駆け引きみたいなものだったのだ。

「それでも、呉から帰って来た後は随分と見違えたんじゃない？ 前は、結構艦娘に無茶を強いる戦法が多かったし」

「第3戦隊の司令官が殉職した市街戦だったか。何があっただろうな」

長門は磯貝風介とは直接の面識は無いが、彼に関しての良い噂はあまり聞かない。拓海は、そんな人間と向こうで会って来たのだという。磯貝の死も間近で見たそうだ。その時の出来事が、彼に何らかの変化を与えたのだろうか――。

「あら？。もしかして気になるの？」

陸奥が楽しげな視線を、長門に送る。

「気になると言えば、気になるな。だが、陸奥が期待するようなことは思ってない。彼がどんな人間で、どんな司令官になっていくのか。それが気になるだけだ」

肩を竦めて、長門は問いに答える。

「まあ、そうね。私もちよつと、気になるわ。もちろん、榛名との恋路もね」

「陸奥、お前……」

陸奥が何か良からぬことでも企んでいるのかと、長門は疑いの目を向ける。そういう事は、外野が首を突っ込んでいい問題では無いだろ

う。

「大丈夫よ。あくまで、影からこっそり覗くだけだから」

「そうか……」

彼女がそう言うのだから、そうなのだろう。陸奥はからかうような事を言っても、基本的に嘘は吐かない。その辺りは長門もよく知っていたので、これ以上何か言うのは止めておくことにした。

「白瀬拓海に榛名と言えば、南鳥島の怪獣の件があつたな」

話題転換とばかりに、長門は先月頭のことを口にする。あの時は孤立した部隊を救出するために、2個艦隊で南鳥島に向かった。残敵の確認を行ったが、影一つ見当たらなかったことを思い出す。島から南東部の海域に、一時的にせよ放射能汚染が残っていたことも気になる。

「ゴジラだつて話だつたわね。去年の南アメリカ紛争以来かしら……」

「ああ。それが日本近海に戻つて来たとなると、いつ深海棲艦との戦闘に影響が出るか分からんな」

今月は、南鳥島戦以来の大規模作戦が控えている。この時期にゴジラが現れでもしたら、多少なりとも作戦に影響が出るだろう。そんな事態にはならないで欲しいが、現状では打つ手が無いと長門は思う。「そうね。戦争あるところにゴジラあり」つて言うくらいなもの。第1世代の子たちは、ゴジラとは遭遇してないみたいだけど」

「ここ数年はずっと、海外目撃されていたそうだからな。運が良かったと言うべきだろう」

しかしそれは、第1世代の艦娘や日本周辺に限定してのことだ。世界では、〃白い目のゴジラ〃がアラビア半島や欧州、アフリカ、北米などを次々と襲撃している。ただでさえ深海棲艦で打撃を受けていた各国は、ゴジラによつて更に危機的状況に陥れられていた。

〃白い目のゴジラ〃なのかどうかは目撃証言でしか無いため確認できないが、もし日本近海に来ているとするならば、日本も他人事ではいられなくなる。

「長門も気を付けてね？ 貴女だつて、無関係じゃないんだから」

「ああ、榛名が言っていた……」

榛名はゴジラを遠くから目撃した際に、軍艦だった頃の記憶が呼び起され、酷く動揺していたそうだ。どんな記憶かまでは、長門は聞いていない。しかし話から想像するに、記憶というのは恐らく「あの光」のことだ。

長門もかつて、その身を以って「あの光」を体験している。だからその事を知っている陸奥は、長門を心配しているのだろう。

「分かっている。ありがとう、陸奥」

「ふふ。どういたしまして」

互いに微笑み合うと、長門と陸奥は踵を返し、海に背を向けた。

「———どうしたものかな。この後は、完全に暇なわけだが……」

「1日暇なものも、考えてみれば初めてね。折角来たんだし、まだ見てないところを回らない？」

「基地探検か。作業の邪魔にならない程度に、行くでしょうか」

陸奥の提案に、長門も迷わず賛成する。ついでに基地の状況も把握出来るから、一石二鳥だろう。そこまで考えて、自分は休みというものに慣れていないことに気付き、苦笑する。暇を与えられても、ついつい艦娘としての目線で物を見てしまうのは悪い癖だ。

今後は、休み方というものを考えた方が良くも思えないと思いつつ、長門は陸奥と共に波止場を後にしようとした。

「ん……う？」

気温が高いこの時期に反して、長門は不意に背筋が寒くなるのを感じた。妙な不安を覚えて、長門は海の方へと振り返る。

「あら？ 長門、どうかしたの？」

「いや……。どうにも嫌な感じがしたんだ……。陸奥は何か感じないか？」

「私は何も……」

急に不穏な気配を纏った長門を見て、陸奥は首を傾げつつ海に目を向ける。しかし二人の視線の先には、波で揺らぐ青々とした海があるだけだった。

やはり何も無いことを確認してから、長門に視線を戻す。

「なが……」

陸奥は名前を言い掛けて、長門の眉間に深い皺が寄っているのを認めた。こんな表情をするのは、深海棲艦との戦いで厳しい状況に陥った時くらいなものだ。

長門が見えない何かに視線を向け、唇を震わせる。

「何だ……。何がいるんだ……」

「深海棲艦かしら」

そこまで言つて、陸奥も長門と同様に言い様の無い不安を、海を見て感じていた。どうにも、波の揺らぎ方が不気味なのだ。深海棲艦も十分に不気味と思える存在だが、彼女らがいたとしても、海はこれほどまでに気味の悪い揺れ方はしていなかった。

——ちやぷり、ちやぷり、チャプリ、チャプリ……。

まるで海を見つめる二人を嘲るかのように、波が一定のリズムを保ちつつ、しかし不穏に揺れる。

二人にとつて、何か良くないモノであるのは確かだった。海面の下に何かあるのかは分からない。だが、“ここから早く逃げろ”という本能にも近い警告が脳裏で強く響いていた。

しかし、二人の足はその場に釘付けになる。それは怖いもの見たさによる興味なのか。それとも恐怖の余り動けなくなっているのか。

兎に角、長門と陸奥は固唾を呑んで、波止場の向こうの海面を見つめていた。

不意に奇妙な波音が静まり、いつも通りの気持ちの良い音が辺りに響き始める。そこで二人は、張り詰めていたものを吐き出すように溜め息を吐いた。

「な、何だったんだ。今は……」

「さあ。気のせいじゃないかしら……。きつと、そうよ」

陸奥の自分に言い聞かせる様な言葉に、長門も頷く。今度こそ、長門は基地を見て回るべく、歩き出そうとした。

——しかし。

「ねえ、長門。あれ……」

陸奥の張り詰めた声に気付いて顔を見ると、強張った表情をして海の方を指差していた。長門も再び海の方に視線を向けて、そこで初めて異常に気が付いた。

「なっ——!!」

長門と陸奥が見つめる先の海面が、まるで山を描いたかのように盛り上がっている。蒼い山はどんどんと高さを増し、ついに最高点に達した。

そして海水は重力に引っ張られて下へと落ち始め、代わりにそれを纏っていた者の姿を露わにする。

二人は釣られるように、唾然としながら上を見上げる。偶然近くを通り掛かった現場スタッフの面々も、同じように首を上に向けていた。

蒼いベールを剥ぎ、姿を現したソレは——。

「ゴジラだと……!?!」

悍ましい物を見るように、長門が呻く。

海から出現した怪物——ゴジラは、白く濁った目でホワイトビーチ基地を一瞥すると、天に向かって怨念に満ちた咆哮を、辺り一帯へと轟かせた。

第18話 亡霊来襲

黒々とした体躯は、見上げれば天に届いてしまうのではと錯覚する程に高い。上陸したゴジラは、その巨大な体躯を以って出撃ドックを破壊する。隔壁シャッターが割れ、1階建ての白い屋根が無残に踏み抜かれた。

そして右へと方向転換したとき、長門たちと視線が交わった。

牙を剥き出しにした顔は、ただ黙って長門たちを見下ろす。

長門は、ゴジラを見るのは初めてだ。隣で戸惑った表情をしている陸奥も、同じ筈だ。

——何故だ。

身の毛がよだつほどに嫌悪感、危機感を覚える。逃げなければ、焼かれるか踏まれるかして殺されてしまう。

そんなことを思うにも関わらず、長門はこの怪獣の中に懐かしさを感じていた。しかし理性が、感情が、本能が、それを受け入れることを強烈に拒む。一度受け入れてしまえば、自分が自分では無くなってしまうのではないかという恐怖と共に。

「お前は……お前は、いったい何者だ!!」

長門は、自分たちを見つめる悍ましい怪物に向かって、声を張り上げた。

——ダレダ。ダレダ。ダレダ。ダレダ。

誰かが、問う。

——ナガト、ナガト、ナガト。

誰かが、答えた。

——ムツ、ムツ、ムツ。

また別の誰かが、答える。

——コロセ。コロセ。コロセ。コロセ。コロセ……!!

誰かが、憎悪の声を上げた。

頭の中に直接声のようなものが響いて、長門は顔を顰めて唇を噛ん

だ。隣を見ると、陸奥も怯えたように耳を塞ぎながら、黒い怪獣を見上げていた。

(これは、ヤツの中から……?)

長門は直感的に、そう思った。この声は、今生きている人間たちや深海棲艦のような生物の声では無い。他の生物でも無い。何かを恨み、しがみ付き、呪わんばかりの怨嗟の声は、まるで死者たちのもののように聞こえた。

このゴジラは、戦争によって死んだ人々の怨念だという話も聞く。最初こそ疑っていたが、いざ目の前にしてみると、その噂はかなり信憑性があるように思えた。

——コロス。

声が頭に再び響いたと思った直後、ゴジラが尾を地面に叩きつけながら、高らかに咆哮した。そして、ふとくてガツシリとした肉付きの良い足を長門たちの方へと向け、ゆっくりと歩き始めた。

けたたましい音量の警報が鳴り響く中、ゴジラは急行してきた戦車の攻撃を物ともせず突き進む。その白い双眸には、長門と陸奥だけが捉えられていた。

「——陸奥、逃げるぞ！」

「そ、そうね！」

ヤツは確実に自分たちを襲おうとしている。長門は咄嗟に陸奥の手を取り、基地東部へ向かって走り出した。

東部には、艦娘の宿舎用に作られたプレハブが幾つも並べられている。それらの建物の陰に隠れて移動すれば、もしかすると上手く撒けるかもしれない。

「ねえ、長門。聞こえたかしら、あの声……」

駆け足で逃げる途中、陸奥が息を弾ませながら尋ねる。

「陸奥も聞いていたのか……」

「ええ。ゴジラから聞こえたような気がするわ」

「そうか。私もついさつき、そう考えていたところだ」

基地の人間が、あんな声を出すようにはとても思えない。それに、頭の中に響く声やこの状況が、長門により確信を与えていた。

「……話せると思う？」

陸奥がふと、そんなことを聞いてくる。確かに、言葉を発せられるようなら意志疎通が出来なくもないように思える。しかし、あの憎しみに満ちた顔を思い出して、長門はそれをすぐに否定した。

「無理だな。そもそもヤツには、私たちの言葉など届かない。――

――陸奥!!」

いつの間にかゴジラが真後ろまで近づいて、自分たちを踏み潰そうと左脚を上げていることに気付く。長門は陸奥の腕を引っ張って抱き抱えると、力の限り左前前方へと跳んだ。

陸奥が背中から着地し、陸奥を抱き抱えた長門がその勢いで彼女と共に転がっていく。

直後、長門たちが先ほどまでいた場所がゴジラの足で踏み付けられ、衝撃が彼女たちを襲った。

長門はすぐに上体を起こし、陸奥を支えて立ち上がる。

「怪我は無いか？」

「背中をちよつと擦ったくらいよ。それより、逃げましょ？」

「ああ、そうだな」

ゴジラが地を踏んだ際に舞い上がった埃で、二人は一時的に視界から逃れている。それでも安心していられる状況では無い。

長門と陸奥は、再びプレハブの方へと向かって走り出した。距離は、あと100mから200mくらいといったところだろうか。ここが踏ん張りどころだ。

舞う埃が無くなって程なくしたところで、ゴジラは再び長門たちを追いかけ始めた。時々横槍を入れて来る人間たちを睨んだり、尻尾で払う程度で、執拗に二人の後を追う。

「ちつ、しつこいな……!」

長門は思わず、舌を打つ。それほどまでに、自分たちを憎む要素があるのだろうか。それとも――。

「どうするの? このままじゃ、あそこに逃げ込んでも無駄よ」

「あそこは、障害物が多い。焼け石に水だろうが、このまま行く！」
不安の色を見せていた陸奥もそれ以上は言わず、長門と共に走り続ける。どちらにせよ、逃げ続けなければ餌食になってしまうのは必須だ。

やがて遠くに見えていたプレハブの数々は、その像を二人に大きく見せ始めていた。

「飛び込めー！」

手近なプレハブに辺りを付け、長門と陸奥は物陰に滑り込んだ。しかしそこで立ち止まりはせず、姿勢を低くして縫うように奥のプレハブの裏へと移動する。そんなことを繰り返していると、ゴジラも艦娘の宿泊地区に到達した。

建物を盾にするのは忍びなかったが、それ以上に自分たちの命が最優先だ。長門たちは隠れつつ、新たな逃避経路を探す。

ゴジラはこちらを見失い、相変わらずの険しい表情のままプレハブの建物群を睨んでいる。この調子なら逃げきれそうだと、長門が思った時だった。

「長門！ あれって……!!」

物陰から指を差す陸奥に言われてゴジラを見る。

視線の先には、背びれを青々と光らせて、空に向けて大きく開けられた口の中に同じ色の光のエネルギーが、今まさに集束しようとしているゴジラの姿があった。

「まさか……」

放射能熱線。

そんな言葉が、長門の頭の中に過ぎる。

ゴジラの名を持つ怪獣たちが持っている、強力な破壊光線。過去に確認されたゴジラは、ほとんどがその破壊光線を武器として使い、敵を屠って来たのだと言う。

それが今、まさに長門たちへと向けられようとしていた。

「私たちは、死ぬのか……?」

長門が、ポツリと言葉を溢す。恐怖は、感じられなかった。そこにあったのは、「諦め」という感情のみ。深海棲艦とは明らかに違う強大

な存在に、自分たちは無力なのだと思い知らされる。

「大丈夫よ、長門。今度は、私も一緒だから」

あまりに落ち着いた声の陸奥が、長門の肩を抱く。彼女の暖かい腕は、僅かに震えていた。

「また、あの光に包まれるのか」

それは、遠い昔の記憶。

何時かの時代、何時かの海。最後の役目として、敵味方の区別無く集められた艦の数々。そこに落とされた溢れんばかりの、身を裂こうと殺到する光。そして、何処までも深く沈んでいくような微睡み――。

いつそ焼かれてしまえば、楽になれるだろうか……。

(こんな所で、終わってしまうのか?)

ふと、横須賀鎮守府にいる仲間のことを思い出す。同じ戦隊に属する大和たちや、他の部隊の艦娘たち。司令官の面々。

“あの時”と違って、自分はまだ何も失っていない。まだまだ、深海棲艦と戦える。しかし今、目の前で黒い死神が自分たちを狩ろうとしている。

(ここで、死ぬわけにはいかない……ッ！)

長門は歯を食いしばって、すつくと立ち上がる。陸奥が、驚いたように長門を見上げていた。

今からでも逃げれば、何とかなるかもしれない。怪我は免れなくても、自分は生き延びねばならない。いや――。

「死にたくない……!」

長門がその言葉を口にした直後、まるでタイミングを合わせたかのように二つの轟音がゴジラを襲った。

長門と陸奥がハッと空を見上げると、4機の戦闘機――沖繩自治政府軍所属の45式多目的戦闘機がゴジラに攻撃を加えていた。

4機は次々にミサイルを発射し、全弾が命中する。次々と爆発が起ころるが、ゴジラは傷一つ付いていない。しかしその衝撃でゴジラは狙いを定め損ね、熱線の発射前の状態を維持したまま空を睨んだ。

ゴジラは戦闘機の1機を視界に収めると、それを追いつつ温存して

いた熱線を一気に吐き出す。戦闘機はそれを紙一重で躲すが、ゴジラが首を動かして熱線を薙ぐようにしたことで直撃し、無残に爆散する。

残った3機は狙いを付けられないように変則的な動きを見せる。僅かな隙を縫って、ミサイルの残弾全てをゴジラに向けて放つていく。しかしこれらの攻撃も全く通用することは無く、ゴジラの熱線によって、次々と撃墜されていった。

火の玉となった戦闘機の破片が、地上に降り注いでいく。一部は司令部施設にも落ち、建物が爆発と共に炎に包まれた。

敵を一掃したゴジラは、長門たちが隠れているプレハブ群を一瞥する。しかしそれ以上は何もせず、空に向かって鳴き声を上げると、西南西の方角に身体の向きを変えた。

地上からの攻撃は続いていたが、ゴジラはそれを全く無視して、その方角へ悠々と歩みを始めるのだった。

「行つたか……」

ゴジラが去った頃合いを見て、長門と陸奥はプレハブの物陰から姿を現す。

幸か不幸か、戦闘機が行った攻撃のおかげで、二人は命拾いすることが出来た。本当の所は偶然なのだろうが、4機のパイロットたちには助けられた。そのことを思いながら、長門は彼らに向けて黙禱を捧げた。

「あの戦闘機が来た方向って……」

長門と同様に黙禱をしていた陸奥が、遠くに見えるゴジラの背中を見て呟く。

「確か、自治政府軍の嘉手納基地があつたな……」

嘉手納基地は、沖縄本島において唯一の巨大な空軍基地であり、滑走路も備えている。そこが襲撃されてしまえば、空輸などにおいて相当なダメージがあるだろう。

しかし本土から応援を呼ぶにしても、深海棲艦の襲撃がある可能性もある。そうなると思えば、艦隊規模の戦力も、対深海棲艦の艦載機防護能力

を備えていない戦闘機も飛んで行くことは出来ない。来られたとしても、1隻か2隻。或いは、44式輸送機だけだ。

そこまで考えて、長門は首を振った。

「——駄目だ。恐らく向こうも応援要請はしているだろうが、政府は答えられないだろうな。……陸奥、予備の通信施設から横須賀に、被害状況の連絡を入れる。司令部施設があれば、碌な連絡は行っていないだろう」

基地の中央部に位置していた司令部施設は、戦闘機の墜落によって今や全焼状態にある。他の建物と距離が開いていて、飛び火する恐れが無いのが、せめてもの救いかもしれない。

「分かったわ……。それにしても私たち、助かったのね……」

「ああ……」

陸奥の安堵した声に、長門も同意する。正直なところ、もう助からないと思っただけに、ホツとしたという気持ちは強かった。

「貴様は一体、誰なんだ……」

長門は、段々と遠くなっていくゴジラの背を見つめながら、行き場の無い問いを口にする。

この場では陸奥を含めて、艦娘は二人しかいなかったため、確かなことは言えない。しかし、南鳥島でゴジラを見たという第6水雷戦隊の面々は、皆一様にある種の恐怖や不安を覚えたという。榛名も、恐怖と共に記憶を呼び覚まされたと聞く。

これらの情報から、長門は一つの懸念を持った。

「ヤツは……ゴジラは、艦娘にとって危険だ」

同日、神奈川県内の高速道路。

午前10時を遥かに過ぎた頃、笠川大輔は自ら軍用車を運転して、

道を急いでいた。横須賀鎮守府で書類仕事に追われていたところに、ゴジラ出現の報を受けたのだ。大輔はすぐさま仕事を中断し、ある場所へと行くべく横須賀鎮守府を飛び出し、今に至る。

イヤホンマイクを装着し、車の中継機を通して無線で「向こう」とやり取りをする。

「ああ。ホワイトビーチ基地の被害状況は聞いている。出撃ドックと司令部施設、入渠ドックが使い物にならない。攻略作戦の延期は決定だな」

《嘉手納基地は壊滅です。幸い滑走路は無事ですので、問題が無ければ明日にでも使えるそうです》

無線の奥から、若い男性の声が聞こえてくる。大輔の部下の一人の声だ。ただし、艦娘隊の方では無い。

「ゴジラは東シナ海に出たんだったな」

《はい。予想進路では、上陸先は長崎。あと5時間ほどで到達する見込みです》

「……元帥は？」

《既に、佐世保の“しなの”に出撃命令を出しています。防衛海軍にも支援要請を出し、受理されています。部隊の出撃許可も下りました》

「そうか。国は、もっと洩ると思ってたんだがな」

《この状況では、そうも言っていられないのでしょう。世間から隠し通すのも、そろそろ限界に来ています》

部下の言葉に、大輔は自嘲気味に笑う。場合によっては、非難の嵐に晒されるだろう。だがそんなものは、この瞬間においては関係無い。

やっと、復讐を果たす時が来たのだから――。

「柳田中尉、整備状況は？」

《現行装備ならば、完璧に仕上げているそうです。最新装備の方は、もう少し調整が必要です》

「流石は中條さんの息子だ……。出撃準備は？」

《ご命令があり次第、何時でも可能です。今から出撃すれば、到着まで

5時間ほど掛かる見込みです」

「なら、4時間半で到着させる。そのくらいなら、多少重くても早く着ける筈だ。——よし。47式機龍Ⅱ、及び機龍隊、出撃だ。操縦担当は柳田中尉、君がやれ」

《了解しました！》

そのやり取りを最後に、無線通信が終了する。

笠川大輔大将。特生防衛海軍の艦隊総司令官。そして彼は、MFS—47“47式機龍Ⅱ”の開発プロジェクトリーダーであると同時に、「機龍隊」の司令官を務めている男だった。

向かう先は東京府旧首都区、特生防衛軍が保有する中でも最大の規模を誇る「旧東京湾岸基地」と呼ばれる場所だ。

東京府と神奈川県の間に入った頃、上空に「しらさぎⅡ」の3機編隊が見える。1機が先を行き、後ろを追う2機はバックパックユニットを背負った機龍Ⅱを吊り下げ、長崎へと向けて飛行していた。

「ゴジラ……。俺は必ず、お前を殺してやる」

誰もいない車内の中で一人、大輔は恨みに満ちた声を響かせ、上空の機龍Ⅱを見送った。

第19話 想いと影

午後1時を過ぎた頃、拓海は横須賀鎮守府内にある「間宮」に来ていた。

「甘味処」と掲げてはいるものの、この店では甘味以外のメニューも扱っている。値段も財布に優しく、それでいて美味しいという評判から、職員や艦娘を問わず人気を博している。昼食の時間ということもあつて、「間宮」は忙しさの真つただ中であつた。

何十分かの後に漸くカウンター席に座つた拓海は、並んでいるうちに注文したカレーを待つ。

店の主である艦娘・間宮は、忙しそうに料理をしていた。そんな中にあつても、時折笑顔すら見せて注文をどんどん捌いていく。その手際の良さは、流石と言ふべきだった。

間宮の仕事の邪魔をするわけにもいかず、拓海は天井に近い位置にあるテレビ台を見上げる。

テレビではまさに今、ここ数時間で起こつた事態についての報道がされていた。

沖縄がゴジラに襲撃され、次の上陸予想地点が長崎であること。長崎では急遽市外への避難が進んでいること。そして、特生防衛軍による巨大な新兵器が出撃したと、発表されたこと。

テレビに映っている民放チャンネルでは、ゴジラの襲撃と新兵器についての情報が大きく取り上げられていた。ゲストを招いて色々と話しているが、そのチャンネルでの大きな関心事として、新兵器の存在が挙げられていた。

店内の様子を窺ってみると、やはりテレビと同様、話題は新兵器のことで持ち切りである。

「確か、40年くらい前に似た様な名前がいたよな？」

「名前からして、後継機つてどこか」

「あの時の総理の判断で、破棄されなかつたっけ」

「何で今更……」

そんな男たちの声が、そこかしこから聞こえてくる。艦娘の姿も見

受けられたが、彼女たちはそもそも、「新兵器」が何なのかあまり理解出来ていないようだった。

新兵器の名は、47式機龍Ⅱ。

5年前のゴジラによる東京襲撃が切っ掛けで、旧首都地下で極秘裏に建造されていたのだという。全高は120mにも及び、先代機龍よりも遥かに大きい。基本的な構造は同じなのだという。

記者会見の映像では、最高責任者の代理だという人物がその事を説明。記者たちからは、様々な質問がされていた。

「機龍は、5体目のゴジラと共に海に放棄されたのでは無かったのか」
「先代機龍はゴジラの骨をベースにしたと聞くんが、今回もそのような方法なのか」

「骨を使っているとすれば、それはどこから調達したのか」

「この機体の存在によって、特生防衛軍は対外侵略すら可能になってしまふのか」

「人が去った後の東京で、何故こんなものを作っていたのか」

エトセトラ、エトセトラ……。

中には答えるに値しない質問も混じっていたが、その人物は言葉をぼかしたり上手くかわしたりしていた。一見答えているようであり、その実何も答えていない。そのことに業を煮やした記者たちが追撃を試みるが、見事にかわされる。そんなことが繰り返されている記者会見だった。

「隣、失礼しますね」

そんな声と共に、テレビを見ていた拓海の右隣の席に座る者がいた。テレビのある左上から隣に視線を移すと、髪をポニーテールに結わえた少女——大和と目が合った。

「ああ、大和さん。また特盛カレーですか?」

挨拶代わりにそんな軽口を言うと、大和が頬を膨らませる。

「もうっ、からかわないでください! 私がよく食べる子みたいじゃないですか。……よく食べるんですけどね」

「——どこかに出撃してたんですか?」

「し・ら・せ・さ・ん?」

会話の流れで軽い気持ちで聞いてしまったことが災いしてか、大和に笑っているように見えて、実は全く笑っていない凄味を帯びた表情を向けられる。

「す、すみません……」

「良いんですよ。別に気にしてませんから」

ぷい、とそっぽを向いてお冷を口にする大和。「やつぱり気にしてるじゃないか」と言いたい所だったが、それは心の中に留めておく。

大和はまだ中身の残っているガラスコップを静かに置くと、安穏とした雰囲気ガラリと一変させ、拓海に視線を戻した。

「白瀬さん、今朝の沖縄でのことは知っていますか？」

「今日の分のカリキュラムが急に中止になって、その時に小耳に挟みましたね。何でも、今度の作戦の前線基地が大変なことになってるか」

拓海はいつものように本庁舎に赴き、講義を受けていた。しかし僅か30分ほどした頃に鎮守府内が突然慌ただしくなり、理由も言われないまま本日分が終日中止となってしまったのだ。

蜂の巣を突いたような騒ぎに聞き耳を立ててみると、沖縄がゴジラに襲撃され、司令官や職員たちはその対応をしているようだった。

「はい。ホワイトビーチと嘉手納基地に深刻な被害が出て、石垣島攻略は延期になりました。その後の復旧次第ですが、最悪7月にずれ込むかもしれません」

「それは……マズいですね」

石垣島海域の攻略が遅れるということは、それだけ周囲への被害も継続する。特に目と鼻の先に敵の本拠を見ている台湾島などにとつては、深刻な問題だ。

沖縄本島の防衛は、佐世保から定期的に艦娘を遠征させることで行っているが、これにも限度がある。石垣島に腰を据える敵艦隊を殲滅したところで深海棲艦が全くなりなくなるということは無いが、それでもこの作戦で被害の大幅軽減が出来る。

是が非でも攻略したいところだったが、肝心の前線基地が使い物にならないのでは、話にならない。

「それに……」

大和がテレビを見上げるのに釣られて、拓海も画面の方に視線を移す。テレビでは機龍Ⅱに加えて、ゴジラも話題に上がっていた。

「白瀬さんは、あの兵器を誰が開発したのか、知っていますか？」

周りの様子を窺いつつ小声になった大和。拓海は大和に顔を寄せ、その声を何とか聴き取る。

「いいえ……。それがどうかしたんですか？」

拓海の問いに、大和はコクリと頷いた。

「開発者は、笠川大将です」

「艦隊総司令官の……ですか？」

拓海は一度しか会ったことが無いが、温厚そうな印象を持ったのを覚えている。その一方で、こちらを見る目が怖くもあった。

「はい。ですが元々、特生防衛軍本隊の方に所属されていたそうなんです」

「じゃあ何で、艦娘隊に……」

「適正があつたそうですよ。艦娘との相性が良かったとか。艦娘が生まれてから、2年目くらいの時だそうです」

大和の口振りからするに、その辺りにも事情があるのだろう。拓海の記憶では、呉、佐世保、舞鶴に鎮守府が設置された時期だ。

これ以上は話が脱線しそうなので、これ以上のことを聞くのは止めておく。

「本隊の方の人だったんですね……」

「私も最近、鳴海提督に教えられて知つたんです。第1艦隊と第1戦隊の旗艦で、自分の秘書艦なら知っておけて……。少しは、教えられる方の身にもなって欲しいですっ」

口をへの字に曲げた大和の口から、愚痴が零れる。

秘書艦は、基本的に部隊の旗艦とイコールで扱われる。その方が、色々と都合がいいのだろう。そして大和のように艦隊の中心部隊の旗艦を務める者は、艦隊の旗艦も務めるということにされている。司令官の傍で彼是と動くことも多いため、何かと大変なようだ。

「……あの人のことだから、どうせ善意なんだろうけど」

鳴海武少将は、結構マイペースなところがある。かと言って悪い人ではないし、寧ろ良い人の部類に入る。しかしそんな人の秘書艦を務めていると、何かと苦勞があるのかもしれない。

「そんな事教えるくらいなら、私にも休暇をくれたっていいじゃないですか。長門さんと陸奥さんだけ休暇なんてズルいです」

「はあ……」

さつきまで機龍Ⅱの辺りのことについて話していた筈が、いつの間にか一人愚痴大会に変わっていく。

「大体、部隊の皆に色目使いすぎなんです！ 武蔵と飲みに行ったかと思えば、扶桑さんや山城さんとデートしてたり！ それで、今度は長門さんと陸奥さんに休暇ですよ!? 私だって部隊の一員です。何かしてくれたっていいじゃないですか！」

「ああ、うん……」

話す言葉に熱が籠り、段々と大和が饒舌になっていく。お冷しか飲んでいない筈なのに、お酒が入ってるのではないかと思ったほどだった。

「秘書艦や旗艦としての務めが出来るのは、光栄です。誇りも持っています。だけど、せめて視線くらい、合わせてくれたって良いじゃないですか！ 初めて会った後から、一回も目を合わせてくれないんです！ 私は便利屋なんですか？ ホテル扱いしないで、ちゃんと出撃もさせてくれるのは有り難いです。でも！ 帰って来たときの一言が『おかえり』で済まされるなんて、幾らなんでも酷いです！」

大和は、多分に鳴海という男について勘違いしているように思えた。

話す言葉は短く、簡潔で、解りやすい。だが、それ以上の表現となると途端に難しくなってしまう不器用な人だと、拓海は時々会う度に感じていた。大和と話す時の雰囲気や目線からして、彼女に気があるということは自分が同性だからか、易々と分かってしまった。

嬉々として大和と話すのだが、視線を合わせようとしても照れが出てしまって、直視することが出来ない。良い大人なのに、思春期の男子かと突っ込みたくなるほどの、愛嬌のある人物だと思う。

一方できちんとした公的な文書などを作成する時には、しっかりとしたものを書いてくる。司令官としての実力も高く、周りからの評判も良い。一端の司令官を務めているだけのことはあった。

しかし言葉の少なさというのは、時として相手に誤解を与えてしまう。目の前にいる大和が、まさにそんな状態にあった。

「大和さんは、鳴海少将のことは好き？ それとも嫌いですか？」
「……嫌いです」

拓海の問いに、即答する大和。ツンとした顔が、猫のようで可愛らしい。言葉のニュアンスから察するに、完全に嫌っているわけではないだろうが、少なくとも恋愛感情などは持ち合わせていないだろう。気が付くと、拓海の前には所謂「普通盛り」のカレー。大和の前には、特盛カレーの皿が置かれていた。

カウンター席と向かい合って配置されている厨房では、間宮が困ったような顔で笑っていた。ふと周りを見ると、傍にいた客の何人かが驚いたようにこちらを見、視線が合うと何事も無かったかのように食事に戻っていた。

いつの間にか大和は、興奮の余り声が大きくなっていったようだった。拓海自身も大和に顔を寄せる様な姿勢では無く、普通に座っていたことに今更気付く。

自分たちを取り巻く状況を理解した大和は、顔を赤くしながら「いただきます」と言い、誤魔化すように特盛カレーを食べ始める。

拓海が間宮に対して頭を下げると、彼女も苦笑したまま「ごゆっくり」と言っつて、何事も無かったかのように仕事に戻った。

「俺もちゃんと、榛名に話さないとな……。——いただきます」
拓海の場合、榛名との間に懸案事項が残っている。

機龍Ⅱがゴジラを止められるかどうかは、拓海には見当も付かない。だが、少なくとも呉鎮守府にあの怪獣が来る事が無いように祈るしか無い。

拓海は自嘲気味に笑ってから、テレビを見つつカレー用のスプーンを手に取る。

そんな拓海の横顔を、大和は意味有り気な横目で見つめていた。

横須賀鎮守府、本庁舎4階。

三笠は、光樹と共に彼の執務室で執務に勤しんでいた。この時代になっても、重要書類の多くが紙だ。サインが必要なものには内容を確認しつつサイン。そんな作業を光樹は延々と続けていた。

三笠の方はと言うと、PCに向かって光樹から任された書類の作成や、メールチェックなどの仕事をしていた。

はつきり言っただけは、三笠よりも光樹の方が大変な仕事状況となっていた。

急に本隊へと合流することになった大輔から、一部の仕事が任せられたのだ。そのほとんどが光樹に任せても大丈夫なものばかりだったが、普段の彼の仕事分を含めると結構な量になっていた。

三笠に手伝えることはあまり無く、結局普段通りの量の仕事をこなす。その量も特別多くは無かったので、早々に作業を終えてしまった三笠は手持ち無沙汰になっていた。

「提督……。そろそろ休まれませんか？ お昼、とうに過ぎていますよ」

「もう、そんな時間か……。そうだな、あと1時間くらいしたら昼にしようか」

「そんな事言っただけ、また『もう1時間』なんて言いませんよね？」
「ぐ……」

目頭を揉む光樹が、くぐもった声を出す。この様子だと、本当に言いかねなさそうだ。だが、それをやりかねないほど重要な書類ばかりであることを知っているだけに、三笠は責めることが出来ない。

「せめて、今くらいは休んでください。いくら大事な仕事と言っても、身体が持ちません」

「そこを何とか……」
「駄目です」

有無を言わせずきっぱりと言うと、光樹は名残惜しそうな雰囲気

書類に視線を送る。

「——分かったよ。休むから、そんなに睨まないでくれ。三笠」
貼りつけた笑みを向けて威圧してみると、光樹は書類から視線を外してあっさりと言参のポーズを取った。

8年の付き合いいえ、これではどちらが上司か部下なのか。そんなことを思っつ溜め息を吐いてから、三笠は自分に割り当てられた机の横に手を伸ばした。そこにある小さな手提げバッグを取り、光樹の机の上に置く。

「奥様からのお弁当です。提督が大変そうなので、こつそりお願いしておきました」

目の前のバッグをきよとんとした目で見つめる光樹の前に、三笠は言う。

大輔から光樹に引き継がれた仕事の量を見た三笠が、密かに電話をかけて彼の妻にお願いをしておいたのだ。

「……愛妻弁当、だよな？」

「さあ、何かしら？　ご自分で、確かめてみては」

不安げな表情を見せる光樹に、三笠は含み笑いを浮かべて言葉を返す。特にここ最近、光樹の妻は彼への攻撃……もとい悪戯が多い。三笠との関係を知っているからか、或いは帰って来ないことへの文句なのか、それとも喝を入れているのか……。恐らくは、そのどれもが当てはまるだろうと三笠は思う。

恐る恐る手提げバッグから弁当箱を取り出す光樹を見て、三笠は鎮守府ゲートで会った時の彼の妻の顔を思い出す。彼女は歳に似合わない、悪戯つ子のような活き活きとした笑みを浮かべていた。

時々光樹が可哀想に思えてくるときがあるが、それは彼の自業自得だ。光樹は、家族も三笠も両方取るといふ選択をしたのだから。

光樹が家族と仲良くしているのを見て、妬かないわけでは無い。だからこうして、彼の妻の悪巧みに率先して手を貸すことがあった。そのおかげと言うべきか、彼女とはすっかり意気投合してしまっている。

光樹は二段構造の弁当箱の上段と下段を横に並べ、警戒するように

蓋を見つめている。

あまり悪戯が続いたためか、光樹は自身の妻が関わるとやたらと慎重になっていた。今回も何かあると思って、警戒しているのだろう。

光樹は非常に慎重な手つきで、二つの蓋を開ける。そこにあった中身は――。

「……あれ」

拍子抜けしたような顔で、光樹は弁当を見つめる。

下段には、白ごはんと梅干。上段には、卵焼きやその他諸々のおかずが入っている。

「どうぞ、召し上がってください」

三笠は込み上げてくる笑いを必死に堪えながら、光樹に勧める。

「あ、ああ……」

年甲斐も無く間抜けな表情になった光樹は、卵焼きの一つに箸を伸ばすのだった。

やはりと言うべきか、光樹は易々と目の前の罨に引つ掛かってしまった。彼は唐辛子がふんだんに混ぜられた卵焼きを、何の疑いもなく食べてしまったのだ。

結果、何とか吐き出すのは防いだものの光樹は三笠から受け取ったコップの水を飲んで、机に突っ伏している。

激辛卵焼きを食べた時の光樹の表情は、本人には悪いがあまりに面白かった。口に入れた瞬間目を丸くし、顔を赤くして咳き込むが絶対に吐き出さまいとする。おかげで三笠は、我慢できずに吹き出してしまった。

一頻り笑った後、三笠は恨みがましく見つめてくる光樹の背中を擦りつつ、落ち着くのを待っていた。

「……三笠、知っていてやったな？」

「ふふ。おかげでいいものが見られました」

「また、まんまとやられたな……」

光樹が自己嫌悪するかのように、ブツブツと一人で何か呟き始めた。

数分経って、光樹は何か立ち直ったようだった。むくりと起き上がると水を飲み干し、何でも無いような顔をして話を切り替える。あまり触れて欲しくないのだろうと思いつつ、三笠もその話題に乗ることにした。

話題は、ゴジラと機龍Ⅱについてのことだった。

ゴジラは現在東シナ海を北上し、長崎沖に近づきつつある。一方の機龍Ⅱも長崎を目指して日本上空をぎりぎりバランスが崩れない程度のスピードでしらさぎⅡに吊り下げられて急行しているようだ。

「正直、新しい『機龍』が作られていたというのは、初耳でした。開発されたのは、笠川大将だったというのも」

「まあ、あの人はゴジラを倒すためだったら、何だってやりそうなんだよな……」

どこか現実感が伴っていない三笠に、光樹は物憂げな目で天井を見つめていた。

「それって——」

「復讐だよ」

三笠の言葉の先を続けるように、光樹は呟いた。その目の奥深くが、暗く揺らいだのを三笠は見逃さなかった。彼を8年、傍で見続けていたからこそ気付けた、些細な変化だった。

それは何も、他者へ向けられるようなものでは無かった。少なくとも、彼自身による復讐ということは考えてはいないだろう。だが、それでも三笠は胸の内に湧き上がる不安を抑えきれずにいた。

その瞳は、まるで罰せられるのを待っている咎人のように見えた。

光樹にもまた、三笠にも知らせていないことがあるのだろう。それは、どうしようもなく大きなことのような気がする。彼一人にとってなのか、彼の周りにとってのことなのか、あるいは別の何かなのかは分からない。

だから三笠は、彼の傍に居続けようと思った。辛いことも、悲しいことも、苦しいことも、大切な人が傍にいればきつと大丈夫だ。

「光樹君」

「何だい、三笠」

「ずっと、傍に居させてね」

「……ああ」

光樹の返事は、完全に肯定とはいかないものだった。だが、それでも三笠の言葉は彼の心に届き、僅かでも痛みを和らげることは出来たようだ。

満足の行く答えでは無かったものの、それが嬉しくて、三笠は微笑む。

——この人と、どこまでも歩いて行きたい。

それが地獄だったとしても、三笠はそう心に誓う。

——理由？ そんなもの……。

——愛しているからに、決まっている。

第20話 因縁の対決

機龍Ⅱを吊り下げたしらさぎⅡの2号機と3号機、それを先導するようにしらさぎⅡ航空隊隊長機の1号機が、九州上空を飛んでいた。機龍Ⅱを吊り下げている分、速度は落ちるがそれでも目的地へと急行する。

目指すのは、既にゴジラが上陸している長崎市だ。

《長崎市街が見えてきた。柳田、準備しておけ》

柳田中尉の乗る、しらさぎⅡ2号機に1号機からの無線が入った。しらさぎⅡ航空隊長の三澄中佐の声だ。

「了解」

後部に設けられた機龍Ⅱの操縦用座席で、柳田は操縦桿に手を添える。前方の窓を覗き込むと、そこ彼処に真つ赤な火の手が上がっている長崎市街の光景が見えた。

「うっひゃあ、酷いな。こりゃ」

前の操縦席で、増田中尉が声を上げる。

柳田たちは事前に、30分ほど前に海上の防衛線は突破され、しなの〃が大破しそれ以外の海軍からの支援艦艇は全て撃沈。上陸を許してしまい、今は地上部隊が対応しているということは何も聞いていた。しかしそれでも食い止めることは出来なかったようで、海岸付近などは火の海となっている。

「増田。早く着陸地点を探そう。あのゴジラ、何処かへ一直線に歩いてる」

同い年である増田の言葉に同意しつつ、遠くに見えるゴジラを見て柳田は言った。周囲に熱線をばら撒いたり尻尾を振り回したりして蹂躪しつつ、その進路はほぼ北に向かっている。

《北……。拙いな。このまま進んで行けば、佐世保に突き当たるぞ》

「おいおい、あそこって確か……」

「防衛海軍の基地と、艦娘隊の佐世保鎮守府がある場所だ」

三澄の言葉を聞いて呻く増田に、柳田は頷いて先を続ける。

ゴジラにどんな意図があるのかは分からないが、ここで食い止めなければ佐世保だけでなく、進路上にある地域にも被害が広がってしまう。

「着地場所、どうするんだ？ あんまり時間が無いようだが」

増田が、柳田に尋ねた。

見ると、ゴジラは市街地中心部から外れるにつれて、徐々に移動速度が上がっているようだ。こんな状況では、落ち着いて着陸させられる場所は無いだろう。

進路を塞ぐようにしても、攻撃に晒される危険がある。かと言って安全な場所では、後ろから追いかけていなければならなくなる。

そこまで考えて柳田は、あることを思い出して「そうだ」と声を漏らした。

「何だ？ どつか良い場所でもあったか？」

前を見たまま聞いてくる増田に、柳田は首肯する。

「ああ。——機龍Ⅱをこのまま、上空で切り離そう」

「はっ？」

柳田の言葉に、増田は素っ頓狂な声を上げた。今にも振り返りそうな勢いだったが、2号機の操縦桿を握る彼は、それをぐっと堪えている。

「柳田、本気で言ってるのか？ 下手すりゃ、俺たちまで巻き添え食って落ちる」

「45年前は、それをやってのけたんだ。上手く切り離せば、あとは俺が何とかする」

「……どうりで家城少将に気に入られていたわけだ」

「あの人は武勇伝に事欠かなかったからな……」

増田の呆れ声に、柳田は呟くように返す。

二人の間に沈黙が訪れたところで、1号機の三澄から通信が入った。

《柳田中尉》

「はい」

《空中発進を許可する。2号機、3号機共に切り離し用意だ》

「——了解！ 機龍Ⅱ、発進準備！ ブースター、点火用意！」

三澄から下された指示に柳田は素早く答え、発進準備の作業に入る。柳田が右手にあるスイッチを操作すると、吊り下げられたままの機龍Ⅱの脚部と背部の46式バックパックに格納されていたブースターが展開する。

いつでも点火が可能になったところで、増田が柳田に話し掛ける。

「ほんとにやるのかよ？」

「許可は貰った。2号機の機体制御は任せたよ」

「……あいよ」

溜め息を吐きながらも増田は操縦桿を握り直し、機体を安定させる。柳田はそれを確認すると、後ろで機龍Ⅱの尻尾を吊り下げている3号機の後部座席に、無線で呼びかけた。

「朝村少尉。準備は良いか？」

《いつでも行けます》

「カウント3で、機龍Ⅱを切り離す。ちよつとでもタイミングをずらせば、バランスが崩れて事故は免れない。——行くぞ」

《は、はい！》

朝村少尉の返事を聞くと、柳田は2号機と機龍Ⅱの首筋を繋ぐワイヤーの接続強制解除用のスイッチに手を伸ばす。

「2号機、接続強制解除、用意！」

《3号機、接続強制解除、用意！》

「3、2、1——解除！！」

柳田の合図と共に、機龍Ⅱの首筋と尻尾に繋がれていたワイヤーが弾け、機体が下に向かって降下し始める。

衝撃で揺れる2号機の中でワイヤーを収納し、柳田はすぐさまブースターに火を入れる。

「機龍Ⅱ、発進！！」

炎上する長崎市街を進むゴジラに向け、機龍Ⅱのブースターが全開で火を噴く。一瞬滞空した後、機体は一気に加速する。

銀の龍は尾を撓らせ、街にブースターの轟音を響かせながらゴジラ

へと突撃。

柳田はあつという間に遠くなくなっていく龍の背中を見ながら、遠隔操縦で必死に起動が逸れないようにコントロールする。

脚部とバックパックのブースターによる推進力で、機龍Ⅱはゴジラへと急接近し、銀色の巨体を体当たりさせた。

反応の遅れたゴジラは右半身後方に体当たりを受け、斜め前へと弾き飛ばされ、瓦礫と埃が巻き上げられる。

機龍Ⅱはゴジラに体当たりした反動を利用して、半ば強引に着陸すると、ゴジラが飛ばされた方に身体を向けた。

「機龍Ⅱ、着陸完了——」

一先ず不意打ちは成功し、柳田は2号機の後部コクピットで安堵する。機体バランスの制御が危うくなり掛けたが、何とかなったようだ。

「つたく、3式」より倍はデカいつてのに、よくやるな。柳田……」
感嘆と呆れの混じった声で、2号機の操縦桿を握る増田が言う。

柳田は機龍Ⅱの損傷個所が無いかをモニターを見て確認しつつ、苦笑いを浮かべて答えた。

「帰ったら、中條さんにどやさされるな」

「そら、あんな無茶やったらな。整備長のあの人、一番ヤツの面倒を見てるんだ。腹括れ」

《二人とも、お喋りはそこまでだ。そろそろゴジラが起き上がるぞ。柳田、機体チェックは済んだか？》

1号機で先行してゴジラの様子を偵察していた三澄から、無線通信が入る。

「こちら柳田。機体、武装共に異常はありません」

《了解。武装使用のタイミミングは全て柳田に一任する。遠慮はするな》

「了解。機龍Ⅱ、戦闘態勢に移行します」

無線が途切れると柳田は意識を切り替え、天井のモニターに視線を移す。モニターには、機龍Ⅱの頭部に内蔵されたカメラからの映像が

映し出されていた。

画面の向こうでは白く濁った目をしたゴジラが、こちらの様子を注意深く伺っているようだった。その瞳を見つめていると、まるで得体の知れない何かに呑み込まれそうな気分になる。

「武装ロック解除。攻撃開始」

柳田は一度頭を振って画面を睨むと、右手の操縦桿に取り付けられたトリガーを引いた。

柳田の動きに同調するように、機龍Ⅱが金属的な咆哮をあげた。

バックパックユニットの両肩から前の部分に突き出した部分、その横に左右対称に設けられた46式8連装ミサイル発射装置が開く。多数の小型誘導ミサイルが次々に吐き出されると、それらは曲線を描いて前方の敵に殺到した。

次々にミサイルが着弾、爆発し、ゴジラは呻き声を上げる。

間髪入れずにバックパックの敵に面したユニットから、ロケット弾も発射された。

通常の艦艇や陸上兵器では考えられない様な数の弾を、機龍Ⅱは雨あられと撃ち出し、辺りは爆発による煙が充満していく。

目の前の相手を敵と認識し、ゴジラは体勢反撃に出ようとするが、機龍Ⅱはそれを許さない。ミサイルの発射を一旦止めつつ、ロケット弾だけは叩きつけながら前進を開始した。

両腕に装着し、バックパックとケーブルで繋がった46式2連装レールガンユニット二つを照準すると、そこから黄色い光を帯びた高速の弾丸が、ゴジラの胸を穿たんと飛び出す。

ゴジラは悲鳴にも似た声を上げるが、機龍Ⅱは柳田に操られるがまま、一切の躊躇も無く攻め立てていった。

「……………」

2号機後部のコクピットで、柳田はモニターを見つめながらゴクリと生唾を飲む。殆ど勢いに任せるまま攻撃に出たが、思いの外ゴジラに効いているらしい。こちらに圧倒されて、向こうからの反撃はこち

らに届いていない。熱線を吐かれないかと冷や汗を掻いたが、こちらも今の所その傾向は無かった。

しかし、油断は出来ない。相手はあのゴジラだ。その中でも、飛び切りしぶといことで知られている個体。ふとした瞬間に攻撃を受けて、大破に追い込まれることも無いとは限らない。

柳田はグローブをはめた手が汗ばむのを感じながら、左右それぞれに握った操縦桿を前に倒す。同時にカメラの映像から、機龍Ⅱがゴジラに接近していく様子が映る。

右手を一度操縦桿から放し、右側に配置された数々のボタンの内の一つを押し込む。すると、機龍Ⅱから送られてくる映像のモニターとは別に、コクピットに埋め込まれている機体状況が示された画面の一部が青く点滅した。画面には機龍Ⅱの前方の機体図があり、右腕部のレールガンユニットがその光で塗られている。

次に機龍Ⅱの右側面図が写されると、レールガンユニットの砲身の間から、短剣のようなものが突き出ていた。レールガンユニットに内蔵された46式メーサーブレードが、使用可能になったことを示している。

「——見える場所まで移動するか？」

格闘戦を仕掛けようとしていることを、窓の向こうに見える機龍Ⅱの背中を見て察した増田は、柳田に声を掛ける。

「ああ。熱線を撃たれても、すぐ回避出来る距離で良い」

「分かった。中佐、行ってもいいか？」

増田は頷いて、無線で1号機に呼びかける。返答は直ぐにあった。

《許可する。ただし無茶はするな》

「了解。2号機、移動を開始する」

そう言つて、増田はしらさぎⅡ2号機の機体を傾け、ゴジラと機龍Ⅱの戦闘域にぎりぎりまで接近する。機体を慎重に移動させながら、肉眼でも戦闘の様子が分かる場所を確保する。

その間に、機龍Ⅱは右腕から突き出したメーサーブレードで、ゴジラとの格闘戦に移行していた。

ロケット弾の発射を止めて、機龍Ⅱはゴジラに正面からぶつかる。同時に右腕のレーザーブレードをゴジラに突き立て、電流を流し込もうとするが頑丈な皮膚に阻まれる。レーザーブレードはあっさりとは折れ曲がってしまうが、機龍Ⅱは構わずゴジラを力づくで押す作戦に切り替えた。

ゴジラも対抗して押し返そうとして、両者の力は拮抗する。互いにその均衡を崩そうと体勢を変え、その度に周囲のビルや家屋が巻き込まれる。

このままでは埒が明かないと判断した柳田の操作により、機龍Ⅱは一度ブースターを噴かせて後退する。

着地の衝撃を身体で上手く流して再び攻撃に転じようとしたところで、黄色く光る双眸に搭載されたカメラが、青白く光るゴジラの背びれを捉えた。

機龍Ⅱは左右のミサイル発射装置から誘導ミサイルを連続発射し、ゴジラの熱線を回避すべく身を屈める。

ミサイルの着弾と、ゴジラの熱線発射は全く同じタイミングとなった。

撃ち込まれた数十発分の爆発でゴジラは照準を狂わせ、熱線はバックパックの右肩のミサイル発射装置に直撃した。

「バックパック、右肩部分に被弾した！」

柳田は舌を打ちながら、被害状況を確認する。損害状況モニターには、バックパックユニットの右半分の武装部分が赤く光っていた。ミサイル発射装置に直撃したことで、誘導ミサイルは使用不可。ロケット弾の発射装置は無事だったが、無理に使えば爆発を起こす危険性があった。

「中條さん、すみません！」

状況を素早く捉え、柳田は機龍Ⅱに次の命令を送った。

柳田からの信号を受信し、機龍Ⅱは上半身を前に倒す。すると背負っていたバックパックユニットの右半分が、ブースターを噴かせな

がら分離する。

ユニットの右半分は機龍Ⅱの背中を離れ、正面にいるゴジラに激突した。それを両手と腹で受け止めて踏ん張ろうとするゴジラは、しかしブースター全開のユニットに押され、後退りする。建物を幾つか薙ぎ倒しながら数百m進むと、ややあつてゴジラを押ししていたユニットが突如、爆発した。

柳田が押したスイッチの信号を受け付け、自爆を起こしたユニットは、残存していたロケット弾と誘導ミサイルまでも誘爆させる。それに伴って爆発は大きなものとなり、ゴジラはその衝撃でたまらず転倒した。

そこにバツクパツクユニットの左半分も叩き込まれ、続けざまに爆発・炎上が引き起こされる。

ゴジラを襲った爆発は周囲の建物も巻き込み、周囲は激しい火災に呑み込まれる。機龍Ⅱはゴジラの様子を確かめるべく、身軽になったその身体で、炎と煙に包まれた一帯に双眼を向け続けた。

ややあつて、火の中からゴジラが現れる。その瞳には明らかな憎悪の色が宿っており、鳴き声を上げると機龍Ⅱに真っ直ぐ向かう。

一方の機龍Ⅱは、バツクパツクとの接続が途切れたことで使い物にならなくなったレールガンユニットを両腕からパージした。

『重装型』から『高機動型』へと移行して身軽になった機龍Ⅱは、両手をドリル状の47式対獣掘削装置（スパイラルクロウ）に変形させる。両手がドリルと化した機龍Ⅱもゴジラへと接近し、再びぶつかり合う。

掴みかかって来るゴジラに対し、機龍Ⅱは左腕のスパイラルクロウで斬りつけ、先ほどの爆発で抉れた皮膚に右腕を突き刺す。ゴジラの左胸に刺さったスパイラルクロウは唸りを上げて回転し、皮膚を食い破っていく。これに悲鳴を上げたゴジラは逃れようとするが、ドリル形態を解除した左手と追撃によって失敗した。

右手のスパイラルクロウの4分の1が皮膚に食い込んだところで、ゴジラは機龍Ⅱの右腕を掴む。ゴジラの背びれが発光するのを確認した機龍Ⅱは、スパイラルクロウを引き抜いて、脚部のブースターを

噴かして離脱。直後にゴジラの単発の熱線が吐き出され、機龍Ⅱはそれを素早く身を屈めることで回避した。熱線が途切れると機龍Ⅱは即座に上体を起こして、反撃に転ずる。

胸部ハッチが開き、中から47式ハーパーメーサーユニットが露出する。口の内部に搭載された47式3連装メーサー砲と同時に黄色い閃光がゴジラを襲う。頭部と胸部の傷口にメーサー攻撃を受けて、ゴジラ呻き声を発して苦しみ悶える。

その後も絶え間なく浴びせられる機龍Ⅱのメーサーにゴジラは遂に耐え切れず、地面に右半身から倒れ込んだ。

「よし……」

機龍Ⅱから送られてくる映像や、コクピット内からの景色を見て柳田は呟いた。

熱線を一発貫つた以外は、ほとんど機龍Ⅱが一方的に攻め込み、戦闘は優位に進んでいる。予想以上に皮膚が固く、メーサーブレードが通らなかつたときには攻めきれないと思つたが、案外どうにかなつていた。

「すげえ……あのゴジラを押しついでやがる」

前の操縦席で、増田が戦場を見ながら感嘆の声を出す。

柳田たちが今日にしているゴジラは、この5年間で世界中の国が迎撃を試みたがダメージ一つ通すことすら叶わなかつた相手だ。怯ませる程度なら出来たものの、硬い皮膚を貫くことが出来ず、熱線への対処手段も持ち合わせていなかつたために悉く返り討ちに遭つていた。

「流石は機龍の後継機つてとこだな」

Multifighting System 3

3式多目的戦闘システム。通称3式機龍。1体目のゴジラの骨をメインフレームとして2003年当時に建造されたその機体は、当時確認された5体目のゴジラに対して、大きな手傷を負わせている。翌年には5体目と共に海底へと消えたが、その運用思想は47式機龍Ⅱにも受け継がれた。

DNAコンピュータによる高速処理と巨大な身体に見合わない

驚異的な機動性能は、機龍Ⅱもこの戦闘で如何無く発揮している。90年代に登場したM・O・G・E・R・Aやメカゴジラの開発者たちは、これに大層驚いていたとも言われる。

そして、3式機龍が建造当初搭載していた必殺兵器を、機龍Ⅱもまた装備していた。

「中佐。絶対零度砲アブソリュート・ゼロの発射許可を。ここで一気に決めます」

柳田の無線への呼びかけに、1号機の三澄が応答する。

《許可する。1発撃てば30分は動けなくなる。——外すなよ》
「了解」

柳田はすぐさま手元にある、他のスイッチ類とは違い大きくスペースを取った赤いボタンのカバーを外し、右手の人差し指を宛がった。スイッチのカバーが外れると同時に、胸部ハッチがハイパーメーサーから別の砲を発射するモードに切り替わる。

47式絶対零度砲アブソリュート・ゼロ。先代の機龍にも搭載されていた、絶対零度の光弾で目標を瞬時に凍結し、分子レベルにまで崩壊させる強力な一撃を放つ砲だ。

威力が高い分かつてはチャージから発射までに時間を要していたが、機龍Ⅱが持つそれはその時間を1秒以下にまで短縮。ボタン一つで即座に発射出来るという代物。その反面チャージから発射と、その後のオーバーヒートを防止するための冷却にエネルギーが取られ、一定時間身動きが取れなくなってしまふ。おまけに最大稼働時間が大幅減となる、諸刃の剣だ。

それは相手に無防備な姿を晒してしまうということにもなり、外すことは出来ない。

機龍Ⅱの機体図を映すモニターでは、胸部ハッチ部分が青く点滅して何時でも発射可能なことを柳田に伝える。それを確認した柳田は、絶対零度砲を発射すべく、赤いスイッチを深く押し込んだ。

大きく開かれた機龍Ⅱの胸部ハッチで、触れれば今にも凍ってしまいそうな蒼い光が球状となっていく。1秒足らずで蒼い球体は発射され、ゴジラを砕く一撃が発射された——。

機龍Ⅱから浴びせられるレーザーが止み、ゴジラは痛みにもがきながら敵に濁った目を向ける。

機龍Ⅱの胸の中央部で何か引つ込み、また別の何か露出してきた瞬間、ゴジラは本能的に己の危機を感じ取った。

ゴジラの背びれが青く光り、黄金の稲妻が鋭く迸る。

蒼い光弾が発射された瞬間、ゴジラはかつて千年竜王キングギドラの力を吸収して獲得した、青と金が混ざり強化された熱線——引力放射能熱線の奔流が、その光弾に向けて解き放たれた。

絶対零度の弾がゴジラを氷漬けにするかと思われた時、倒れたままのゴジラが威力を強化した熱線によって阻まれる。

光弾は熱線との接触面を凍らせ、砕きながら尚も進もうとする。しかしゴジラから延々と吐き出される熱線によって弾は目標から大きく逸れ、遙か後方に着弾した。

ゴジラに無理矢理逸らされた絶対零度の弾により、着弾した周辺にあった建物は一気に氷漬けとなり、跡形も無く崩れ去っていく。氷の欠片と僅かな瓦礫や構造物を残して、その一帯は瞬く間に更地となるのだった。

「くそっ、外したッ！」

柳田は右手で作った拳で膝を打ち、画面の向こうのゴジラを睨む。避けようが無い一撃の筈だったが、まさかあんな手段に出るとは全く予想していなかった。

「渾身の一撃を力技で回避するとはねえ……」

操縦席にいる増田も、ゴジラの芸当に舌を巻いて窓の外を凝視している。

「早く次の行動を——ッ!!」

慌てて左右の操縦桿を動かす柳田だったが、機龍Ⅱからの反応が無

いことに気付いて機体状況を示すモニターを見る。

モニターには機龍Ⅱの全身機体図が赤く点滅し、『冷却中』という警告テロップが表示されていた。

「しまった……！」

機体が絶対零度砲を撃った反動で、行動することが出来ない。舌を打ってカメラ映像を確かめるべく顔を上げると、そこには機龍Ⅱの目の前まで迫ったゴジラの姿が映し出されていた。

ゴジラは機龍Ⅱに接近すると、くるりと身を翻す。回転する勢いを伴って、ゴジラの尻尾が機龍Ⅱの頭部を直撃し、左目が破損して光が消える。その勢いで機体が右に倒れ、瓦礫と埃を巻き上げた。

機龍Ⅱを再び視界に収めたゴジラは、敵が動かないことを確認すると天高く吠える。

倒れた敵に追撃を加えることはせず、ダメージを負って戦意を失ったゴジラは進路を変更。元来た道に戻るように海へと帰っていった。

《——柳田。柳田、機体の損傷具合を報告しろ》

海に消えていくゴジラを窓越しに呆けるように眺めていた柳田は、三澄からの無線でハッと我に返った。

慌ててモニターをチェックし、機龍Ⅱの損害状況を素早く確かめる。

「こちら柳田。損害状況……左眼カメラ大破。絶対零度砲の発射に伴い、現在機体を冷却中。重装型の武装は全て喪失。それ以外の損害は無し。……遠隔操作システムも無事です」

《了解。30分後に再度チェック。機体を起こして、帰投する。春日基地で一泊した後、東京へ飛ぶことになる。パイロット兩名、明日も宜しく頼む》

《了解！》

「了解」

3号機パイロットの岡田大尉と、2号機パイロットの増田が三澄の言葉に応答する。

《取り敢えずはこのまま待機だ。念の為、警戒は怠るなよ。皆、お疲れ様》

その言葉を最後に、1号機との通信が一旦終了する。それを確認すると、柳田はそれまでの緊張が一気に解けて、背もたれにへたり込んだ。

「お疲れ様だったな。柳田」

背後の柳田の様子を感じ取った増田が、苦笑交じりに労いの言葉を掛ける。

「ああ……。一時は駄目かと思つた」

機龍Ⅱが行動不能に陥り、カメラのすぐ近くに映るゴジラを目にしたときには、心臓が止まるような想いがした。自分はやや離れた場所にいたにも関わらず、死ぬかと思つて身構えたほどだった。

「まあ、^{機龍Ⅱ}アレも無事だし俺たちも無事だ。今はそれで良いつてことにしようや」

「そうだな……。そうすることにするよ……」

「で、帰つたらどうするんだよ？ 墓前に報告か？」

「ああ。家城少将に、生きて帰つて来られたことを言わなきゃな」

柳田は、かつて孫のように可愛がつてもらつた老婆——今は亡き家城茜の優しくも頼もしきを感じる微笑みを思い出す。

自分がこの世界に入ると決めてから世話になつた彼女には、感謝しても感謝しきれない。それは、彼女がこの世を去つて3年が経つた今も変わらなかつた。

柳田は、再びゴジラが消えていった長崎の海を眺める。やや傾き始めた太陽が照らす青々とした海は、見る者をどこまでも深い場所まで引き摺り込んでしまいそうに思えた。

その海から人間を殺すべく現らわれる、破壊神。

機龍Ⅱの初陣は、まあまあのものでつたと言えるだろう。だが、もっと上手くやれた筈だとも思う。

今度ヤツと相対した時には、翻弄してやるぐらいの気持ちで行こうと決意を固めつつ、柳田は水平線の向こうをじつと眺めるのだった。

第21話 仲直り

ゴジラの長崎、沖縄襲撃から二日が経った6月14日。拓海は再び呉鎮守府へと来ていた。

朝に横須賀を発って厚木から航空機に乗り込み、昼前には呉に着。迎いの車で鎮守府へ行く途中、拓海は街の様子を目にした。

1週間ほど経って彼方此方に重機が散見され、破壊された街の片付けが進んでいる。中には、復興に当たる防衛軍の姿も見受けられた。

空港から鎮守府まで送り届けてくれた運転手に礼を言い、拓海は車を降りる。

1週間ぶりに来た呉鎮守府は、街と同じく二大怪獣の戦いの爪痕が残ったままだった。

屋根が壊れた鎮守府本庁舎には工事用の骨組みが生まれ、港の岸壁近くのアスファルトは大きく窪んでいる。

それらを眺めながら、拓海は窪みの近くに足を向けた。

近づいてみると、花が一つ横たわっていることに気付く。色褪せていることから、ここに置かれてから日が経っていることが分かる。

そこは、呉市街戦で犠牲となった磯貝風介——の千切れた足が落ちていた場所だった。

磯貝には、良い印象など一つとして無い。初対面こそ表面上は人が良さそうに見えたがそれも一時的なもので、直ぐに本性を現した。自分勝手に妄想にも近い言動を繰り返す磯貝に、拓海が反感を持つのは当然のことだった。

彼が何故、榛名に執着しあのような言動を取るようになったのか拓海は知らない。それを知るつもりも無い。

しかし、一つだけ言えることはあった。

「俺は、アンタのようにはならない」

独り呟き、拓海は静かに黙祷を捧げる。その黙祷は彼への鎮魂というよりも、自分自身への誓いだった。

「白瀬さん」

不意に後ろから声が聞こえて、拓海は目を開けて振り返る。声の主は、潮風に揺れる銀髪を抑えている翔鶴だった。

翔鶴は、拓海の足元に視線を向けて驚いたように小さく目を見開いてから、ふと柔らかく微笑む。

「磯貝少将にご挨拶ですか？」

「そんなんじゃないです。ただ、目の前で人が死ぬのを見るのは、初めてだったので……」

誓いのことは言わず、拓海は事実だけを述べる。一方で後ろめたさのようなものも感じて、翔鶴から視線を逸らした。

実際、拓海は人の死を目の当たりにするのは初めてだった。幸か不幸か、そういうものを見なくて済むような場所で暮らして来た。だが、この世界は違う。

拓海が足を踏み入れた世界は、今まで生きていた世界以上に危険な場所だ。明日、目の前で話をした人が深海棲艦や怪獣によって殺されてもおかしくない。磯貝の殺される様子だけでなく、呉市街に広がっていた光景を目の当たりにして、拓海はそのことを一層強く感じていた。

「そうですか……」

翔鶴は拓海の隣に歩を進めて、窪みに向けて暫し目を閉じる。

その間、拓海は海の波打つ音を聞きながら、黙祷する彼女の横顔を見つめていた。

翔鶴は黙祷を終えて目を開くと、拓海がじっと見ていることに気付いて、顔を向ける。

「あの、白瀬さん？」

彼女の声で拓海は我に返ると、「すみません」と言つて首を振った。ただ、見惚れていたわけでも、見つめていたことについて恥ずかしさを覚えているわけでも無い。横顔を見ていて、純粹に気になったことがあったからだだった。

「翔鶴さん、磯貝少将と仲良かったんですか？」

黙祷をしている翔鶴の表情は、親しかった人に向けるように悲しうだった。彼女は磯貝の指揮下には無かったし、先日の様子だと仲が良いようにも見えなかった。それにも関わらず、あのような表情をしたのはいつたい、どういうことなのだろうか。

拓海の疑問を受けて、翔鶴はゆっくりと首を左右に振った。

「いいえ。事務的な会話をするだけでした。その、よく分からない人でしたから」

「分かることと言ったら、『榛名が好き』ってことくらいですね」

翔鶴はその言葉に苦笑はするも、否定はしなかった。

「そうですね。ただ——」

「……ただ？」

翔鶴は何かを言い掛けて、口を噤む。

「いえ。何でもありません」

「はあ……」

誤魔化すように笑う翔鶴に、拓海は首を傾げつつも何も言う事は出来なかった。元々磯貝と翔鶴の関係について大した興味は持っていなかったの、拓海はその話題を切り上げることにする。

「そういえば翔鶴さんは、どうしてここに？」

話題転換とばかりに、拓海は彼女がここに来た理由を尋ねる。

「外を歩いていたら、偶然白瀬さんを見つけたんです。——また、

榛名さんとお話されるんですか？」

これ幸いとばかりに話題に乗って来たことに少々違和感を覚えたが、特にそのことで話の腰を折ることはせず、肯定する。

「いい加減、今の状態は何とかしたくて。多分に俺が悪いですし、このまま喧嘩別れ何て嫌ですから」

榛名とはもつと仲良くなりたいたいと思う拓海としては、今の状態はとも好ましくない。どうしても話したくないことはあるが——譲歩することも考えた方がいいのだろう。尤も、今の拓海は榛名に話す内容を選び好み出来るわけでは無いのだが。

「私からはこんな事しか言えませんが……。ちゃんと仲直り、してくださいね」

「はい。それは勿論」

心配そうに見つめてくる翔鶴に、拓海はしつかりと頷く。いつまでも先延ばしにはしたくないので、今回は天変地異が起きようとも仲直りを絶対しよう、というぐらいの覚悟で来ている。

そんな拓海の顔を見てか、翔鶴は頬を綻ばせた。

「その様子なら、大丈夫そうですね。応援しています、白瀬さん」

「——その、俺は応援される立場じゃないと思うんですが」

「それでもです。厚意は受け取っておかないと、嫌われますよ?」

「——ありがとうございます」

翔鶴の笑顔に圧倒されて、拓海は素直に礼を述べる。身長は自分のほうが高い筈だが、何故か翔鶴の身体の方が大きいような気がしてきた。

恐ろしいものでも見るかのような拓海の間を、翔鶴はきよんとした顔で見つめ返す。その眼差しが余りに純粹なものだったために、思い過ぎであることに直ぐに気付いて安堵する。

「白瀬さんは、これからどちらに?」

拓海の視線の意味を翔鶴が知る由も無く、彼女は行き先を尋ねた。

「ああ、待合室の方に行こうかと。そっちで、榛名と待ち合わせをするんで」

「分かりました。それでは行きましょうか」

翔鶴は頬笑みを浮かべてくるりと後ろを向くと、本庁舎へと向けて歩き出す。

腰まで届く髪を揺らしながら歩く翔鶴の後ろ姿を見つめながら、拓海は心の中で非礼を詫びつつ、彼女の後に続くのだった。

本庁舎に入ってみると、中は意外と綺麗なものだった。屋根が崩れ、一部が焼け焦げたために外では修理工事用の骨組みが組み立て痛々しいものだったが、少なくとも玄関ホールの辺りは無事だったようだ。

翔鶴は、自分の部隊の司令官のところに行く用があるからとその場

で別れた。

階段を上がって2階へ行く翔鶴を見送りつつ、拓海は1階の玄関の直ぐ傍にある待合室に赴く。

待合室はやや奥行があり、5人掛けのベンチが3列ほどに分けて並べられていた。ベンチに向かい合う白い壁には薄型のテレビが設置され、近くには幾つかの掲示物がある。部屋には誰も居らず、一人で待つには少しばかり寂しい。

拓海は窓際にある、手前の列の最後尾のベンチを選ぶと、適当に座って息を吐く。背もたれに身を預けて、天井を見上げた。

「……あれから、もう1ヶ月なんだよな……」

一人呟き、拓海は改めてこれまでのことに思いを馳せる。

南鳥島での一連の出来事、横須賀鎮守府にやって来た時の事、この呉の街で目にした事……。長いようで、あつという間の1ヶ月だった。今ではもう、こちらでの生活に慣れてきてすらいる。

今更、元いた世界に帰りたいかと聞かれたところで、拓海としては首を横に振るだろう。それだけ、この生活が良いと思いはじめた。それに、帰れたとしても自分が生きていた時代に行けるとは限らない。

ただ、一つだけ心残りがあるとすれば。

「……彩水」

向こうの世界に残して来た、妹のことだった。来た直後は兎も角として、光樹の娘だという人物に会ってから、ずっとそのことが引っ掛かっていたのだ。

名前の同じあの少女は、本当に妹なのだろうか。顔は全く似ても似つかないが仕草や言葉の端々や表情の浮かべ方からして、どうしても彼女の影がちらつく。今のところ確信が持てず、半信半疑の状態だ。

そして、彼女がもし本当に妹だったとするなら、拓海のいた世界ではどうなってしまったのか。こちらは皆目見当も付かない。少なくとも、何らかの形で死を迎えたことになるのだろうか。

「……駄目だ。あれからずっと、こんなこと考えてばかりだ」

拓海は眉間に皺を寄せて首を振り、仰向けから俯く姿勢に変える。

榛名との問題もある。この先、自分はやっていけるのだろうかと自己嫌悪に陥り始めた時だった。

「……お久しぶりです」

すっかり聞き慣れた、耳に心地良い声が拓海の耳を打つ。顔を上げて声のした方、待合室の出入り口を見ると、巫女服のような恰好をした少女がこちらを見つめていた。

「えつと……久しぶり」

無言で同じベンチの右端に座った榛名に、拓海は恐る恐る声を掛ける。一人か二人分空いたスペースに、拓海は何とも言えない気持ちを抱きながら榛名を見た。

「はい……。お久しぶりです……」

それ以上会話は続かず、沈黙が訪れる。榛名は前を向いたまま、一向に拓海の方を見る気配が無かった。拓海も榛名から顔を逸らし、自分の足元に視線を落とす。自分の情けなさに、拓海は組んだ手に力を籠める。

拓海が司令官になろうと思ったのは、榛名がいたからだ。例え榛名があの時南鳥島にいなかったとしても、この世界にいると分かった時点で拓海は迷わずこの道を選んだだろう。

しかし、目の前にいる彼女はかつて見ていた画面の向こうの存在では無い。人と寸分違わない喜怒哀楽と、体温を持っている。人の手で作られた存在だが、彼女たちは間違いなく「人」だと拓海は思う。この世界に来てから、拓海はそれをより強く感じていた。

だというのに、この有様だ。榛名相手なら、言わなくても大丈夫だろうと自分の勝手な想像を押し付けたために、こんなことになっている。それが、拓海には悔しくてたまらなかった。

「白瀬さんは……。その、元気……。でしたか？」

聞こえてきた榛名の声に、拓海は思わず顔を上げて彼女の方を見る。榛名は相変わらず前を向いたままだったが、視線だけはこちらに送って、様子を窺っているようだった。

「あ、ああ。榛名は……?」

「私も、元気です……」

再び沈黙が、場の空気を支配する。

あれを話そう、これを話そうと色々頭の中で準備してきたのだが、いざ顔を合わせると途端に何を話せば良いのか分からなくなる。言葉は喉元まで出掛かっているのだが、つかえてしまう。そんなもどかしい状態のまま、室内に壁掛けの時計の音が一定のリズムを刻んで、空しく響いていた。

「は——」

「し——」

拓海が声を掛けるのと同時に、榛名が口を開く。重なった声に続く言葉は無く、三度沈黙する。気が付けば二人とも顔を上げており、お互いを見つめ合ったまま硬直していた。

「……榛名から、どうぞ」

このまま黙っているのも良くないと思い、拓海は先を譲る。それを受けて、榛名は口を開いた。

「白瀬さんは……自分で解決すると言いました。本当に、お一人で解決出来ますか?」

それは、拓海が1週間前に口にした言葉だった。無表情を貫いたまま問うてくる榛名に、拓海は直ぐに言葉を返すことが出来なかった。

例えば、あの時「自分の力で解決しなきゃいけない」と言ったが、どうやって解決するかまでは考えが至っていなかった。その事が頭を過ぎり、口を噤んでしまう。

「……するよ。……絶対に」

しかしそれでも頑なな気持ちが変わらなかり、拓海は自分に言い聞かせるように話す。それを聞いた榛名は、どんな表情だっただろうか。言いながら俯いた拓海には、窺い知ることとは出来ない。

「……話せば、もっと簡単に解決するかもしれません。それでもですか?」

「ああ……。余程理解がある人でも無い限り、誰にも解決出来ないよ」「そうですか……」

榛名はそう言って目を閉じ、やや下に顔を向ける。拓海は、残念がられていると思っただが、注視してみるとそういうわけでも無いようだった。

拓海としては、これ以上この事について話したいとは思わない。それ故に、話題を少しばかり変えてみようとした。

「代わりと言っては難だけど、子どもの頃のこと、話してもいいかな」横須賀での電の言葉を思い出し、拓海は話題を変えるべく焦り気味に提案する。

そのやり方は流石に強引だったのだろうか。榛名は首をゆつくりと横に振り、再び拓海を真っ直ぐと捉えた。

「昔のことを聞くという意味では変わらないかもしれませんが——」。私が知りたいのは、そういうことではありません」

「じゃあ、いったい何を……」

呟いて、榛名の双眸を正面から見つめ返す。

「貴方が何故、妹さんのことを『呪縛』と言ったのか……：……についてです」

瞬間、拓海は榛名の瞳を凝視したまま硬直する。それは、「あの事」について話せという最後通牒のようにも聞こえたからだだった。

拓海は唇が震えるのを感じながら、口を開く。

「それって、どういう……意味……」

言葉が続かない。口の中が乾いていて、飲み込む唾が無い。それ程に緊張しているのに気付きつつ、拓海は次の言葉を待った。

意外に待つ時間は少なく、榛名は淀みなく次の言葉を口にした。

「私はあの時、自分の姉妹を『絆』と言いました。簡単に言ってしまうえば、大切な『家族』だからです。私は、金剛お姉さまも比叡お姉さまも、霧島も大好きです。ですが白瀬さんは、自分の家族のことを『呪縛』と言いました。それに……。妹さんのことを、あまり思い出したくなさそうでした。……白瀬さんは、妹さんのことが嫌いなのですか？」

躊躇いがちに聞いてくる榛名に、拓海は即座に首を振って否定する。

「いや。嫌いなわけじゃないよ。ただ、今会ったとしても、昔みたいに可愛がってはやれないだろうな……。妹のことを思い出すたびに、吐いてしまいそうになるんだ」

この世界に来る遙か前の自身の醜態を思い出して、拓海は自嘲気味に笑う。あまりに痛々しい表情をしているのか、榛名がこちらに一人分身体を寄せて顔を覗き込んで来ていた。

「妹さんに、何かされたんですか？」

「」

言い掛けて、拓海は口を閉じる。果たして、これは言っても良いことなのだろうか。出来れば、拓海としては表面的な部分であったとしても榛名に踏み込んで来て欲しくは無かった。

——それは、彼にとつてあまりに“酷いこと”であったからだ。

「白瀬さん」

「……榛名？」

更に身体を寄せ、榛名が至近距離で拓海を見つめる。決意の籠ったその瞳に、拓海は知らず釘付けになっていた。

「私は、白瀬さんが何を抱えてたとしても、見放したりしません。貴方には、私が付いています。ですから——白瀬さんが言える範囲で構いませんから、私の質問の答えを教えてください」

瞳は逸れること無く、拓海をしつかり捉えている。その瞳に一切の曇りは無く、その言葉に偽りは全く無い。

——何と力強く、頼もしいことだろう。

これでは、自分が情けないと余計に思えてしまう。

拓海の中にそんな思いが過ぎった時には、自然と口が開いていた。

「——高校2年生の時だ」

「え？」

不意に、榛名の口から驚きが漏れる。それは、拓海とて同じだった。

あれほど一切話すものかと決めていたのに、榛名の言葉を聞いた途端、ほんの少しだけ気持ち軽くなったような気がしたのだ。

自分の小さな変化に多少驚きながら、拓海は話を続ける。

「その時に、妹との関係にヒビが入った……というか。俺が一方的に妹を遠ざけて、それからほとんど話さなくなった……。『呪縛』になっただけなのは、その時だ。——ごめん。これ以上は本当に無理みないだ」

少し話ただけで、胸の辺りがむかついて気持ちが悪くなる。その先に触れようとしただけで、悪寒が全身を襲う。

拓海が胸元を抑え、顔色が悪くなってきたところを見て、榛名は十分と言わんばかりに彼の右肩に手をそつと乗せた。

「大丈夫ですか？」

「……うん。何とか。期待に応えられなくて、ゴメン……」

「いいえ。白瀬さんが本当に辛いというのが、榛名にもよく分かりましたから……」

どうやら、この先は話さなくても良い様だ。

頭の中でそのことを思い出すだけならまだ大丈夫だが、それを実際に口にしようとする強い抵抗感が襲ってくるのが、あの日以来の拓海の身に起きていることだった。その先に踏み込むことで、何もかも失ってしまうことへの防衛反応なのかもしれない。

事実、拓海はもう話さなくていいと分かっただけで、胸の気持ち悪さはかなり和らいでいた。

「落ち着きましたか？」

拓海が息を整えるのを待つて、榛名が声を掛ける。拓海は頷きながら、それに応じた。

「ありがとう。それと、ほんとにゴメン……」

そう言つて、拓海は頭を下げる。

榛名の言葉を受けて、気持ちは確かに軽くなった。榛名になら、話しても大丈夫かもしれないと、今まで頑なに誓っていたことを拓海はここにきて初めて破った。

一方で、話してしまうことで何かが変わってしまうことへの恐れもあった。あの吐き気から、自分が未だ「あの事」を強く拒絶していることも分かった。その所為で、どうにも話が中途半端な形で終わって

いる。だが、これ以上のことは話さなくて済んで良かったとも思う。「もう謝らないでください。白瀬さんが私に話そうとしてくれただけで、十分です。それと、榛名の方こそ、ごめんなさい」

榛名は微笑みを浮かべてから、顔を上げた拓海と入れ違いに、自分の膝に手を乗せて頭を下げた。

「な、何で榛名が謝るのさ」

「勝手に、白瀬さんの傍から去ってしまいましたから……」

「それは俺が悪かったからで、榛名が謝るようなことじゃ——」

拓海は気にしなくていいと止めるが、榛名は頑として首を振る。

「それでも、謝らせてください。あの時私は、納得出来なかったんです。白瀬さんが、何で妹さんのことを「呪縛」だなんて言うんだらうって」

榛名の言うことも、尤もだろう。仲の良かった家族に対して、あの様な物言いが許せなかったのかもしれないと、拓海は思う。

そんなことを考えている拓海の前で、榛名は言葉が続ける。

「——あの時、最後まで話を聞かなくてごめんなさい。……最初から、こうしていれば良かったんです」

それは、とても遠い回り道だった。ここに至るまで、どれだけ思いを巡らせただろう。

拓海は、恐れを抱いていたとしても一歩でも良いから足を踏み出せば良かったのかもしれない。

榛名は、相手がどれだけ頑なであっても食い下がれば良かったのかもしれない。

後々から考えると、「ああすれば良かった」「こうすれば良かった」と思えてくる。だが、感情はおいそれと片付けられるものではない。

目の前で頭を下げる少女を見て、拓海は思わず笑みを溢した。それに気づいた榛名が、きよとんとした目で拓海を見る。

「色々と不甲斐ないところもあるけど……。これからも宜しく。榛名」

言うのと、榛名は頻りに瞬きを繰り返しながら拓海を凝視している。

口元を僅かに開けたまま何も喋らないまま見つめて来る榛名に、拓

海は段々と不安になり始めていた。

それから数秒経ったとき、榛名がくすりと口元を抑えて微笑む。

「はい。こちらこそ宜しくお願ひします。——でも、私を怒らせた責任は取ってくださいね」

「——はい？」

拓海は聞き間違えたのかと思って、榛名を凝視する。

「責任を取ってくださいねと、言ったんです」

「今のでお相子……とかじゃなくて？」

てつきり、お互いに謝って終わりと思っていた拓海は、開いた口が塞がらない。

「今日は一日、私に付き合ってください。白瀬さん？」

既に榛名の中では決定事項であるようで、抵抗は無意味だった。釈然としないものはあるが、まあ良いかと拓海は応じることにする。

「分かったよ」

拓海が首肯すると、榛名は心底喜んでいた。屈託の無い眩しい笑みが、拓海に向けられる。

何はともあれ、これで仲直りをする事は出来たようだ。それが今回の大きな成果だろう。

その後拓海は暫く、榛名とこの1週間の出来事について話していた。ゴジラの襲撃のこともあれば、楽しい話題も上がる。1週間とは言え、この隔たりを埋めようとしたためか時間が過ぎるのはあっという間だった。

昼の時刻が迫り、話は一旦ここで切り上げようと拓海と榛名はベンチから立ち上がる。

その時、呉鎮守府内に放送が流れ、二人のいる待合室のスピーカーからも聞こえた。緊迫した声に、拓海と榛名は表情を強張らせる。

第22話 孤島の6水戦

時々、私は夢を見る。

遠い昔、気が付けば姉妹が皆いなくなっていて、私一人が残される夢だ。敵と激しい戦いが繰り広げられる中で、一人、また一人といなくなっていくた。

戦いが終わった時には、3人の姉と妹は海の底に沈んでいた。

寂しい、とは思わなかった。皆、果敢に戦って沈んだんだ。

私は、幸か不幸か機雷に触れて修理に入り、南へと赴くことは無かった。本来なら私も行っただろう南の海で、仲間の多くが水底に消えていった。

私は、命拾いをした。やがて戦いも終わったが、私は何も思わなかった。「ああ、終わったんだ」という気持ちだが、胸に去来するだけだった。

やがて、私にも他の仲間たちと同じように、母国を去る日がやって来た。

錨を上げて、異国へ行くための航海に出る。

母国の艦としての航海も、これが最後だろう。そう思った時だった。

はらり、と何かが自分の頬を伝う。

何だろうと思つて触ってみると、指が濡れていた。おかしいな、と思つて今度は目元を拭ってみる。やっぱり、濡れていた。

そこで初めて、自分が泣いているんだと気付く。

そんな筈は無いと、私は首を振る。

おかしいじゃないか。私は仲間が沈んでも、姉がいなくなっても、妹が遠くへ消えてしまつても、泣くことなんてなかったのに。

私は、ずっと敵を見続けていた。やがて戦う敵がいなくなつて、後ろを振り返つて気付いたんだ。

私は自分の気持ちを、ずっと押し殺していたんだって。悲しむ暇も余裕も無いと、敵に砲を向けていたんだ。

それに気付いたら、また目元から雫が流れ落ちた。

ぽたり、ぽたり、ぽたり、ぽたり……。
どうして。

どうして、私は一人なんだ？

どうして皆、私を置いて行ったんだ。

一人にしないで。

「不死鳥」の呼び名は、確かに私の誇りだ。でも――。

皆がいないと、私は寂しいんだ。

姉さんたちがいないと、心が張り裂けそうになるんだ――。

目が覚めて、間近に天井が見える。

目元を着込んだピンク色のパジャマの袖で拭うと、僅かな灯りでも濡れているのが分かった。

「また、あの夢か……」

今年の初めに艦娘としての生を受けてからこの方、私は時々こんな夢を見ていた。

姉である暁や、妹の雷と電がいなくなってしまう夢。

「……起きよう」

考えていても仕方ないので、残りの涙も拭き取ってしまう。

枕元に置いた、ライト機能付きのデジタル時計を確かめる。

6月6日。0600。マルロクマルマル

部屋は窓が無く、薄暗いが既に朝だ。要塞の1階はほとんど窓が無い所為で、朝になっても照明を点けないと暗い部屋ばかりだ。

私はそつと、2段ベッドの上段から梯子を伝って床に降りる。

ベッドの下段を覗くと、暁姉さんが涎を垂らして仰向けで眠りかけていた。空調は効いていて涼しい筈だが、暑そうにしながら寝ている姉さんのパジャマは乱れ、タオルケットは蹴飛ばされて壁際に追いやられていた。

「姉さん……」

普段からレディであろうと胸を張っている割に、こういう時になると見た目通りの子どもだ。まあ、それも姉さんの可愛いところではあ

るが、この格好はあんまりにもアレだ。

幸せそうに眠る姉さんのパジャマを直して、タオルケットを掛け直す。これで、誰が起こしに入ってきてきても大丈夫だと思う。

本当に大丈夫なのか……？

パジャマからセーラー服に着替え、帽子を被る。身形を簡単に整えてから、脱衣所として使われている部屋へ向かう。先月の南鳥島での戦いの後に入った工事で、新しく洗面台が追加されたからだ。

隣にある仮設の入渠施設として使われていた部屋も、この時にきちんとした入渠施設兼お風呂として生まれ変わった。あの時は、6水戦の皆で久々にゆっくりと湯船に浸かったな。

まだ寝入っているのか、人の気配の無い要塞の広々とした廊下を歩いて、脱衣所兼洗面所に着く。

扉を開けて、入り口脇のスイッチを押すと、室内が蛍光灯の白い光で照らされる。

やはりというか、誰もいない。そこで不意に、ついさつき見た夢を思い出してしまった。これはいけない。不安になってどうする。

そそくさと洗面台に立ち、棚からハンドタオルを引っ張り出した。鏡を見てみると、随分と酷い顔をしていた。これは、酷いな。さつさと顔を洗ってしまおう。

顔を洗い終えて廊下に出ると、食堂のドアが開いて中から照明の光が漏れているのが見えた。

台所とも繋がっているから、誰かが朝食の準備をしているんだろう。

食堂に入ると、左手のカウンター奥のキッチンで案の定、女性の背中が見えた。

「お早う。貴恵」

私が声を掛けると、その人は振り返る。ショートヘアのその女性は私を見つけると、包容力のある笑顔を見せた。

「お早う、響ちゃん。今日も早いよね。響ちゃんたちは？」

「姉さんは相変わらずだ。幸せそうな顔で寝てるよ。雷や電もまだ寝てるんじゃないかな」

「そっか。後でこっそり、暁ちゃんの寝顔見に行こうかな」

「それは後が大変だと思う」

私が言うと、その人は何を思い出したのか吹き出した。予想だが、私の考えていることとそう変わらないと思う。

女性の名前は、千町貴恵せんじょうたかえ。階級は少尉。司令官代行と一緒に派遣されて来た、オペレーターの一人だ。この要塞の家事を一手に引き受けてくれていて、医務官としての一面も持つ。

目つきは結構鋭いが、それを補って余りある綺麗な人だ。基本的に明るい人で、私たちにとっては姉のような存在。大らかなところもあり、異性を寄せ付けけない様な張り詰めた雰囲気を感じながらも、意外と可愛い物好きでもある。ぬいぐるみが一番好きだそう。

そんな人が、何故軍に入っているのかは、私は知らない。

けれど、私は貴恵の笑顔が好きだ。凍ってしまいそうになる心を、解きほぐしてくれるような温かみがある。

「手伝おうか？」

「ごめん。助かるよ」

私も朝食の準備をしようと進言すると、貴恵が苦笑しながら頷いた。

何せ6水戦と貴恵、そしてもう一人の少尉と司令官代行の分を合わせて9人分だ。用意するにしても大変だろう。

私は食堂を横切つて、台所へと向かった。

朝食を終えて小一時間ほど休憩した後、私たち第6水雷戦隊は食堂の隣に設けられた工廠に来ていた。

神通さんや姉さんたちは、部屋中に散って各々が艤装を身に着け、最終確認を行っている。

私も艤装を着けて、問題が無いか確認する。

主機、よし。主砲、よし。魚雷発射管、よし……。異常は無いみたいだ。

「おう、響。艤装は大丈夫か？」

顔を上げると、貴恵と共にこの南鳥島に赴任して来ているもう一人の少尉、浅上^{あさがみ}颯太^{そうた}が笑窪を浮かべながら私を見下ろしていた。

掘りの深い顔でありながら爽やかな印象を与える顔つきで、身体もよく鍛えられている。一見すれば武闘派のようにも見えるが、彼は艤装整備士官だ。

彼がここに来る以前は、妖精さんだけが艤装を整備していたが、それではどうしても限界はある。損傷自体は艦娘本体と別途に修復ドックに入れることで直せるが、その後の調整は人や妖精さんの手が必要だ。島が包囲されていた時は、妖精さんが担っていたがそもそも艤装整備担当の妖精さんでは無かったし数も少なく、かなり厳しい状況だった。

それも彼が整備担当の妖精さんと共にやって来てからは、かなり楽になった。オペレーターという役割も持っているが、本分はやはりこちらなのだろう。私が今身に着けている艤装も、かなり良い仕上がりになっている。

「Xopoo^{ハトラシヨウ}。調子があつても良いよ。颯太」

背中^ハの艤装に直接付いている12.7cm主砲の反応もかなり良い。動作も素直で、細かい照準も難なくこなせそうだ。

「そうかい。そいつは良かった。何気に響が、ここじゃ一番厳しいからなあ」

「颯太が丁寧^{テニシ}にやってくれるからだよ。皆が無事でいられるのは、貴方のおかげだ」

出撃の前後に、彼が私たちの艤装を一つひとつ夜通しで見つけてくれるのを知っている。

感謝の意味を込めて言つたつもりだったが、颯太は口角を上げたまま悲しげに表情を曇らせた。

「そうか……。そう言つてくれると助かる」

「颯太……？」

「……すまん。ちよいと昔のことを思い出してただけだ」

そう言うと、颯太は何でも無いと笑ってみせる。

私たちと出会う以前に何があつたか分からないが、彼の笑顔はそれ以上の干渉を拒んでいた。元々彼は、積極的に艦娘と仲良くなろうとしていないのは、この1ヶ月ほど一緒に過ごしてきて、知っている。

「ところで颯太」

彼が拒否している以上、そのことについて話しても仕方が無い。気にならないかと言えば嘘になるが、それはぐつと堪えて話題を変え

る。

「何だ？　もう少し調整するか？　哨戒とは言っても出撃だしな」

「そうじゃない。貴恵のことだ」

「千町がどうしたんだ？」

私は、颯太の右の眉が僅かにピクリと動いたのを見逃さなかった。

「まだ告白はしていないのかい？」

「し、知ってたのか……」

「嫌でも気付くさ。この泊地の皆はとづくに知ってるよ」

「やっぱりか……」

知らないのは、当の本人である貴恵くらいだろう。時折、貴恵に熱い視線を向けていたから、すぐ分かった。

「その様子だと、まだなのかい？」

「そりゃあ、な……。告白する以前の問題が転がってるっていうか……」

「同じ部屋だから、チャンスじゃないか」

「それが問題だつて言ってるんだッ！」

恥ずかしいからって、そんなに顔を真っ赤にしなくても。

でも、颯太の言うことも尤もだ。異性が同じ部屋にいるというのは、彼としては気が気じゃないだろう。それに、普通ならそんなことにはならない。

「じゃあ、追い出すのかい？　自分から出て行くってことも出来る筈だけど」

「どっちもやったさ。つていうか、響も知ってるだろ。わざとか？」

「バレたか」

「お前な……」

私も当然、颯太が部屋を別々にしようとは彼は頑張っていたのは知っている。だけど、貴恵は追い出せば強引に戻り、出て行こうとすれば必死に引き留め、こつそり移動しても後からくつついてくるという有様だった。

「まだ諦めてない？」

「当然だろ。同室なんて状況、あいつは良くても俺の気が持たねえよ」

「私が言っているのは告白のことだ」

「……いい加減怒るぞ？」

からかい半分に言ったら、怒られた。顔が怖い。

「ごめんなさい」

「そんなしよげた顔すんな。どっちにしろ、千町には自分が女だって自覚をもう少し持ってもらわないと——」

「それは大丈夫じゃないかな」

私の言葉に、颯太は首を傾げている。まあ、気付かなくても無理は無いか。

あまりに貴恵が一人部屋になるのを嫌がったため、本人に聞いてみたことがある。貴恵は口外しないのでね、と添えた上で教えてくれた。『一人で寝るのが、すつごく怖い。でも、響ちゃんたちは二人ずつだから悪いし、元谷大尉のところに行くわけにも行かないし……。だったら、呉にいた時から良くしてくれてる浅上君のところなら大丈夫かなって。迷惑掛けてるのは分かってるんだけど……』

と、申し訳なさそうな顔で言っていた。本人が「絶対に言わないで」と言っていたので、私から教えるつもりは無い。

因みに恋愛経験があるか聞いてみたら、きよとんとした顔で「無い」と即答された。この様子だと、颯太の気持ちには全く気付いていなさそう。というか、下手をすると……。

「そうなのか……？　　そういや、いつつ朝は寝間着のまま出て行ってたな。他の部屋で着替えてたっけ。——　　っというか、寝る時以外部屋にいないな」

颯太は首を捻りながら呟いている。……うん。こつちに関しては、彼の名誉の為にも言わない方が良さそうだ。

「まさか、気付いてなかったとか？ 1ヶ月もいたのに？」

「うっ……。ほ、ほら。今日の出撃は近海の哨戒だろ？ とつとと行つて終わらせて来い」

誤魔化された。

仕方が無い。こういう時に追求すると、彼は怒り易い。本気で怒ると、かなり面倒なことになる。今日のところはここまでにしておく。

南鳥島から出撃し、私たち6水戦は55kmの沖合を、島の外周をカバーするように航行する。

占領状態から解放されたとは言え、南鳥島や小笠原諸島などでは未だに深海棲艦の出現が確認される。それを警戒した哨戒というわけだ。

いくら監視衛星があるとは言え、取り溢しがあってもいけない。尤も、敵が出現したとしてもイ級などの脅威度の低い相手がほとんどだ。

その所為か、小笠原諸島の方の哨戒も片手で数えられる程度しか行ったことがない。まあ、あちらは人間の目があるので緊急事態にも対処しやすいということなのだろう。

任務とは言っても、楽な部類なものなので大抵は和やかな雰囲気だ。島風に至っては連装砲ちやんと一緒に、辺りを駆け回っているくらいである。

CROCSと接続したカメラユニットや、神通さんの偵察機が辺りを哨戒してくれていることによる安心感もあるのだろう。

「そう言えば響、浅上少尉と何話してたのかしら？」

隣に行く姉さんが進路を私に寄せ、小声気味に話し掛けてきた。

私は素早く、島との通信がどうなっているか確認する。……今のところは、海上でのデータ共有のみで音声通信は繋がっていないよう

だ。

颯太や貴恵に聞かれる恐れは無いと分かって、溜め息を吐く。

「どうしたのよ？ 響」

「姉さん。音声通信が繋がっているかは確かめたのかい？」

「たつ……確かめたわよ！」

この顔は……焦っているな。小声で話しかけて来た時点で、もしかしたらと思ったが案の定のようなだ。

「例え小声でも、通信が繋がってたらどうするんだい？」

「そつ、それは……誤魔化すわよ。そんなに大事な話だったの？」

「それは、もう。他言無用って颯太から言われた」

自称レディーからのあるまじき発言には耳を塞ぎつつ、素直に答える。

「ど、どんな話をしたのよ？」

興味心身に目を輝かせるのはいいが、距離を積めないで欲しい。衝突したら危ないだろう。

「皆にばらしたら怒られるような話だ」

姉さんとの距離に気を配りつつ、ぼかして伝えるが彼女は頻りに瞬きを繰り返すだけだった。ややあつて、顔がみるみると青くなっている。

「へ……」

姉さんも、本気で怒ったときの颯太の剣幕を知っているからか、小刻みに震えてすらいた。あれは姉さんじゃなくても、物凄く怖かったが。

「多分、姉さんも知ってることだと思うけど。それでも聞く？」

「と、当然よっ！」

自慢げに小さな胸を張っているが、やっぱりまだ震えている。本当に大丈夫だろうか。

念の為音声通信が繋がっていないことを再度確認して、姉さんに話すことにした。

「颯太の、貴恵への片想いのことだよ」

これは少なくとも、6水戦の皆知っている筈のことだ。つい先

日、島風や雷、電とも話したし姉さんも知っているだろう――。」「……何よそれ？」

姉さんは良くも悪くも、私の予想を裏切ってくれた。

それから5日後の11日、電が日帰りで横須賀へと向かった。

6日に起こった呉市街戦の情報、その日の日没ごろになって横須賀鎮守府と呉鎮守府の双方から伝わって来たからだ。

私たち6水戦が所属する、第3艦隊の拠点でもある呉鎮守府も被害を受けたそうだ。

巨大怪獣が2体も現れたというのには驚いたが、それよりも更に私たちが驚かせたことがあった。

その場に、白瀬拓海が居合わせたという情報だ。

僅かな時間だが背中を預け、言葉を交わしたと人物がいたというのが不思議だった。

横須賀からは鳴川少将から直接連絡があったが、何でも呉に帰った榛名を訪ねるためということだったらしい。

それを聞いて、私の胸がチクリと痛んだ。だが、それだけだった。いったい何だったんだろうか。

白瀬拓海と言えば、1ヶ月前のことを思い出す。

要塞の3階で実際に彼と話してみても、漠然と私^水たちの司令官になつて欲しいと思った。

それは、白瀬拓海の何かを押し殺した表情を見たからか。それとも、本来持ち得るはずの無い、兄がいるかのような心地よさを覚えたからか。思わず弱音を吐いてしまった。そしてあの時彼がくれた言葉は、包囲下で擦れていた私の心を救ってくれた。

そして敵艦隊の中枢を叩いて包囲を混乱させられた時は、素直に嬉しかった。無力さを感じていた私にも、出来ることはあったんだと思つた。

——ゴジラという怪獣が現れるというのは、全くの想定外ではあつたが。

榛名さんが突然悲鳴を上げるような事態はあつたが、何とか私たちは生き延びることが出来た。

鳴川少将や三笠さんまでもが来たのには面食らつたが、助けに来てくれた皆を見て久しく忘れていた「嬉しさ」が胸の内から湧き上がって来た。

それで油断していたからだろうか。鳴川少将が話を振って、榛名が答えたときの自分の反応には驚いたな。

自分で言うのもおかしいが、本当に驚いたのだ。

ただ自分は、白瀬拓海が榛名に気持ちを伝えたということ聞いただけなのに。元々、彼の気持ちは知っていた筈だ。

だというのに、次から次へと涙が零れてくる。今まで経験したこと無い、不思議な感情だった。

どういうわけか姉さんも泣いていたが、あの時は彼を困らせてしまったことは申し訳ない。私の所為で、他の通りすがりの糾弾を受けてしまったようなものだ。

兎も角、あの感情が何だったのか。その答えに私が辿り着くのは、当分先のような気がする。

ゴジラと言えば、いつの間にか私が一人ぼっちになっている夢は、あの後から見る回数が増えたように思う。

以前は多くても1ヶ月に1回程度だったのが、大体1週間くらいで見えるようになった。絶対と言うわけでは無く、見ない時もある。確信は無いが、ゴジラの姿を見た所為なのだろう。

あの場に居合わせた皆も含めて、あのゴジラには得体の知れないモノを感じる。出来ることなら、近づきたくない。そもそも歯が立たない相手であるのは一目瞭然なので、近づくつもりは全く無い。

……話が逸れた。

えっと、何の話だったかな？

——そう、電が横須賀に行ったという話だ。

電は連絡を聞くや否や、鳴川少将に日帰りで良いから何とか都合が付けられないかと直談判した。

あの控え目な性格の子が、随分と積極的に言っていた。白瀬拓海が巻き込まれたことを聞いて、かなり心配していたな。

急なことだし断られると思っていたら、鳴川少将は若干考える様子はあつたもののその場で承諾していた。

そんなわけで、電は島と本土を日帰りで往復するという強行日程に出た。

少将も言っていたが、こんなことは二度も無いだろう。よく融通が利いたなと思う。

そして電は、本当に1日と経たないうちに帰って来た。

流星に疲れているんじゃないかと思つたが、輸送機から降りて来た電の顔は、この上なく緩み切っていた。

確か、電は白瀬拓海と話をしてきた筈だ。

彼が元気なのかとか、何で呉にいたのかとか、聞きたいことは色々あつた。しかし、電を見るとその話すら出来るかどうか怪しいところだった。

白瀬拓海に何かされたのかと聞くと、電はにやけたまま

『何でもないのです〜』

と言つて迎えに来た私たちの脇を通り抜けて、要塞に入つて行つた。

それが夕飯時になると、何でも無いような顔をして話の内容を皆に聞かせてくれた。

榛名さんと喧嘩のようなことになつていたのには驚いた。こつちにいた時は、そんな雰囲気でもなかったのに。

因みに、電が何故にやけていたのかは遂に話してくれなかった。

二日後、私たちは少し遠出をして硫黄島との間にある海域を哨戒航行していた。

海は比較的穏やかで、空は雲一つない青空が広がっている。こんなところに深海棲艦が出て来るのかと思うが、出て来る時は出て来るから油断が出来ない。

と、耳に手を当てて自分の偵察機と通信していた神通さんが、私たち後続を振り返った。

「敵の駆逐隊を発見しました。南へ約5kmの海域に、ロ級が1隻、イ級が5隻です」

「どうやら、戦闘に突入するようだ。」

艦装の動作を確かめつつ、私たちは速度を30ノットにまで上げる。

すると、神通さんの隣を行っていた島風が一気に速度を上げ、陣形から離脱した。

《島風、先行し過ぎだ!》

無線から、司令官代行の元谷重虎大尉もとやしげとらの焦った声が聞こえてくる。

「だって、私が一番速いんだもん!」

島風はそう言い返すと、私たちを置いて先に敵へ突撃して行く。

《じ、神通! 旗艦は貴女だろう。いい加減、足並みを揃えさせたら――》

「これで良いんです」

遮って、神通が言う。

「そうね! こういう時の島風は頼れるんだから!」

「電もそう思うのです」

「私にちよつかい掛けてくるのは気に入らないけどね」

雷、電、暁が次々に無線に話し掛ける。

《お、おい。響。お前から何か言って――》

「すまないが、元谷大尉。私たちは司令官である鳴川少将が『自由にしてくれて良い』と言っている以上、このやり方は変えられないよ」

6水戦は現在、直接鳴川少将の指揮下に入っている。元谷が強く言っていないのはそのため、あくまで自分は“代行”だということを抑えているからだろう。

“代行”は“新米少佐”よりも扱いや権限は下だ。代行は、担当司

令官の指示を仲介する存在に過ぎない。それだけ、出来ることも制限される。

「私たちを心配してくれるのは嬉しい。だから、本当にマズいことになるまで見守っていて欲しい」

《しかしだな……》

「大丈夫さ。島風を信じて欲しい」

《……分かった》

それきり、無線の向こうから声はしてこなくなった。一応、説得は出来たようだ。

その直後、敵の駆逐隊を肉眼で確認する。

既に戦闘は始まっており、島風が連装砲ちゃんと一緒に駆けまわりながら攪乱行動に出ていた。

次々と主砲や魚雷が撃たれ、当たることはないものの敵は混乱しているようだ。

「単縦陣に移行します！」

神通さんの指示で複縦陣から、彼女の後ろに姉さん、私、雷、電の順番に縦並びの陣形になる。連携のとれた動きで、火力を集中するための準備を整える。

「攻撃、始め!!」

続いて神通さんの合図で、攻撃が一斉に開始された。それと同時に島風は敵から離脱し、私たちとは別に距離を取って攻撃をする。

神通さんの左腕の14cm単装砲4基から次々に弾が撃たれ、後に続いて私たち駆逐艦の12.7cm連装砲が火を噴いた。

何十発と吐き出された弾が、駆逐イ級の頭を貫き、駆逐口級の胴を貫く。外れた弾は、周囲に水柱を作り上げた。

敵が弱ってきたところで、各自が魚雷発射管を稼働させ、目標に照準を合わせる。

「全員、魚雷一斉射です！」

それを合図に、神通さんの4連装魚雷発射管2基、私たち暁型姉妹の計8基の3連装魚雷発射管、島風の5連装魚雷発射管1基から、全部で37本の酸素魚雷が放たれた。

薄つすらと目立たない航跡を描いて、止めを刺す槍が敵駆逐隊に降り注ぐ。

魚雷は敵駆逐艦全てに命中し、巨大な水柱が上がり、口級やイ級が青い血を撒き散らしながら身体を引き裂かれていく。

悲鳴の声を上げながら、敵は瞬く間に海の藻屑となった。

その後は戦闘も無く、無事に南鳥島への帰路に着くことが出来た。島に着いて見れば、もう日暮れ時になっている。

海岸に接した要塞の南の方に上陸すると、元谷大尉たちが私たちを出迎えてくれた。

「第6水雷戦隊、只今帰投しました」

神通さんが敬礼をしたので、私たちも後に続く。

「ご苦労様。怪我は……無いみたいだな。全く、冷や汗が出たぞ」

敬礼を律儀に返しつつ、元谷大尉が溜め息を吐いた。多分、島風が先行した時のことを言っているのだろう。

「それ、島風ちゃんが奇襲を仕掛ける度に言ってますん？」

貴恵が苦笑いをしながら横から声を掛けると、元谷大尉は難しい顔になる。

「そうは言ってもな。島風は無茶をするから、心配なんだよ。敵にル級でもいたら、どうする気だ」

「先月は誰も追いつけなかったよ？」

島風が忙しなく跳んだり走ったりしながら、講義の声を上げる。

「それは対包囲戦の時の話だろう。戦闘データを見たが、あれはかなり危険な賭けだったぞ。今は、敵が小型艦ばかりだったから良いもの……」

私も、彼の心配は尤もだと思う。

ああして説得を試してみたは良いものの、内心では心配で仕方が無かった。あの戦いで自由に動けたことで、島風はすっかり味を占めてしまったらしい。

「大丈夫だってば。私には誰も追いつけないもん」

「だからそれが——」

「言い合いはそこまでにして貰って、そろそろ中に入りませんか？」

颯太が口を挟み、元谷大尉と島風の間を割って入る。

「そ、そうだな。中に入ろうか」

バツの悪そうな顔をして、元谷大尉は踵を返して要塞の方に歩いて行く。

「全く、最年長のクセしてよ……」

「三十路だっけ？ あの人、結構頑固だからねえ……」

ドアを開け、中に入って行く元谷大尉を見ながら颯太と貴恵が話している、島風が口を尖らせて二人の傍に近寄った。

「私、あの大尉苦手だよ。いつともうさいし……」

「奇襲作戦はやりたがらないからな、大尉は。あれで司令官志望か。言っていることには一理あるんだがな……」

「良い人でも現れたら、変わってくれるかな？」

貴恵の発言に、その場の空気が一瞬で凍り付いた。

……貴恵、颯太が微妙な顔で見てるよ。

「……ま、何だ。神通たちも早く中に入れ。艦装の整備をするからよ」

「あ……はい。分かりました。皆、行きましよう」

神通さんは苦笑いで応じ、先に歩き出す。

「……いつも頼らせて貰ってるけど、たまには私を頼ってくれてもいいのよ……」

「おう、ありがとうな。雷……」

「電も力になるのです」

「サンキュー……」

「色々大変なんだね。颯太も」

「島風。言ってくれるなよ……」

3人が口々に言いながら、神通さんの後に続いて行く。

そんな中私の隣では、姉さんが首を傾げていた。

「レディーには分からない世界ね……」

「暁はその調子なら、当面大丈夫そうだな」

疑問符を浮かべる姉さんに、颯太はただ項垂れるだけだった。

「颯太。頑張れ」

「ああ……。じゃあ、行くか。響」

颯太は、疲れ切った表情をしながら歩き始める。

何故だろう。私も今のやり取りで、徒労感を覚えている。……今は考えるのは止しておこう。

「あつ、あれ？ 私変なこと言った？ つていうか、何で皆先に行っちゃうの!？」

一人置いて行かれたことに気付いた貴恵は、慌てて私たちの後を追って走り出す。

当の本人は、自分がどんな発言をしたのか全く気付いていない。

……まあ、あの流れで気付けという方が酷かもしれない。

これは先が長いなと思いつながら、私は隣をとぼとぼと歩く颯太を励ましつつ、要塞の中にある工廠へと向かうのだった。

6月14日、未明。

暗闇に包まれた海を、不気味な光を帯びながら進む一団があった。

上空で薄っすらと赤いオーラを纏った雲が、海を怪しく照らしている。

その下に行く一団は赤や黄色、青色の光を纏った異形たちだった。

「オマエタチハ、ドンナ声デ泣ク……?」

一団を先導するリーダーと思しき1体が赤い目を揺らし、歪に笑う。

艦隊は、迷うことなく西へと向かう。リーダーは後ろを振り返り、虚ろながらも確固たる意志を持った目を見て、再び声も無く笑った。

「サア。『マルコス』ハ、モウスグダ……」

第23話 戦う理由

——深海棲艦、来襲せり。

その一報が放送によって、呉鎮守府内を瞬く間に駆け巡った。続けざまに情報が、はきはきとした女性の声で届けられた。

『本日明朝、南鳥島泊地に深海棲艦が襲来。多数の敵艦載機により、空襲を受けた模様。敵戦力は不明。鎮守府内にいる第3艦隊所属艦娘及び、各司令官は直ちに本庁舎作戦会議室までお集まりください』
そんな放送が淀みなく伝えられた後、10分と経たず本庁舎の中が蜂の巣を突いたように騒がしくなる。職員たちの足音や声は、待合室で経ったままだった拓海と榛名にもしつかりと聞こえていた。

「南鳥島に敵襲って……」

南鳥島には、神通たち第6水雷戦隊がいる筈だ。明朝だと言うから、既に数時間は経っている。

傍らの榛名に視線を向けると、彼女も動揺を隠し切れない様子だった。

「……兎に角、召集が掛かっているので私は行きます。白瀬さんは、どうされますか」

「俺も、会議室に行っているか」

「その、白瀬さんはまだ司令官ではありません。追い出されるかもしれませんよ?」

「それでもだ。この世界に来て、榛名の次に会ったんだ。せめて、状況だけでも知っておきたい」

榛名の指摘は、確かにその通りだろう。こうして鎮守府内の往來を許されているとは言え、身分上では未だに民間人だ。そんな人間が、重要な場所に入って行けるとは思えない。

しかし、だからこそ拓海は6水戦の現状を知っておくべきだと思った。

榛名は、そんな拓海の真意を確かめるように彼の目をじっと見つめた。

拓海も榛名の視線を正面から受け止める。彼女の問いに答えるためでもあるし、既にある考えが浮かんでいたのである。

「……分かりました。一緒に行きましょう。白瀬さん」

暫く見つめ続けられるという、微妙に気まずい時間を過ごした後、榛名はゆつくりと頷いた。

取り敢えず榛名には認めて貰えたようで、拓海はほっと一息を吐く。

「ああ……」

そう言うなり、拓海と榛名は同時にベンチ前から動き出した。向かうは作戦会議室だ。

「榛名、失礼します」

榛名が作戦会議室のドアをノックし、先に中へ入る。

後に続いて拓海も入室すると、既に来ていた金剛以下第2戦隊や翔鶴ら第5航空戦隊の面々が左手奥のスクリーンに向かって立っていた。

60平米と少しあろうかという部屋は薄暗く、1つを残して机は全て壁際へと追いやられていた。残った机にはプロジェクターが置かれ、ホワイトボードの前に垂れ下がったスクリーンに日本列島の画像が映し出されていた。

スクリーンの脇には髭を蓄えた大柄な男、芝浦兼続が立っていた。プロジェクターの光で浮かぶ顔は、眉間に皺を寄せていて険しい。

「ん……。お前も来たのか……」

兼続の視線に射抜かれ、拓海は思わず身を固くした。それでも目を逸らさず、彼の瞳を見つめ返す。

暫く見つめ合っているうちに「自分は場違いなのではないか」と思ったが、兼続は小さく溜め息を吐いただけで、特に咎めるようなこととは言っていない。

「白瀬拓海。在室を許可する」

「は、はい」

反射的に返事をする。兼続は視線を外し、他の面子を見回した。

隣で榛名がこつそりと安堵しているのを余所に、部屋にいる全員へ号令が掛けられる。

「これより、第6水雷戦隊並びに南鳥島泊地への支援作戦の概要説明を開始する」

「では、こちらを見てくれ」

兼続のアイコンタクトで、端に前方右端に立っていた若い男がPCを操作する。それに合わせて画像が拡大されていき、南鳥島が画面中央よりやや左の方に表示された。島の形は辛うじて分かるという程度で、補足用に「南鳥島」の文字と該当地点がマークされている。

「既に知っているだろうが、本日明朝に突如敵が襲来し、南鳥島は被害を受けた。この画像は先日、軍の偵察衛星が撮影したものだ。そして

———

兼続が言葉を切ると同時に画面が切り替わると、部屋中に動揺が広がった。

「カネツグ提督。これって」

声を上げた金剛に、兼続が頷く。

「そうだ。今から2時間前の、同じ地点の画像だ」

そう言っただけに見せられた写真には、南鳥島から東の沖合を覆う気味の悪く赤みがかかった灰色の雲が辺りを埋め尽くさんばかりに覆われていた。

「この赤味を帯びた雲は、主に強力な深海棲艦の個体がいると思しき場所に発生している。北太平洋地域では主に、アリュウシヤン、ミツドウエー、ウエーク島で観測されている。これらの地域には相当数の深海棲艦が潜伏していると思われるが、この雲によつて観測は出来ず、ジャミングも厳しい。———そして今回の件だが」

再び画面が切り替わり、更にフェードアウトした同じ画像が2枚並べられる。表示されている日付から、左側が先日のもので右が今日のものだと分かった。

画像が表示されるや否や、真つ先に気付いた翔鶴が手を挙げる。

「ウエーク島の雲が……北西に動いた痕跡がありますね」

「正解だ。翔鶴」

翔鶴が指摘した通り、痕跡は写真にもしつかりと残っていた。

先日はウエーク島で纏まっていた厚い雲が、今日になって何かに千切られたように北西へ50kmほど伸びていたのだ。そしてその延長線上に、規模は小さいものの同様の雲が南鳥島沖に広がっていた。

「恐らく、夜の時間帯を隠れ蓑にして接近し、何らかの強力な敵性個体が南鳥島を襲ったと考えられる。現場からの報告によれば、多数の艦載機による攻撃を受けたようだ。艦載機を射出した敵の姿は不明。確認できたのは、潜水ソ級と、戦艦ル級、重巡り級、軽巡へ級がそれぞれ1隻ずつ。ル級以降は全てflagshipと推定される。この遙か後方に空母型の敵がいると思われるが、航空機からの攻撃や砲撃、雷撃に阻まれ確認できていない」

「それって、何時ぐらいの報告？」

翔鶴と仲良く並んで立つ瑞鶴が尋ねる。

「日本標準時で0600。マルロクマルマル今から4時間ほど前のことだ」

淀みなく兼続が告げると、部屋の中が少しざわつく。

放送を聞いた時点で予想は出来たことだが、彼は暗に現在泊地にいる面々の安否が分からないと言っていた。

「向こうとの通信は？」

「報告の直後、泊地との通信が途絶。恐らくは敵の砲撃、あるいは空爆によって通信機器が損傷したと思われる。最後に、滑走路が爆撃で穴が開いて使えなくなつたという報告で向こうとの通信は途切れた」

伊勢の質問に、兼続は説明を付け加える。

「特生防衛海軍はこの事態を受けて、南鳥島の緊急支援作戦を実施することを決定した。南鳥島は、後々のウエーク島確保や南太平洋への展開のための重要な拠点だ。この際、泊地における生存者の有無は問わない。何としてもここを維持しろというのが、上からの指示だ」

兼続の口から出た言葉に、艦娘たちは動揺を隠せない。拓海も、彼女らと同じような気持ちだった。

救出作戦はあくまでも建前で、本当の目的は南鳥島の防衛。6水戦や職員たちはどうなってもいい、というような言い草に内心怒りが湧き起こっていた。

「今回、特生防衛軍の指揮下にある44式大型輸送機は使えない。千島列島の攻略に使われていたり、修理が行われていたりとこちらに回せる分が無いからだ。敵の制空圏内を飛ぶには必須で足も速いが――。君たちには空中降下の経験が無いことも鑑みて、水上艦艇による作戦展開となった。皆の言いたいことは、分かる。貴重な戦力でもあるし、それ以上に大切な仲間だ。今は彼女たちが無事なことを祈りつつ、1分でも早く現場へ向かう。今出来ることと言えば、それだけだ」

重苦しい空気が流れる中、兼続は事情を説明すると共に、フオロ―も欠かさなかった。沈痛な表情をしている辺り、彼の言葉は本当なのだろう。

兼続によって作戦についての説明が一通り行われた後、その場は解散となった。

艦娘や職員は次々と、準備を始めるべく行動を起こし、部屋を出て行く。

そんな慌ただしい状況の中、拓海は榛名と共にその場に立つたままだった。その前方には、同じくその場から動かないまま兼続が拓海たちを見つめていた。

「さて……。白瀬拓海、君は何故ここに来た？」

容赦の無い視線を向けられて怯みそうになるが、拓海はどうか堪える。

「彼女たち……神通さんたちが心配だからです」

「なら、ここにいない必要は無いだろう？ 金剛たちに任せればいい」

兼続の言う通り、単に神通たちが心配なのならここに来る必要は無いかもしれない。彼女たちのことを他の誰かに任せることも出来るだろう。だが、拓海はそんなことを言われるためにここにいないのでは無い。

「自分は、彼女たちを助きたい。あの子たちがいたから、俺はここにいらられる。俺を“司令官”と呼んでくれた子もいた。その期待に応えたいんです」

「君はまだ、民間人だ。この戦いで、死ぬかもしれないんだぞ？ それにどうやって助けるのか、考えているのか？」

兼続は険しい目つきで拓海を見つめ、問いかける。

何も、自分から危険な場所に飛び込む必要は無い。彼ら彼女らが戻ってくるのを待つことも出来る。それでも行くというのなら、覚悟はあるのか？

彼の視線が、拓海にそう訴えかけていた。しかし、拓海の答えは最初から決まっている。

「覚悟は、とっくに出来ています。だからって、死にたいわけじゃ無いです。自分も、自分の関わる艦娘たちも生きて帰って来られるように、この1か月鍛えてきました。——それに、助け方も既に考えてあります」

兼続の目を真っ直ぐ見て言い、それから隣にいる榛名に視線を向けた。

そのの意味するところを既に知っていた榛名は、一つ頷いて拓海の背中を押す。

「……言ってみろ」

表情を変えないまま、兼次は先を促す。

拓海は小さく息を吸ってから、言葉を発した。

「自分も、この作戦に参加させてください」

兼続はすぐには答えを返さず、無言のまま拓海を見つめる。

拓海も視線を逸らすまいと、兼次を見る。

先ほどから、彼の感情を読み取ることは出来ない。表情も無く、何を考えているのか分からないことが、沈黙の中で拓海を不安にさせた。

「——いいだろう。作戦参加を許可する」

「……えっ？」

不意の言葉に、拓海は間の抜けた声を出した。聞き間違えか何かか

と思い、何度か瞬きを繰り返す。

「白瀬拓海。本日より『新米少佐』認定試験を行う。笠川大将からの許可も頂いている。作戦は先ほど伝えたとおりだ。今回は、第2戦隊を任せる。以上だ」

簡潔に伝えると、兼続は踵を返し部屋を出るべく歩き出した。

「ありがとうございます！」

彼の背中に向かい、拓海は頭を下げ、礼を述べる。作戦に出ることを許された喜びから、知らず頬が熱くなる。隣をちらりと見ると、榛名も礼をしている以外は凡そ拓海と似たような表情を浮かべていた。

「……そうだ」

そんな拓海の様子を見て足を止めた兼続の聲が、耳朶を打つ。

頭を上げると、先とは変わって眉を顰めて拓海を見つめる兼続の姿があつた。

「白瀬拓海。戦いは常に『死』と隣り合わせだ。艦娘は勿論、俺たち軍人も例外では無い。それでも何故戦場に赴くか、分かるか？」

「いえ……」

「日本という国や己の肉親を守るため。その日生き抜くため。或いは敵を倒すため。理由は様々だ。単純な憧れや、親が軍人だったからというのもあるだろう……。死にたくないのは、誰だって同じだ。それでも、戦わなければいけない時というのは必ずある。だが君はどうだ？ 君が志願した理由は聞いている。だが……それは本当に君がしなければいけないことか？」

自分が戦う理由。改めて、拓海は目を閉じて心の内に問いかける。

好きな子と一緒にいたい。6水戦の皆を助きたい。ゲームで憧れていた「司令官」になりたい。この世界に来てからの思いが、幾つも頭を過る。

世界の事情というのも、確かに知っている。ゴジラなどの巨大生物や、深海棲艦という驚異がある。しかしその前に、もっと単純な動機がある筈だ。

「自分は榛名が好きだから、彼女の傍にいたいから、戦うんです。それに、6水戦の皆も他の艦娘の皆のことも好きだから、誰にも沈んでほ

しくない。誰かに任せるんじゃないやなくて、自分の手でやりたい。放っておくことなんて出来ません！」

拓海は自分よりも何十も年を重ねた男に、正面から訴えかける。やろうと思えば、それは誰にだって出来ることだろう。『自分にしか出来ないこと』とは言えないかもしれない。

だが、それがどうしたというのだろうか？ 自分が『そうしたい』と思ったから、そうする。世界や国がどう、というのは後から結果として付いてくるものだ。ならば、自分がやりたいことを「やるべきだ」と思ったときにやっておかなければ、後悔する。

そんな拓海の真つ直ぐな眼差しを見て、兼続はふと笑みを溢した。

「なるほど……。俺も随分年を取ったな」

苦笑気味に溜め息を吐くと、今度こそ彼は踵を返す。

「あの、芝浦大佐……？」

何も言わずに出て行くこうとするので拓海が声を掛けると、部屋を去る間に兼続は立ち止まる。

「まあ、何だ……。これから色んな意味で大変になるな。白瀬拓海。ヒトヒトマルマル1100までに江田島3番埠頭に集合だ。くれぐれも遅れないようにな」

心なしか笑い交じりの声で背中越しに言い残すと、兼続はそそくさとかかから逃げるように部屋を出て行ってしまった。

必死の思いで訴えかけたのだが、あっさりとした返事を貰い肩透かしをくらった気分になる。恐らく言葉は届いたのだろうが、唐突な態度の変化に首を傾げざるを得ない。

「なあ、榛名。芝浦大佐、いったいどうした——」

よくよく考えても分からず、後ろにいる榛名に聞いてみようと思いついたところで、拓海は漸く変化に気づいた。

「白瀬さん。さっきの言葉、どういう意味ですか……？」

「ほあ……？」

思いがけない事態に付いて行けず、変に上擦った声を漏らしてしまった。

笑っていた。榛名の顔には、能面のような恐ろしい笑みが貼り付い

ていたのだ。

「白瀬さん、他にも沢山好きな子がいたんですね。榛名知りませんでした」

「ちよ、ちよつと待て！ 何か誤解してないか!？」

口元が吊り上がり、全身に寒気が迸る。

人間はあまりの恐怖を体験すると笑い出してしまうという話があるが、今の拓海がまさにその状態だった。

何故だろう。命の危険すら感じる。

「散々榛名のことを好きと言っておいて、本当は他の子のことも好きだったなんて。榛名は嘘を吐かれていたんでしょか」

「い、いや。それは誤解だつて——？」

抗議しようとするが途中で思い当たる節があり、拓海は思わず口を噤んでしまう。

ついさっきの、兼続からの問いに対する自分の「艦娘の皆のことも好き」という言葉ではないか？

拓海の思い出したような表情に、ゆらりゆらりと体を揺らして近いくる榛名から答えがもたらされる。

「思い出しました？ 薄情じゃないですか、白瀬さん」

やはり、と拓海は確信する。

拓海はただ、他の艦娘たちにも好意的であるというだけだ。友達や後輩に向けるような類のものだ。決して他意は無い。恋愛的感情を向けているのは榛名だけだ。

そこに断じて嘘は無い。そう、無いのだ。二度言うのは大事なことだからだ。

「違うんだ、榛名。俺の言い方が悪かった。そういう意味じゃなくて——。榛名……？」

どう説明したものかと考えながら話していると、榛名の様子が一変する。急に立ち止まり、俯いたまま微動だにしていな。

「おかしいです……」

「榛名？」

またしても拙いことを言ったかと思い、戦々恐々としながら榛名を

見つめる。

ふと、彼女の目元の辺りから滴がぽたぽたと零れ落ち始めた。

「分かっているのに……。白瀬さんは、そんな人じゃないって分かっているんです。なのに、白瀬さんの言葉を聞いたら胸の辺りが痛くなつて……」

右手で服の胸元を握りしめ、榛名は独り言のように呟く。

「ごめん。俺の所為で……」

「白瀬さんは悪くありません。悪いのは、勝手な解釈をした榛名ですから……。でも、胸の痛みが何なのか分からなくて、気が付けば白瀬さんに失礼なことを……」

榛名は戸惑うように、胸元の右手を強く握り締める。

よく考えてみれば、艦娘で知識もある程度身につけているとは言え、まだ生まれて半年程度の身だ。多分、自分の中に初めて芽生えた感情なのだろう。分からなくても無理はない。見た目は拓海と同年代なので、つい忘れてしまいたいそうになる。

そこまで理解した時には、拓海の抱いていた恐怖感はどこかに吹き飛んでしまっていた。

「大丈夫。大丈夫だ、榛名。俺も、榛名の気持ちはよく分かるから……」

そう言つて、拓海はズボンのポケットに仕舞っていたハンカチを差し出す。榛名は目線を拓海の手元に上げると、顔を見せないようにハンカチを受け取って目元を拭う。

「白瀬さんも、ですか……?」

涙を拭い終えて鼻をすんと鳴らすと、榛名は泣きはらした目で拓海の顔を見上げる。目元はまだ赤いが、もう見られても良いようだ。

拓海は苦笑しながら、頷いてみせる。

「まあね。ちっちゃい時の話だけど」

小学校の低学年くらいの頃、拓海は同じクラスの女子に初恋をしたことがあった。

その子はクラスの他の子どもたちにも人気があつて、彼女の傍には

男女問わずいつも誰かしら立っていた。教室の喧噪の中でもはつきりと分かる、透き通るような声の持ち主で、屈託のない可愛らしい笑顔を浮かべる子だった。

そんな彼女を、拓海はよく遊んでいた男子連中と一緒に遠巻きに見ていた記憶がある。

勿論、クラスが同じなので話すこともあった。あまりにも愛らしい笑顔で話しかけてくれるので、向こうも自分を好きなのではと錯覚してしまったほどだ。

ある時、その子に好きな男子がいるという噂が流れたことがあった。彼女に憧れている男子連中は、その人物を探す。最有力候補を見つけるまで、時間は掛からなかった。

実際、女の子と男子はとても仲が良かった。クラスの誰よりも一緒にいる時間が長く、手を繋いでいるのを見たこともあった。だが、普段から周りの友達にも「好き」と言っているような子だったので、誰もが信じるのが出来なかった。

そんな状況をチャンスと捉える者がいるのもまた、必然だったのかもしれない。

一番手を切ったのは、他ならぬ拓海自身だった。今になってみるとよく分からないが、とにかく「振られるわけがない」という謎の自信があつたからだ。

結果は、見事に玉砕。クラスの皆の前で告白し、彼女の純粋な一撃の前に拓海の心は打ち砕かれた。

「うん、私も白瀬君のこと好きだよ。友達だもん」

これには二番手・三番手を狙っていた男子たちも、興味津々に見ていた女子たちも流石に言葉を失った。

偶然居合わせた担任（女性）は、凍り付いた空気を何とかしようとその女の子にこう尋ねた。

「因みに、誰が一番好きなの？」

すると彼女は、教室のある一点を見つめたまま頬と耳を赤く染め、その男子の名前を口にした。

流石の拓海にも、その「好き」が意味するところが分かった。そし

て、自分に対してはあくまで友達として「好き」であると理解し、胸を突き刺すような痛みに襲われた。

こうして担任という刺客から投下された爆弾により、女子たちは黄色い声を上げ、他の男子たちは悉く沈黙してしまった。

当の拓海はと言うと、フラフラと保健室に行き、3時間目の授業はベッドの中で涙をながしていたのだった。

「——さん。白瀬さん？」

榛名の声によって、拓海は回想の世界から一気に引き戻される。気が付けば、榛名が不安そうに拓海の顔を覗き込んでいる。

思った以上に顔が近く、動揺しながらも拓海は苦笑を浮かべたまま誤魔化すことにした。

「ま、まあ、その。榛名には、俺みたいな想いは絶対させないから」「はあ……」

思った以上に、過去の記憶によるショックが大きかったらしい。榛名は呆けた顔で拓海を見上げている。

嫌なことだけはよく覚えているもんだな、と内心嘆息しながら、榛名を元氣付けようと振る舞うことにする。

「とにかく、榛名。その気持ちは、とても大事なことだと思う。だから困ったときは、誰かに相談したらいいんじゃないかな。ほら、金剛たちなんか榛名の話をよく聞いてくれると思うよ」

「白瀬さんに話すのは、駄目ですか？」

榛名から拓海に向けられる寂しそうな目に、思わず「うつ」と声を漏らす。

「ダメってわけじゃないけど……。同性や姉妹の方が、何かと話しやすいだろうし……」

「それなら、その小さい頃のお話というのを聞かせていただけませんか？」

思った以上に、榛名も粘り強いらしい。

ある種の黒歴史なので、あまり話したくは無いが—— “あれ”

に比べたら恥ずかしいだけで済むか。

そう考えると、心なしか胸の内が軽くなったような気がした。

「……そうだな。神通さんたちを無事に助けることが出来たら、話そうか」

拓海がそんなことを言うと、榛名が満足げで嬉しそうな顔で頷く。

「はい！ 約束ですよ？ その時には、6水戦の皆さんにも聞いてもらいましょう」

「あまり気は進まないけど……。分かった。約束だ」

これでまた一つ、戦う理由が出来た。

絶対に神通や暁たちを助けて、生きて帰ってこよう。

拓海は新たに、決意を固めるのだった。

第24話 送り出す者

拓海が南鳥島の襲撃を知る2時間以上前のこと。

光樹は秘書艦である三笠と共に、横須賀鎮守府本庁舎の地下1階にある「第1作戦司令室」にいた。

部屋の前方にオペレーター席が並べられ、正面の壁には多くの情報が表示された巨大なディスプレイが3枚埋め込まれている。後方には司令官用の席が設けられ、同時に5人ほどが座れるくらいのスペースが確保してあった。

光樹はその司令官席の、ディスプレイに向かって右から2番目の座席に腰を下ろしていた。その斜め右後ろに、彼に付き添うように三笠が立ち、ディスプレイを注視している。

光樹もまた、ディスプレイの情報と手元の書類を交互に見ながら、「事」の推移を見守っていた。

「おはよう、鳴川君。寝なくて平気かね？」

真ん中の席に座る人の気配がして顔を上げると、上司である大輔の姿があった。

挨拶をすべく立ち上がろうとすると手で制され、光樹は大人しくそれに従う。

「おはようございます、笠川大将。まだ一晩経っただけなので、大丈夫ですよ」

光樹がそう言うと、大輔は皮肉げに笑って肩を竦めた。

「この老いぼれめは無理が効かんからな。だが、だからと言って徹夜は体に悪いぞ。少し寝て来たらどうだ」

「自分は第1艦隊の指揮がありますから。この作戦が終わるまで、眠れませんよ」

「それもそうか。……それで、状況はどうなっている？」

「はい。至って順調です。今日未明までに、^{ウルツブ}得撫島と幌筵島の間の海域にいる深海棲艦を掃討済みです。現在は新^{シムシル}如島ベースからの補給を受け、幌筵島攻略開始は0700。^{マルナチマルマル}あと10分ほどです」

大輔から報告を求められ、手元の紙に印刷された地図を指さしながら

ら、光樹は説明をする。

「損害状況は？」

「至って軽微です。10水戦の那珂、荒潮両名が小破。支援艦艇や航空機に損害はありません。ですが、ここから先は一気に増えることになるでしょう」

「泊地棲鬼以下、推定30隻程度の敵艦隊か」

「はい。艦娘の偵察機と望遠観測による情報から推測するに、制空権確保はそう難しいことではないでしょう。ですが戦艦や重巡が多くいるため、苦戦は免れません」

「ここが正念場というわけだな」

そこで報告は終わりとなり、二人は作戦について言葉を交わしながら、状況開始の時を迎えた。

時間を更に遡ること、二日前の6月12日。

ゴジラによる日本襲撃があった日の未明に、その時点での日本の勢力圏で最も北にある択捉島で、深海棲艦の襲撃が起こっていた。

島の北端部に置かれていた小さな拠点を狙い、空爆や艦砲射撃が突如として始まったのだ。

単冠湾の第5艦隊司令部は、すぐに敵の出所が得撫島であると判断。択捉島に襲来した敵を返り討ちにすると同時に、即日「得撫島攻略作戦」が発動された。

日没までに、軽空母ヌ級と戦艦ル級が中心となった多数の敵艦を掃討・殲滅し、得撫島を確保する。

事態はそれで収束すると思われたが、日没直後に急展開を見せる。カムチャツカ・チュクチ連邦——通称カムチャツカ連邦の首都カムチャツキーから、突如としてアリュウシヤン方面並びに、幌筵・占守島方面から苛烈な攻撃を受けていると連絡が入った。敵はやはり深海棲艦で、小型艦から大型艦にかけて100隻以上が出現したと言うのだ。

沿岸部は居住禁止区域だったため、幸い一般住民の被害は無かった

が、代わりに軍の関連施設や港湾施設が多数、破壊されていた。

連絡を受けた日本政府は、翌13日にかけて「日力深海棲艦連携条約」に基づき、特生防衛海軍に出動を要請。それを受けて、敵の片方がいると推測される幌筵島、占守島への部隊派遣を決定する。

第5艦隊の単冠湾泊地部隊と、横須賀の第1艦隊、舞鶴の第4艦隊からも部隊を出し、臨時に連合艦隊を編成。

敵影の認められなかった新如島に簡易ベースを設置し、13日夜に「幌筵・占守島攻略作戦」が発動された。

第1作戦司令室の中央のディスプレイには幌筵島周辺の海図が映し出され、艦娘や敵の位置がリアルタイムに更新されている。両脇では艦娘の損傷状況や、実際の戦場の様子が映し出されていた。映像は小型自立飛行カメラによるものだ。

映像は艦娘が収集した情報と共に、CROCSを用いて新如島ベースを経由して単冠湾、横須賀、舞鶴に送られる。

カメラはより安全な、艦娘の部隊の後ろを飛んでいるためかやや遠くで見辛いが、ディスプレイの海図の情報のおかげで、戦況を把握することは出来る。

緑色の矢印のようなアイコンが味方艦娘、赤が深海棲艦だ。味方の方には「KAGA」などと表示して位置を分かりやすくしているが、対する敵はその都度、どれがどの個体かが更新されていく。実際に艦娘が確かめた情報に合わせて、表示をしているのだろう。

赤城旗艦の第1航空戦隊、葛城旗艦の第3航空戦隊、祥鳳旗艦の第4航空戦隊の各4隻、計12隻から緑色の点が飛び出していく様子が見える。これが、彼女たちの艦載機を示している。対する深海棲艦の艦載機は、やはり赤で表示されていた。

機数の上では、こちらの方がやや有利。しかし元々搭載機数の少ない、3航戦や4航戦は劣勢を強いられていた。

持っている艦載機が、零式艦戦52型などの旧式装備ばかりなためだ。艦載機の開発が追い付いておらず、配備遅延の影響がこのよう

場面がよく表れている。敵に、明らかに性能が上な戦闘機がいる所為でもあるだろう。

一方で1航戦の面々は、より良い装備が施され、本人たちや妖精の練度が高いこともあって正に破竹の勢いといったところだ。

次々と敵艦載機のアイコンが消え、味方のフォローに回り、敵に爆撃や雷撃を仕掛けてダメージを与えていく。

彼女たちによって、制空権は確保したのも同然な状態になっていた。

その後も作戦は順調に進み、あと1時間で幌筵島を確保出来そうだった。そんなタイミングの時だった。

大輔と光樹に、南鳥島が襲撃を受けたという報が届いた。

慌てた様子で50歳弱の男性が部屋に入るなり、挨拶もそこそこに大輔に何か耳打ちをする。

男性が去った後の大輔は、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「鳴川君。本日0600マルロクマルマルに、南鳥島泊地が深海棲艦に襲撃された。呉の芝浦大佐からの報告だ」

事のあらましの説明と共に、大輔は先ほどの男性が置いて行った衛星写真を見せる。

「ウエークからの『雲』ですか」

ウエーク島から南鳥島の方へ伸びる、不気味な赤を纏った雲を見て光樹は顔を顰める。

推測が間違っていなければ、敵はウエーク島から来た可能性が高い。同時にこの雲の直下には大抵、石垣島の泊地棲姫よりも上の強さを誇る個体が存在している。

南鳥島は今後の展開において重要な島だ。ここを奪い返されることだけは、阻止しなければならない。

諸々の問題はあるが、今は如何にして島を守るか考えなければならぬまい。

そう考えて、光樹は前方のモニターで幌筵島海域の戦況を再確認する。

制空権は既に確保。敵艦も現時点で半数ほどが撃沈されている。残っている敵も、6割ほどが中型艦、小型艦だ。あと少しで、掃討戦に移ろうかというタイミングだ。

「敵は大型空母クラスを中心とした編成……。呉は1部隊を残して、全部隊で島へ急行……。となると、それを相手に出来る艦娘は……」
ぶつぶつと呟きながら状況を整理し、横須賀側の出来る対応を検討する。

思ったよりも声は響いていたらしく、それを聞いていた大輔は光樹がしようとしていることを察していた。

「第1航空戦隊に任せるしかあるまい」

「はい。制空に関しては、3航戦と4航戦に任せて問題ないでしょう。旧式とは言え、『ゼロ』ですから」

1世紀前の大戦では、一時空の覇者として名を馳せたオリジナルの名前を持ち、それに見合う性能を持った艦載機だ。その艦載機隊を指揮する艦娘たちも、決して練度は低いわけでは無い。

一方で南鳥島は、数えきれないほどの艦載機が襲つて来たようだ。その艦載機たちも恐らくは、『色付き』と考えていいだろう。

「呼び戻したとしても、横須賀を出発出来るのは1500ヒトゴーマルマルになってしまふでしょう。『するが』の出撃許可を頂ければ、距離としてはこちらの方が近いので、呉の第3艦隊が向こうに到着する前後までには行けます」

「『さがみ』は既に許可を出している。『するが』も同様、出撃させて構わん。『特別権限』を使え。上からの文句はこちらで対処しよう。鳴川光樹少将、現時刻を以て南鳥島の防衛及び、救出作戦の指揮を命じる。以後、作戦名は――」

「『マルス作戦』……というのはどうでしょう」

「軍神の名か。南鳥島マーカスとも縁のある言葉だな。それで行くとしよう。念の為、戦時には第4作戦司令室を使ってくれ」

「了解しました」

大輔の許可を得るなり光樹は手元の電話子機を取り、単冠湾泊地にいる毛利暉博中將てるひろ・第5艦隊司令長官に繋ぐ。部屋を移る前に、連絡

は通しておかなければならないからだ。

数回のコールの後、電話のスピーカーの向こうから年季の入った硬い声が聞こえた。

《……鳴川だな？ 話は既に聞いている。詳細な情報はこれからだが……。必要な艦娘は？》

話が早くて助かると思うと同時に、彼の理解力には舌を巻かされる。

様子からすると、敵の敵襲を受けたという第1報だけのようだ。それだけ、呉の方で混乱が起きているのかもしれない。横須賀に回すだけで手一杯なのだろう。

しかしそんな状況でも、少ない情報から推測し先回りをする。その能力の高さが、毛利暉博の特徴だ。

「第1航空戦隊の4人です。呉から5航戦が出るでしょうが、敵は大型の空母—— “鬼” か “姫” 辺りがある可能性は否定出来ません。そうなった場合、いくら彼女たちでも劣勢は確実でしょう」

《笠川大将は何と？》

「“するが” 出撃の許可が出ています。1航戦は横須賀港から向かって貰います」

《彼女たちの指揮権は元々、横須賀そちらのものだ。すぐに手配しよう。通常の輸送機になるが、1300前ヒトサンマルマルまでには厚木に到着させる》

「分かりました。鳴海少将にも宜しくお伝えください」

《彼が司令官だったな。こちらも了解した。それでは、貴官の検討を祈る》

ものの5分程度で通信は終了し、電話の子機を置くと光樹は席から立ち上がった。

上官である大輔の方が見上げる形になってしまいが、今はそんなことも言っていられない状況だ。当の本人も、別に気にしていない表情だった。寧ろ、光樹を労わるように見つめている。

「それでは、お先に失礼します」

「ああ。仕事は山積だろうが、少しでもいいから寝ておくんだ。明日、身が持たないぞ。三笠もな」

大輔は、光樹の後ろに控えていた三笠にも目を向け、言葉を掛ける。彼女もまた、光樹に付き添って徹夜の身だ。光樹に比べればまだ平気かもしれないが、それでも光樹と共によく知っている三笠を心配しているものだろう。その感情は、孫や娘に向けるものに近かった。

「はい、ありがとうございます。総司令官殿。機会があれば、提督と3人でお茶は如何ですか？」

三笠はその気遣いに感謝を示しつつ、臆することなく笑みを浮かべながら尋ねる。

「ありがとうございます、楽しみにしているよ。それでは二人とも、体に気をつけてな」

大輔も頬の皴をより深くして笑いつつ、二人を送り出す。

光樹と三笠も揃って「ありがとうございます」と礼を述べながら、第1作戦司令室を退出したのだった。

第1作戦司令室を出た光樹は、待機中のオペレーター要員を呼び出した後、一旦執務室に戻る。

部屋に入るなり自分の机に直行し、受話器を取ってダイヤルを回す。箱崎町の港に連絡をするためだ。『するが』も他の特性防衛軍の艦艇と同様、そこに係留されている。

相手が電話に出たことを確認すると、光樹は名前と所属を明らかにした上で直ぐに伝達事項を口にした。

「特別権限A―6及びA―7により、『するが』の緊急出撃を行う。
出撃予定時刻は1500。ヒトゴーマルマル急いでくれ」

単刀直入にそれだけ伝えると、相手の応答を待たずに電話を切る。

光樹が口にした「特別権限」は、「Aナンバー特別権限」と呼ばれるものだ。

A―6が艦娘の緊急出撃を行うこと、A―7がそれに付随して輸送機や艦船などが必要になった場合に直ちに準備しなければならぬことを意味する。

一口に「特別権限」とは言っても、その権限を発動出来る者は一定

しない。特生防衛海軍に認められた権限ではあるが、中には総理大臣でなければ発動出来ないものもある。

兎も角これで、「するが」に関しては大丈夫だと確認すると、光樹は再び受話器を取って次のダイヤルを回し、次の連絡先へと繋いだ。

赤城たちの厚木から横須賀までの輸送手段の確保、呉鎮守府を含めた各方面への連絡などで忙しく動き回っていると、あつという間に時間が過ぎていた。左腕に身につけた腕時計は、既に午後の1時を示していた。眠っている時間など、無かつたと言っている。

長年の軍人生活で慣れているとはいえ、やはり辛いものは辛い。だが、そうも言っていられないのも事実だった。

「そういうえば提督、そろそろ白瀬さんが出撃しているころですよね？」
三笠の言葉で、1時間ほど前に大輔から聞かされていたことを頭の中から引つ張り出す。

「ああ。今頃は、「するが」の同型艦「さかみ」に乗っている筈だな。まあ、南鳥島が襲われた時点で想像は出来たが」

「6水戦の皆さんと、打ち解けていましたし」

「まさか本当に、1ヶ月で認定試験に入るとは思わなかったけどな。飲み込みは早い奴だから、それほど心配していないが」

認定試験を兼ねたこの出撃で、拓海が「新米少佐」になるかどうかが決まる。チャンスは1度きりでは無いが、ここで決めてしまっただけらしいと思う。

そこで三笠が、思い出したように呟く。

「心配と言ったら……。白瀬さん、「さかみ」に乗っても大丈夫でしようか」

「ああ……。アレか……」

三笠が心配しているのは、「するが」が最大戦速になった時のことだ。

「するが」型は、日本で初めてスーパーキャビテーション航行を実現した軍艦だ。最速でも60ノット以上。「改やまと型」でもあり、他の日本艦艇同様に特生防衛軍の蓄積された技術が反映された型で

もある。

拓海が乗ったことのある船は、速くても25ノットぐらいまでしか出ていないだろう。かつて青森と函館間を航行していた、高速フェリー程度の速さだ。

その2倍以上の速さを誇る艦へ乗った時に彼がどうなるのか、確かに心配である。

「……俺もまだ、乗ったことは無いからな。なるようにしかならないさ……」

「私も出来れば、“するが”型には乗りたくないですね」

「それはまた、どうしてだ？」

「嫉妬してしまいますから……」

「……………」

顔を赤くして俯く三笠と、何とも言えない表情で固まる光樹。

自分よりも圧倒的に早い艦に乗りたくないというのは、未だ艦としてのプライドを持っている彼女からしてみれば、無理もない話だった。

2時間ほどが経過し、光樹と三笠は“するが”が停泊する埠頭に立っていた。眼前には、第1航空戦隊司令官・鳴海剛少将と赤城、加賀、蒼龍、飛龍の計5人が整列し、光樹を見ている。

「これで揃ったな」

「第1航空戦隊、これより『マルス作戦』を拝命する」

敬礼する剛に続き、赤城たち4人も彼に続く。光樹と三笠も、敬礼を返す。

剛が敬語で無いのは、光樹とは階級も年齢も違わないからだ。見た目は普通のおじさんといったところだが、これでも格闘術の使い手らしい。

敬礼が解かれたところで、加賀が口を開く。

『マルス作戦』……5航戦の子たちもいるのかしら」

「不満か？」

「いいえ。ただ、ちよつと気になつただけよ」

「出会い頭に仲間内で喧嘩はやめてくれよ？ 特に瑞鶴とな」

「それは大丈夫。向こうが突つ掛かつてこなければ、ですが」

「作戦行動中にだけは、やめてくれよ……」

加賀の目に宿つた殺気に、光樹は背中に冷や汗を掻く。どちらかと言えは恐怖というよりも、色んな意味での心労の方ではあるが。

翔鶴とはお互いあまり干渉せず、龍驤や龍鳳とは程良い先輩後輩の関係だ。しかし瑞鶴とはどういうわけか仲が良くない。

主に瑞鶴の方から突つ掛かつて加賀を怒らせているので、彼女の言は間違つてはいない。だが時折加賀の方からも小言や文句を言い、それが喧嘩に発展することもあった。

2対2の演習中にそれをやらかし、おかげで二人は翔鶴と赤城の艦載機からペイント弾を雨あられとくらい、それを見た剛が烈火のごとく怒つた事件があつた。三笠と共に、体面など気にしていられないほど必死に仲裁したり宥めたりした記憶がある。

「加賀さん、私からもお願いします」

「赤城さん……」

「6水戦の子たちの命が掛かつてるんです。この状況ですから瑞鶴さんから何か言われることも、無いと思いますよ」

「そうね……。分かつたわ、赤城さん。何事も無く帰つてきたら、間宮さんのところに行きましょう」

「はい！ 大盛りカレーですね！」

「貴女のそれは、特盛と言うのだけれど……。まあ、いいわ」

赤城のおかげで、加賀の殺気が引つ込む。その代わりに、赤城の食いが出てきてしまうのは、それはそれで頭が痛い問題だった。軍持ちとは言え、領収書の金額と上からの小言が増えることは必至だからだ。

「そんなに食べちゃったら、お腹がはみ出ちやいそう……」

「私は多聞丸に怒られちゃうかなあ」

おかげで空気は一気に弛緩し、蒼龍と飛龍などはそれぞれ溜め息を吐いている。それが一層、場の空気を緩めることに繋がった。

「さっきの緊張感はどこへやら……」

光樹がその様子を見て脱力感を味わっていると、剛が小声で話し掛けてきた。

「この調子なら、当面は大丈夫だろう。きちつと、お前さんのダチを見てきてやるからよ」

「……そうだったな。拓海がしつかりやれるか、見てきてくれ。あなたの意見も、かなり重要だからな」

気を取り直して、光樹も返事をする。少将である彼の意見は、大佐である兼続よりもさらに重みを増すだろう。

何もなければ、明日の朝9時ごろに拓海は南鳥島付近にいる筈だ。作戦の成功と6水戦の無事もそうだが、拓海の試験通過も願わずにはいられない。

「ああ、任せておけ。——ほら、お前ら。早く乗艦するんだ。艦長が首を長くして待ってるぞ」

剛は自信たっぷりに請け負ってから、赤城たちを“さがみ”の乗艦用タラップに急かす。

4人は慌てて、光樹に挨拶をしつつ“さがみ”に乗り込んで行った。

「全員、生きて帰って来いよ……」

「提督……」

思い出すのは、こちらの世界に来て軍に入ってから記憶。

敵に乗艦を撃沈され、帰ってこなかった同期。ゴジラによって破壊された、横須賀の市街地。死屍累々と化した、宿毛湾泊地——。

これ以上、何も失いたくない。だからこそ、後方で自分に出来る限りのことをする。

しかしこの時既に、彼がそんなことを願うのは許されなくなっていたのかもしれない。

光樹はただ、横須賀の海を去っていく。"するが"の後ろ姿をただ見
つめているのだった。

第25話 初陣、救出

2048年6月15日、巡洋艦「さがみ」の艦内は交戦海域到達を目前と控え、乗組員たちが慌ただしく動き回っている。

狭苦しい連絡通路を、拓海は金剛たちと共に乗組員の一人に案内されながら急ぎ足で進んでいた。先頭を乗組員が行き、その後ろに伊勢、日向、霧島、榛名、比叡、金剛、拓海と続く。

向かうのは、「さがみ」の艦尾に設けられた格納庫区画。そこに、艦娘たちが出撃を行うのに必要な施設が一通りある。

司令官が指揮を行うオペレーティングルームは、艦前方のCIC付近にある。本当ならばそちらの方に向かうべきであったが、見送りという名目で兼続に許可を貰い、金剛らと行動を共にしていた。もつとも、格納庫に送った後はすぐに引き返さなければならぬ。

「タツクー、ちよつといいですよカ」

格納庫区画も目前に迫り、通路の少し開けた所で金剛は立ち止まると、振り返って拓海に話し掛けた。

「あれ、行かないのか？」

先に行ってしまう比叡たちを見て、拓海は尋ねる。

「後から直ぐに追い付くデス。ここまで来たら、もう道に迷わないデス。比叡に言っておきましたカラ。それより、タツクーに話がありマース」

「俺に？」

言葉はいつものような明るく陽気な調子だったが、それに反して真面目な表情に、何か大事な話があるのだろうかと思える。

「タツクーはどうして、榛名のことが好きになったんデスカ？」

「……え？」

彼女の口から出た問いに、思わず声を漏らしてしまった。

予想外の質問に、拓海は上手く反応することが出来なかった。状況が状況だけに、今回の戦いに関係するようなことを聞かれると思っていたのだ。

「タックー、聞いてマスクか？」

「……ん。ああ、うん。聞いてるよ。まさか、こんな時に聞かれるとは思ってなくてさ」

「こんな時だからデス。それで、答えは教えてくれマスクー？」

金剛はそれを聞いて、どうしようというのか拓海には分からない。何か大事な理由があるのだろうか……。

いつも以上に真剣な雰囲気を出している金剛を見て、答えないわけにはいかないと思う。元々、榛名が好きだということは知られてしまっている以上、理由を聞かれて恥ずかしいことは何も無い。

あまり考え込んで、要らない推測をされるよりも言ってしまった方が良いかと判断する。

拓海は自分の右側に立つ金剛に目を向けながら、口を開いた。

「……一目惚れだな」

「ワオ。それは意外デース。もつと何か理由があるのかと思ってマシタ。榛名で何か、酷いことを企んだりしようとしていたりしていると思っマシタ」

「それは心外だな。……まあ、前例があるし金剛がそう思うのも無理ないか」

あまり思い出したいくない顔を頭の中に浮かべて、拓海は嘆息する。「スミマセン。私、前の提督の後押しをしてしまいましたカラ……。タックーもそんなつもりじゃないかと疑ってたデス」

「後押し？」

聞けば、前の提督——磯貝が着任した当時、彼から榛名のことについて打ち明けられたそう。金剛も最初はそういうことならと二人の仲を取り持とうとしたが、直後から彼の行き過ぎた言動が見え隠れしていたという。金剛の話もよく聞かず、一人で勝手に暴走することが増えていったようだ。勿論静止もしたが、効果は無いに等しかった。

そしてその結果は——。語るべくもないだろう。

「それは、辛かったな……」

拓海は、明らかに落ち込んでいる金剛を慰める。

「榛名は気にしないでと言ってくれマシタ。でも、私の所為で榛名は……」

「考えすぎじゃないかな」

「そう、デスカ……？」

「寧ろ、金剛はよく頑張ったって褒められるべきだろ。榛名は、金剛がどうした、何て一言も言っただけでなかつた。金剛たちのことを心配してたくらいだ」

そう言うと、金剛の顔が驚きの色に染まる。

金剛は、自分が磯貝の想いが叶ってほしいと、純粋な良心から行動を起こしただけだ。聞いた話と拓海が知っている末路から考えて、榛名に嫌な思いをさせたのは磯貝単独による暴走と考えていいだろう。

それに、榛名は言葉通りそのことについて何も口にしてはいない。南鳥島で再会したときも普段通り接していたし、呉では気遣われる側である筈の榛名が、逆に磯貝の死でショックを受けていた金剛を励ましていた。

「本当デスカ……？」

「ここで嘔吐いてどうするんだ。金剛は人の恋路を良かれと思って応援しただけで、何にも悪いことはしちやいないよ。金剛は頑張ったって分かるし、それは皆も知ってるんじゃないか」

「タツクー……」
「不安なら、後で話をしてみたらどうだ？ 意外と気にしてないと思うよ」

若干楽観的ではあるが、そんな提案を試してみる。

金剛は暫し迷ったように考えていたが、やがて飲み下すように頷くと、いつものような天真爛漫な笑顔が戻ってきた。

「そうネ。タツクーの言う通りかもしれないデス。当たって砕けろ、デスネ！」

「砕けちゃだめだろ、砕けちゃ」

「なら、タツクーも私と一緒に榛名と話、してくれマスカ……？」

金剛は、甘えるように上目遣いで拓海を見つめる。

不意にしおらしい態度を取られて、拓海は一瞬心を奪われそうにな

る。そんな内心をおくびにも出さないように注意しながら、首を縦に振った。

「分かったよ。俺も一緒に、話を聞くから。……早く格納庫に行こう」
「アリガトウゴザイマースー。約束だからネー！」

そう笑って金剛は振り返り、速足で格納庫の方に歩き出す。

拓海は彼女の背中を微笑ましく見つめながら、後に続いたのだった。

格納庫まで金剛を送り榛名たちと言葉を交わした後、拓海は急いでオペレーティングルームに戻った。

艦娘の出撃予定海域に着くよりも前に、何とか到着する。

壁沿いに設けられた席にはCROCSの機材を小型化したものが配置され、それが6人分あった。

兼続と3水戦の渋谷諒大佐は、既に拓海から見て右側の三つ並べられた席のうち二つに座っている。

「来たか。早く席に着け」

「はい……！」

真ん中に座っていた兼続に促され、拓海は空いている彼の右側の席に着く。

システムを起動、ログインIDとパスワードを入力。ログインが完了し、次に第2戦隊とのリンクを開始する。作戦域の海図、地図に問題なし。座標モニタリング、よし。各艦娘のコンディション、異常無し。確認し、インカムを装着。

正式な出撃としては、これが初陣となるが拓海に精神的な動揺は無い。緊張こそすれど、支障無くやっていける。

拓海は自分の両頬を叩いて気付けをし、金剛との通信を開始した。

「こちら、白瀬拓海。旗艦金剛、聞こえるか？」
《バッチリ聞こえるネ》

「艀装は完了しているか？」

《もう終わってマース。妖精さんは平気だって言ってるデス》
「了解。こつちからも確認する」

6人分の艀装状態をインストール、チェック。35.6cm連装砲、電探、偵察機に問題無し。伊勢型の瑞雲全機、発艦可能。艀装リンクの状態、良し。

カメラユニット起動。問題無し。通信状態、良好。

この1ヶ月のカリキュラムのお陰で、小型化していてもシステムを問題無く動かすことが出来た。

CROCSは本土にある鎮守府や大きな泊地の場合、オペレーターが付いていて艦隊単位での纏まった処理を行う。しかし一部泊地や基地、南鳥島のような離島の場合はその必要は無く、司令官自らが操作するのは珍しいことでは無い。それはこの「さがみ」も例外では無かった。

「艀装は全て問題無しだ。全員のバイタルも安定。いつでも行ける」

《Thank you ネー！ 出撃順は？》

「二番目だ。3水戦が出た後に、出撃する」

《了解デース！》

金剛の返答とほぼ同時に、「さがみ」が一気に減速していくのを体感じた。艦娘の出撃に際して、安全を確保するための措置だ。

「「さがみ」が攻撃を開始した。俺たちも始めるぞ」

CICと艦橋から情報を受け取った兼続が、拓海と諒に伝える。

拓海にも、ミサイルか何かを発射したような爆音と振動が伝わってきた。

深海棲艦には、通常攻撃は通用しない。しかし全く意味が無いというわけではない。「さがみ」は、支援部隊到着までのカバーと牽制を同時に行おうとしている。

「了解。第3水雷戦隊、準備はいいか？」

《旗艦長良、いつでも行けます！》

1番手に出撃する3水戦に諒が確認を取り、長良がそれに答える。やり取りはそれぞれの部隊で別々のため、拓海には聞こえなかったが、その様子からこちらの出番も近いと感じ取った。

「艦長から、出撃許可が出た。部隊を出せ」

兼続の言葉を受けて、諒はマイクに声を吹き込む。

「第3水雷戦隊、出撃！」

諒の合図で、第3水雷戦隊が大海原へ向けて発進する。

“さがみ”の現在位置を示す地図では、南鳥島から南の沖合で止まるこの艦の艦尾部分から6つの緑色の点が吐き出されていた。同時に味方識別が行われ、艦娘の名前が次々に記されていく。

出撃したのは、長良、五十鈴、三日月、望月、吹雪、白雪。“さがみ”艦尾から飛び出した彼女たちは、既に敵1隻の識別が見えている海域へと直行する。

「次、第2戦隊。金剛、比叡、榛名、霧島、伊勢、日向、カタパルトへ」それを確認次第、今度は拓海が自分のマイクに声を入れる。

この艦には、鎮守府などで見られるような出撃用カタパルトの艦載版がある。これは“するが”型3隻全てに搭載されている。それを使って、彼女たちは出撃が可能となる。

格納庫自体、艦尾の内側のスペースをほとんど占有して作られており、その中には艀装のメンテナンス装置や2隻分の簡易入渠ドッグまで用意されている。さながらミニ鎮守府のような機能を、この艦は備えていた。

《第2戦隊、準備完了デース！》

「よし。第2戦隊、出撃！」

《私たちの出番ネ！ Follow me！ 皆さん、ついて来て下さいいネー！》

金剛の陽気な声と共に、第2戦隊が出撃する。“さがみ”を出た後は、3水戦を追随する航路を取った。

続いて、兼統指揮下の第5航空戦隊も続く。

翔鶴は出撃をするなり、敵がいると思しき方向へ高速索敵機・彩雲を飛ばす。味方である6水戦の搜索も含んでいるのだろう。反応がまだ見えないところからすると、ここから離れたところにいるのかもしれない。

「——艦長から確認を取った。南鳥島泊地にいる司令官1名と士官2名は無事だ。6水戦は機器の損傷と軽度のジャミングで通信状態が悪く、行方の確認が向こうでは取れないようだ」

「ということとは、こちらでは確認が取れたんですね？」

兼続の言葉に、彼よりもやや年若い諒が敬語尋ねる。

「既に本艦がジャミング中和装置を使用し、彼女たちの無事を確認した。だが、響が大破、他全員も大破寸前の中破状態で、現場海域から動けなくなっている」

誰一人として沈んでいないことに安堵しつつも、予断を許さない状況に拓海は同時に焦りも覚えた。

誰かから通信が入り、兼続がインカムを耳に押し当てる。

「翔鶴か。———そうか、了解した。至急、艦載機を全機発艦だ。出し惜しみはするな」

「見分かりましたか」

諒の言葉に、兼続は首肯する。

「ああ。ここより南東へ5kmの海域だ。先に俺の部隊の艦載機を急がせる。二人は指定場所に急行し、敵を発見次第攻撃。味方の救出も行ってくれ」

「了解！」

「了解しました！」

それを聞いた拓海たちは、早速指示を飛ばして彼女たちを南東へ向かわせる。

ほぼ全速力で駆けて行く金剛たちの頭上を艦載機が通り過ぎ、やがて地図と海図の上に敵と味方の反応が見え始めた。追従している小型カメラユニットの映像からも、遠めだが誰かが蹲っている様子が見える。

「伊勢、日向、瑞雲を真っ直ぐ飛ばしてくれ。5航戦の後に続いて航空攻撃だ。牽制でも構わない。金剛、比叡、榛名、霧島は偵察機を飛ばして弾着観測射撃の準備だ」

《伊勢、了解しました！》

《日向、了解》

《金剛、了解デース！》

次々と返答が帰って来て、すぐに金剛たちは瑞雲や偵察機を正面に向けて飛ばす。

空母の艦載機編隊の後を、瑞雲と零式水上偵察機が飛んで行く。パイロットの妖精と視界イメージを共有した金剛たちによって、前方の海域の情報が送られてくる。

海図上に、次々と敵の正確な情報が更新されていく。カメラユニットからも、その影が遠目に見え出していた。

「なっ……い！」

兼続が声を漏らし、拓海も唾を飲み込んで画面を見る。

カメラには、幾つもの不気味に揺らぐ黄色い光がある。手前には、6水戦の面々と思いき影が蹲っていた。その上では、どこからか橙色の敵艦載機が自由に飛び回り、彼女たちを弄ぶように空中を踊っていた。

「よりもよって、こいつらか！」

兼続の怒声が、部屋に響く。

海図に示された敵の情報は――。

戦艦夕級flagship、重巡り級flagship、軽巡へ級flagship……。

各艦種でも特に脅威とされる個体たちが、無表情に6水戦へと攻撃を加えていた。

倒そうとするわけでも無く、逃がそうとするわけでも無い。ただ、彼女たちを上空の敵機と同様に弄んでいる光景が目飛び込む。

拓海の全身が、沸騰するように一気に熱くなった。

「敵の親玉は随分な趣味をしいやがる……い！ 全部隊、攻撃態勢に移れ！ 空はこちらで抑える！」

兼続も怒りを覚えたのだろう。声を張り上げ、翔鶴たちに指示を飛ばし始める。

「第2戦隊、砲撃開始だ！ 2隻ずつで、敵3隻を攻撃。3水戦の突入を援護だ！」

拓海も通信を入れ、攻撃の合図を送る。

《了解デース！ 全砲門、Fire!!》

金剛たちの主砲が次々に火を噴き、敵3隻に襲い掛かる。しかし敵も機敏に反応し、着弾地点から素早く離れ、初撃は空振りに終わる。

「夕級が撃ってくるぞ！ 散会して衝撃に備えろ！」

映像越しに夕級の動きを捉え、拓海は指示を飛ばす。金剛と比叡、榛名と霧島、伊勢と日向の組み合わせで、初弾命中をかわす。続け様に2発目、3発目の至近弾が三手に分かれた金剛たち水しぶきをかける。

《アイツ、1隻で私たちを相手にするつもりか!?!》

夕級は自身が持つ砲を器用に3方向へ向け、こちらの装填が終わるよりも早く打ち込む。

榛名と霧島が、3水戦に向かうり級とへ級の方にも砲を向けるが、夕級によって阻止された。

《ヒエーツ！》

インカムから比叡の悲鳴が聞こえてきて、拓海は急いでバイタルチェックをかける。直撃は避けたが、眼前で敵砲弾が爆発した所為で艤装にダメージが出ている。しかし、まだ無視出来る程度だ。

「榛名、霧島、暫く目標は夕級だ。対空に気を付けてくれ。比叡はまだ小破にもなっていない、十分戦える。——すみません、こっちは夕級から離れられそうにないです」

指示を飛ばした後、拓海は兼続と諒に自部隊の現状を伝える。

「渋谷大佐、そちらはどうだ」

「大丈夫です。その2隻は3水戦が引き受けましょう。——五十鈴から潜水艦が1隻、近くに潜んでいると報告がありました。爆雷とソナーはあるにはありますが——敵を捉え切れていません」

「渋谷大佐、こちらから瑞雲を数機回します。上空からの援護になりますが」

「十分だ。助かる」

水上や上空からだけでなく、水中にも脅威が潜んでいる。3水戦は3隻が対潜攻撃手段を持って来ているが、確実に期すならば瑞雲も回した方がいいだろう。

諒は申し出を即座に受け入れ、拓海は伊勢と日向に指示を伝える。

「3水戦が潜水艦を見つけた。余っている瑞雲はあるか?」

《はい。先ほど戻ってきた数機なら……》

《私の方も同じだ》

「急いで3水戦の援護に回してくれ。負担は増えるけど、頼む」

《大丈夫です。伊勢、了解しました》

《日向、了解だ》

伊勢、日向の両名から瑞雲数機が飛び立ち、3水戦の上空で対潜行動を開始する。夕級の相手をしながら瑞雲を複数の方向に分けるという無茶振りに、伊勢と日向は難なく答えている。パイロットの妖精の力も含めて、これが航空戦艦せあるということ。拓海は実感していた。

そして、戦況は5分——ややこちらが不利なまま推移していた。

5航戦が制空権を中々取ることが出来ないのが、主な要因だろう。彼女たちの戦闘機は紫電改二と、零式艦戦52型だ。どちらも決して悪い機体では無いが、敵艦載機の方が質と量共に上回っている。

戦闘機はじわじわと落とされ、対空能力が無いに等しい艦攻や艦爆が海へと散っていく。

敵の艦攻と艦爆はその合間から金剛たち支援部隊を攻撃し、妨害する。3水戦や第2戦隊はそれを避けながら水上の敵を相手しなければならず、状況は徐々に悪い方へと傾き始めていた。

「やはり、母艦は奥から出て来ないか……。このままでは拙いな……」兼続は自分の所の画面を見て、歯噛みする。

追えば、追撃が来る恐れがあり6水戦も助けられなくなる。しかし前に進もうとしても、敵の猛烈な攻撃の前に阻まれてしまう。

「せめて敵の攻撃を妨害して、神通たちを救出する隙くらいは作りたいですね」

同意するように、諒も呟く。

どっちにしてもこのまま戦っていれば、助けを待っている彼女たちが力尽きてしまう恐れもある。その憂いだけは絶っておきたいところだった。

「場所の検討はついているんですか？」

「ああ。だが、敵艦載機の動きから推測してこの艦から大体20km

程度は離れているだろう。距離が遠くて、仮に抜けられたとしても追撃は免れないな。尤も、それすら許してはくれんだろうが」

拓海の質問に、兼続は翔鶴たちから貰ったデータを元に分析する。全速力で行こうにも限界はあるし、艦隊がバラバラになって集中攻撃をされてしまう。特に航空機などは足が速いので、振り切ることも不可能だ。

そこまで考えて頭の中で何か引っ掛かっていた時、伊勢の声が拓海の耳に入った。

《見つけた……！ 望月さんにソナーを使うよう伝えてください。潜水ソ級です》

「分かった！ 渋谷大佐、伊勢の瑞雲が潜水ソ級を発見。ソナーをお願いします」

「流石は航空戦艦だ。早いな。望月、ソナーを使え。瑞雲が指示している辺りにソ級が要る筈だ。——大丈夫だ。あんたの三式ソナーを信じる」

程なくして、五十鈴が潜水ソ級を沈めたという報告がオペレーターにも届く。これで、水中の心配事は水上艦と艦攻からの魚雷だけに減った筈だ。潜水艦がいなくなったからといって安心は出来ないが、負担はやや減ったことだけは確かだった。

「待てよ……。魚雷……？」

確か、この艦には最新の魚雷が搭載されていなかったか。

「どうした、白瀬拓海」

「その……。『さがみ』は最速で目標に到達する魚雷を積んでいると、呉を出るときに聞いたんですが……」

呉を出港する直前、艦長から艦の装備について簡単にだが、拓海は聞いていた。細かいことは教えてもらっていないのでそれ以上は分からず、何か知っているかもしれない兼続に聞いてみる。

反応は案の定のように、「そうか」と漏らしながら艦橋に内線を繋いでいた。

「——艦長、例の魚雷をこれから指定する海域に何本か打ち込んで貰えませんか？ ——ええ、損傷は与えられませんが、あの速

さと威力ならば妨害は十分に可能でしょう。その隙に、6水戦を本艦に回収します。——はい。宜しく願います」

通話を終わると兼続は、拓海と諒に告げる。

「『クラミツハ』を使用する。CICからの予定コースを二人に渡す。そこから各艦娘を退避させる。その後はなるべくコースに近づかせないように。発射数は4本。敵の航空攻撃が途切れ次第、3部隊で夕級たちを押し戻す。隙を見て6水戦は退避。大破している響は、第2戦隊から一人を牽引に回せ」

画像データが転送され、拓海と諒はそれを見つつ素早く兼続の言葉を実行する。

画像には『クラミツハ』のデータも一部書かれており、速力は最大300ノット程度、2分ほどで目標に辿り着き次第、海面近くで自爆させるという内容が書いてあった。

金剛たちを退避させながら、拓海はその出鱈目さに息を呑むしか無かった。

艦娘たちの退避を確認すると、魚雷『クラミツハ』が20km先の海に向けて発射される。それは拓海たちの画面からも確認出来、魚雷は猛スピードで海中を突き進む。

ものの2分で1本目が届き、反応が消失したことで炸裂を確認する。インカムにもカメラユニットを経由した轟音が響き、映像では遠目にも分かるほどの波しぶきが上がる。その瞬間、敵航空機の統率が僅かに乱れたのが、海図上のアイコンから確認出来た。

続けて、2本目から4本目までも順次撃たれ、その度に敵機は混乱していく。

自分たちのリーダーに何かあったことを察知した夕級たちは、攻撃の手を止めて魚雷が炸裂した方角を見つめている。

「今だ——！ 5航戦、反撃だ！」

「3水戦、水雷戦用意！」

兼続の声を狼煙として、状況が一気に傾く。彼に続いて、諒も自分の部隊に指示を送っていた。

「第2戦隊、通常弾を装填。前に出てくれ。6水戦の安全確保を最優

先だ！ それと、榛名は響を見つけ次第、"さがみ"まで牽引してきてくれ。伊勢と日向は、二人に護衛の瑞雲を回してくれ」

《榛名、了解しました！ 響ちゃんと一緒に戦った子です。絶対に助けます！》

《伊勢、全力でサポートするわ！》

《日向、右に同じく》

拓海の言葉で、第2戦隊も次の動きを見せる。

榛名を選んだのは個人的な信頼もあるが、響ともそれなりに仲が良く、彼女自身が長い期間南鳥島を守り続けていたという実績があるからだった。

艦娘として、戦隊の誰よりも修羅場を潜り抜けて来た彼女にこそ、任せるべきだと思ったのだ。

3水戦を先頭に、前線が少しずつ押し上げられていく。

夕級たちは航空支援が切れ、その隙に叩き込まれる攻撃によって後退を強いられる。

退路を阻まれていた6水戦の前に道が開かれ、敵との間に割り込むように3水戦が追撃を仕掛ける。

空からは天山や彗星などが夕級たちに襲い掛かり、水上では金剛たちが支援砲撃を行う。

夕級やリ級が器用に避けて下がる中、霧島の攻撃はへ級に直撃。動きが止まったところに3水戦の雷撃が撃ち込まれ、へ級は成す術も無く海へと消えた。

仲間を倒された夕級が3水戦に照準を変え、猛反撃を行う。敵を撃沈して油断していた吹雪と白雪が、直撃弾を受けて中破してしまった。

程なくして3水戦に守られていた6水戦の面々が、撤退を開始。しかし、響だけはその場から動けない状態が続いていた。

「榛名、砲撃を中断して響の保護に回ってくれ。霧島は、榛名の直援を頼む。このままだと3水戦が耐え切れない」

諒から五十鈴たちの状況を伝えられ、拓海は即座に指示を出す。

海図を見ると、態勢を立て直したのか敵航空機が徐々に増え始めて

いる。このまま戦い続けるのは無理だと判断し、響の即時救出に切り替える。本当ならば安全を確保してからの良いのだが、逆に響どころか艦隊全体にも悪影響を出しかねないだろう。

「渋谷大佐、艦装リンクは使えないのか？」

「無理です。艦装の損傷状態が最悪です。こちらからの信号受信も出来なくなっています。自動航行への切り替えは無理かと。下手にやっても、響の身体にどんな負担が掛かるか分かりません」

兼続の問いに、首を横に振る諒。

CROCSとの接続により、艦娘の艦装を一時的にロックして自動航行モードに切り替える機能がある。主に艦娘の緊急回避用に使われるのだが、響の場合それが不可能になってしまっているのだ。十中八九、敵の猛攻撃によるものだろう。

二人のやり取りを聞いていた直後、榛名が響の傍に到着したことを確認する。

《こちら、榛名です。響ちゃんを発見しました》

「容体は？」

《意識が朦朧としています。……あと少し遅れていたら、轟沈していたかも、しれません……》

「なっ……」

榛名の苦しい声に、拓海は息が詰まる思いをした。

カメラユニットは金剛たちの方にいるため、響の正確な様子は分からない。だが遠目に見ると、榛名が響を抱き抱えている様子は何となくだが分かった。

幸い意識は無くしていないようだが、それでも非常に危険な状態であることは、それらの情報だけで十分に判断することが出来た。

「……響を連れて、早くそこから戻って来てくれ。格納庫の方に直接行くんだ」

《……分かり、ました。響ちゃん、もうすぐだから、頑張つて……》

榛名が、響に声を掛けているのが拓海の耳にも届く。

「白瀬、響の様子を」

「……はい。榛名からの報告によれば、意識はかなり朦朧としていて、

轟沈寸前の状態だった……と」

「……そうか。入渠ドッグの準備は出来ている。戻って来たら、すぐに入れるように」

「了解、です」

拓海は何とか、兼続に響の現状を伝える。それを伝えるだけでも、胸の内に重いものを感じた。顔見知りなだけに、その辛さに耐えるのがやっとというところだった。

兼続はそれ以上何も言わず、自分の部隊の指揮に戻る。

拓海も気持ちは晴れないものの、何とか意識を切り替えて自分の仕事に取り掛かった。

今の自分は、指揮官という立場だ。こんな時にしつかりしなくては、どうする、と自分に言い聞かせる。

6水戦が交戦海域から抜けた後は、3部隊の艦娘と敵艦との戦闘が再び激化していた。

夕級は相変わらず無類の強さを発揮し、リ級も相手を寄せ付けない戦いをしている。敵母艦も態勢の立て直しが終わったようで、敵機の数は先ほどと変わらない数にまで回復していた。

一方で3水戦は2隻が損傷。第2戦隊も砲撃を続けるが決定打は与えられず、5航戦は艦載機の消耗で徐々に制空権を巡った争いで押され始めていた。

このままでは敵に押し切られる。

誰もが、そう思っていた時だった。

新たな味方艦娘の援軍が、この海域に到着した。

第26話 Marcus

「ハッチ開放！」

“さがみ”の艦尾格納庫に、乗組員の男性の声が響き渡る。直後、ハッチ開放を告げる警報ランプが光り、けたたましい警告音が鳴り始めた。

ハッチが開いて海面と艦内をスロープのように繋ぐと、その上にカタパルトが展開される。艦娘の出撃用に使われている物だ。

しかし今回、使用する者はいない。ハッチは、海上から帰還する艦娘を回収するために開かれていた。

榛名は満身創痍となった響を脇に抱え、“さがみ”に帰還する。

“さがみ”のハッチは当に開かれ、響以外の6水戦のメンバーは既に乗艦している筈だ。

「響ちゃん、しつかり！」

「……………」

必死に声を掛けるが、返事は無い。発見からここに来るまでずっと、響に声を掛け続けていたが、彼女の意識は朦朧としていて返事を聞くことは出来ていなかった。

兎に角響を抱えたままハッチを上りながら顔を上げると、そこにいた乗組員のうち、こちらを見ていた何人かが血相を変えていた。

「お、おい！ 嬢ちゃん、こいつは……………」

ハッチを上がり切ったところで、艀装の整備を担当している男が声を掛けて来る。彼も他の面々と同様、力なく榛名に抱えられている響を見て顔色を青くしていた。

「響ちゃんです。ドッグに連れて行ってもいいですか？」

「…………ああ。一人分は空けてある。すぐにでも行こう。艀装は取り敢えず、付けたままで良い。向こうで外す」

事態を重く見た男は、榛名の先を歩いて数十メートル先にあるドックを目指す。

榛名は響の身体を抱えたまま、男の後に続いた。乗組員たちが顔色を変えたのは、言うまでも無く響の状態にあつた。

艦装は、背中の主機を搭載しているランドセル型の物は、大穴が開けられ、上部に取り付けられた12.7cm連装砲は影も形も残っていない。他にも細かい傷や爆発による小さい穴が夥しく開けられている。

響本人は、頭から流れ出た血の跡が額から左目、頬にかけて残り服が破けて焼け焦げ、あられもない姿になっていた。腰回りにあつた筈の魚雷発射管も根元を残して吹き飛んでおり、代わりに彼女の脇腹に痣と大火傷を残していた。

他にも、身体中に敵の攻撃による火傷や痣、切り傷が数え切れないほど付いており、少女をこれ以上ない程に痛めつけていた。

その有様は筆舌に尽くしがたく、こうして生きているのが奇跡とすら言えるほどの状態だった。

格納庫内の入渠ドックは目隠しも兼ね、四方を高い壁で囲まれていた。

榛名は途中で女性乗組員の力も借り、響を急いでドックに運ぶ。

大破した艦装は外の男に預け、既にお湯が張られた長方形の風呂に響を浸からせる。このお湯が、艦娘を治癒する効力を備えているからだ。

一刻でも早く入渠させなければならなかったため、服は脱がせている余裕は無かった。

すぐ隣にもう一つ同じ形の風呂があり、そちらには暁が入っている。その向こうで、残りの艦娘たちが他の女性スタッフの応急手当を受けながら順番待ちをしていた。

惜しみなく高速修復材^{パケツ}が投入され、損傷を受けていた彼女たちはあつという間に修理を完了させていく。艦装の方は別で修理をすることになるので出撃は出来ないが、本人たちの傷は治っていた。

修理を終えた神通や暁たちは、ドックに横たえられて修復中の響の傍に寄り、心配げにその様子を見守る。

普段は自由奔放な島風でさえ、連装砲ちやんの一基を胸に抱きながら無言で響を見つめていた。

「榛名さん。響ちゃんは……」

神通が青を上げ、響を挟んで向かい側にいる榛名に話し掛ける。

「危険な状態は脱しました。ですが、高速修復材を使ってもあと1時間掛かるそうです。内臓や骨にまでダメージを受けていて、入渠が終わっても絶対安静だそうです」

幾分か顔色が良くなった響を見ながら、榛名は彼女の状況を説明する。少なくとも彼女が無事であることが分かり、神通は痛まじげな表情を残しつつも安堵の溜息を吐いていた。

「私、は……艦娘として、まだ……戦えるのか……?」

「響ちゃん!」

意識を取り戻した響が薄目を開いて呟く。

それに気付いた神通たちは、響の顔を覗き込むように身を乗り出していた。5人の顔には、喜色が混じっている。

榛名もその様子にほっとしつつも、響に伝えなければならない事実を思うと胸が痛んだ。

「榛名さん、か……。久しぶりだ……」

「はい……響ちゃん。こんな形で再会するとは思っていませんでした……」

「……私の身体が無事でも、艤装が駄目なら艦娘として、この先戦っていけるか分からない。この身体も艤装も、そう簡単には替えが利かないからな……」

「それは……」

響は自分の状況をしっかりと把握しているらしく、状況が芳しくないことを榛名の表情で察してしまったようだ。

艦娘たちはそれぞれ、固有の「艦の記憶」を持っている。

響なら、実際に軍艦として存在した特Ⅲ型駆逐艦「響」、榛名なら金剛型戦艦「榛名」の記憶だ。

艦娘たちは軍艦だったところに体験した出来事を、自分自身の記憶と

して持つて生まれる。

現状で確認されている限り、軍艦「響」の記憶は今ドックで横たわっている「響」という艦娘しか保持していない。それはここにいる神通も暁たちも、そして榛名も例外では無い。

同じ艦を由来とする名前と記憶を持つ艦娘は、彼女たちが世界に登場してから一度も例は無いのだ。

記憶を宿した身体と、彼女たちの艤装も記憶と同様に一人と一個ずつしか存在しない。

第一世代の艦娘たちが轟沈した後、別の個体として建造された例も無い。となると、一人の艦娘が轟沈してしまえば、その艦娘は二度と存在しなくなる。

同じ「艦の記憶」や姿を持った艦娘をもう一度生み出せない以上、彼女たち一人ひとりが貴重な存在であり、戦力と言えた。

「事実を、教えて欲しい。私はとつくに、受け入れる覚悟は出来ている」

響の言葉に偽りは無いことが、彼女の穏やかでありながら強かな瞳から感じられる。

それを見て榛名も自身の中にあつた迷いを振り払い、覚悟を決めて話すことにした。

「…………このままでは、響ちゃんの言う様に艦娘として活動出来ないだろうということでした」

「やはり、そうか…………」

榛名の言葉を飲み込みながら、響は先を促す。

「先ほどの整備担当の方が仰っていましたが、艤装は大破。辛うじて原型は保っていますが、動力部分が完全に破壊され、内装も全て駄目になっているそうです。横須賀にいる明石さんでも直せるかどうか…………と。ですが…………」

「…………何だい？」

思わせぶりに間を置いた榛名に、響は首を傾げる。

「響ちゃんが艦娘として戦えなくなる、ということは無いですよ」

同時刻、〃さがみ〃オペレーティングルーム。

戦況は新たな局面を迎えようとしていた。

「来たか」

兼続が自分のモニターを見つめて、眩いていた。

拓海のモニターには、〃さがみ〃後方から飛来する多数の艦載機の表示がされている。

敵機かと疑ったが、よく見るとそれらは味方を示す緑色で塗られていた。

明らかに、5航戦の艦娘のものでは無い艦載機たちは〃さがみ〃上空を通り過ぎ、金剛たちと交戦している敵艦載機と夕級、リ級に襲い掛かる。

特に敵機と交戦を行っている一部艦載機の速さは、翔鶴たちの紫電改二よりも明らかに上で、機動性も高い。他の艦載機と共にみるみるうちに敵機を撃ち落とし、制空権が一気にこちら側に傾こうとしていた。

「1航戦ですか」

「ああ。何とか間に合ったようだ」

兼続は、諒の言葉に安堵の息を漏らしながら答える。

拓海も事前に、彼女たちの援護があることは兼続から聞いていた。南鳥島や横須賀で顔も合わせたことはあるが、ここまで戦力を覆せる力を持っているとは思ってもみなかった。

《こちら、〃するが〃。1航戦司令官の鳴海剛だ》

ふと、拓海たちのインカムに通信が入る。

「こちら〃さがみ〃。5航戦司令官・芝浦兼続です」

代表して兼続がマイクを取り、敬語で応答する。向こうの方が、大佐である兼続よりも上の少将にある人物だからだ。

《本土からの要請で、千島から援護に来た。遅れて申し訳ない》

「いいえ、寧ろ助かります。——6水戦は無事に保護しました。敵残存戦力は夕級とリ級のflagship。それから未だ姿を見せない敵航空母艦です」

《こちらでも確認している。——と。迂回させていた蒼龍の二式艦上偵察機が敵母艦を補足した。データをそちらに回す》

その声の直後、海図情報が更新される。海図はより広域を示すと、*“さがみ”* から南東へ約22kmの辺りに敵のアイコンが表示される。

その詳細を確かめた瞬間、拓海たちは絶句した。

やや間があつた後、立ち直るのが一番早かつたのは兼続だった。

「鳴海少将。……この情報に、間違いということはない」

《有り得ないな。蒼龍を介して送られてきた情報だ。こちらでも、偵察機のアイコンが敵に接近したのを確認している。3機向かわせたが発見直後、即座に撃墜された。敵さんもかなり良い目を持っているらしい》

困惑したように尋ねる兼続に、剛は至って冷静な声で答える。

海図には、空母ヲ級flagship2隻。そして——。

「装甲空母姫……ですか」

しん、と静まり返つたオペレーターイングループに、兼続の声が響く。《あくまで、艦載機の妖精とイメージを受け取つた蒼龍からの報告だ。現在までに確認されている深海棲艦の特徴と識別名称から、彼らがそういう判断したに過ぎない》

「他の敵艦という可能性は？」

《上空に*“雲”*があることや移動能力、艦載機運用能力から考えて少なく見積もつても*“鬼”*だろうな。ヲ級では、この現象はまずありえないな。……まあ、そもそも蒼龍が嘘を吐いているとは思えない。兎に角、今は目の前の敵を何とかする方が先だ》

「——そうですね。では、引き続き援護を頼みます」

《おうよ。任せられた。……ああ、そうだ。白瀬拓海はいるか？》

兼続との受け答えをした後、剛は思い出したように拓海の名前を呼んだ。

「はい。ここにいます」

《光樹から、お前のことを任されている。ここが正念場だ。気張れよ》
「ありがとうございます」

やや雑な言い方ではあるが、それが剛なりの気の使い方なのだろう。

拓海はやや戸惑いつつも礼を述べる。

「——では、これで一旦通信を切りますがよろしいでしょうか？」
《ああ、時間を取らせてすまない。これで通信を終える。『マルス作戦』、何としてもやり遂げよう》

その言葉を最後に、
“さがみ”と“するが”のオペレーティング
ルーム間の通信は完了する。

拓海は、先ほどの剛からの言葉を反芻する。

——光樹から、任されている。

鳴海剛は、光樹と同じ年でもう長い付き合いになるのだという。あの口調からして、光樹とは友人でもあるのだろう。

横須賀でも何度か会っているが、親近感の持てる話しやすいおじさんといった印象だった。

そんな彼からの言葉は、それだけで十分励みになる。

敵の情報でシヨックを受けていた自分の頬を叩いて、気合を入れなおす。

拓海は画面に向かい、金剛たちに指示を出しつつ戦況を見守るという地道な作業に意識を戻していった。

1 航戦の戦闘機たちが敵機を駆逐していく。

先ほどまで自由に空を舞っていた艦攻も艦爆も、1 航戦の戦闘機の前には成す術も無かった。

5 航戦も残存している艦載機を回し、必死に敵へ喰らいつつ行く。

1 航戦の主力戦闘機は、空母艦娘の次世代艦載機として登場した烈風系列の機体。そして、その烈風たちを超える能力を持ち、事実上の

加賀専用となっている震電改。

それら最新鋭の艦載機隊が激闘を繰り広げ、空を蹂躪する。

その後が続いて、自機の安全を確保した流星改や流星といった艦攻や、彗星一二型甲などが夕級とり級に向けて魚雷を放ち、爆弾を見舞う。

夕級もり級も全力でこれを回避し、十字雷撃の前にも一発の被弾も無くしぶとく生き残って見せる。続け様に対空攻撃を行い、背を見せた艦載機を撃墜。

しかし、制空権を奪われつつあることによつて夕級とり級は確実に疲弊していき、形成は艦娘たちの方へと傾いていた。

やがて、一発の爆弾が夕級を捉える。

爆弾は夕級の背中に直撃し、爆発によつて体勢を崩す。

カメラユニットからの映像でそれを見ていた拓海は、即座に指示を出す。

「今だ！ 徹甲弾を装填！」

《OK!! 全砲門、Fire!!》

拓海の声に金剛が即座に答え、直後に5人の艦娘が主砲を夕級に固定。合図と共に一斉射を行い、多数の徹甲弾が夕級目掛けて殺到した。

それでも尚夕級は回避運動を取ろうとするが、翔鶴の彗星による爆撃で妨害されてしまう。

最後の機会を失った夕級の全身に、徹甲弾が突き刺さる。数発は外れたが、それでも半数以上の弾が彼女に命中していた。

徹甲弾が炸裂し、夕級の身体を内側から食い破っていく。一瞬のうちに身体は引き裂かれ、夕級は苦しむような表情を浮かべながら、成す術も無く爆発の炎に包まれた。

《夕級flagship、撃沈を確認しました》

敵を注視していた霧島から、報告が入る。

制空権がこちら側に傾いてから、敵を倒すまでの時間は今までとは段違いに早かった。

夕級は最後まで粘っていたが、それも上空からの援護に支えられて

いるところが大きかったと実感する。敵艦攻や艦爆の攻撃は的確で、金剛たちは十分な照準をする余裕が無かった。

一方で、水上艦の数の上では艦娘側の方が多かったにも関わらず、金剛たちを相手にリ級と合わせてたった2隻でしぶとく立ち回っていた夕級の戦闘能力には舌を巻かされた。

《やつと倒せましたね、お姉さま》

ほっと一息吐いたような比叡の声が、無線の奥から聞こえてくる。

《まだデース。まだリ級が残ってマス》

「ああ。3水戦がリ級と戦ってる。リ級の背後から包囲網を敷きつつ、追い詰めるぞ」

《了解デース。皆さん、行きますヨー！》

金剛の張り切った声に続いて、第2戦隊が移動を開始する。

東の海域で戦っている3水戦との間にリ級を挟むようにして、金剛たちは迅速に展開していく。

伊勢たち瑞雲による牽制攻撃の後、金剛たちによる砲撃が開始された。

「渋谷大佐、隙はこちらで作ります」

「助かる。3水戦、聞こえるか？ 第2戦隊の支援砲撃が加わる。隙を見て、魚雷を叩き込め！ 砲撃はいい、魚雷を撃つことに専念しろ」

拓海の言葉を受けて、諒は次の指示を出す。

ここからは、金剛たちの砲撃がより重要になってくる。

艦載機たちによる爆撃を行いつつ、金剛たちは榴弾に切り替えて敵の意識を自分たちに向けるための砲撃を開始した。

程なくして、絶え間なく浴びせ続けられる砲撃に、リ級が鬱陶しそうに注意を金剛たちに向ける。

両腕の主砲を突き出して砲撃を返しつつ、金剛たちに向かってリ級は動き出した。自然と背中を3水戦に向ける格好となるが、敵は速度を上げているために雷撃を行っても捉えられない可能性がある。

そこに、瑞雲や彗星たちの爆撃が加わり、進路を塞ぐように流星たちの魚雷が投射される。

たまらずリ級は減速しかわそうとし、そこに金剛による砲撃が1

発命中する。衝撃でリ級は一瞬停止して崩れたバランスを取ろうとした。

——その一瞬が、致命的な仇となる。

3水戦は即座に魚雷発射管に魚雷を装填、旗艦長良の合図で一斉に酸素魚雷が海中に叩き込まれる。

合わせて32本にも上る魚雷が、薄っすらとした航跡を残して突き進んで行く。

漸く持ち直したところで魚雷が命中し、そこで初めて背後の敵を思い出したり級は、今まで無表情だった顔に驚愕の色を初めて浮かべた。

直後に炸裂した魚雷により、リ級の身体は圧倒的な威力の前に引き千切られる。藍色とも黒とも判別出来る不気味な色の血を撒き散らしながら、塵芥と化していった。

「リ級 flagship、撃沈!!」

「5航戦、3水戦、第2戦隊、南東22kmの海域に向かえ。目標は敵空母3隻。うち一隻は敵の親玉だ。何としても叩く!」

諒を介した3水戦からの報告を受けて、兼続が指示を出す。

最後の戦いが、始まろうとしていた。

南東へ艦娘たちが航行すること、約20分。

上空では1航戦を中心とした戦闘機隊が、最後の抵抗を試みる敵艦載機たちを悉く叩き落していく。

おかげで先行する3水戦と榛名を欠いた第2戦隊に致命的な損傷は無く、敵が未だ留まっている海域に着こうとしていた。

間も無く、“さがみ”オペレーターイングルームのモニターも更新され、海図には新たな敵の情報が表示されていた。

“するが”からの連絡があった時には不明瞭だった情報も、流石に近づけばはつきりとする。カメラユニットからの映像もあり、その姿を確認するのは今や容易となっていた。

「装甲空母姫……」

映像越しに姿を確認した拓海は、その不気味なあり様に呻く。

ポニーテールに結わえられた白髪にほぼ裸身も同然な真っ白い本体、それを覆うように装備された艦装。さつきまでは届かなかったであろう主砲は艦娘たちをしつかりと捉えている。全身からは赤いオーラのようなものが湧き立ち、赤い光を瞳に宿した彼女は口元を歪めて笑う彼女は、さながら蛮族を迎え入れた悪の女王のようだ。

両脇に黄色いオーラを纏わせたヲ級を2隻侍らせ、最後の戦いに挑もうとしている。

止めだと言わんばかりに兼続が声を上げようとしたところで、無線の向こうからそれは聞こえた。

「サア、オマエタチモ聞カセルガ良イ。泣キ叫ブ声ヲ。見セ
ルガ良イ。無様ニ喚ク姿ヲ!!」

それは、声だった。

愉悦を含んだ笑みで、一度聞けば忘れられない纏わり付くような声で、ソレは喋った。

「言葉を発した……!?!」

沈黙した拓海たちや艦娘たちの心の声を代表するように、諒がポツリと溢す。

確かに口を動かし、言葉が発せられたのだ。

他でも無い、敵艦隊を率いてやって来た女王。装甲空母姫によって。

「——考えるのは後だ！ 5 航戦、攻撃開始！ ヲ級から確実に沈めろ」

兼続の一言で、現場も我に返ったように再び動き出す。

画面上では、しばらく空を回っていた艦載機たちがヲ級2隻に向かって攻撃を開始した。

「だ、第2戦隊、砲撃開始！ 敵艦載機の発射口を重点的に狙え！ 敵からの砲撃に注意だ」

拓海も、先ほどの事態は一度頭の隅に置き、金剛たちに攻撃を指示する。

暫し固まっていた金剛たちも、この声で弾かれたように指示を実行に移した。

残った艦載機や弾を惜しみなく使い、艦娘たちは敵空母に攻撃を加えていく。

ヲ級は最後の抵抗を試みるが、既に艦載機のほとんどを使い果たらしい。回避行動を取りつつ対空機銃で迎撃するも砲撃によって機銃は潰され、残された艦載機も帽子状の発射口を潰されたことで何も出来なくなってしまう。

そこに叩き込まれた魚雷によって、2隻のヲ級は抵抗らしい抵抗をすることも出来ず、海の藻屑となって消えていった。

残る敵は、装甲空母姫。

金剛たち第2戦隊と長良たち3水戦が取り囲んだところで、彼女はさも愉しそうに笑い始めた。

《ククク……。良イダロウ。死力ヲ尽クシテ、掛カッテ来ルガ良イ!!》
そんな声を発すると、装甲空母姫は発射口から最後の艦載機を大量に発射し、16inch連装砲で怒涛の反撃を開始した。

たちまち爆撃と砲撃が艦娘の周囲に着弾し、幾つもの水柱が出来上がる。

《くっ、まだこんなに力を残していたとは……!》

攻撃を何とか凌ぎつつ、伊勢が呟く声が拓海の耳にも残る。

「第2戦隊は敵の装備を潰して、味方の援護だ。砲身はなるべくこちらに引き付けて、3水戦を撃たれにくくする」

即座に自分たちの役割を頭の中で弾き出し、金剛たちに通信を飛ばす。

装備を潰して止めを刺すのがベストではあるが、それが出来なくとも砲身はこちらに向けさせておくことで、3水戦に雷撃による奇襲の機会を与える。

空は1航戦と5航戦が飛び回り、抑えてくれている。そうなれば、

何度も砲撃を加えて来るこちらに目が向き、背後は空く筈だ。

《皆さん、敵の頭を抑えるネ!》

即座に指示を理解した金剛を先頭に、装甲空母姫に攻撃が加えられる。

目論見通り、航空戦で艦載機を水上艦に回せない彼女は、第2戦隊に向けて砲身を向けて、反撃を開始した。

その隙に3水戦が背後に飛び込み、雷撃戦に移るべく体勢を整える。

しかし装甲空母姫はそれを予想していたように、艦載機と砲身を反転させようとする。直後に榴弾が彼女の本体を叩き、砲の照準は狂わされる。敵機もまた、味方艦載機によって抑えられ、海へと落ちて行った。

「そう簡単にやらせてたまるか!」

「渋谷大佐、今だ!!」

「ここが最後のチャンスだ! 全艦、雷撃開始!!」

拓海の声に続いて、兼続が諒に合図を送る。それを受け取った諒は、3水戦に最後の攻撃を指示した。

長良たちが、魚雷の残弾全てを発射管に装填し、装甲空母姫へと向けて発射する。

拡散して放たれた雷撃は確実に敵の回避進路を塞ぎ、内4本が命中する。

しかしそれでも尚倒しきることは出来ず、装甲空母姫は海の上で忌々しそうに艦娘たちを睨んでいた。

装甲空母姫は砲身を長良たちに向けて弾を込めるが、直前でそれは阻まれた。

1航戦と5航戦の艦爆が直上から急降下し、止めの爆撃を見舞ったのだ。

爆弾が次々と直撃し、主砲に直撃した一発がさらに大爆発を引き起こす。

無数の爆発に覆われた装甲空母姫は黒い血反吐を散らしながら、波の上頽れた。

《ククク……楽シカッタゾ……。貴様タチノ、勝ち、ダ……》

如何にも愉快そうな表情で言葉を残し、装甲空母姫はついに全身の力を失い、俯せに倒れる。

そのまま身体は暗い海に吸い込まれ、二度と海面に姿を現すことは無かった。

ややあつて、上空にあつた赤いオーラを纏った灰色の雲が急速に消えて行き、代わりに南国の日の光が艦娘たちを照らし出す。

「——敵旗艦、装甲空母姫の撃沈を確認した。鳴海少将より、『マルス作戦』終了の通達があつた。作戦は成功。二人とも、お疲れさまだ」

“するが”の剛からの通信を受け取り、兼続が諒と拓海に向けて作戦終了を告げた。

2048年6月15日、ヒトヒトマルマル1100。

南鳥島沖にて、島の防衛と6水戦の救出を目的とした「マルス作戦」は、敵襲撃艦隊の撃滅という戦果を得て、ここに完遂された。

第27話 変わっていくもの

「——よって、白瀬拓海を本日1200を以つて新米少佐の階級ヒトフタマルマルを与える」

作戦終了から二日が経つたこの日、拓海は横須賀鎮守府本庁舎の会議室で、演説台の前に立つ笠川大輔の言葉を聞いていた。大輔は台を挟んだ正面にいる拓海を見据え、厳粛な面持ちを保っていた。

拓海は真っ白な新品の軍服を身に着け、肩や袖には星の角を丸くしたような凶形と錨が描かれた階級章が身に着けられている。

今まで自分が来た制服には無かった重みを感じて、内心落ち着かないものの顔には出さず、努めて真剣な表情で大輔と対面し任官の儀式に挑んでいた。

「白瀬拓海、謹んでお受け致します」

「貴官の検討を祈る」

大輔の言葉が、会議室に反響する。

この場には拓海と大輔、そして推移を見守る光樹の3人しかいない。儀式とは言っても簡易なものではあったが、その言葉が一層拓海の気を引き締めさせた。

二人は敬礼を交わし、儀式は完了する。

白瀬拓海はこの瞬間から、正式に特性防衛海軍の一員となった。

「お疲れ様。これで式は終了だ、白瀬君」

式を終え、大輔が目の前で固まっている拓海に声を掛ける。

先ほどまで感じられていた緊張感や威圧感のようなものは感じられず、皺の刻まれた顔に柔らかい笑みを浮かべている。

「あ、ありがとうございます」

張っていた気が抜けた所為か、声が裏返ってしまう。

「はは、緊張していたようだね」

「そのようです……」

そんな様子を見ていた大輔の言葉に、恥ずかしさを覚えつつも肯定する。

拓海には、今回の式で感じた緊張を得た経験が無い。

サツカーをやっていた時には多くの観衆の目に晒された大舞台に立つこともあったが、その時の緊張感とは全くの別物だ。

いつ死ぬかも分からない戦場に赴き、自分だけでなく仲間や艦娘、果ては多くの民間人の命を背負う責任。自分たちの生存を懸け、深海棲艦を排除しなければならぬという使命。

そんな義務や必然が生じたことによるものなのだろう。

以前、兼続が言っていた言葉を思い出す。

『日本という国や己の肉親を守るため。その日を生き抜くため。或いは敵を倒すため。理由は様々だ。単純な憧れや、親が軍人だったからというのもあるだろう……。死にたくないのは、誰だって同じだ。それでも、戦わなければいけない時というのは必ずある。だが君はどうだ？ 君が志願した理由は聞いている。だが……。それは本当に君がしなければいけないことか？』

あの時、自分はまだ民間人だった。そこに義務や必然は無く、責任を負う必要も無かった。だが自分はそれでも足を踏み出し、ここまでやって来た。思えば、決断したあの瞬間から自分は何かしらを背負っていたのかもしれない。

「——— ったく。本当に司令官になっちまうとはな。拓海」

端にいた光樹が進み出て来て、口角を釣り上げて溜め息を吐きながら話し掛けて来た。

「俺は光樹の言葉でここまで来たんだけど」

「そういえば、そうだったか。半分冗談みたいなものだったんだけどな。……お前が、やり遂げようと思ったことは必ず通す奴だつてことを忘れてたよ」

どこか懐かしそうな表情で目を瞑り、光樹は呟く。その瞼の裏には、何十年と前の景色が浮かんでいるのだろうか。——拓海にとって、時間間隔で言えば昨年度までのことだが。

「お前だって、散々あっちこっちに引き摺り回してくれたじゃないか。おかげで浦島太郎にでもなりそうだよ」

「そいつは悪かった。俺がウェーク島なんか連れて行っていなけ

りや——」

「でも、感謝してるんだ」

拓海が遮って口にした言葉に、光樹は意外そうな表情をして顔を上げる。今はすっかり年をとって中年のものになってしまったが、その狐につままれたような顔は確かに自分と同じ年だった頃の光樹のものだった。

「いや、俺の所為で拓海はこんな世界に流れ着いた挙句、巻き込まれて……」

「俺は『巻き込まれた』なんて思っちゃいないよ。自分から首を突っ込んだだけだ」

我ながら、可笑しなことを言っている自覚はある。だがそんなことは、この際拓海にとって関係無かった。

「光樹だつてこの世界に首を突っ込んで、ここまで生き抜いて来たじゃないか。なら、俺は大丈夫だ。それに、光樹が居てくれたから俺は榛名たちとも会えた。俺に新しい居場所をくれた。だから、光樹。俺は何度だつて言うよ。——ありがとう」

それは真実、拓海の本心から出た言葉だった。

それは一方的なものなのかもしれない。だが、光樹という存在があったからこそ、艦娘たちと共に戦うという選択肢を選べたのだ。

光樹には、どのように聞こえただろうか。

「……俺は、礼を言われるような立場じゃない」

「けど、俺は榛名や神通さんたちと会えた。それに、皆も必死に戦って、そのお陰で助かった人もいる。お礼を言われても罰は当たらないと思うんだけど」

「だとしてもだ。拓海の手紙は、素直に嬉しい。だがな、告白してしまえば俺は後悔すらしているんだよ」

光樹は顔を背けて、自分を呪う様に吐き捨てる。

今まで見たことのない表情を見せた光樹に、拓海は驚きと不安を覚えた。

「一体……何を、後悔しているんだよ」

問われて、光樹は視線を拓海と大輔の二人に向ける。

それから悲しげに笑って、口を開く。

「……さあな。けどな、拓海。俺はもう、後戻りは出来ないんだ。——拓海。何かを得るといふことは、何かを失うといふことだ。……大切なものだけは、絶対に守り通せよ」

そう言つて、光樹はこの話はここまでと手を叩く。

先ほどまでの暗い雰囲気があるで嘘だったかのように表情を楽しげなものに一変させると、大輔の方に目配せをした。それで、大輔も思い出したように頷いている。

大輔は今の話には別段、反応を見せていたわけではなかった。難しい顔はしていた気がするが、光樹の方に集中していたために拓海はよく見ていなかった。だが、光樹が大輔に向けた視線はどういう意味だったのだろうかと考える。

「……私の顔に何か付いているかい？」

「い、いえ、何でもありません。失礼しました」

気が付けば大輔のことを凝視していたようで、不審がられてしまう。拓海が慌てて謝るが、特に気にした素振りは見せなかった。

「そうか。ならいいが。——それはそうと、白瀬君」

「どうされました？」

「鎮守府に大食堂が出来たことは知っているだろう？　もう昼だ。先に退出して、そこに行くように」

「……？　了解しました」

大食堂は、鎮守府本庁舎から徒歩10分ほどのところに出来た新しい建物のことだ。

用事があるとすれば食事の時ぐらいだが、そんな場所で一体何があるのだろうか。

疑問に思いつつも大輔や光樹は教えてくれそうな気配は無い。取り敢えず行ってみようと決め、拓海は会議室を退出した。

拓海は大食堂までの道を歩きながら、第3艦隊の面々はどのようにしているだろうかと考える。

作戦が成功し、南鳥島に被害確認の調査が行われた後、兼統の指示

で拓海は「するが」に乗って横須賀に向かうことになった。

横須賀に帰って来てから、晴れて司令官になれることが決まったが、それを金剛や榛名たちに報告することは出来ていない。今日の準備を含め、色々と忙しかったためだ。

ふと、自分がどこの部隊の所属になるか聞かされていないことを思い出す。空きがあることは知っているので、そこにに入れてくれれば良いとは思うが何か事情でもあるのだろうか。

そんな答えが出る筈も無いことを延々と考えていると、いつの間にか大食堂に辿り付いていた。

大食堂は1階建だが屋根の高さは本庁舎の3階くらいまでである、鉄筋コンクリートの建物だ。奥行きも、拓海の知る一般的な市民体育館の4分の3くらいはあるだろう。

ちょうど二日前にオープンしたばかりのこの食堂には、拓海も昨日来たことがある。

中は、スペースの大部分を占めている一般スペースと調理室や倉庫、それに先ほどいた会議室よりも少し広い、貸し切り専用部屋があつたと記憶している。

正面玄関の自動ドアを潜って中に入ると、そこに見知った顔の軍刀を携えた少女が一人立っていた。

「お待ちしていました、白瀬さん」

「三笠さん」

「司令官に着任、おめでとうございます」

本庁舎の会議室には居なかつたのでどうしたのかと気になってしたが、三笠はここにいたのかと納得する。

「あ、ありがとうございます」

肘を斜め下に下げて背筋をすらりと伸ばし、見本のような敬礼をする彼女に拓海は戸惑いつつも答礼する。

拓海が司令官となったために、艦娘である三笠は階級としては下になる。ほんの少しのやり取りだったが、拓海はいよいよ自分の立場というものへの自覚が増すのだった。

「そう硬くならなくても大丈夫ですよ。私は、提督からのご命令によ

りここで待つていただけですから」

「提督——光樹からですか？」

三笠の「提督」という言葉から、拓海は即座に誰のことを言っているのか理解する。彼女がそう呼ぶのは、光樹しかいないからだ。他の人に対してそういう呼び方をしているのを、拓海は見たことも聞いたことも無い。それに彼を呼ぶ時の三笠は、ほんの僅かに頬が緩む。

短い付き合いではあるが、拓海も早い段階で気付いていた。それだけ、彼女は光樹のことを強く信頼しているのだろう。

「はい。これから、白瀬さんを案内するように言われています」

三笠は自分の癖に気付かれているとは露知らず、拓海の質問に答える。

「案内……？」

「来てもらった方が早いですね。すぐそこですが、お願いできますか？」

「えっと……。よく分かりませんが、分かりました」

何が何だか拓海自身でもよく分からない返答に、三笠は小さく笑みを溢す。

「それでは参りましょうか。と言つても、すぐそこですが」

その視線の先には、普段は貸し切り専用として使われている部屋の扉があつた。

「白瀬拓海さん、司令官着任おめでとうございまーす！」

三笠に連れられて部屋に入るや否や、そんな声と同時に多数のクラッカーが鳴り、拓海を迎える。

「うわっ!？」

不意打ちのような歓迎を受けて、拓海は思わず声を上げた。

クラッカーの中身から吐き出された紙屑を取り払うのも忘れて、驚いて後ろに一歩下がった姿勢のまま目の前の面々を見る。

「あれ？ 白瀬さーん？ 聞こえてるー？ 那珂ちゃんだよ？」

出迎えの音頭を取った人物——那珂が、固まる拓海の顔を覗き込んで手を振っている。

「ああ、うん。聞こえてるよ……」

そう言いながら、拓海は自分の置かれている状況に頭が追い付いていなかった。

何せ目の前には那珂を含めて、横須賀に籍を置く第1艦隊の大半の艦娘がいたのだから。

こうして、拓海の司令官着任を祝うパーティーが第1艦隊の主催で始まった。

由良率いる第5水雷戦隊は近海を哨戒中ということではなかったが、その他の部隊は全員いる。

合わせて約20人に上る少女たちに祝われることになり、拓海は事態が未だによく呑み込めていなかった。こちらに來いと言われた段階で何かしらあるのだろうと予想は付いていたが、まさか彼女たちが出て来るとは思っていなかったからだ。

食事の配膳係や、監督役としてここにいる第1戦隊司令官・鳴海武少将がいるくらいで、他の人間はいない。

拓海は状況に流されるがままに、ビュツフエとして用意された料理に手を付ける。

今のところは、仰々しい挨拶などはせずに取り敢えず食事を楽しもうということらしい。

皿に料理を文字通り盛っている赤城や加賀、それを躍起になって咎めている朝雲、何故か二人きりの世界に入り込んでいる大井と北上など、艦娘たちは思い思いの時を過ごしていた。

「如何ですか？ 白瀬さん」

何故自分が艦娘たちによって祝われているのか分からないまま食べられていると、皿を片手に持った三笠が近づいて話し掛けてきた。

「えっと……。これって、どういう状況なんですか……」

部屋に入った途端主賓として扱われたと思えば、今はほぼ蚊帳の外に置かれているようなこの状況。怒るだの不満だのといった感情は全くないが、かと言って困惑してはいないわけでは無い。

説明を求めると、三笠はくすりと笑ってから、見た目以上に大人び

たような視線で彼女たちを見やった。

「言つてしまえば、白瀬さんは口実みたいなものですね。仲良くなれているのは、まだ一部の子だけでしよう?」

「はつきり言われると何か悲しくなりますね……」

「ほら、あの子たちは私とは違って生まれてこの方、ずっと戦つてばかりでしょう。息抜き用の施設はあると言えませんが、大きな楽しみというものはありません。ですから、ここで思い切つて息抜きのしてみましよう、私が提督にお願いしたんです」

「三笠さんが?」

意外なことを聞き、拓海は驚いたように三笠を見る。まじまじとした視線に彼女は苦笑すると、拓海に視線を戻して話を続ける。

「はい。白瀬さんも着任することですし、いい機会かと思つて。ダシにするように申し訳ないとは思つたんですけど」

「いえ……」

祝うことも出来て同時に息抜きも出来る。正に一石二鳥というやつだろう。しかしこうもはつきり言われると、自分は所詮そんなものだったのかと落ち込んだ気分になる。

先ほどまでの着任で引き締まった気分が、一気に台無しだ。嬉しいことは嬉しいが、それ以上に悲しいのやら空しいのやら………複雑な気分だ。

「そう落ち込まないで下さい。白瀬さんを祝うことだって、皆忘れていませんから」

「はあ……」

そうは言つても、盛り下がってしまった気分は中々上がらない。

三笠は他にも何か言おうと考える素振りをしていたが、拓海の様子を見て諦めたようだ。

「言葉にするよりも、実行してしまつた方が良さそうですね。白瀬さん、落ち込んでいるところ申し訳ありませんが、自分が主賓だということを忘れないくださいね? そんな顔をされると、頑張つてセツティングしてくれたあの子たちに失礼ですよ?」

「え……?」

「さて、大和さん」

思ってもみない発言に戸惑っている拓海を余所に、三笠は近くを通りがかった大和を呼び止める。

大和が立ち止まって並ぶと、三笠は彼女を見上げるような格好になる。ヒールの所為もあるだろうが、大和は三笠よりも身長が高い。しかし大和の凜然とした姿勢に負けず劣らずの少女らしからぬ貫録を持った三笠の雰囲気のためか、両者は拓海から見て対等かそれ以上に見えた。

「そろそろ始めますか?」

「ええ、お願いします。提督を呼んできてください」

「分かりました」

大和は一礼すると、この部屋にパーティー用として設置されている木と頑丈な鉄パイプうで作られたステージの方に歩いて行く。ステージ袖のような、四角に間仕切られた場所に入っていくと、その奥に向けて何か話していた。

「何をして……ってどうか、光樹もいるんですか?」

「それはお楽しみですよ、白瀬さん」

三笠の意味有り気な微笑みに首を傾げつつ、ステージの方に視線を移す。

大和はいつの間にかテーブルの方に戻って、武蔵や長門たちと共に食事を再開していた。

ステージではマイクスタンドが立てられ、光樹が登壇してそこに向かっていく。マイクの前に立つと一礼し、応じようとした艦娘たちを手で制していた。

「まだ食べている子は、慌てなくても良い。———それでは、俺から一つ連絡事項を通達する。拓海、よく聞いておくように」

会場に漂う妙な緊張感の中で向けられた光樹の視線に、拓海は食器を置いて背筋を伸ばしステージの方を向く。

……直感的にこうしなければと思ったのだが、隣で何故か三笠が笑いを堪えようとして失敗し、声を漏らしていた。

「……………白瀬拓海『新米少佐』。貴官の配属を発表する」

そう勿体を付けて懐から白く折りたたまれた紙を一枚取り出すと、それを体の前に持っていき、両手で広げて内容を読み上げる。

「現時刻を以って、呉の芝浦兼続大佐と共に私が直接指揮する部隊へ配属。よって、両名は横須賀鎮守府へと転属とし、新設部隊の指揮を行ってもらおう。この場には居ないが芝浦大佐には、第5航空戦隊の艦娘が属する『第101独立防衛艦隊』に。そして——」

一拍置いて、光樹は会場を一通り見回す。沈黙と緊張感に包まれる拓海たち。

光樹は再び書面に目を戻すと、続きを読み上げた。

「白瀬拓海『新米少佐』。貴官は『第1独立遊撃艦隊』を指揮してもらおう。当面の所属場所は南島島泊地とする。こちらの所属艦娘は——
——各員、登壇してくれ」

光樹の声を合図に、拓海から見て右手にある舞台袖から新しい部隊の艦娘たちが上ってくる。

その面子に、拓海は驚きを通り越して言葉を失うことになった。

「呉第2戦隊から来ました、戦艦榛名です。貴方が提督なのね。宜しくお願いします！」

「航空戦艦、伊勢です。宜しくね！」

「6水戦から来ました、神通です。どうか宜しくお願いします」

「暁よ。私がレディだったこと、忘れないでよね！」

「雷よ。キチンと頼ってよね！」

「電です。あのっ、宜しくなのです！」

「島風です。速さなら誰にも負けませんよ！」

そこに並んでいたのは榛名、伊勢、神通、暁、雷、電、島風……。彼女たちが、拓海がこれから指揮することになる艦隊の構成艦。

まさか、本当に自分たちと特に縁のある子たちと戦うことになろうとは思ってもみなかった。しかも、いきなりこの配置である。

「白瀬拓海、前に」

光樹に促され、拓海は彼女たちの元へと向かう。登壇した先で光樹と敬礼を交わしてから、拓海は質問をぶつけた。

「光樹、この編成はいつたい……」

駆逐隊や水雷戦隊の指揮というのなら、まだ分かるが今回は戦艦クルスが2隻も加わり、独立遊撃艦隊を編成する。とても新人にやらせるような編成では無いが、どういう意図があるのか。

拓海の言わんとすることを察した光樹は、マイクを片手に拓海を含めた会場全員に今回の配置の説明をする。

「6水戦に関しては、個人的な交流があり尚且つ、民間人とはいえ一定の戦果を挙げている。榛名は単純に彼との相性の良さ、伊勢とは航空戦においての連携の良さが目立つ。そして司令官不在による配置換えのし易さ………といったところが、主な理由だ。部隊名に関しては、私の直接指揮下かつ第1艦隊には属していないためだ。他に質問は？」

矢継ぎ早に告げられた説明を何とか飲み込みつつ、拓海は新しい部隊で共になる艦娘たちを視界に収める。

「ってというか、何で皆ここに……」

「配置換えに伴って、昨日までに呼んでおいた。最初は普通に合わせようかと思ったが、今日のパーティーの話になった時に、サプライズにしようって話になってな」

「そ、そうなんだ……」

光樹の話を聞きつつそこに並ぶ8人の艦娘一人ひとりの顔を確かめ——、そこであるべき姿が無いことに気が付いた。

「あれ、響は………?」

拓海が発した一言で、場の空気が一変する。

榛名と伊勢は顔を見合わせ、6水戦の面々の反応もどこかおかしい。第1艦隊の艦娘たちも俯いたり顔を背けたり、小声で何やら話しかっている。

まさか、響に何かあったのか。

轟沈は………有り得ない。榛名が響を救出した時点で、それは起こる筈がない。ならば、解体されてしまったのか。それとも、彼女は既に………

「嘘………だろ?」

そんな可能性に思い当たり、拓海は言葉を失う。

つまり、響は――。

「何が嘘だと言うんだい？」

どこか落ち着きのある幼さを残した聞き覚えのある声が聞こえて、拓海は後ろを振り返った。

まず目に入ったのは、二重のラインと星と鉦の図が描かれた白い帽子。そして水色と銀色の中間のような白っぽい髪。暁型よりもやや高い背と、それを包む白いセーラー服。

何故。有り得ない。

「響……？」

だって、彼女はもう――。

「私が死んだと思ったのかい？　少しは目の前の現実を信じてみたらどうだい？　司令官」

彼女はそう言つて、呆れた様に首を振っている。

「響の……お姉さん？」

知らず言葉が口を吐いて出ると、只でさえじとりとした彼女の目が座った。

「私の姉は暁だよ。それに司令官は、私のこの姿も知っていると聞いたんだけど、違ったかい？」

溜息交じりに告げられる言葉に、拓海の中の疑念が確信に変わっていく。

そう。向こうで一プレイヤーだった拓海もその姿をよく知っている。

史実の暁型の中で唯一生き残った「不死鳥」と呼ばれた駆逐艦。かつてソ連でその余生を終えた、駆逐艦「響」の新たな名前。

「В е р н ы й」

拓海は噛み締めるように、その名前で目の前の少女を呼んだ。

「Да。全く、姉さんたちも趣味が悪いな」

「は……？」

まさかと思つて振り返ると、暁たち駆逐艦は我慢しきれずに吹き出し、伊勢は口元を抑えて声を押し殺しながら笑っていた。榛名は申し訳なさそうに苦笑し、会場の艦娘たちも笑ったり首を振ったりして

様々な反応をしていた。

「おい、響、まさか……………」

「そのまさかだよ。司令官」

その答えを聞き、拓海は全身から力が抜けた様に床に膝を着くのだった。

昼食の時間を使ったパーティーもお開きとなり、拓海は大食堂の建物近くにある広葉樹の太い幹に背を預け、青々とした葉の隙間から見える青空をぼんやりと眺めていた。

白い雲はこちらの世界でも変わらず西から東に流れ、木漏れ日は本格的な夏が近づこうとしていることを教えてくれる。深海棲艦の影響下にあった、あの不気味な空とはまるで違う。

「こんな所で暇を持て余しているのかい？ 司令官」
「響か」

声の主は大食堂の方からやって来たようだ。ヴェールヌイは拓海の右隣にやって来て、ピタリと体を横にくっ付ける。

背が伸びた所為か、以前よりもかなり大人びたような印象を受ける。暁たちよりも明らかに背は高くなり、前よりも女性らしい体格になったようだ。

そんな彼女を拒否するわけでも無く、かと言って動くわけにもいかず、拓海は少女に視線が固定されてしまう。

「流石に傍でじろじろと見られるのは、恥ずかしいな……………」

「あ、いや、ごめん、響」

肩をくっ付けていればそれだけ、彼女の視線は自然と見上げるようになってしまう。そのいじらしい動作が可愛らしくて、拓海は諸に動揺する。

「それは…………別にいいさ。嫌いじゃ…………無い……………」

「そ、そっか……………」

次の言葉が見つからず、拓海は沈黙してしまう。

「……………ところで司令官」

「うん？」

「その、『響』じゃなくて今の名前で呼んでくれないか。昔の名前も確かに私のものだが。出来たらそっちを使っしてほしい。呼びにくいかもしれないけど」

ポツリと言って、彼女は恥ずかしそうに視線を逸らす。

何となく呼ぶのが憚られる気がして「響」と呼んでいたが、姿も名前も変わった今、そのままというのは確かに変だ。しかし「響」と呼び慣れていたのも事実なので、どうしたものかと考える。

「ヴェールヌイ……か。……そうだな。『ヴェル』って呼んでもいいか？」

ふと思いついて、隣で幹に寄り掛かる少女に尋ねてみる。

「『ヴェル』………良い響きだ。嫌いじゃない。司令官が呼びやすいように呼んでくれ」

「分かった。これからも宜しくな。ヴェル」

「ああ。姉妹共々、こちらこそ宜しく」

変わりゆく空を見上げながら、拓海とヴェールヌイは静かに言葉を交わした。

遂に手にすることとなった司令官という仕事。この先何が起こるのかは、神のみぞ知るといったところだろう。

それでも拓海は、これからのことに思いを馳せずにはいられなかった。

希望と覚悟。艦娘と共に歩むであろう、日常と非日常。

もう、後戻りをするには出来ない。これは、自らが望んだことだ。そのことに、何の後悔もある筈が無かった。

たとえば、そこに残酷な運命が待っているようとも。

第2章 護国騷乱編

Task 00 始まりの地

日本は古くから、多くの火山が集中している。富士山や岩手山、桜島に代表されるような成層火山から、箱根や十和田湖などのカルデラまでその形態は多様だ。

神話の時代にも、火山とは何かしら縁があったものと考えられる。

古代には文明一つを滅ぼす噴火があり、その後の大和朝廷の時代ではそれに引けを取らないほどの出来事があったとされるが、幾ら探せどもそれを証明する記録は見つかっていない。その話も近畿のとある小さな村にある古い石碑に刻まれているだけで、他の史跡や歴史書に痕跡を求めるが裏付けられるようなものは無かった。

とある教授は、「そんな歴史的事実など存在しなかった」と昭和28年の論文で述べている。しかし私はその説を肯定せず、ありとあらゆる資料を調べた。時には研究者たちが決してやろうとしなかった危険な場所への実地調査も厭わず、その過程で小さな遺跡も幾つか見つけた。

数ある遺跡の中から、私は朽ちかけた一冊の古文書を発見した。中身を調べるとそれは、かつて「護国聖獣伝記」を執筆する際に見つけた資料に連なる物だった。そこに記されていたのは、「火の神」にまつわる事。第四の護国聖獣とも言うべき、荒々しい神についての記述だった。

記録を調べると、その聖獣は「護国聖獣伝記」で挙げた魏怒羅、最珠羅、婆羅護昨のように神話に出て来る者たちのモデルとはならず、遂には語られることもなくなった存在であることが分かった。その聖獣の名は古文書の中で「阿吽魏羅珠」と記されている。背には無数の棘を持ち、その形相は悪鬼の如き恐ろしいものだったそうだ。近年の生物学に関する研究では恐竜の時代に「アンギラス」という名前の

生物がいるとされるが、それに連なる存在であると思われる。

阿吽魏羅珠は超高温の火をその身に纏い、或いは吐き出してあらゆる物を焼き尽くす。古文書によればこの聖獣は暴れに暴れ、大和朝廷の寸前にまで攻め入ったという記録がある。この時朝廷は滅亡の危機に瀕したが、突如として降臨した天照大神により鎮められ、以来クニを守る聖獣の一体となった。彼の聖獣は現在、桜島近辺で永い眠りに就いていると考えられる。

この聖獣は活動のサイクルが長いため、二十世紀中に目を覚ますことはないことは確実だ。しかしクニが未曾有の危機に瀕したときこの暴竜は目覚め、自らの本能に従って敵を屠ろうとするだろう。

伊佐山 吉利・著 『続・護国聖獣伝記』（昭和29（1954）年）より

6月20日、新潟県妙高市某所。

1台の黒いワゴンタイプの車が幹線道路から外れて、何も無い空地のようなスペースに入る。適当な場所に車が止められると、運転席から一人の年老いた女性が現れた。

片手には薄茶色で厚い表紙の本を持ち、年齢に似合わず伸縮タイプのズボンとオレンジ色のワイシャツを着ている。眼鏡の類はかけておらず、白髪は茶色く染め上げられていて、すれ違った者が一目で60代も後半になるうとしているとは気付かないくらいの見た目をしていて。40代終わりから50代くらいには見られていても可笑しく無いほどだ。

老女は暫し何かを探すように辺りを見回して、それから隣接する森林の凡そ道とは呼べないような場所に視線を定めた。運動靴を履いた足を踏み出し、鬱蒼とした森林の中へと躊躇いも無く分け入って行く。

彼女の名前は、立花由里。元々は報道関係者だったが今は引退し、個人ブログの運営と後進の育成を行っている。新人の頃にオカルト関係を扱うテレビ局に入社し、ゴジラと護国聖獣の激闘に巻き込まれ

ながら自前の足で追いかけて、その一部始終を全国に報道したという過去を持つ。そのことがきっかけで彼女の地位は急速に向上し、一時は別のゴジラに関する事件を追いかけて世界中を飛び回ったこともあった。

現在では子供や孫も出来、そのような活動も行っていない。精々日本中を駆け回ることぐらいだが、親族からは「元氣すぎる」だとか「体に気を遣ってくれ」とかと言われ、本人にとっては要らぬ心配をされている。

尤もそんなことを言われるのは、由里にとって半ば趣味か習慣のよう染みついた行動の所為であるだろう。40年以上前の戦いを未だに強く記憶に刻み付けている彼女は、こうして護国聖獣や怨霊ゴジラにまつわる場所へ繰り返し訪れている。孫の手島のような場所は深海棲艦のために渡航できなくなったが、基本的に行ける場所には足しげく通っていた。それは自分の原点を忘れないためでもあり、英霊と怨霊たちのことを忘れないためでもあった。

深海棲艦については、長い人生の中で報道経験を積んで来た由里にもよく分かっている。突如としてあらわれ、3つ巴の泥沼と化したあの第3次世界大戦を終わらせ、制海権を人類から奪い去った存在。彼らはどこで生まれ、どこからやって来て、何の目的で人類を攻撃するのか。何一つ分からない。ある意味で、人類を憎んでいる節がある、東京で復活を遂げた怨霊ゴジラ以上の謎と言えるかもしれないと由里は思う。こればかりは特生防衛軍を調べても情報は無く、真相は闇の中だ。

そして深海棲艦に対抗すべく現れた、「艦娘」という兵器群。こちらにも謎が多く、一般にはどんな艦娘がいるかは積極的に公開されていない。ただ、目撃談や接触談はネットや噂話などで語られており、軍がそれを統制するといった気配は無い。必要なら、新聞記事に名前を載せる程度のものだった。

由里自身は、どんな艦娘がいるかについてはある程度把握をしている。第1世代は言うに及ばず、今年になって現れたばかりの第2世代もだ。それもこれも、今は無き父の伝手のお陰だろう。父は艦娘が現

れる前に亡くなったが、きつと良い顔はしないかもしれない。その点については、申し訳ないと思っっている。

人間大のサイズの艦装を装備し、海の上を航行して人類が太刀打ち出来なかった深海棲艦を、クラスに関係なく撃破していく少女たち。彼女らがどうやって形を成し、この世に生を受けているのかは一切合切秘匿されており、由里ほどの報道者と言えどその情報を追うことは出来なかった。不審な点は幾つもあるのだが、それ以上迫る事はやめていた。

木々の間を抜けて暫く歩くと、開けた場所に出る。

そこには小さな川と砂利の川岸があり、辺りには背丈ほどの高さまで伸びた雑草も生い茂っているのが確認できた。

ここは、一連の戦いに巻き込まれることとなった運命的な土地。若い頃、同僚や上司と連れ立って荒唐無稽なオカルト伝説の取材にやって来た場所だ。木々の向こうには、高くそびえ立つ妙高山の姿が確認出来る。「護国聖獣伝記」に記されている、かつて地を司る神・婆羅護^{バラゴン}が眠っていた地だ。

しかしあの聖獣は箱根にて、奮戦空しくも怨霊ゴジラに圧倒的な力の差を見せつけられ、倒されてしまった。その後が続いて現れた最^モ珠羅、魏怒羅は2体掛かりで挑むがやはり敵わず。先に倒された最珠羅の力を受けて、大ダメージから復活し《千年竜王・キングゴジラ》として覚醒した魏怒羅も、最後の最後で倒されてしまった。最後は父の決死の行動によりゴジラの自滅を招いて横浜の海で爆散、漸く倒せた——筈だった。

5年前になって突然、ゴジラは何故か東京でより巨大となった姿で出現し、品川を中心として破壊の限りを尽くしたのだ。世間では色々と言があるようだが、あの異様な姿も込みで、怨霊ゴジラとしか考えられなかった。品川で大爆発が起き、直後にゴジラが現れたという目撃情報があるが、一体何が起こったのか。40年以上前に死んだと思った怪獣の登場に、由里も少なくない衝撃を覚えたものだ。

そしてここ最近も、不可解な出来事が起こっている。

突如として富士の樹海から千年竜王が現れ、大都市に向けての攻撃行動を開始したのだ。

護国聖獣は、クニを守る存在。人間であろうと自然や土地に害を成すものは容赦無く殺されることは、40年以上前の池田湖で保護された犬と糸のようなものに包まれ、溺死させられた複数人の若者の事例からも明らかだ。

しかし今回の場合はどうも、あまりに行き過ぎていた。人間が都市を作ったことや環境汚染などの問題により襲われるなら、とつくの昔に同じような事態が起こっていても可笑しくは無いのだ。だが、そんな事態は後にも先にも記録されていない。そんなクニを守る筈の聖獣が復活していたのもだが、それ以上に破壊の限りを尽くしたことに驚いた。

横浜の海で溺れかけた自分と彼を助けてくれた聖獣が、同じ人間に必要以上に牙を向き、殺戮を行う。ショックを受けないわけが無かった。

どうにも、自分にも分からないことがこの日本で起きようとしている。そんな折、呉市街戦の後に見付けた書物があった。

その名を「続・護国聖獣伝記」と言い、世界に2冊しか存在していない古びた本。1冊はとある小さな村の図書館に、もう1冊は京都に移された国立国会図書館本館にあったのだ。由里はその2冊のうち、前者を片手に持っている。村長が「うちの村にあっても何も役に立たないから」と譲ってくれたのだ。

著者は、伊佐山吉利。「護国聖獣伝記」の著者でもあり、その村に滞在したことがあったという。本が作られたのは昭和29年。最初のゴジラが襲来した年だ。この時のゴジラの東京襲撃の際に、彼は行方不明となっている。その時既に、かなりの高齢だったそうだ。

だが、由里は実際に「伊佐山吉利」と名乗る人物に直に会ったことがある。白髪で皺は深く刻まれ、やや背が曲がっている。そんな彼の言葉はどこか抽象的でありながら、確信を持った内容であったのを覚えてる。不審人物として拘束されていた時に出会ったのだが、その

時彼はこう口にしていた。

『あれは、太平洋戦争で散った亡き者たちの無念の集合体。怨霊だ』

ミステリアスな雰囲気も含めて、由里はその言葉にとっても興味を覚えていた。当時は若気の至りというか、「特ダネだ」という気持ちは無かったわけでは無かったが……………」。

報道者として世界をあちこちとこの目で見て来た現在は、その言葉の意味も分かるような気がしている。

「天の神は、悪意ある者によって墮ちた」

突然真横から老人の声が聞こえ、由里は驚きと共に振り向き、声の主を見て思わず後ずさる。誰もいなかった筈の川岸に、音も無く老人が水面を見つめて立っていたのだ。驚きもするだろう。しかし由里は、同時に身の毛も弥立つほどの恐怖を感じていた。

何故なら、いる筈の無い人物が確かに存在していたからだ。それも、40年以上前と全く変わらない姿で。

「どうして貴方が——！ 伊佐山……吉利さん……」

湧き出て来る恐怖を理性で抑えて、由里は辛うじて質問する。老人はその声のにこりと微笑むと、身体の向きを変えて由里と正面から向かい合った。

「火の神は目覚めた。遠からず、地の神と海の神も目を覚ますだろう。悪しき天を討ち、安らぎの眠りを与えるために」

「婆羅護咩と……最珠羅……」

由里が2体の聖獣の名を呟くと、老人はゆっくりと頷く。それから右腕をおもむろに上げると、由里が片手に持つ「続・護国聖獣伝記」を指さした。

「紅き聖獣は、破壊と誕生をもたらす荒神。それを持って、艦娘隊の〃新米少佐〃に持って行き、見せてやって欲しい」

「何故かと……聞いても？」

「事を起こした者は、彼にも深く関わる者。そして彼女を止められるのは、恐らく彼だけだ」

由里でさえ知らない情報を平然と口にする、この亡霊のような男――

—実際、亡霊なのかもしれない——は何者なのか。

艦娘隊に「新米少佐」なる者がいるということとは、初耳だ。いつそんな階級が設けられ、誰がなったのか。そして暴れる千年竜王には「彼」という「新米少佐」に関わる女がいるということ。知らないことばかりで、由里は聞いた通りのこと以上は推測することが出来ない。

「私に……これを見せてどうしろと？」

「時は既に動き出している。全てが失われる前に、救うのだ」

「それって、どういう意味で——！」

微妙に会話が成立しないまま言葉を残し、老人は由里が瞬きをしたのと同時に突如として目の前から消える。目の前には、まるで今まで何もなかったかのように来た時と変わらない風景があるのみだった。

阿吽魏羅珠は、火山噴火にも匹敵する圧倒的な破壊力により全てを焼き尽くし、その跡には新たな生命が時間をかけて芽吹いていったという。その火は地を溶かし、水を蒸発させ、全てを制覇する空を覆い尽くしたと古文書には書かれている。実際、池田湖周辺の古い地層には、激しい戦いの痕跡が僅かに見られるのが何よりの証拠だろう。

その暴力的なまでの力を認めた天照大神は、暴走で自身さえ狂わせ兼ねない力を鎮める代わりに、このクニの大地全ての守護を課した。この時、他の聖獣全てを統べる存在へとこの怪物は変わったのだ。

しかし火の神でありながら千年竜王すら超えかねない、頂点にある力を恐れた朝廷の者たちによって阿吽魏羅珠の存在は硬く秘匿され、タブー視された。記録も尽く焼却処分し、限られた資料だけを人目に見つからない洞窟などに隠す。その結果現代ではそれらの記録は継承されず、この神が忘れられる結果となったのだろう。

確かにこの護国聖獣は、他の聖獣たち以上に危険な存在なのだろう

う。クニを汚す者ならば相手が何であろうとその力を行使し、結果として人々の生活までも奪いかねない。

「願わくは、この聖獣が目を覚ますときが永遠に來ないことを。」

伊佐山 吉利・著 『続・護国聖獣伝記』(昭和29) 1

954(年)より

Task 01 八重山列島の戦い・始動

6月27日。八重山諸島・西表島北西数kmの海域に、拓海たちの部隊が乗るASD―144、海域強襲支援駆逐艦「あさぎり」が25ノットで東に向け、進んでいた。「石垣島攻略作戦」の発動に伴い、艦娘の挟撃・強襲部隊を平久保半島の西に展開する敵後方部隊へ向け出撃させるためだ。

「マルス作戦」の終了後、石垣島に展開していた泊地棲姫の艦隊は推定90隻規模にまで拡大。敵の中心である泊地棲姫は石垣島から北に大きく突き出した、平久保半島の東側の海岸に鎮座。ホワイトビーチ基地の仮復旧に伴い、当初予定していた戦力を増強して作戦を実施することが艦娘隊により決定された。

駆逐艦「あさぎり」から出撃する第101防衛艦隊と第1独立遊撃艦隊は、平久保半島の西で敵の後方部隊と交戦。主力艦隊が東で交戦している隙にこれを倒し、敵旗艦まで一気に肉薄することとなった。その後は残存艦隊を友軍と共に殲滅するという予定である。

この作戦に参加する艦娘の数は100を超える。艦娘隊に所属する艦娘の大半が参加しており、文字通りの大規模作戦となっていた。

「あさぎり」は海域強襲巡洋艦「するが」型の補助的運用を想定して作られたものだったが、あまりに開きすぎた性能の差から単独で艦娘の部隊を運用出来るように改装されていた。

そのため「するが」と比べて些か手狭で、載せられる艦娘も15隻程度と大きく後れを取っている。しかし小回りの利き易さや単独でも十分に運用可能と判断されたことから、このような作戦に駆り出されることとなった。他にも、5隻いる姉妹艦のうち3隻がこの作戦に参加している。

駆逐艦「あさぎり」艦内。

第1独立遊撃艦隊の司令官となった拓海は、第101防衛艦隊を指揮する兼続と共にオペレーティングルーム内で作戦開始の時を待つ

ていた。

以前乗っていた「さがみ」よりも部屋は大分手狭だが、それでも必要な機器は確保されており、不便という感覚は無い。席も拓海と兼続の二人で埋まってしまい、背を向けあうように配置されていてもお互いの身体がぶつかるといふか否かという程度だ。

CROCSを起動させてインカムを装着すると、拓海は待機している榛名たちに通信を入れる。

「こちら、白瀬。調子はどう?」

《準備は万端です。皆、張り切っています》

拓海の声掛けに、無線の向こうで榛名が答える。

「緊張してる?」

《いえ——はい。少し、緊張してます……。白瀬さんは、如何ですか?》

榛名の声に、僅かに緊張が混じっている。今回の作戦では、敵の防衛線を裏から突破して注意を分散させ、主力艦隊の負担をなるべく少なく抑える必要がある。最も泊地棲姫に肉薄し易い位置からの攻撃開始となるが、危険も多い。

「俺は大丈夫だよ。ただでさえ俺たちの部隊は数が少ないんだ。無事で帰って来てくれ」

本当のことを言えば拓海も緊張していたのだが、それはおくびにも出さずに応答する。

「ここで、余計な不安は与えたくないと思ったからだ。」

《はい。榛名、頑張ってくださいね!》

榛名は極めて明るい声で答えてくれたことから、取り敢えず大丈夫そうだと安心する。

そこに、ヴェールヌイが割って入るように話しかけて来た。

《私たちの心配はしていないのかい?》

「……………ヴェール」

《司令官のことだ。本当は私たちが無事で帰って来てくれるか不安なんだろう?》

「それは……………」

無い、とは言えない。

この間の南鳥島沖での戦いで、6水戦は壊滅の危機に陥った。自分が彼女たちの指揮をする中で、また同じことが起こってしまったら。そう考えてしまう部分も確かにあった。

《私たちは絶対に帰って来る。また轟沈寸前にならないように頑張るさ。だから司令官も、私たちがそうならないように導いてほしい。そのための司令官だろう?》

「……………そうだな。その通りだ」

ヴェールヌイの言葉に、拓海は頷く。ここで不安があっても、意味は無い。ならば今は、彼女たちをしっかりとサポートするのが自分の役目だった筈だ。

《だから、その……………帰って来たら……………》

「うん?」

何故か口籠り始めたヴェールヌイの声に、拓海は反射的に聞き返す。

《だ……………だ……………》

「だ?」

《————っだーもう! 響ってばしっかりして頂戴!!》

言い淀んでいたヴェールヌイに我慢できなくなったのか、暁が不意に声を上げる。因みに思いの他大声だったので、無線越しの拓海は思わず身体をビクリと跳ねさせてしまった。

《暁ちゃんはっやーい》

《こんな時に島風に言われたくないわよっ! 響、レディーならばつきり言いなさい!》

《ね、姉さん……………?》

《そうね! どうしてもと言うなら、妹に頼ってもいいのよ!》

《ちよつと、羨ましいのです……………》

《あの、皆さん……………?》

先ほどまでの空気が霧散して、一気に緩んでいく。神通が困ったように止めようとしているようだが、時既に遅し。

《ふふ。あんまり一緒にいる機会は無かったけど、良い子たちね!》

《榛名はもう……慣れました……》

微笑ましく言い合う暁たちを見る伊勢と、ただ苦笑いを浮かべることのない榛名の様子が目に浮かぶ。ふと、初めて南鳥島で榛名や6水戦の面々と会った時のことを思い出した。あの時も、暁と島風がこんなやり取りをしていた。

それは兎も角、彼女たちがいる場所は艦尾格納庫の筈だ。他の乗組員の目もある。画面を見れば“あさぎり”は展開予定の場所に到達しようとしていた。

「……………その、もうすぐ作戦海域だ。それと暁、レディーと言うなら少しは周りを気にしてくれ……………」

《大体しれいかんは——！——うっ!?》

やや脱力気味に通信を入れると暁は何か言いかけてから、周りの様子に気付いたらしい。きつと今頃、格納庫の乗組員が生暖かい目で彼女たちを見ていることだろう。無線の向こうから、恥ずかしさのあまり声にならない悲鳴を上げている様子がありありと伝わって来た。

「白瀬」

不意に後ろから背中越しに、兼続に話し掛けられる。

「はい」

「頑張るんだな。……………色々な意味で」

「……………」

何だか意味有り気なニュアンスで言われるが拓海には分からず、首を傾げるしかなかった。ただ、呆れられているのは確かなようだった。

その後は“あさぎり”は予定ポイントに到達し、特に支障も無く艦娘の出撃も完了した。第101防衛艦隊と第1独立遊撃艦隊はそれぞれ単縦陣を形成し、最短距離で平久保半島の西に展開する敵へと向かった。西側に少数が展開している敵部隊を叩き、その後泊地棲姫へと奇襲を仕掛けるためだ。

駆逐艦“あさぎり”から出撃した第1独立遊撃艦隊は、交戦予定の海域に向けて旗艦の榛名を先頭に単縦陣で進んでいく。隣では第1

01防衛艦隊旗艦の翔鶴が並び、その後ろに単縦陣随伴艦が付いて来ている。

榛名は作戦海域へと向かいながら、隣を航行する翔鶴をじっと見つめていた。

「どうかされましたか？ 榛名さん」

「い、いえっ。どうした……というわけではないんですが……」

榛名は何と言っていいか上手く表現できず、曖昧な物言いになってしまう。今の榛名は、気になることがあるが聞いても良いのか迷っていた。

「ヴェールヌイさんのことですか？」

「えっ」

翔鶴に言い当てられ、榛名は思わず声を溢す。

「私も、ヴェールヌイさんの様子は気になっていましたから。白瀬さんのことですね？」

「……………はい」

ばれているのなら隠すことも無いと思い、榛名は素直に頷く。

榛名は、出撃前に拓海と通信していたときの彼に対するヴェールヌイの態度が、何となく気になっていた。

「思い当たる節は、ありますか？」

言われて、榛名は自分の記憶を探ってみる。

拓海が初めて南鳥島に現れた時は、まだ「響」だった頃の彼女に別段変わった様子は無い。割とすぐに打ち解けていた印象はあった。……………そういえばこの時、彼女が泣いていた事を思い出す。拓海や光樹との会話を聞かれた時だ。この時、彼女は自分の流す涙に戸惑っていたような印象がある。

その後の事となると先日まで遡らなければならぬが、作戦終了後に響の元に駆け付けた時の嬉しそうな表情と、彼が“さがみ”から降りた後の悲しそうな表情。拓海の着任祝いパーティーでヴェールヌイとして彼の前に足を踏み出した時の様子。大きな木の幹に寄り掛かっていた拓海にヴェールヌイが小走りで探しに行ったことも、榛名は偶然目撃していた。

ヴェールヌイは伊勢、神通、暁を挟んでそれなりに後方にいたが、彼女には聞かれないように気を遣いながら、榛名は心当たりを翔鶴につらつらと述べてみる。

「……………翔鶴さん、これって」

「そうですね……………。多分、そういうことなんだと思います」

翔鶴は、榛名の言葉に同意する。

「やっぱり、ヴェルちゃんは……………」

榛名はヴェールヌイのことを、そう呼んでいる。本人からの希望もあり、言い易さも含めて「ヴェル」という愛称を使っている。

「先程の様子を見ていれば、分かりますから。白瀬さんは何か言っていましたか？」

「いいえ、特には何も……………。白瀬さんが気付いていたかどうかは分かりませんでした」

「そう……………。——偵察機の子たちが、敵を見つけたわ」

偵察部隊として出していた彩雲の妖精からの報告を受けて、翔鶴が全員に声を掛ける。無線の奥の司令官にも報告をしつつ、翔鶴は榛名の方に顔を向け直した。

「そうね……………。無事に戻ったら、まずはヴェールヌイさんに聞いては如何でしょうか。その方が、分かるものもあります。それに……………」

「……………それに？」

「榛名さんが、白瀬さんをどう思っているのか。それを考える、良い機会になると思いますよ」

「……………」

翔鶴の言葉の意味が理解できず、榛名は無言になってしまう。少しだけ、普段は温厚で優しい面持ちの翔鶴の目に少しだけ鋭い眼差しが宿っていたのを、榛名は見逃さなかった。

気が付いた時には、翔鶴はいつものような柔らかい表情に戻っていた。

「もうすぐ、敵海域です。お話の続きは、また今度にしましょう」

そう言ってから、翔鶴は背中の矢筒に手をかけつつ、弓を構える動

作に移っていく。矢を放つことで、艦載機を発艦させようとしているのだ。その矢が放たれると、瞬く間に5機の紫電改二へと姿を変え、編隊を作って飛んで行く。随伴艦の瑞鶴たちも、翔鶴に続いて艦載機を放って行く。

時を同じくして、拓海から榛名たちの部隊にも通信が入って来た。

《こちら拓海。敵の第1次防衛線は水雷戦隊だ。翔鶴たちの部隊と一緒に複縦陣を形成。同抗戦に持ち込んで一気に叩く》

「了解です！」

拓海からの呼び掛けに応じて、榛名は後続の艦娘たちと共に行動に移す。拓海からの通信は、榛名の部隊全員には聞こえる。だが、実行に移すとすると旗艦の動きは重要だ。後続の艦の基準にもなるため、こういう時に下手な動きは出来ない。慣れない旗艦ではあるが頑張ろうと気合を入れ、榛名は次の航路を決めるのだった。

「敵、水雷戦隊を発見！ 数は6隻。皆さんからももうすぐ見える筈です！」

索敵をしていた翔鶴が、真つ先に全員へ情報を伝える。爆音が聞こえるあたり、味方の艦載機が既に交戦を始めているのだろう。

《榛名たちは現状を維持したまま進んでくれ。砲撃戦でカタを付ける》

新人だというのに淀み無い拓海の指示が聞こえる。元々の素養もあつたのかもしれないが、この短い期間で色々と吸収したのだろう。その声だけで、榛名は不思議と安心することが出来た。

程なくして、敵艦を肉眼で確認する。軽巡ホ級flagshipと、通常の駆逐イ級が1隻。他にイ級がもう4隻いたようだが、既に艦載機隊によって撃沈されていた。

「白瀬さん、他の艦影は？」

《翔鶴さんの彩雲が、奥に第2次防衛線を張る敵艦隊を見つけてる。気付かれてはいるけど、近づいて来ない。待ち伏せしてるんだろう。その2隻を落として、次に備える》

「榛名、了解しました」

拓海との通信を一度切り、目の前の敵艦に意識を集中させている。翔鶴たちの艦載機は一部の哨戒用を残して、補給のために着艦している。敵艦は既に満身創痍。ここで外すわけにはいかない。

「全艦、砲撃用意！」

榛名が声を上げると、続く伊勢たちは砲をホ級とイ級に向ける。2隻は混乱状態にあるようで、一か所に固まって右往左往しているようだ。

「砲撃準備、完了！ 榛名、右舷砲戦行けるわよ！」

後続艦を確認した伊勢に頷き、榛名はX字形に展開した艤装の35.6cm連装砲4基を敵に照準し、榴弾を装填する。駆逐艦の12.7cm連装砲でも、十分に届く距離まで来ている。

「全砲門、砲撃開始!!」

榛名の合図と共に、伊勢たちから砲弾が同時に吐き出された。

ホ級とイ級に次々と着弾し、2隻はあつという間に火達磨と化していく。火はまず表面を焼き、やがてその内側にも到達。イ級は口内部にあつた砲に誘爆したのか、風船が膨らむように内側から爆発を起し、ホ級と共に海へと消えていった。

「翔鶴姉！ 第2次防衛線の敵艦がこっちに向かって来る！」

「こちらでも確認したわ。全攻撃部隊、発艦します！」

第2次防衛線の部隊の方を偵察していた艦載機からの情報を受け取った瑞鶴からの知らせに、翔鶴はあくまで冷静に応じる。

第101防衛艦隊の面々は直ぐに休ませていた艦載機を発艦させ、敵との航空戦に移行した。

《第1独立遊撃艦隊は、翔鶴たちの護衛に移る。敵は又級flagships 2隻とル級、それから水雷戦隊が3つ。うち1つが翔鶴たちに向かつて突出してる。まずはそっちから片付ける》

榛名は肉眼で、拓海の言葉通りこちらに向かつて来る一団を発見した。他の敵艦も遠目に見えたが、そちらは遅れがちのようだ。それならば、突出している方を先に叩いてしまった方がいいだろう。

「伊勢さん、瑞雲で先制攻撃をお願いします！」

「待ってました！ 皆、足止めお願いね！」

伊勢が喜々として左腕にある航空甲板の艤装を前に突き出し、瑞雲を次々と発艦させる。

瑞雲は次々と甲板から飛び出すと、敵水雷戦隊——ノーマルのへ級1隻、口級5隻に群がり、攻撃を開始する。

又級からの艦載機は翔鶴たちによつて抑えられており、既に制空権は榛名たちのもの。上空の支援は望めず、へ級の水雷戦隊は止むを得ず足を止めて、対空防御へと切り替えていた。旗艦のへ級を中心として輪形陣を形成して対応するが、伊勢の瑞雲は器用に対空機銃の弾を掻い潜つて爆撃を行う。

牽制と砲撃を確実に当てるための囮のつもりだったが、意外に効果を発揮しているらしく、現に口級を1隻撃沈することに成功していた。

「榛名、撃つなら今よ！」

「ええー！ 砲撃開始ですー！」

榛名は頷いて、攻撃の合図を出す。

榛名たちの主砲に捉えられてからへ級たちは気付き、回避行動をするが既に遅い。

「逃がさないよッー！」

伊勢の瑞雲に進路を阻まれ、敵水雷戦隊は逃げ場を失つてしまう。

そこに、榛名たちの放った主砲弾が容赦無く叩き込まれた。成す術も無くへ級たちは砲撃と爆撃の雨に晒されて、沈んでいった。

敵艦の撃沈を確認すると、榛名は次の目標を確認する。

空を見上げると、敵の戦闘機部隊は既に壊滅したようで、残っていた爆撃機や雷撃機が逃げまどったり苦し紛れの当たる筈も無い攻撃を繰り返したりしている。それらも翔鶴たちの戦闘機に食い尽くされ、制空権は完全にこちらのものとなった。

吐き出す艦載機が無くなったのか、撤退を開始する2隻の又級と、それらを護衛する敵艦の姿が遠くに見える。そしてその前には、榛名たちの進路を阻むように二つの水雷戦隊がいる。

翔鶴と瑞鶴は又級たちに狙いを絞り、龍驤と龍鳳は水雷戦隊に対して艦攻や艦爆で攻撃を始める。伊勢は数と性能で若干劣っている龍

驪たちの艦載機に、瑞雲を支援機として回し、その攻撃に加わっていた。

《榛名と伊勢は砲撃を続行。神通たちは敵に接近して砲雷撃戦だ》

「了解です！ 皆さん、行きましよう」

神通が答えて、暁たち駆逐艦を引き連れて航空攻撃に晒されている敵水雷戦隊へと向かって行く。

榛名と伊勢もより撃ち易い場所へ位置取りをし、主砲を敵に向けてる。

敵の数は12隻ほど。航空攻撃があるとはいえ、一斉射では間に合わないだろう。

「伊勢さん、1基ずつで順次砲撃にしましょう」

「やっぱり、そうなるよね」

伊勢も賛成の意思を示し、榛名と共に攻撃を行う。二人の連装主砲から砲弾が放たれ、敵水雷戦隊に次々と命中した。

一方の神通たちは牽制砲撃を行いつつ敵の真横に陣取ると、魚雷発射管を回転させて発射体勢に移る。

「雷撃、開始です！」

神通の合図と共に、魚雷が一斉に発射される。魚雷のほとんどは手前にいた敵水雷戦隊に当たり、水柱と共に敵を次々と屠っていった。残りの数本は後方の敵に交わされたが、そこに龍驤たちの爆撃と雷撃、それに榛名たちからの砲撃が突き刺さる。

10分と掛からず敵水雷戦隊を3つ全滅させた榛名たちは、次のターゲットを又級たちに切り替える。その時既に又級は撃沈されて姿を消しており、1隻ずつ残った通常のル級とリ級が攻撃に晒されていた。

2隻は必死に対抗しているが、翔鶴と瑞鶴の艦載機たちによる息の合ったコンビネーション攻撃によって翻弄されていた。既にル級は中破、リ級も大破していて撃沈までそう時間は掛からないだろう。

「榛名さん！ 止めの方、お願いできますか？ あの子たちを一旦戻さない」と

撃沈も一歩手前というところまで来て、翔鶴から榛名に声が掛か

る。あの2隻を倒しても、泊地棲姫を倒すまでは連戦が続くだろう。榛名は了承の意味で首を縦に振ると、自分の零式水上偵察機をル級たちの上空に向かわせる。

《——なるほど。伊勢、瑞雲を1機だけ残して着艦。残りの1機で弾着観測射撃。榛名に続いてくれ》

意図を察した拓海が、伊勢に呼び掛ける。

「了解です」

伊勢は空で待機させていた瑞雲を呼び戻し、1機だけ榛名の偵察機を追わせる。

間もなく、瀕死のル級とル級の上空に陣取ると榛名と伊勢は互いに顔を見合わせて頷き、敵に砲を向ける

偵察機の妖精が見ている景色が、榛名にイメージとして送られてくる。

敵はこちらに気付いているが、損傷のために動くことが出来ない。弾道のズレを修正し、照準を固定する。

「今です!!」

榛名の合図で、二人の主砲から徹甲弾が撃たれる。弧を描きながら弾は吸い込まれるようにル級とル級に全弾が直撃。

榛名は撃沈したことを妖精からのイメージと肉眼で確認し、息を吐く。偵察機を呼び戻しながら、無線の向こうにいる拓海に報告した。

《お疲れ様。このまま平久保半島を北から回って、泊地棲姫を目指す。皆、大丈夫か?》

榛名は自分の部隊の艦娘たちに目を配らせて、各々の状態を確認する。全員元気そうな顔をしていることから、特に問題は無いようだった。

「特に問題は無いです。皆さん、元気ですよ」

《榛名は……どうかな、大丈夫?》

「はい、榛名は大丈夫です」

《そっか。無理はしないでくれよ。いざ危ないって時は、榛名の判断を優先するから》

「ありがとう、ごこいます……」

声音から拓海が自分を気遣ってくれているのが分かって、胸の内が熱くなる。彼は本当に、榛名のことを想っている。それだけに、榛名には言い様の無い不安があった。

ヴェールヌイの気持ちを察したからか。それとも、翔鶴に言われたことが気に掛かっているからか。分からないことだらけだ。

「あのっ、白瀬さん……」

《ん？》

「い、いえ……何でもありません……」

《そう……っ？》

榛名は不安に駆られて口を開いたが、拓海の声聞いた途端に閉ざしてしまふ。よくよく考えてみれば、言える筈が無かった。拓海の持つ答えなど、一つに決まっている。これを聞いてしまえば、ヴェールヌイを傷つけてしまうことがすぐに分かった。

ヴェールヌイは優しい子だ。姉妹をととても大切にしているし、南島で神通と二人で戦っていた自分を言葉少なながらも心配してくれた。

気付いているからこそ、榛名は口を閉ざすしかなかった。

『私以外に貴方を好きだという人がいたら、白瀬さんはどうしますか？』

そんなことを聞けば、拓海はどのような答え方だろうと「その気持ちには答えられない」という意味のことを言うだろう。

聞かなくても、そんなことはヴェールヌイとて理解していない筈がない。自分にそういった気持ちが向くことは無いと。拓海は確かに彼女を「好き」なのだろうが、それはあくまでも艦娘としてであって、一人の異性としてでは無い。

そのことを口にする残酷さを、ほぼ1ヶ月の間彼と共にいた榛名は理解出来てしまった。

ヴェールヌイとはこの先も仲良くありたい。そして自分は、拓海のことをどう思っているのか未だに分かっていない。そんな状況で言

葉にする勇気を、榛名は持つことが出来なかった。

《半島の西側はクリア。次は半島の先端を迂回して、東側にいる泊地棲姫へ向かってくれ。敵の主力部隊が味方に引き付けられている間に奇襲するのが、俺たちの役目だ。行こう》

「……………はい。皆さん、行きましよう」

榛名の葛藤を知る由もない拓海の言葉に返事をし、榛名は無理やりにでも気を入れ替える。

そして艦載機の回収を終えた翔鶴たちと共に転進し、平久保半島の先端を目指すのだった。

平久保半島の先端部分に差し掛かろうという頃だった。再び偵察機を出して警戒に当たっていた翔鶴が顔色を変えて全員に警告を発する。

「っ！ 皆さん、敵空母艦隊です！ あと5分ほどで接敵します!!」

「うそ!? 気付かれた!?!」

目を見開く瑞鶴を始めとして、その場にいる艦娘たちにどよめきが広がっていく。

そんな中で榛名は落ち着きながら、翔鶴の隣に寄って尋ねる。

「敵の内訳と数は?」

「flagshipのヲ級が2隻、同じくヌ級が1隻、それからタ級flagshipとリ級eliteが1隻ずつ……………。それと……………」

「翔鶴さん?」

「青いオーラを纏ったり級が1隻……………。明らかに今までのリ級よりも強そうね……………」

翔鶴から告げられた事実には、その場にいた全員が凍り付く。

青いリ級。そんな存在は、榛名たちは今まで一度も見たことも聞いたことも無い。他の艦種でも、潜水ソ級は兎も角として、「青いオーラ」を纏った敵艦は存在しなかった……………筈だった。

不意に拓海が、それを最初から知っていたかのように呟いた。

《り級改・flagship……………》

新種の敵艦を発見しても尚、艦隊は前へと進み作戦を続行する。数
が多ければ撤退も考えられたが、主力艦隊が未だに戦っている中、新
種がいようと引くわけにはいかなかった。ここは数で押し切るしか
方法は無いだろう。

各々が不安を抱える中、新たな敵との戦いが刻一刻と迫ろうとして
いた。

Task 02 八重山列島の戦い・剛敵

《連合艦隊用の陣形を取るようになった。第4警戒航行序列だ》

新手の敵艦隊の出現を受けて、榛名たちは陣形の変更を行う。

第4警戒航行序列は、連合艦隊編成時に使用される陣形の一つだ。戦闘隊形とも言われる。

予め何らかの事態にあった時のために既に配置は決められており、前方の6隻は神通以下の水雷戦隊、後方の6隻は榛名と伊勢を先頭としてその後ろに翔鶴たちが付いて行く形だ。

特に迷うこともなく陣形を構築すると間も無く、平久保崎の沖合に差し掛かる。

「敵艦隊を発見しました！」

陣形の先頭に行く神通が指した先に、黄色いオーラを纏った空母ヲ級の艦隊が姿を現した。

翔鶴たちは即座に艦載機を飛ばし、応じるように敵のヲ級2隻とヌ級も艦載機を頭の帽子のような物体から吐き出す。

敵味方の戦闘機同士がぶつかり合い、間を縫うようにして艦攻や艦爆が相手へと迫るべく飛んで行く。敵の艦攻や艦爆の一部は追って来る紫電改二や零戦52型の追撃を器用にかわし、榛名たちの元へ到達。しかし彼女たちの必死の対空攻撃のお陰で、被弾することは何とかが免れていた。

「翔鶴姉。ちょっとこれ、厳しい」

瑞鶴がそう呻くのも無理は無い。

敵の一部の艦載機——恐らくヲ級のどちらか片方から出て来た敵機に、翻弄されてしまうのだ。

味方の戦闘機を後ろに付けたと思えば敵機は急に減速してやり過ぎし、戦闘機であればそのまま機銃を撃って逆に背後から撃ち落とす。こちらの戦闘機による機銃の掃射には、流れるように旋回して避けてしまう。

艦載機の姿形は、ヌ級のflagshipなどが持つ従来のもの

だ。今のところ母艦が確認出来ていない、白い球体型の新型艦載機と呼ばれるものには無い。単純な性能では、恐らく新型に軍配が上がるだろう。しかし翔鶴たちが相手にしている敵の艦載機は、性能差を補って余りある賢さのようなものを見せ付けていた。

「あかん！ ウチの艦載機じゃ無理や」

弱い艦載機に紛れて、敵の戦闘機は翔鶴たちの艦載機にしつこく纏わり付く。龍驤は艦爆や艦攻を何とか逃れさせようと自分の戦闘機を当てていたが、捉えることが出来ない。

「まだです！ 諦めません！」

龍鳳は形成が不利でありながらも、必死に足掻く。しかし、ジリ貧であることに変わりは無かった。

段々と、深海棲艦の艦隊との距離が縮まっていく。神通や榛名たちは対空攻撃を何とか切り抜けながら、砲撃戦の準備を整えて敵と相対しようとしていた。

大分近づいたお陰か味方の艦攻や艦爆は敵戦闘機の追撃を逃れ、敵艦へと攻撃を開始していた。しかし機体の損傷や中にいる妖精の疲弊からか攻撃は甘く、爆弾は用意にかわされ魚雷は敵の機銃によって水際で阻止される。それでも敵の砲撃を妨害するということでは、意味はあった。

「ちよ、ちよつと！ 何よあれ!!」

前方を警戒していた暁が、突然声を上げる。暁が指差す先では、予想外のことが起こっていた。

事前に確認されていた青い重巡り級が、仲間の艦を引き離して突撃して来たのである。艦爆や艦攻によって迎撃が行われるが、青いり級はまるで見越していたかのようにそれらを撃墜、あるいは全速力で進んでいながら器用に攻撃を避けてみせる。

青く光る左目と赤い右目は真っ直ぐ神通たちを捉え、片腕の主砲を突き出すと猛然と砲撃を開始する。

「はわっ！」

「おうっ!？」

最初の弾は電と島風の傍に着弾し、大きく上がった水柱が飛沫となつて二人に降りかかる。

神通や榛名たちは砲弾による反撃を開始するが、青いり級は尚もスビードを緩めることなく、予め弾の軌道を読み取りながら急速に接近して来ていた。

「はっ、速いわね！ アイツ!？」

「流石にこれは厳しいな……」

なおも迎撃を試みるが、青いり級の勢いは留まるところを知らない。

のらりくらりと攻撃をかわし、しかし一度も足を止めずに彼女は突き進む。瞬く間に神通の目の前まで接近すると突然上体を前に倒して、視線を低くする。

一瞬相手の姿を見失ってしまった神通を見ると、青いり級は右手の艦装を腕ごと振り上げ、胸部を殴りつける。不意打ちをくらった神通はバランスを崩し、左側を行く暁の傍まで飛ばされてしまった。

「くっ……」

神通が殴られた場所を抑えて起き上がっている間にも、青いり級の攻撃は続く。

ほぼ至近距離で駆逐艦の面々が撃つ弾を、艦装で弾いたりかわしたりして一旦離脱して距離を取る。そこで砲撃に移らず、シャトルランのような見事な切り返しをして、今度はヴェールヌイに迫ろうとしていた。

「近すぎて撃てません……!」

艦娘はヒトの形をしているが故に、陣形を組んでいる際には必然的に艦同士の間隔が実物の艦艇よりも遥かに近くなってしまう。そのため、榛名と伊勢は主砲を撃って援護することが出来ない。友軍がいる場所に向けた戦艦の砲撃は、誤射の危険がある。

「なら、私の瑞雲はどう!？」

伊勢は待機させていた自前の瑞雲を数機飛ばして爆撃を行わせ、ギリギリのところまでヴェールヌイから青いり級を引き剥がすことに成功する。

尚もしつこく追つて来る瑞雲に対し、青いり級はそのまま接近することを断念。今度は主砲を何も無い場所に何発も打ち込んで強引に水柱を上げて、視界を遮る手段に出た。

「何よそれ——！」

雷が不平を言うのも束の間、水柱の一つを割って青いり級が目の前に姿を現す。

「今度は騙され……」

先の神通への攻撃を見ていた雷は足元にも気を配るが、逆にそれが仇となる。青いり級は前傾姿勢になると見せかけてフェイントを掛け、雷から見て左前方へと躍り出る。その勢いで右足を振り上げると、そのまま左肩を目掛けて横薙ぎの蹴りを繰り出した。

「きゃっ!?!」

「雷!」

小さい悲鳴を上げて蹴り飛ばされる雷をヴェールヌイが受け止める。雷を抱えたままヴェールヌイは背中の艤装の主砲を青いり級に撃ち込むが、当然のようにかわされてしまった。

「させません!!」

次の攻撃をしようとした青いり級に対して、神通が主砲を撃ちながら接近。それを見た青いり級は、何を思ったのか魚雷発射管から魚雷を取り出して短刀のように右手で持つて切りかかる。咄嗟に神通も魚雷を一本取り出し、相手の魚雷を鏝迫り合いの要領で受け止めた。

「いたた……。何よ、あのり級! 上手すぎるにも程があるわ!」

まさか近距離戦闘で挑まれた拳句に圧倒されていることに、雷が声を上げる。その目線の先で、青いり級は早々に神通の魚雷を弾いて鏝迫り合いを解くと、左腕にある口のような形の艤装展開し、奥にある主砲が火を噴いた。

敵弾は神通の手にある魚雷に命中。誘爆する瞬間に神通は手を放して腕で顔を覆い隠し、爆風で飛んでくる破片から身を守る。

負けじと神通は主砲を撃ち返すが、青いり級はバックステップで回避。後退ついでに自分が手に持っていた魚雷を神通の頭上に放り投げると、左腕の主砲で撃ち抜く。魚雷は爆発を起こして煙を撒き散ら

し、神通たちの追撃を許さなかった。

その爆発で神通たちが足を止めると、後方の夕級flagshipとリ級eliteが支援砲撃を開始する。タイミングを合わせるように、上空でも艦載機たちの攻撃が強まっていた。

翔鶴たち空母が、制空権を奪われないように敵機に翻弄されながらも奮闘し、榛名や伊勢は砲撃を続ける。

翔鶴らの支援をするために、神通や駆逐艦の面々は対空射撃に集中し、伊勢も瑞雲を飛ばして撃ち漏らした敵機への攻撃を砲戦と同時にこなしていた。

空で激戦が繰り広げられる中、榛名は僚艦たちと共に敵艦隊へ砲弾を撃ち込む。

赤いオーラを纏うリ級eliteはどうか中破まで追い込み、動きを封じるが残る夕級には徹甲弾の角度をずらされ、装甲に弾かれてしまう。

先ほど艦隊を引つ掻き回した青いリ級は、やや距離を取った場所で前進する連合艦隊の動きを阻害する砲撃を撃って来る。

拓海や兼続からの指示で、敵艦隊に接近して制空権を奪われる前に叩くという算段だったが、そうは問屋が卸さない。

「リ級改・flagship……ですか」

榛名は、拓海が無線越しで呟いた言葉を思い出す。

彼は、榛名たちのいる世界とは違う場所から来た人物だ。艦娘も深海棲艦も、画面の中に架空の存在となっている世界。

本来なら黄色いオーラを纏っている筈だと言うが、目の前にいる敵は青いオーラを発している。しかしこうして直接戦ってみると、そう呼ばれるだけの力があるのり級にはあると榛名には感じられた。

「まったく！ しれいかんは下手に口走るんじゃないわよ！」

対空攻撃と青いリ級の両方の対応に追われている暁が、汗を浮かべながら口を開く。

拓海がその名前を呟いた時、彼の事情を知らない兼続に疑念を持た

れ、問い詰められてしまっていた。

非常回線や全艦隊の指揮官による通信以外は、CROCSで他の司令官の話す内容は独立した部隊運用を行うために直接音声として伝わって来ない。しかし無線を切っていなかった拓海の様子から、何があつたかを知ることが出来た。

《……すまない、暁。気を遣わせて》

拓海が、苦虫を噛み潰したような声音で暁に言う。

「ふんっ！ レディーに恥を掻かせたお礼よっ！」

拓海の事情——異世界からの漂流者であることは、光樹や三笠、榛名と6水戦の面々以外には笠川大輔大將しかいない。

このようなことを言ったところで信じる者が必ずいるとは限らず、余計な混乱も生みかねない。その懸念から、関係者は拓海の情報についての秘匿義務が与えられていた。

青いり級について確証を得られていなかった拓海は、兼続から何故知っているのかと問われてしまう。その返答に窮してしまったことで、兼続が訝しんでしまった。

ますます答えられなくなつて、困っていた様子の拓海に助け船を出したのが、暁だ。

拓海を通して兼続に取り次ぐよう頼み、無線が繋がるなり口を開いた。

『私たちのしれいかんを疑うなんて許さないわよ！』

これには、流石の兼続も閉口していた。ややあつて気を取り直した彼は暁に何か尋ねようとしたが、一方的に無線を切り、今に至る。

「私は白瀬司令官のことはまだよく知らないけど、ホントに信頼してるのね」

「とーぜんよっ！ 皆もそうよね!？」

爆撃や雷撃、砲撃を潜り抜けながら、暁は他の面々にも声を掛ける。

「愚問だよ、姉さん」

部隊全員の言葉を代弁するように、ヴェールヌイが答える。榛名も

敵から目を逸らさないまま、彼女に賛同して首を縦に動かした。

「そこまで言うなら、私も頑張らなきゃね! ——と! 私の瑞雲が又級を大破させたわ!」

伊勢の言葉通り、前方で作戦行動が出来ないほどに大破した又級が、海面に崩れ落ちる。

それを見ていたのか、敵艦隊の先頭に行くヲ級がリ級eliteに何かを指示する。リ級eliteは頷くと、動けなくなった又級flagshipの傍に寄り、腕を掴んで担ぎ上げた。

「逃がしません!! 伊勢さん!!」

「ええ! やるわよ!!」

榛名は2体が撤退するつもりだと判断すると、即座に伊勢へ合図を出し、伊勢もそれに答える。

「全主砲! 砲撃開始!!」

榛名と伊勢の35.6cm連装砲が一斉に爆音を発し、放たれた弾が又級flagshipとリ級eliteに叩き込まれた。

2体は防御姿勢を取る間も無く引き裂かれ、海の藻屑と化していった。

途端に、上空を飛んでいた一部の艦載機が統制を失い、あちらこちらへと右往左往し始める。先ほどの又級が飛ばしていた艦載機だ。

それらを母艦である伊勢に帰投途中の瑞雲が、機銃で撃墜している。

「榛名さん、青いリ級が敵艦隊に合流します!」

「どうされますか? 白瀬さん」

神通の報告を受けて、榛名が無線の向こうにいる拓海に呼び掛ける。

《敵の判断が早いな……。敵は撤退戦に移行してる。榛名からも確認できるか?》

拓海に言われて、榛名も微妙な敵の変化に気付く。

一つは、敵の艦載機が攻撃態勢からこちら側の進攻を妨害するような動きに変わったこと。もう一つは、前進しているにも関わらず敵との距離が詰められていないことだ。

当然攻撃の手を緩める様子は無いが、些細な変化に榛名は驚く。ふと、敵艦隊の先頭にいるヲ級と榛名の目が合う。

「白瀬さん。先頭にいるヲ級が、敵艦隊の旗艦ですか？」

《だろうね。このヲ級を中心に敵は進路をこまめに変えていたし、妙な動きをした艦載機も恐らくコレのものだな》

「どうされますか？」

榛名の質問に、拓海は即座に答える。

《このまま追撃だ。翔鶴さんたちが敵艦載機を叩き落すから、神通さんたち水雷戦隊は先行して突撃。榛名と伊勢は支援砲撃だ》

「それって、結局いつもの戦い方よね？」

《……まあ、そうだな》

横から入れられた暁の突っ込みに、無線の奥で拓海が苦笑する気配があった。

「いーじゃん。そっちの方が分かりやすくして」

呆れる暁に島風が連装砲ちゃんとしゃれ合いながら、呑気な声を出す。

「島風はいつも先行し過ぎなのよ……」

「あはは……。でも、それが私たちの戦い方なのです」

「電の言う通りだな。С о г л а с и т ь с я^{賛成}だ」

雷が頭を抱え、ヴェールヌイは電の言葉に同意する。

電は小さく微笑みながら榛名を見ると、それに続くように、他の第1独立遊撃艦隊の面々の視線が榛名に集まった。

「皆さん……」

榛名はそれぞれの視線を一つひとつ受け止めていくと、目を閉じる。

ややあつて目を見開くと、榛名は声を張って、皆に旗艦としての指示を出した。

「それでは、皆さん！ 白瀬さんの言葉通り、追撃作戦を実行します！ 連合艦隊陣形は解除、神通さんたち水雷戦隊は単縦陣で畳みかけてください。私と伊勢さんで援護します！」

「了解!!」

部隊の全員が、声を揃えて返事をする。

翔鶴たち空母の艦載機によって制空権がこちらに傾き始めると同時に、榛名たちの反撃が開始された。

榛名たち第1独立遊撃艦隊と、翔鶴たち第101独立防衛艦隊による反撃が開始されると、膠着しかかっていた戦況は動き出した。

上空では敵旗艦のヲ級flagshipの艦載機が相変わらず、粘り強い動きを見せていた。しかし翔鶴たちの戦闘機の奮闘で、僚艦の機体が次々と脱落していったために数で押され始め、水上の艦娘たちへの脅威は確実に減らされていく。

その期に乗じて、榛名たちが敵艦隊へと急接近。敵機の脅威から逃れた、味方爆撃機や雷撃機の支援を受けながら、夕級flagshipと青いり級との砲撃戦に入る。

「貰ったわー！」

伊勢の徹甲弾が、旗艦の傍にいたもう片方のヲ級flagshipに突き刺さった。

母艦を失い統制の取れなくなった艦載機を、紫電改二や零戦52型が即座に叩き落とし、更に数の優位を築いていった。

戦況が不利になるにつれ、残ったヲ級flagshipは歯を食いしばり、空を睨む。爆撃機も艦攻もほぼ落とされてしまった状況下でも尚、戦闘機だけで戦線が完全に瓦解するのを堪えていた。

翔鶴たちの艦載機も、負けてはいない。

優勢となった空から繰り返し爆撃と雷撃を続け、敵の進路妨害をしつつダメージを徐々に蓄積させていく。

爆弾を落として身軽になった瑞鶴の零戦62型も空戦に加わって、敵戦闘機を撃破する。

制空権も優勢となり、このまま片が付くかと思われた矢先だった。

榛名と伊勢に先行して敵艦隊に近づく神通たち水雷戦隊に、それは起こった。

「きゃあっー！」

「姉さん!？」

突然、暁の悲鳴が上がった。後ろにいたヴェールヌイが、倒れかけた暁に近づき、肩を支える。

「いたた……。何よ、もう!」

一気に中破に追い込まれ、涙目になりながら攻撃の主を探す。このまま只では済まさないと砲を構えようとした時、自分を支えていた筈のヴェールヌイに肩を引っ張られた。

「ちよつと——きやつ!?」

思わずヴェールヌイに抗議をしようとした瞬間、先程まで自分がいた場所に砲弾が叩きつけられ、水柱が上がる。

「危なかった……。姉さん、まだ戦えるかい?」

「……。何とか」

背筋に寒いものを覚えながら、暁は素早く艤装と自分の身体をチェックする。当たり所がよかったのか、何とか中破で済んだようだ。目の前の敵を倒すまでなら、問題は無い。

ヴェールヌイに礼を言い、自分を心配して速度を緩めつつ砲撃を続けていた神通たちにも大丈夫と伝えて、暁は再び前身を始める。

「絶対、許さないんだからっ!」

暁の視線の先には、無表情で砲を撃ち続ける青いり級の姿があった。恐らく、あの敵からの砲撃だったのだろう。

青いり級も自軍が劣勢であることを悟っているのか、無理な突撃をしてくることは無い。しかし、それでも暁や神通たちの心理を確実に突きながら、単艦でこれ以上の進攻を防いでいた。

その分、空が留守になるということも無く、爆撃や雷撃も見事なままでにかわす。

「何よ、あのり級! 無茶苦茶よ!」

「攻めきれないので……。」

延々と続く砲撃戦に苛立つ雷に、落ち着きながらも不安を隠しきれない電。

今、突出すればやられてしまうことを分かっているのか、島風も電の後ろから離れず連装砲ちやんと共に砲撃を続けるのだった。

一方、青いり級1隻による奮闘のお陰で、夕級flagshipは水雷戦隊の後方への砲撃に集中出来るようになっていた。

夕級は、榛名や伊勢の徹甲弾に装甲を貫かれないように角度をずらしつつ、反撃を加えていく。接近してくる艦載機は、ヲ級と自身の対空機銃で弾幕を張り、正確な狙いを付けさせない。

尤もこの行動は、夕級以上の戦艦ではごく普通に行われることだ。僚艦の半分を失いながらも夕級が戦い続けられるのは、空で奮闘しつつ自軍艦に的確な指示を出してくる旗艦のヲ級flagshipと、駆け引きに長けた青いり級がいるおかげだった。

「伊勢さん、瑞雲はまだ残っていますか？」

「戻って来た子は皆行けるけど……。爆弾までは難しいわ。精々、機銃攻撃までね」

「十分です。ヲ級を避けつつ、夕級の注意を上空に引き付けてください。その隙に撃沈します」

「分かったわ。もうひと踏ん張りよ、皆！」

榛名の言葉に頷き、伊勢は半分程度にまで減った瑞雲を発艦させ、夕級に向かわせる。

「すみません、伊勢さん。ご無理を言って……」

僅かばかり疲労を滲ませている伊勢を見て、榛名は俯く。

今までは姉で旗艦である金剛に付いて行くだけで良かったが、今度は自分が指示をする立場となった。

拓海は言うに及ばず、自分の指示で部隊を動かせるようになったのだ。自ずと僚艦に負担を強いてしまう。そのことに、榛名は不安と責任を感じていた。

「良いいってことよ。このくらい、何ともないわ。旗艦ならもっと、胸をどんと張りなさい。そんな顔していると、あの子たち逃げちゃうわよ？」

笑みを浮かべながら、伊勢は青いり級と戦う神通たちの方を見やる。

「伊勢さん……」

「貴女は優しくして、それでいてしっかりと芯が通ってる。皆の心の支

えになってくれているわ。南鳥島で貴女の背中を見てた神通たちなら、尚更ね。この部隊の旗艦は、榛名にしか出来ないわ」

そう言つて、伊勢は夕級との砲撃戦に集中する。

姉である金剛は、底抜けの明るさで自分たちを引つ張つてくれた。彼女もまた、こんな気持ちだったのだろうか。それでも金剛は、彼女に出来るやり方で艦隊を引つ張っている。

ならば自分も、己に出来ることをするしか無いだろう。

最後まで諦めずに戦う。それは「昔」からやって来たことだ。あの時、同じ空を見ていた伊勢にも負けるつもりはない。

「———そうですね。行きましよう、伊勢さん」

榛名は気持ち切り替えて、戦闘を続行する。

当初の作戦には無かつたことだが、これは戦争だ。況してや相手は深海棲艦だ。想定外のことなど、幾らでも起こり得る。

ここは自分がしっかりしなければと、榛名は決意を新たにすのだった。

戦況はほぼ艦娘側の流れとなり、ヲ級たちを排除するべく、追撃が続けられていた。

しかしどうにも、攻め切ることが出来ない。

ヲ級 flagship の戦闘機は数を減らしながらも最後の抵抗を続け、夕級 flagship はどうか小破まで持ち込んだ程度。青いり級に至つては、一発も当てられずにいた。

「す、すみません。艦載機、発艦出来ません！」

九九艦爆や九七式艦攻は全滅し、零戦52型も疲弊した龍鳳が申し訳なさそうに、状況を報告する。

龍驤は全滅を免れていたが、やはりこれ以上の継戦は厳しい様子だった。その分の負担が翔鶴と瑞鶴に掛かり、疲労が蓄積されていく。

「絶対、絶対許さないのに！」

ややムキになって砲を撃ち続ける暁だが、目標の青いり級は苦も無く味方の砲弾共々かわしてしまう。

この状況が暫く続くかと思われた時、暁や榛名たちに拓海からの無線通信が入る。

《皆、追撃は中止だ。 “あさぎり” まで戻って来てくれ》

「何よ、あとちよつとなのに！」

暁が抗議するが、拓海は「駄目だ」と呟く。

《これ以上の深追いは出来ない。敵の主力艦隊の後方にいる個体群が、こつちに進路を変えた。勘付かれた可能性が高い。奇襲作戦は失敗だ》

翔鶴たちにも兼続からの通信が入ったのか、瑞鶴が暁と似たような反応を見せている。

それを見ながら榛名は、拓海に今後の動きを訪ねることにした。

「ヲ級の艦隊は、どうされますか？」

《今は見逃す。向こうも撤退しているんだ。背中を撃たれないように気を付けていれば、心配は無いよ。榛名たちは “あさぎり” に乗艦して、修理を受けてくれ》

「了解しました。皆さん、第1独立遊撃艦隊はこれより撤退します。ヴェルちゃん、暁ちゃんを支えてあげて」

拓海の指示を受け取りつつ、榛名は合図を出して撤退行動を開始した。

「ちよつと……と、とと」

暁はまだ戦えると言わんばかりに身を乗り出すが、不意に前のめりによるめく。ヴェールヌイが手を差し出したことで、転ぶことは避けられた。

「大丈夫かい、姉さん。疲れているみたいだ」

「そ、そうね……。ありがとう、響」

ヴェールヌイに支えながら、暁はさっきの勢いが嘘のように大人しくなる。ここは撤退するしかない、暁も悟るしか無かった。

「ヴェールヌイちゃんが一人じゃ、大変でしょう？ 私も手伝うよ」

島風が、普段と変わらない飄々とした表情で近づいて来て、何でも

ないといった様子で暁に肩を貸す。

素直に体を預けながら、暁は島風を訝しげに見た。

「な、何のつもりかしら?」

「撤退するなら、早くしないといけないでしょ? おっそいのは嫌だもん」

「私がお荷物って言いたいわけ?」

「そんなこと言っていないよ。暁ちゃんは友達だもん」

「な————っ!」

島風の口から出た言葉に、暁は顔を真っ赤にして絶句する。

その言葉が余程嬉しかったのか、暁は「し、仕方ないわね」と呟きつつ島風に体重を預けた。

「それでは暁ちゃん、ヴェルちゃん、島風ちゃん、行きましようか。皆さんに置いて行かれますよ」

それを微笑ましく見つめていた神通が、3人に声を掛ける。場が収まるまで榛名たちを先に行かせ、その場で待機していたのだ。

「Xopopo^ハsho^シo^{ヨー}。時間が無い、戻るとしようか」

ヴェールヌイの言葉に同意するように神通達も頷き、敵が迫ってくる前に撤退を始めるのだった。

「——了解した。『あさぎり』は現海域から退避。周辺の警戒は怠るな。後はこちらで引き受ける」

巡洋艦『するが』のオペレーターイングルーム。その中央に設置された艦隊司令長官用の席で、光樹は『あさぎり』との交信を終えた。タイミングを計ったかのように、三笠が光樹の傍に進み出て来て、彼の顔を覗き込む。

「提督、『あさぎり』は何と」

「ああ。向こうからの連絡が入った。皆もそのままでもいいから、聞いてくれ」

光樹は第1艦隊及び第3艦隊の司令長官であると同時に、今回の攻略作戦の総指揮を任されている。

光樹の周囲には、オペレーター用端末と向かい合っている第1艦隊所属の各戦隊司令官4名がいた。その場にいる全員に声を掛けたのは、これが今回の作戦に大きく関わるものであったためだった。

「『あさぎり』より出撃した第1独立遊撃艦隊と第101独立防衛艦隊が、平久保半島沖にて新手と接敵。撤退させることに成功したものの、無視出来ない損害を被り、『あさぎり』へ帰還。泊地棲姫への奇襲は失敗だ」

作戦失敗の知らせに、各々の司令官に動揺する素振りが見られた。「新手の敵の内容は？」

司令官の一人、第1戦隊の鳴海武少将が、詳細な情報を求めて尋ねる。

「ヲ級改flagshipが2隻、又級flagship、夕級flagship、リ級eliteが1隻ずつ。更に、リ級の上位種であると思われる『青いり級』が新たに確認された。このり級は、単独でこちらの艦隊を翻弄。艦隊を率いていたヲ級も、他の個体以上の強さを発揮。敵艦隊の半分を鎮めたものの、青いり級と旗艦のヲ級、そして

夕級は仕留められなかったとのことだ」

「戦艦や空母がいたにも関わらず、ですか」

武の言葉に、光樹は首を縦に振って説明を続ける。

「青いり級は駆け引きと状況認識能力、旗艦のヲ級は文字通りの指揮能力と空間戦闘能力に長けているというデータがある。この2隻を中心として艦隊は動いていたようだ。見事に奇襲を食い止められてしまった形だ」

ある程度、奇襲を察知した敵艦隊が現れる可能性は考慮していたとはいえ、ここまでの能力を持った個体が現れるとは、流石の光樹にも思いもよらなかった。

しかし起きてしまったことを悔やんでも、今更遅い。新手の出現と奇襲失敗による戦況の把握を逸早くしなければ、という時だった。

鳴海武の弟であり、光樹とも同い年でもある1航戦の司令官、鳴海剛がディスプレイを見ながら声を上げた。

「赤城の彩雲が、敵の動きを補足した。敵後方のヲ級以下中小型艦の部隊が、半島の北へ向かっている。奴ら、『あさぎり』の連中のところに行くつもりだ」

「流石に気付かれたか」

光樹は自分の席に設置されたディスプレイを見つつ、自軍艦隊と敵艦隊の動きを観察する。

戦線は後進も前進もしていないが、艦隊戦力の大半を動員したことによる物量と火力により、安定している。敵の数も徐々にだが、確実に減少している。こちらは数隻の損傷が見られるが、継戦能力に問題は無い。元々は奇襲部隊から目を逸らすための大規模な囮のようなもののため、長期戦にも耐えられるように配置をしているので、想定の内だ。

『あさぎり』が遭遇した敵艦隊は、石垣島近海を離脱して北東の方角へ逃亡中。

これらの情報を鑑みながら、光樹は作戦の変更を下すこととした。

「全部隊に通達。これより、石垣島攻略主力艦隊は現時刻1400をヒトヨシマルマルをもって、敵艦隊への総攻撃に移る。当初の予定とは異なり、時間が掛

かる上に苦戦は必至だ。夜戦を行うことも覚悟しておいてくれ」
光樹の命令はマイクを通して、「するが」の姉妹艦「さがみ」、
すおう」にいる各司令官にも伝えられた。

奇襲部隊が敵の中核を叩き、指示系統が混乱した深海棲艦を主力艦
隊が一気に沈めていく予定が前後した形だ。

しかし、そんな戦況と作戦の急な変化にも関わらず、各部隊は陣形
を整えている。

「全艦、攻撃開始!!」

光樹の声と同時に、艦娘の大艦隊による攻勢が火蓋を切った。

総攻撃開始から半刻が経ち、戦況は優位に推移していた。

1 航戦を中心とした航空部隊が空を制し、大和や長門を始めた戦艦
の主砲が敵を薙ぎ払う。更に水雷戦隊の砲雷撃戦による奮闘で、戦線
は前へと押し初めていた。

敵の後方から離脱した艦隊は、潜水艦部隊に追わせ、「あさぎり」
への進路を妨害するように仕向ける。

C R O C S を介して最速で情報共有を行うことで、艦隊は一糸乱れ
ぬ戦線の展開を実現することが可能となっていた。

光樹は手元のディスプレイを見つめながら、奇襲部隊が遭遇した敵
の動きを注視する。カメラユニットによる遠距離観測であるため座
標は正確では無いだろうが、間違っているわけでも無い。

最早戦闘継続に支障があるからか、敵は合流する素振りを見せず、
変わらず北東への進路を取り続けている。

「提督、この艦隊はどうされるおつもりですか？」

改まった声で三笠は新手部隊を指し、光樹に尋ねる。

タ級 flagship はどちらかといえば脅威度は低い方だ。懸
念すべきなのは、旗艦のヲ級 flagship と青いり級。

「あさぎり」から送られてきた情報によるならば、このまま放置と
いうわけにはいかない。この先の作戦に、支障をきたす恐れがあるだ
ろう。

「そうだな……」

光樹はディスプレイの左をタップすると、三笠の方を見上げた。

「すまない、三笠。俺が良いと言うまで、目を逸らしてくれないか」

「提督、何を……」

「時間は掛からんさ」

三笠は納得のいかないという表情をしつつも、光樹の言葉に従って、画面が視界に入らいように目を逸らす。

それを確認すると光樹は画面に展開されたメールソフトのモードを暗号用に切り替え、手早く入力していく。

画面には米印が打ち込まれていくだけで、そこから内容を判別することは不可能だった。

メッセージを打ち終えた光樹は送信ボタンを押し、たった今入力したデータを削除する。

ほんの短い作業をした光樹は顔を上げ、三笠をじっと見つめた。

「三笠……」

「はい」

律儀に目を逸らしたまま、三笠は光樹の呼び掛けに答える。

優しい気な瞳の奥に宿る、かの人物から受け継いだ熱い意志。艦装を背負わずとも、堂々たる流麗な立ち姿は、まさにその名に相応しいものだった。

「昨晚、どこに泊まったか覚えているか？」

「ホワイトビーチ基地の宿泊エリアです」

三笠は、正面の壁に埋め込まれたディスプレイに移される戦況に目を向けたまま、端整な顔を崩さない。

「面白いものを見たんだが、聞くか？」

「……………何でしょうか」

場が場であるためか他人行儀のような態度を崩さないままだったが、その目には興味が宿っていた。

光樹は三笠の表情を見逃すまいと視線を一点に定め、昨晚見たありのままのことを呟いた。

「羊羹を摘まみ食い」

「してません!!」

途端に三笠は顔を赤くして、抗議の声を上げる。先程まで微動だにしていなかった姿勢は何処へ行ったのか、前のめりになって光樹に顔を近づけていた。

「……そうか」

思いの外血気迫る勢いに、光樹は気圧されてそう返すことしか出来なかった。まさかここまで反応を見せてくれるとは、思ってもみなかったのだ。

「あつ……」

思わず大きな声を出したことに気付いたのか、三笠は顔を羞恥に染めたまま身を引いて縮こまる。そんな彼女を見て、光樹は笑みを溢さずにはいられなかった。

「そうムキになるってことは、あれはやっぱり三笠だったんだな」
「なっ——!」

光樹の言葉に、三笠は硬直する。

そう、光樹は見てしまった。消灯時間も近くなったホワイトビーチ基地の一角、宿泊エリアの食堂で彼女が幸せそうな表情で羊羹を頬張っているところを。

息抜きがてら、夜の散歩を追えて自室に戻ろうかという時だった。誰もいない筈の食堂の明かりが点いているのを見つけ、こっそりと覗き見てみると彼女が一人、幸せそうな笑みを浮かべて羊羹を食べていたのだ。

危うく笑いそうになったが、作戦前夜だというのにニヤニヤしながらその光景を光樹は眺めていた。

「いやあ、中々可愛いものを見せて貰ったよ」

はっはと笑いつつ司令官たちに目を向けると、複雑そうな顔だったり必死に笑いを堪えようとして失敗していたりと、各人各様の表情を見せていた。

それから視線を戻すと、三笠は顔をいつそう赤くして光樹から視線を逸らしていた。

「そ、それよりもう良いんですか。提督」

「ん？ ああ、もう大丈夫だよ。三笠。そのために話し掛けたようなものだから」

「……帰ったら卵焼きのロシアン・ルーレット確定です」

「ぐ……。またやるつもりか？」

「当然です。少しは私の身にもなってください」

顔を赤らめたまま、三笠はぷい、とそっぽを向いてしまう。そんな見た目相応の少女らしさが、また可愛らしいと光樹は思う。

「美味かったか？」

「……とても」

そう言つて三笠は、素直に首を縦に振るのだった。

気を取り直して、光樹は再び戦況の推移を見守る。

先から戦況は大きく動いてはいないが、しかし着実に主力艦隊は敵を確実に倒し、前へと進んでいく。夜戦に入る前には、泊地棲姫を叩くことが出来そうだ。そのくらい、状況は良いと言えた。それでも敵本陣に殴り込むのに2時間程度の遅れになる。

楽観視は出来ない状況が続いていた。

そして拓海たちが遭遇し、奇襲作戦を失敗させる要因となったヲ級 flagship の艦隊は、北東への進路を取り続けている。

火力だけでも、物量だけでもなく頭脳を使つたと見られる、未知の敵。

見た目だけで言えばヲ級は何の変哲もない一般的な個体であったし、青いり級も纏うオーラは違うが、目の青い発光色の特徴から光樹の知っている「改・flagship」と一致する程度だ。

しかし相手は、こちらの想像を超えた強さを発揮した。これからも恐らく、こうした事態は続くのだろう。未知の個体が出て来る可能性も十分にある。

実際、未だ人類が制海権を取り戻せていない南方海域では、日本近海で確認される個体以上の強さを持つ者が多数いるという話もある。

そういつたことも鑑みると、艦隊の増強と練度向上は重要な課題と言えた。

「……遅かれ早かれ、こうなってはいたな」

光樹はディスプレイに目を向けながら、独り呟く。

深海棲艦——駆逐イ級を最初に見たのは、20年ほど前。当時は、制海権は未だ人類のものであり、深海棲艦はほとんど見られなかった。上司に報告するが信じてもらえず、何も出来ないまま、人々が一方的にやられていくのを黙って見ていた時の悔しさは、今でも忘れられない。

危機的状况とは言え、その頃よりは遥かにマシかもしれないと、光樹は苦笑する。

「それで、提督は例の艦隊をどうされるのですか？ 何かメッセージを送っていたようですが……」

先程、光樹がはつきりと答えを返していなかったためか、三笠は今度こそと言わんばかりに尋ねる。

「そんなに気になるか？」

「それは、勿論。誤魔化したってダメですよ」

今まで苦楽を共にしてきた少女の真剣な眼差しには、これからも光樹と共にありたい、という意志が宿っていた。

光樹も、彼女がいることで何度も励まされ、ここまでやって来るこ
とが出来た。

「手を、打っただけさ」

「手……ですか？」

だからこそ、伝えたくないこともある。

色んな感情を分かち合ったからこそ、光樹は伝えるべきでは無いと判断した。

物憂げに答えた光樹の表情を見て、三笠はそれ以上の追及をするこ
とが出来なかった。

触れてしまえば、今すぐにでも壊れてしまいそうだったからだ。

最初は、流れ着いたこの世界に僅かな希望を抱いていた。

自分は、フィクションだと思っていた世界に足を踏み入れたのだと。

元いた世界は、冷戦が終わっても尚、血を血で洗う終わらない地獄だった。

世界を回って、日本は何とも恵まれた国だと痛感した。だが、あまりに平和すぎた。

戦争が無いということは確かに良いことだろう。それ故に、「平和」という名の真綿で自分たちの首を絞めていく。

苛烈な世界を見てから、日本という国をより愛すると共に、憎しみを持つようになった。そして、血の世界を恨むようになった。

どうにも矛盾した感情を持っているのは、自覚している。けれども。日本、そして世界が、憎くて、恨めしくて、悲しかった。そして、無力感に苛まれた。

何故、人間はこうも愚かなのかと。

自分は、この世界をどうにかするにはあまりに小さすぎると。

尤も、こんな想いを抱いたところでどうすることも出来ない。自分だって、音楽やゲームに夢中になる程度の、ただの人間でしか無いのだから。

別の世界に転移してしまってから、あの怪獣の存在するこの場所なら、人類も愚かではないだろうと期待を抱いていた。

しかし、この世界の人間たちも大して変わってはいなかった。

そんな時に、見付けたのだ。

この世界の、新たな可能性を。

Task 04 八重山列島の戦い・青花

八重山列島から北東へ数km離れた海域を、空母ヲ級flagshipは仲間2隻と共に進んでいた。

石垣島で戦う仲間を助けるためではなく、撤退をするためだ。

事前に援護の指示を受けて、南方から北上してきた彼女たちは、5隻の随伴艦と共に平久保半島付近に配置されていた。

一帯を警戒中に、半島の東の海域とは違って少数で向かって来る艦娘たちをヲ級は発見。敵の動き方を見るに、あの艦娘たちは石垣島に展開していた艦隊の長を奇襲して、討ち取るつもりだったのだろう。

自分の艦隊戦力に自信を持っていたヲ級は、艦娘たちに数の不利を取られながら戦闘に突入。しかし思っていた以上に、敵の艦娘たちはヲ級たちと拮抗した実力を見せた。

艦隊の弱い部分を突かれて、一気に劣勢となってしまい、残る味方はタ級flagshipとリ級の改良型だけになってしまった。ヲ級自身の艦載機も、今は戦闘機を数機飛ばすことで精一杯な有様だ。「ヲッ……」

自分たちが敗走を始めた直後、長の危機に気付いた一部の味方が反転したのを、ヲ級も見ていた。同時に、艦娘の主力艦隊が一気に動き出したことも。

遠目に見た限りだが敵の戦力は、相当なものだろう。数も石垣島の艦隊と同程度揃えていたし、武器の性能もかなり高いと見える。

あの戦闘で初めて艦娘というものを見たヲ級は、初めこそ大したことは無いと侮っていたが、今では殲滅されてしまうのも時間の問題だ。

自分たちとどこか似た武装を持っていた彼女たちを、泊地棲姫は「艦娘」と呼んでいた。だから自分もそう呼んでいるに過ぎないのだが、あの少女たちはいったい何者なのだろうかとヲ級は思う。リ級が近くで戦った時、「自分たちに近い匂いがする」と言ったこととも何か関係があるのだろうか。

「ヲヲツ……」

ヲ級は後ろにいるリ級に尋ねてみるが、リ級は分からないと首を振る。

分からないのなら仕方が無いと、ヲ級は再び前を向いた。

兎に角今は、一刻でも早く補給を済ませて、石垣島に戻らなければならぬ。行ったところで劣勢になっているのは目に見えていたが、それでも放棄するわけにはいかない。

艦娘を擁するあの国は、人間たちの反撃をより拡大させてしまう芽になりかねない。

今回派遣されてきたのは、彼らの手が南方にまで及ぶかどうかの判断を下すためでもあった。

そして艦娘と接敵したことで、彼女たちは危険だとヲ級は判断した。

どうにかこの局面を乗り切り、南方の味方の増援を待つしかない。島を死守出来なければ、いよいよ自分たちが負け続ける運命になるかもしれないのだから。

補給場所への航路を取り続けていると、リ級が何かを見つけ、警戒を促してきた。

ヲ級も同時に発見し、自前の目の良さを活かして遠くの影を注視する。

スピードを僅かに落として、徐々に接近していくと、それが何なのかはつきりとしてきた。

半袖に膝上の丈のスカートの、長い黒髪。銀色に輝く小型の連装砲を右手に持ち、背中に主機、足に舵と思しき艀装を身に着けている。腰には、連装魚雷発射管を装備している。右肩から左の腰にかけて小銃のようなものを下げているが、それは対空か近接戦闘用のどちらかなのだろうか。

背はヲ級よりも低く、平久保半島の海で見た駆逐艦娘よりやや高い程度。

これらの特徴から、ヲ級は敵艦娘の駆逐艦と判断した。数は1隻

で、周りに他の敵影は見られない。

「フツ!!」

ヲ級は味方に警告を出し、臨戦態勢へ移行する。装備は厳しい状態だが、短期決戦ならば倒せるだろうと踏む。念のため逃走経路を想定しつつ、徐々に敵へ近づいていく。

やがて夕級の砲撃が必中範囲にまで近づくが、敵の艦娘は一向に動く様子が無い。

顔を俯かせ、直立不動のままだ。

夕級とリ級はヲ級の横を抜け、前に出て攻撃準備に入る。

「……………」

攻撃準備態勢のまま、ヲ級たちは海上に佇む艦娘を睨み続ける。

ヲ級がすぐに砲撃指示を出さなかったのは、目の前の艦娘がどこか異様な雰囲気を持っていたからだだった。立ち姿にも全く隙は無いことから、この駆逐艦は相当な手練れなのかもしれないと警戒する。

表情は見えない。こちらを認識しているのか、あるいはしていないのかは定かではないが、先に見た駆逐艦娘よりも白い肌が、不気味さをより一層際立たせていた。

口元が動き、何事かを呟いているのが分かる。しかしその声は小さすぎて、ヲ級には聞き取ることが出来なかった。

警戒を続けながら、ヲ級は残り少ない戦闘機を発艦させ、上空で待機を命じる。すぐにも応戦出来るようにするためだ。

睨み合ったまま、時間が刻一刻と過ぎていく。

石垣島周辺の敵の追撃も十分に考えられるため、ヲ級としてはあまりこの場に長居はしたくなかった。だが、それを許さない空気が、この場に流れている。

ふと、相対している艦娘の声が、ヲ級たちにもはつきりと聞こえてきた。

「アロー……………^{ワン}……………。目標……………確……………認……………」

聞こえてきたのは、幼さを残した少女の声。しかし、どこか機械的で生気が無い声だ。

ヲ級は薄ら寒さを覚えて、警戒を強める。

この艦娘は、間違いなく只者では無いと直感した。

その直後だった。

突然、鈍い爆発音と共にヲ級の左前方にいた夕級flagshipの頭部が吹き飛んだ。

ヲ級は何が起きたのか分からず、倒れていく夕級の胴体を呆然と見つめる。

「ヲ……」

呆気を取られたまま、ヲ級は前方にいる筈の敵を確認しようとし――。そこに、敵の姿が欠片も無いことに気が付いた。

「ヲッ!？」

それだけで事態の異常に気が付いたヲ級は、掻き消えた敵の姿を探す。

前方はもちろん、左右、後方を見るが、姿は無い。そして上空を見上げたとき、ヲ級は目を見開いた。

さつきまで海上にいた筈の少女が空高く跳躍し、銀色の連装砲を直下にいるヲ級たちに向けていたのだ。逆光で顔はよく見えなかったが、明確な殺意をヲ級たちに向けているのが分かった。

ヲ級が咄嗟に全力で後退すると、直後に目の前で大きな水柱が上がる。あの艦娘が、砲を撃つたのだ。

水柱がヲ級の身長ほどの高さまで上がったことから、威力はかなりあると思われる。それをくらっていたら、ヲ級は間違いなく夕級と同じ運命を辿っていただろう。

即座に戦闘機へ指示を出し、上空から落下してくる敵へ向かわせる。必中距離まで接近させ、合図を送って戦闘機の機銃による攻撃が開始された。

その瞬間、敵が背負っているランドセル型の艤装の両側が展開し、内側から幾つかの漏斗状の物が露出。それが火を噴き、艦娘の落下軌道が強引に変更された。

戦闘機の機銃攻撃を掻い潜り、漏斗状の物体――スラスタ―を片方ずつこまめに切り替えて噴かしながら、落下。更に足を海面に向ける

とスラスターを全開で噴かせ、落下の衝撃を和らげながら難なくと着水を完了する。

ヲ級たちとの距離を詰めたその艦娘が頭をもたげると、初めて表情が垣間見えた。

「う……あ……」

意味の無い声を出すその艦娘に瞳は、虚ろだった。

その目には凡そ“人間らしさ”が宿っておらず、どこまでも暗く深い闇そのものだ。焦点は定まっているが、その艦娘に映っているのは目の前にいる2隻の深海棲艦のみ。

ヲ級とリ級を視界に収めた艦娘は、ぼつり、と今度は意味のある言葉をつぶやいた。

「目標……殲滅……開始……スル——!!」

突如として艦娘の顔が怒気を孕み、明確な殺意を持った視線がヲ級たちに向けられる。

艦娘は砲を前方に構えると、ヲ級へ向けて発砲する。そこにリ級が割って入り、右腕の装甲の硬い部分でヲ級を庇った。

「ヲッ！」

大丈夫か、と答えを掛けるとリ級は問題ないとアイコンタクトで答える。しかし装甲は大きくはないものの抉られて、黒い血が流れ出していた。

駆逐艦の砲撃で、重巡の装甲を抉ってしまうほどの威力を出したことに、ヲ級は衝撃を覚える。人間たちはいつの間こんな物を作っていたのかと、悪態を吐きたい気分だ。

ヲ級は戦闘機に機銃を撃たせて艦娘を遠ざけ、リ級が体勢を立て直す時間を稼ぐ。

リ級が十分だと頷くと、ヲ級は戦闘機を一旦離脱させる。直後に、リ級は持ち前の速さを活かして、敵艦娘へと急速接近して行った。両者の中距離戦が始まったことを確認すると、ヲ級はやや後退しつつ、戦闘機に援護へ向かわせた。

リ級が正確無比な攻撃と高い機動性で攻め立て、上空から戦闘機が機銃掃射で進路を妨害する。しかし艦娘はスラスターを駆使して弾

の間をすり抜けて、一方的にリ級へ砲撃を当て続けていた。

段々とリ級の砲照準が合わせられない程に速度を上げ、変則的な進路を取りながら、艦娘は砲撃をする。リ級も回避行動を取っているのだが、一度外せば次弾は確実に当て、また外せばその次も当てることの繰り返しだ。駆逐艦というだけあって装填も早く、リ級が1発撃つ間に艦娘は2、3発のペースで弾を撃っていた。

当然リ級は装甲を削られ、反撃もままならないまま戦い続けていた。

空からの援護も意味を成さず、時折艦娘が空に向けて撃つ小銃の弾幕で中々接近することが出来ない。

一発の被弾もすることなく艦娘は動き続け、ヲ級とリ級を攻め立てる。1隻たりとも逃がさんとする迫力から、ヲ級は恐怖を覚え始めていた。

目の前の獣は、飢えた狼の如き勢いを見せている。このままでは、一撃を与えることすら敵わず全滅してしまう。

そう思い始めたとき、リ級が顔を半分だけ向けて、メッセージを発した。

——逃げろ。

「ヲッ!?!」

何をするつもりだ、とヲ級は問いかける。

リ級は、ここは自分が囿になるからお前だけでも逃げろと、懇願するような眼を向けていた。

その目を見て、危うく感情的になりかけていたヲ級は頭を振り、冷静に状況を分析する。

敵の数は1体。補給場所に着けば、艦載機を補充してこの場にいる敵を倒し、石垣島への援護に行くことは比較的容易になる。しかしそのためには、一度リ級を見捨てなければならぬ。

仲間を大事にすることが心情のヲ級は、その選択肢を拒否したかった。しかしここで散ってしまったのは、仲間の想いが無駄になってしま

う。

人間、そして艦娘を倒すことが、至上の使命だ。それを果たすには、

自分が生き残らなければならない。今後も、大きな戦力として期待をされている自分が。

「フ……………ッ！」

結論を出したヲ級は、リ級に謝りつつ全速力で戦闘海域からの離脱を始める。僅かな戦闘機を直援に残し、ヲ級は事前に想定していた逃走経路を辿り始めた。

離脱していく途中で振り返った瞬間、あの艦娘が再びスラストを点火して跳躍し、リ級を蹴り飛ばして海面に叩き付け、組み伏している様子が目に入った。思わず引き返しそうになるが、リ級が向けてきた視線がそれを許さなかった。

—— お前には、戦いは似合わない。優しい奴だ。だから、どこか遠くで、花を見つめて……………。

リ級の言葉の直後、彼女の頭を押さえつけていた艦娘が左腕を持ち上げ、捻り始める。少女らしからぬ剛力を発揮して、艦娘はリ級の左腕をいとも容易く振り切ってしまった。

「アアアアアアアアアアア!!」

聞いたことも無いような苦渋に満ちた悲鳴が、辺り一帯に響き渡る。

青い涙を流して、リ級は必死に逃げようともがく。

—— 嫌だ！ やめろ！ 死にたくない！

そんな声がヲ級の頭の中に響く。

艦娘が敵を逃がす筈も無く、馬乗りの体勢で押さえつけたまま右手の砲をリ級の大腿部に向け、何の躊躇いも無く引き金を引いた。

右脚は根元から吹き飛ばされ、宙を舞う。主を失った右脚は海に落ちると、そのまま沈んで消えていった。

「アアアアッ！ アアッ！ アアッ！」

これ以上ない程の悲鳴を上げて、リ級は身体を引き裂かれた痛みにのた打ち回る。

そんなリ級に対して、無機質でいて殺意だけは宿した目を向ける艦娘は彼女の髪を左手で掴んで頭を持ち上げると、海面に激しく叩き付けた。

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も――！
執拗なまでにリ級の頭を叩き付ける艦娘からは、憎しみというべき感情が溢れ出していった。

やがて、抵抗する力を失ってしまったリ級は、艦娘にされるがまま頭を持ち上げられる。艦娘は右手の砲をリ級の頭に据え、引き金を引いた。

主砲から撃たれた弾でリ級の頭は、黒い血を撒きながら四散する。つい先刻まで敵を苦しめていた青いリ級の最後は、凄惨で呆気の無いものだった。

「フッー」

次は自分だと悟ったフ級は、全力で離脱を続ける。

敵の上空にいた戦闘機を差し向けて時間を稼ごうとするが、霧散し始めたリ級の亡骸に跨る艦娘の小銃による迎撃で一瞬にして全機が撃墜されてしまう。

そして黒い返り血を浴びた艦娘は揺ら揺らと立ち上がったかと思うと、いきなりスラストを全開にして、一気にフ級との距離を詰め始めた。

「フ!？」

あまりの速さにフ級は目を白黒させながら、尚も逃げ続ける。本当ならば迎え撃って敵を討ちたいところだが、今は丸腰同然の状態だ。捕まってしまえば、自分も同じような殺され方をしてしまう。そんなことは嫌だと、フ級は必死で前へと進んで行く。

しかし向こうは、フ級も逃がさまいと追いかけて来る。

全開で火を噴くスラストが水しぶきを上げ、少女の身体を前へと押していく。主機も全開で回しているのか、予想を上回る速さでフ級との距離が縮まる。

「捕ま……え……タ」

背後で氷のように冷たい声が聞こえてフ級が振り向くと、目と鼻の先に艦娘が迫っていた。

艦娘は獲物に食らい付くように、主砲を無表情で構える。

「ヲヲヲッ!!」

まだ諦めるわけにはいかないと、ヲ級は全力で艦娘から遠ざかろうと後退する。

「死……ネ……」

少女は、眩くと同時に弾を放つ。

連装砲から吐き出された弾は、ヲ級の頭を捉えて突き進む。それをヲ級は何とか回避しようと姿勢を変えて、一発を回避することに成功した。しかしもう一発は回避に失敗し、彼女の左目に突き刺さる。着弾した弾は内部で爆発を起こし、ヲ級の左目を大きく抉った。

「ガ……ッ」

ヲ級はたつた今失った左目を抑えつつ、頭部に装備された副砲に弾を装填。後退を続けながらも、差し違える覚悟で艦娘に照準を合わせた。

艦娘も止めだと言わんばかりにヲ級に接近。主砲を前に突き出す。

これで終わりだ、と自らの死を覚悟して目を閉じ――。

「ヲ……う」

何も起こらないことに疑問を覚え、ヲ級は恐る恐る目を開ける。

そこには、ヲ級の眼前で砲を突き出した格好のまま動かなくなった艦娘の姿があった。

視線は固定されたまま動かなくなっており、ヲ級を追い続けている様子は無い。腕の一本から足に至るまで微動だにせず、硬直してしまっただけのようだった。

急に動きを止めてしまった敵を見て、ヲ級は暫し戸惑いを見せるが、すぐに逃走を再開する。

理由は分からないが、攻撃を仕掛けて来なくなった敵に背を向け、これ幸いと艦娘から遠ざかる。背中をがら空きにするようなことはせず、時折振り返って敵の様子を確かめながら、ヲ級は撤退行動に徹した。

その間、艦娘は1ミリたりとも動くことは無かった。

ヲ級はその後も無我夢中で逃げ続け、気が付けば日もかなり傾いていた。

喉は焼けるように熱く、連戦に逃亡と短時間に全力で身体を酷使したためか疲労がたまり、息も上がっている。

ヲ級は徐々に減速し、やがて停止すると、周りに敵影が無いか首を振って確かめる。

追って来る敵はいないようだと思えば、ヲ級はその場に崩れるように尻もちをついて、内股で座り込む。

「ヲ……ヲヲ……」

未だに痛む左目にはもう、かつて感じていた光は無い。あの艦娘の砲撃で、失ってしまったのだ。

引き連れていた筈の仲間も皆海に消え、今は自分が残っているだけ。その所為だろうか。心の何処かに、ぽっかりと穴が開いているような気がした。

——これは恐怖？ 悲しみ？ 分からない……。

だが、この心に穴を穿つたのは、間違いなくあの艦娘だろう。

あの青いリ級は、ヲ級が初めて南方で目覚めてからの同僚……いや、友だった。

自分たちに備わった本能をより高めるために戦闘訓練を重ね、敵である人間たちの島々を襲撃し、苦楽を共にしてきた。

やがて自分たちが奪い取った島一つの防衛を任されるようになり、そこで彼女との日々を過ごした。

無人となったその島には、人間たちがかつて住んでいた集落があった。木造ばかりであったため、どの家も空襲と艦砲射撃で焼けてしまっていた。

木や人や動物が焼けた臭いが混じり合い、強烈な死臭が漂う廃墟。ある日、その島に上陸したヲ級はリ級と共に、悪臭に鼻を曲げながら集落を中心に視察を行っていた。

そこで唯一焼け出されずに済み、鉢植えの中に咲く綺麗な一輪の花

を見つけた。青い花びらを輝かせるそれはとても大切に育てられていたようで、健やかに日の光を浴びている。この辺りでは見かけるような花では無いから、人間が持ち込んだものなのだろう。

人間は、深海棲艦にとって憎むべき存在だ。しかしヲ級は、そんな人間が育てた花を見て酷く心惹かれていた。

それからヲ級は、任務の合間を縫ってはその花の面倒を見るようになった。

元々管理していた人間は花に関する手記を残しており、その中に青い花もあった。様々な花の絵が描かれていたことから、相当に花好きな人間であったのだろう。字こそ読むことは出来ないが、その人間が花に注いでいた愛情は本物であったのはヲ級にもよく分かった。

その手記には青い花の育て方も絵で分かりやすく解説しており、ヲ級はそれを見ながら青い花の世話をした。

花は手を掛ければ掛けるほど育てる者に答え、安らぎを与えてくれる。やがて青い花は子孫を残してその命を枯らすと、ヲ級は強い悲しみを覚えた。

悔しかったのでも無い。嫌だったのでも無い。寂しかったのでも無い。

——よく、生きてくれた。

それは、感謝からの涙だった。

そんなヲ級を、リ級は何を言うでもなくただ見守ってくれていた。ヲ級はそこから、命というものを学んだ。

命は、己が出来得る限りのことを精一杯成し遂げて、子孫に後を託し、一生を終えていく。だから人間は、自分の生存を脅かしてくる我々を恐れ、攻撃してくるのだと理解するのに時間は掛からなかった。

しかし、それとこれとは別だ。

我々だって、この海で生きるために戦っている。自分たちに牙を剥いてくる敵は、容赦なく倒す。

そういう認識の元、ヲ級は尚も戦い続けた。

一方で、変化も現れていた。

攻撃対象はあくまでも自分たちを攻撃する人間だけで、逃げ惑う無辜の民には一切の攻撃をしなくなった。

リ級もそんな彼女の変化に気付いて、上手く立ち回ってくれていた。

“我々”は、人間を例外無く屠らなければならない。そんな暗黙の了解にも近い掟を密かに破ってでもだ。

——ああ、これは罰なのか。

海面に仰向けに倒れたヲ級は、どこまでも透き通る青空を見上げる。

人間を無差別に沢山殺しておいて、今度は力の無い人間を見逃すようになった、中途半端な自分は、罰を受けたのだ。

だから成す術も無く、あの艦娘一人に仲間を殺された。

あの艦娘は、自分たちを憎んでいた。悍ましい程に暗くて深く、沈んだ目の少女。自分は彼女を知らないから、同胞があの子やその仲間を酷い目に合わせてしまったのだろう。

見逃されたのは、最後のチャンスが与えられたからのか、それとも時を待たずしてこの身に次の罰が下されるからのか。それは分からない。

でも、もし次があるのなら。この身に許しの機会があるのなら。

「タイセツナ、ダレカ。マモリ……タイ……」

次の瞬間、ヲ級の視界が青く染まる。それが何なのか認識出来ないまま、彼女は静かに意識を手放した。

時間はやや遡り、ヲ級たちと艦娘の戦闘が繰り広げられていた海域。

ヲ級たちを襲った艦娘は、突如停止したときの状態のまま海上に佇

んでいた。

ザザ、と音が聞こえて、艦娘の耳に何処からともなく無線通信による音声が入力される。

《アロー^{ワン}、再起動シークエンスを開始》

その音声と同時に停止していた主機が唸りを上げ、人形のように固まっていた艦娘は砲を構えた姿勢から直立へ体勢を変える。

「戦果、報告。戦艦、夕級……flagship……撃沈。仮称……リ級改……flagship……撃沈。ヲ級flagship……左目、喪失……確認。攻撃範囲外へ……逃亡……。自動強制停止プログラムにより……追撃中止……。以後の消息……不明……」

少女は戦闘時とは変わって焦点の定まらない目のまま、淡々とただどしい口調で報告をしていく。

無線の向こうの相手はそれを受け取り、機械に命じるように声を吹き込む。

《戦果報告を受領した。評価ランクはA。試験兵装のデータ収集も終了。これにて、作戦を終了する。アローは指定座標までの移動後、回収する。以上だ》

「アロー、了解……。事前指定座標への移動……開始……」

少女は無機質さを感じる声で答えると反転し、どこかへと向かって進み始めた。

白い航跡が尾を引き、少女は何処かへと姿を消したのだった。

Task 05 八重山列島の戦い・変化

駆逐艦「あさぎり」は、榛名たちを収容して西表島沖へと退避していた。この辺りは隣の石垣島と比べて深海棲艦の目撃例が少なく、襲撃の危険性も低いと判断されたためだ。

現在、「あさぎり」は警戒態勢を維持したまま停船している。波も穏やかで揺れの少ない艦内を、榛名は会議室へ向かって一人で歩いていた。

他の面々は、艦後部の格納庫で入渠や艀装のメンテナンスを行っている。中破していた暁も大事は無く、入渠ドックで休んでいる最中だ。

こうして榛名が一人で歩いているのは、自身の艀装のメンテナンスをしていた際に、拓海から呼び出しを受けたからだだった。

榛名は会議室の前へと到着すると、灰色の武骨な扉をノックする。

「旗艦榛名、ただいま参りました」

「入室を許可する」

扉の向こうから声を聞いて、榛名は中に入る。そこで待っていたのは、声の主である芝浦兼続大佐と、自らの司令官となった白瀬拓海だった。

十七畳程度の部屋の中央には、薄型のタッチパネル式のディスプレイが埋め込まれた長机がある。その長机を挟んで向かい合うように、兼続と拓海は立っていた。

「榛名、失礼します」

二人と敬礼を交わし、榛名は拓海の隣に立つ。そこでディスプレイを見てみれば、石垣島周辺の地図が映されていた。

地図上には「あさぎり」の現在位置と、石垣島の東側に展開する敵味方の配置がリアルタイムで表示されている。

顔を上げたところで、タイミングよく兼続から声が掛けられた。

「榛名、来てもらって早々ですまないが、早速始めさせてもらう。『するが』との調整がまだ残っているからな」

「それはいいのですが……。調整、ですか？」

発せられた言葉に疑問を呈すと、兼統は首を縦に振った。

「急遽決まった作戦の調整だ。そちらは後々、この艦に乗っている艦娘全員に集合を掛けた時に説明する。……まずは、これを見てほしい」

榛名の質問に手短かに答えてから、兼統はディスプレイに触れる。

ディスプレイはタッチパネル式になっており、兼統が右手の親指でピンチインの操作をすると、地図が収縮されてより広域が映し出される。

「知つての通り、主力艦隊は1400ヒトヨンマルマル頃より敵艦隊へ総攻撃を実施中だ。発動から1時間ほど経つが、あと2時間ほどで敵中枢艦隊との接敵が予想される。我々の奇襲が成功していれば、遅くとも現時刻には泊地棲姫との戦闘に入っていたはずだ」

「それを阻んだのが、あのヲ級たちですね」

「白瀬の言う通り、ヲ級flagshipの艦隊は仮称『リ級改・flagship』などの強力な個体を有し、奴らの攻撃によって一時撤退を余儀なくされた。白瀬個人へ聞きたいことはあるが……。今は止すでしょう」

兼統の言葉に、拓海は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。当てつけのような言い方からするに、拓海が青いリ級を見た時に溢した『リ級改・flagship』という言葉が尾を引いているようだ。

あの時は暁が庇ってくれたから良かったもの、根本的に兼統の疑念を取り払うところには至っていない。

「そ、それで、そのヲ級たちがどうかされたんですか？」

嫌な雰囲気がかけたところで、榛名は話題を戻す。事情を知っているだけに、榛名としてもあまりこの話題で拓海に困ったような顔をして欲しくないと思っただからだ。

「……と、すまない。件のヲ級たちだが、1時間前——主力艦隊の現作戦開始直前までに、石垣島から北西約40km以上の海域での『消滅』が確認された」

「『消滅』……？」

兼続から告げられた言葉に、榛名は思わず聞き返す。拓海は特に表情を変化させていないところから察するに、彼は事前に兼続から知らされていたようだ。

「ああ、『消滅』だ。30分ほど前の、『するが』からの連絡だ。生憎、データ収集が可能なユニットが現場周辺に展開されていなかったために、CROCSのデータには奴らの事は記録されていない。彼らが生き残っていた場合、二度目の襲撃もあり得たわけだが、その心配は無くなった。」

我々は^{ヒトロクマルマル}1600に出撃前ブリーフィングを行った後、^{ヒトナナマルマル}1700頃から作戦を開始することになる。その旨を、他の艦娘たちにも伝えておいて欲しいが、榛名、構わないか？」

「はい。皆、格納庫にいる筈ですから……。榛名が呼ばれたのは、そのためなのですか？」

榛名が尋ねると、兼続は首を横に振る。

「いや。白瀬が、『気になることがある』と言ってな。そうだな？ 白瀬」

「はい。榛名にも一応、聞いておいて貰おうと思って……」

拓海は頷いて、榛名の方を見た。『聞いてくれ』と顔に書いてあったような気がして不意に零れかけた笑みを堪えつつ、榛名は尋ねる。

「それで、白瀬さんが気になさっていることは何でしょうか？」

「ヲ級が『消滅』したことだよ。……芝浦大佐、改めて確認しますが、『するが』からの情報はヲ級艦隊の『消滅』だけですか？」

「ああ。『消滅』だけだ。その点は、俺も気になっているところだ。具体的な情報は何も無かった。『消滅』以外はな」

「ありがとうございます。榛名、俺が気になっているのはその事なんだよ」

拓海が何を言わんとしているのか分からず、榛名は首を傾げる。それから少し考えて、榛名は言葉の意味に気付く。

「ヲ級艦隊が消えたことに、何か関係が」

榛名の予想は当たっていたらしく、拓海は頷きつつ、状況の整理を始めた。

「うん。——俺たちが撤退した時、残っていたのは旗艦のヲ級と、夕級、そしてリ級改。これらは全てflagshipで、どれも並大抵の奴らじゃない。特にヲ級とリ級は頭が良くて、連携もかなり上手い。状況認識能力は、かなり高いと見ていいと思う。……そんな連中が、『消えた』というのは、何処か引つ掛からないか？」

「何かの手段で、行方を眩ましたということは無いのでしょうか」

深海棲艦が、正体不明の方法で脱出した、或いは既知の手段だが戦闘中の今は知らせるわけにはいかないやり方で逃げ果せたか。順当に考えるならば、その辺りだろう。

兼続は拓海の発言をどう受け止めているのかと思ひ、視線を横にずらす。彼は、ディスプレイの地図に目を落とし、腕を組んだまま話が終わるのを待っている様子だった。既に聞いているのか、或いは同様の考えに至っているのか、どちらかは分からない。

しかし話に参加する様子では無いようなので、榛名はそのまま拓海に視線を戻した。

「その可能性も考えて、芝浦大佐と一緒にそれぞれの深海棲艦について確認されていることを検討してみたんだ。レーザージャミング、閃光弾、ブースターなどの外部装置、個体単位で確認されている戦闘技術……。まさか、こんな時に鎮守府で習ったことが役立つとは思わなかったよ」

「それで、どうだったのですか？」

「結論から言うと、今回に限ってはあり得ない。」

レーザージャミングに関しては、一定数以上の数の深海棲艦がいないと発生しない。そして今回の作戦ではレーザージャミング中和装置の搭載艦が全部で6隻。『するが』型3隻と、『あさぎり』型の3隻だ。その内、俺たちが乗ってる『あさぎり』以外の5隻は東側で敵を囲うように展開して、フルで装置を稼働し続けているおかげで、ジャミングは無効化されている。

他にも閃光弾やブースターのような物は、今回も含めて連中が所持していたことは無い。残る戦闘技術だけど、ヲ級たちが姿を消したと言えるほどのものを持つてるとは言い難かった」

「……そういえば、白瀬さん。何故、ヲ級の艦隊が『消えた』と分かったのでしょうか……」

拓海の話を聞くうちに、「どうやって」消えたかの話に終始していたことに気が付く。拓海も頷いて、榛名の言葉に答えるべく話を続けた。

「まず前提の話をする、〃あさぎり〃も含めて、この作戦に参加している6隻は従来の高性能レーダーは搭載されていて、補足範囲も広い。だけど、深海棲艦は探知することが出来ない。そこで、CROCSの探知システムの出番になる。CROCSは、一度探知した敵は撃沈するか索敵範囲外に出るまで表示出来る。ここでネットワークになるのが、カメラユニットの索敵範囲だ」

CROCSシステムでは、カメラユニットが最も大事な役割を持っている。味方の索敵データ収集や戦闘映像もその内の一つだが、それらの情報を艦娘やCROCSシステム搭載艦へ発信する能力が持たされている。扱う情報も膨大だけに、艦載機とのデータ共有も含めると送受信の可能範囲が、カメラユニット一つにつき10km程度になってしまう。

レーザーや衛星などの遠距離通信の手段はあるが、それはあくまでもシステム搭載艦や設置されている鎮守府での話だ。小型である自立飛行ユニットには、そこまでの能力は発揮出来ない。

このために、大本となるシステムと繋ぐために中継用の通信機能を備えたカメラユニットが飛ばされる。このカメラユニットは、艦娘のバイタル情報を収集、戦闘映像の撮影などの事情から艦隊から半径100mまでが行動可能範囲となる。

これらの要因から、CROCSによる索敵可能範囲外となると、艦娘による自力での索敵が必須となってしまう。

CROCSは、多くの利点を有していると同時に致命的な欠陥も抱えたシステムと言えた。特に、カメラユニットに左右されてしまうという点はより致命的だ。

それでもカメラユニットが運用されているのは、逆に言えば距離を

限定した場合の情報処理能力が優秀だからだ。

榛名も、CROCSを用いるにあたってこの辺りの事情は把握している。だからこそ、気付くことがあった。

「主力艦隊が展開していたのは、石垣島から10kmから20km程度の範囲ですから、ヲ級たちの消滅を確認できませんね。望遠鏡での観測は——」

「先程、各所に問い合わせたが、どこも『確認していない』という回答だった。当時の配置状況も考えて、ヲ級たちを見た者は誰もいないということになる」

榛名の言葉に重ねるように、兼続が説明をする。

ヲ級たちの進路が的確だったのか、或いは時の運によるものなのか。どちらにしろ、攻略艦隊はヲ級たちを見失った。

「そうなるよ、一体誰が『消滅』を確認したのでしょうか……」

そうして榛名は、一つの疑問を捻り出した。

「俺が気になってるのは、それだよ」

「近くに、味方がいたのでしょうか……。ですが、この辺りに味方は……」

推定される場所から一番近いのは、宮古島周辺だ。榛名はディスプレイの地図を指さし、作戦の配置を振り返る。

「芝浦大佐、宮古島周辺または、近海に味方はいましたか？」

「防衛海軍の所属艦が島の南に一隻だけだ。主に、新手の深海棲艦が島に潜んでいないか監視するためのものだ」

兼続はディスプレイを操作して、海軍艦の配置を表示させる。位置としては、ヲ級の推定消滅場所とは島を挟んで反対側だ。

「誰も確認出来ないはずなのに、『消滅』ですか……。おかしいですね……」

このやり取りで、榛名は先程自分が浮かべた疑問の答えが、ぼんやりとはあるが見えてきた。

ハツとしながら顔を上げて拓海を見ると、彼は同意するように頷く。

「この場所……海域に、俺たちの知らない誰かがいた」

拓海は、確信を持った表情で答えを口にした。

「私たちの知らない、誰か……」

「日本以外の国か、あるいは日本にいる誰か。地図やCROCSの情報だけだと、その『誰か』までは近づけないと思う。そこで、次のヒントになるのが情報はどう伝わって来たか、だ」

「確か、『するが』からの連絡と仰っていましたね」

榛名は記憶違いが無いように、兼続に確認を取る。

「ああ。鳴川少将から直々の連絡だった」

兼続から告げられた人物の名前を聞いて、榛名は咄嗟に拓海の方を見た。

「白瀬さん……」

拓海は困惑したような表情で、ディスプレイの地図を見下ろしていた。榛名が心配して顔を窺うと、拓海は何でもなかったかのように笑みを浮かべる。しかし困惑を引き摺ったままなのか、その笑みには陰りが見えた。

「……大丈夫。ありがとう、榛名」

「でも、白瀬さん——」

榛名は先の言葉を続けようとして、拓海に遮られる。

「そう。俺は、光樹のことを疑っている」

そう言った拓海の顔からは、友人へ疑いの目を向けることへの苦しみが垣間見えていた。

榛名と拓海は会議室を辞して、艦内通路に出る。

扉が閉まったことを確認した榛名は、立ったまま何かを考えている拓海に声を掛けた。

「あの、白瀬さん。鳴川少将のことは……」

その先の言葉が出ず、榛名は声を途切らせてしまう。眉根を寄せている彼を見て、どう声を掛けていいのか分からなかったからだ。

「いや、別にショックを受けているとか、そういうことじゃないんだ。

ただ……」

「ただ？」

「あいつ、趣味以外の事は昔から話そうとしないんだよな。それが、再会したらこの世界のことを色々教えてくれたり、かと言って肝心なことは隠していたり。何を抱え込んでいるんだろうって思ってた。今回の件だって、何か隠してるんじゃないかって」

「それで、『疑っている』と？」

「まあね。……ああ、そっか」

不意に拓海は自虐気味に笑って、肩を揺らした。

「どうされました？」

「……榛名も、こんな気持ちだったのかな」

「私の……気持ちですか？」

何を言おうとしているか分かりかねて、榛名は尋ねる。心なしか耳が熱くなっている気がしたが、それが何故かを考える余裕までは、榛名には無かった。

「隠し事って、されてる相手からしたらあんまり良いもんじゃないな。大事な人なら、尚更」

「あっ……」

可笑しそうに笑う拓海の様子を見て、榛名はつい先日のことを思い出す。拓海と喧嘩をしてしてしまった時のことだ。

「榛名」

「は、はいっ」

一旦笑いを収めた拓海に声を掛けられ、榛名は畏まって彼の前で気を付けの姿勢を取った。

「あの時は心配してくれて、踏み込んで来てくれて、ありがとうな。その、すごく嬉しかった」

「——！」

一切の曇りも感じられない屈託の無い笑みを向けられて、榛名の顔は知らず知らずのうちに赤くなる。そこで初めて榛名は顔の熱りを自覚して、思わず顔を背けた。

「あ、あれ？ 変なこと言った？」

流石に予想していなかった反応だったからか、拓海は慌てて榛名の様子を窺う。

「いつ、いえつ。その、白瀬さん」

「な、何？」

「榛名、白瀬さんのこと……信じていますからね」

彼を心配させないように、熱の残る顔に精一杯の笑みを榛名は浮かべた。

「え、あ、うん……。ありがとうございます……」

拓海は榛名を見たまま硬直して、擦れた声を出す。向けられた言葉に、呆然としている様子だった。

「で、ではつ。榛名は格納庫に戻りますので」

「わ、分かった。じゃあ、次の集合の時にまた……」

「はいつ。失礼します」

途端に顔を合わせるのが恥ずかしくなり、榛名は適当に理由を述べると一礼をし、回れ右をして速足で拓海の前から去って行く。

心臓の鼓動が早い。顔が熱く、手からは汗が滲み出る。

何故、自分が真っ赤になっているのか結論を出せないまま、榛名は格納庫に続く通路を歩いた。

ただ、その原因ははつきりとしていた。

「榛名、白瀬さんのあんな笑顔を見るの、初めてです……」

そこから大した時間を掛けることも無く、榛名は格納庫へと辿り着いた。1階と2階の扉のうち、1階の方から出た榛名はドッグをざつと見回す。

この「あさぎり」も「するが」型と同様に、艦娘やその艤装の管理をするための簡易的な施設が、一通り揃っている。

入渠ドッグの方では、入り口の傍で雑談をしている龍驤と龍鳳の姿が見える。入り口脇に「使用中」の掛札があることから、同じ部隊の翔鶴と瑞鶴を待っているのだろう。

視線を移すと、出撃カタパルト前のスペースでは、島風と暁がじゃ

れ合うように遊んでいた。相変わらず島風が連装砲ちゃんと一緒に逃げ、それに煽り立てられた暁が何か喚きながら追いかけているように見える。不思議なのは二人の顔には自然と笑みがあり、前よりも仲良くなっているように思えることだ。

待機中には明るい雰囲気の格納庫を微笑ましく見つめながら、榛名は艀装保管スペースへ歩いて行く。

この艦に乗り込んでいる艦娘たちの艀装が、雛壇のような台の狭いスペースを上手く割り当てられ、各々が取り出しやすいように配置されていた。

鎮守府のような陸上施設ならばカタパルトに立つだけで、自動的に装備出来るが、生憎そういった設備の無いこの艦では、艦娘が一連の作業を行っている。艀装は見た目以上に重さがあるので、艦娘からはこの対処は非常に有難がられていた。そんな艀装だが、艦娘が背負うと本人にとっては、まるで重さが無いように扱えるのが不思議なところだ。

「異常は……無いですね」

自分と仲間たちの艀装のチェックを一通り済ませると、榛名は満足げに息を吐いた。

そこに、榛名の傍へ近づいてくる一人の気配があった。

「艀装の点検か。С п а с и б о^{スバシーバ}」

「ヴェルちゃんですか」

振り返ると、氷のような透き通る目で榛名を見上げているヴェールヌイがいた。

ヴェールヌイは艀装を一瞥してから、榛名に視線を戻す。

「榛名さん、時間は大丈夫かい？」

「はい。私が好きでしていたことでしたから……。何かお話でしょうか」

榛名が尋ねると、ヴェールヌイは一見無表情とも取れる、何か含みを感じさせるような目を下に向けた。

「その、ここでは話辛いから、食堂でいいかい？ 今の時間なら空いている筈だから……」

再び顔を上げたヴェールヌイの眼差しには、真に迫るものがあった。

「それは……構いませんが」

「榛名さんも、私に聞きたいことがあるんだろう?」

凶星を指され、榛名は顔を硬くしながら目の前の少女を見る。まさか、出撃した際の翔鶴との会話を、聞かれていたのか。

どのみち尋ねようとしていたことであり、後ろめたいものは何も無い筈だが、榛名は一瞬返答に窮してしまった。

「——はい。ヴェルちゃんは、聞いていたのですか?」

「何をだい? 翔鶴さんと深刻そうに話していたのは見たけど、私は内容までは知らないよ」

「そ、そうですか」

ヴェールヌイの答えに、榛名は安堵する。

「じゃ、行こうか」

ヴェールヌイは気にしていないような態度を取りながら背を向けて、一足先に艦内食堂へ向けて歩き出す。

その後を追いながら、榛名は微かに胸の内に残る罪悪感に戸惑いを覚えていたのだった。

榛名とヴェールヌイは、艦内食堂に入ると適当な席を見繕い、机を挟んで向かい合いながら座る。

部屋は士官用と下士官用のうち、後者ももののように、内装は実に簡素なものだったが手入れがよく行き届いていた。天井の蛍光灯の光が磨き上げられた床に反射し、より清潔な印象を見る者に持たせる。

ヴェールヌイが言っていたように食堂には誰もおらず、正真正銘彼女と榛名の二人だけだった。

「さて、人が来てしまってもいけないし、早速話を始めてもいいかい?」

「構いません」

ヴェールヌイの第一声に頷き、榛名は話を始めることに同意した。

了承を得ると、ヴェールヌイは逡巡無しに、単刀直入に切り出した。
「榛名さんは、白瀬司令官のことが好きなのか？」

「え……」

彼女の口から飛び出た質問に、榛名は答えるのも忘れて暫し硬直してしまふ。

何を聞いているのかは、分かる。しかし何故、このタイミングでの質問をされたのかが分からなかった。おまけにそれは、榛名の方がしようとしていた質問だっただけに、衝撃は大きい。

答えを返しあぐねていると、ヴェールヌイは榛名の言葉を待たずに先を続ける。

「私たちは建造されてからずっと、同じ呉鎮守府指揮下の艦隊にいただろう？　だから、南鳥島に配属される前にも、榛名さんのことはよく見かけてた。あの時は……そう、磯貝少将の指揮下で、司令官がこちらに来る前だったな」

「それが……どうかされたのですか」

磯貝という名前に、痛む胸を押さえながら榛名はヴェールヌイの次の言葉を待つ。

「昔は榛名さん、『元氣は良くて表情豊かだけど、笑わない子』だった。呉鎮守府の軍の人達の間で話題になってた。あんなに可愛いものって。まあ、その時から『榛名が笑わないのは磯貝って奴の所為だ』って噂も流れてた。実際、その頃は私も榛名さんが楽しそうに笑ったところを見たことが無い」

「……………」

榛名はヴェールヌイの証言に、言葉を返すことが出来なかった。

自分としてはちゃんと笑えていた筈だと記憶を手繰って——
実のところそうでは無かったと気が付いてしまったからだ。姉の金剛や比叡、妹の霧島がいつも心配そうな表情を向けてきていたことを、榛名は思い出す。

「そんな榛名さんが変わったのは、司令官が南鳥島に流れ着いてからだった。彼が来てから、榛名さんはよく笑うようになったんだ。苦しかった時に私たちを元氣付けるための笑顔でも、愛想笑いでも無く

て、本当に楽しそうで嬉しそうな顔だ。それで思ったんだ。榛名さんは、司令官のことが好きなんじゃないかって。そんな目をしてた」
ヴェールヌイは下げていた視線を上げて、榛名の目を覗き込むように見つめる。

真を問う彼女の目線に、榛名は戸惑いながらも自分に問いかける。
「……答える前に、一つ良いでしょうか」

本当は答えなど出ていないのだが、ほんの少し先送りにしようとして、榛名は口を開く。

「何だい」

「ヴェルちゃん、白瀬さんのことが好きなのですか？」

「ああ、好きだよ」

先程聞かれたように単刀直入に尋ねてみると、実にシンプルな答えが返って来た。あまりの淀みの無さに、質問をした方が驚く程に。

「因みに、何時からでしょうか」

「多分、南鳥島にいた時からかな」

気を取り直して聞いてみると、これもまたあっさりと返事が来る。だがヴェールヌイの頬には、少しだけ赤みが帯びているように見えた。

「何故かは、聞いても？」

「司令官と色々話して……。彼の優しさに触れたから、かな。私に対しても、榛名さんや皆に対しても、司令官は優しくしてた。それに、司令官と話していると、すごく楽しいんだ。このままずっと、一緒に居られたらいいのと思えるくらいに。きっと、私が私そのままでいられる居場所だから……」

拓海のことを話すヴェールヌイは、初めて見るのでは無いかと思う程柔らかくて幸せそうな表情をしていた。

ヴェールヌイと拓海が直接会っている回数は、それほど多くは無。傍にいた榛名とは違い、別行動なことが殆どだ。それでも彼女にこんな表情をさせていることに、榛名は小さな衝撃を受けていた。

「そう、だったんですね……」

「それで榛名さんは、どうなんだい？ 私の質問に、答えていないだろ

う?」

「このまま話を逸らそうかとも思ったが、そうは問屋が卸さなかつた。

『榛名さんが、白瀬さんをどう思っているのか。それを考える、良い機会になると思いますよ』

“あさぎり”から出撃した後に聞いた、翔鶴の言葉が脳裏に蘇る。「正直なところ、私にはまだ、よく分かりません……」

榛名は、今のところ口の中ではつきりしていることだけは言葉にして、ヴェールヌイに伝える。

榛名には未だ、自身が彼のことをどう思っているのかが分からなかった。

好きかと言われれば、確かに「好き」だろう。しかしそれは、ヴェールヌイの言う恋愛的意思での「好き」と同じなのか。それとも、単に信頼しているだけなのか。或いは、友達のような親しみを覚えているのか。

それらを判断出来るだけの材料を、今の榛名は持ち合わせていなかった。

「そう、か……。そんな事だろうとは、思っていたよ」

ヴェールヌイは呆れるような笑みを浮かべながら、椅子から立ち上がる。

「ヴェルちゃん……?」

「今ので、覚悟は決まったよ。榛名さん、私は司令官を、振り向かせる」
そう啖呵を切っておきながら、ヴェールヌイは恥ずかしそうに頬を染めて、そそくさと食堂を出て行く。

彼女の宣戦布告を受けた榛名は、出口を見たまま、暫く固まっているのだった。

石垣島攻略作戦が行われているのと時を同じくして、立花由里はある場所に来ていた。

鹿児島県は鹿児島市。湾に浮かぶ桜島を望む港近くに止めたレンタルカーの中から、由里はその島を見つめていた。

3週間前には、桜島で火山活動の活発化とその後の急速な鎮静化という、不可解極まりない現象が発生。これが僅か1日の内に、起こっていた。桜島の観測史上例に無いこの事態を受けて、政府は全島を立ち入り禁止区域に指定する。

そして、その同日に島根県の三瓶山が突然活動を開始。活火山に指定はされていても、噴火の予兆がそれまで見られなかった火山の異変は、近辺に出現していたある怪獣との関連性が、各メディアで取り沙汰されていた。20世紀末の富士山の噴火とそれに関わる一連の事件という前例が、その説を後押しする要因にもなっていた。

世間では、桜島と三瓶山の活動には関連が無い様に思われているが、由里は寧ろ逆だと考えていた。

第4の護国聖獣、阿吽アンギラス魏羅珠。「続・護国聖獣伝記」に記載されている、「火の神」とも言うべき怪獣の特徴が、三瓶山近辺に出現した怪獣と酷似していた。

マグマのような赤みを帯びた表皮と、炎を吐き出すその様は、由里が手にしているその本の記述と一致する。

本を読む限り、伊佐山吉利は阿吽魏羅珠を《火山そのもの》と捉えていたようだ。

それらの内容と桜島、三瓶山の両火山の変化や周辺で起こった地震データなどを調べ、本の記載と照らし合わせる。そこから確証を得られたわけでは無いが、由里はそれらの現象が阿吽魏羅珠によってもたらされたものだと考えていた。

6月6日の早朝、桜島は小規模の地震後に活発化。同7時ごろには

三瓶山が噴火を開始し、直後に巨大な4足歩行生物が発見される。ほぼ同時刻に、青木ヶ原樹海から飛び立った千年竜王が呉を目指して各地を進撃。4足歩行生物はこの動きを予期していたかのように、真っ直ぐ呉へ。

千年竜王を撃退した生物は、三瓶山付近まで引き返し行方を眩ませる。その1時間から2時間後には、小規模な噴火を繰り返し、大規模噴火の予兆すら見せていた桜島の活動が急速に収まっていた。

由里は、この生物は元々桜島の地下におり、千年竜王の活動に呼応するように地下深く潜り、マントルを通って三瓶山から出現したと考えている。あまりに突飛な考えではあるが、20世紀末の2体目のゴジラと富士山噴火の関連を知っていると、笑い飛ばせる話でもない。

「白瀬……拓海……」

桜島から視線を外し、由里は手元の資料に目を落とす。

あの老人——伊佐山吉利が口にしていた「新米少佐」という言葉を頼りに、艦娘隊——特生防衛海軍内部に該当する人物を調べた結果、彼の名前が出て来た。

2038年10月25日生まれの18歳で、この1ヶ月間で民間人から所謂「提督」の職についた青年だ。それ以前の経歴は、一切不明。書類上のデータで見つかったのは、たったのこれだけだ。あまり褒められた方法では無かったが、やっとの思いで掴んだ情報はそれだけだった。

出身地や通っていた学校、士官学校の在籍記録、海外での類似人物の目撃情報なども洗ったが、該当する項目は一つとして無かった。まるで、ある日突然現れたかのようなのだ。

白瀬拓海に宛がわれた「新米少佐」という階級名も、前例が無い。准将や准尉のようなものらしいが、「新米少佐」の階級を新たに置こうとしていた、という話も見当たらない。

「あまりに都合が良すぎる……」

あまりにも不可解な事だが、それを推測するにしても情報がまるで

無い今、それは不可能だ。考えても仕方が無い。経歴が分からないとなると、次は人物像だ。

彼の人となりについては、幸い噂程度に漏れ聞こえて来ていた。知人を使って得た情報を整理すると、基本的に「艦娘たちと付かず離れず」の関係を維持しており、司令官としての将来性は期待されている……といったところだ。上司部下の関係を維持したり、家族のように扱ったりと、両極端な司令官が多い中、そのどちらでも無い人物だというのは珍しい。一方で、艦娘「榛名」とは他の艦娘たちと比べて極端に親しくしているようだ。

その他の人間関係としては、同じ艦娘隊の鳴川光樹少将とは年の離れた友人といった間柄で、その秘書艦である「三笠」とも多少交流がある。そして実質的な直接の上司は、芝浦兼続大佐だ。最近、試験的に設立された部隊に共に配属されているらしい。

「司令官としては、可もなく不可もなし……」

多少歪さを感じる部分はあるが、それは本人に会って直接確かめなければならぬだろう。

ただ、彼に会ってどうすればいいのだろうかという疑問はある。

伊佐山吉利は、「続・護国聖獣伝記」を彼に見せろと言うが、それを何を意味するのは分からない。この書物の中身は、大半が阿吽魏羅珠に纏わる記述で占められている。恐らくは、白瀬拓海と阿吽魏羅珠に何らかの関わりがあるのかもしれない。

そして、白瀬拓海と関わりのある「女」であり、千年竜王を狂わせた原因であるらしいこと。伊佐山吉利本人は、曖昧な物言いをしていたが話の流れから、そう言いたかったのだろうと推測は出来る。

こちらは、千年竜王が樹海を飛び立った日とその前後に当たりを付けて調べている最中だ。

白瀬拓海と接触する渡りは、3日前に何とか付けることが出来た。艦娘隊に申し込んだ結果、翌7月1日に、呉鎮守府本庁舎でということになることが向こう側から伝えられた。

意外だったのは、応対に鳴川少将が直接当たったことだ。

何らかの対深海棲艦作戦の準備が行われていることを、由里は察知

していた。ゴジラが沖繩を襲撃する前後に、ホワイトビーチ基地で大規模な動きがあったことから、容易に察することは出来た。

そのような状況であれば、鳴川少将も多忙に違いない筈だ。実際、由里が横須賀に電話を掛けた時点で、彼は鎮守府を留守にしていた。

由里は元々、「艦娘隊の新米少佐に会いたい」と問い合わせただけで、鳴川少将が出て来るとは思っていなかった。どこから対応しているのか気にはなったが、それを聞く暇は無かった。

何故、彼が出たのかも不明なままだ。

由里は手元の書類を助手席に置き、車を発進させる。

桜島を見に来たのは元々、活動が従来通りに戻っているかをこの目で確かめるためだ。直近の火山情報や付近の住民からの聞き込みで、島は普段の活動に戻っていることは分かった。今のところは、それだけで十分だ。

もし阿吽魏羅珠が再び現れるようなことがあった際に、参考に出るといふ点において収穫と言える。

阿吽魏羅珠の出現に関する一連の情報は、由里の推測を交えた上で特生防衛軍には伝えてある。その影響か、鹿児島市内には警戒にあたる軍関係者の姿も見られた。

車を南に走らせること約1時間、由里はもう一つの目的地・池田湖へと到着していた。

ここはかつて、護国聖獣の1体で水の神最珠羅^{モスラ}が目覚めた場所だ。当時、由里が「護国聖獣伝記」の内容に確信を持つきっかけを与えた場所でもある。

インフアント島とのモスラとは違い、あくまでクニを守ることに重きを置いており、人間に対しても容赦の無い行いをする。それは、46年前に若者たちが繭のようなものにくるまれ、溺死させられていた事件に如実に現れている。個々の人間にこまで牙を剥いたモスラは、後にも先にも件の聖獣だけだ。

最珠羅の出自にも、不明な点は多々ある。どこで生まれ、どこから

やってきたのか。インフアント島を日本の学者が調査したことがあったが、あちら側にも記録らしいものや言い伝えなどは残っていないかったという。

尤も、魏怒羅^{キドラ}や婆羅護^{バラゴン}も出自がはっきりしていないのは同じだ。過去、バラゴンやキングゴドラが出現した例はあるのだが、それらの個体はいずれも護国聖獣とは全く別の怪獣だ。

「どうしても抽象的な話になってしまいわね」

溜息を漏らし、そういえばかつての自分は魂がどう、ともつと曖昧なことを真剣に考えていたことを由里は思い出す。

それ自体が大きく外れているとは思わない。当時の人々が、何らかの脅威で怯えていたがために、自分たちに牙を剥いた者らを守り神としたのだろう。

車を降り、由里は湖岸へと出て湖を眺める。

湖面は穏やかに揺れているだけで、変化は何も感じられない。

怨霊ゴジラと思しき怪獣が5年前に現れてから今まで、護国聖獣がそれを迎え撃つたことは無かった。

何故、という疑問は尽きない。しかしかの千年竜王が復活していたというのなら、最珠羅や婆羅護^{バラゴン}も再び目覚めるのではないかと、由里は予感していた。

妙高山に眠る婆羅護^{バラゴン}は、復活の兆しを見せていなかった。ならば次は、最珠羅がどうなっているかを確かめる必要がある。池田湖へと来たのは、そう考えての事だった。

ふと視線を横にずらすと、岸边に人影を見つける。由里からさほど遠くない所で男女3人と思しき人影が、1匹の犬を囲んでいる様子が窺える。顔立ちや服装からして、若者といったところだ。それぞれが、手に野球バットや木の棒らしき物を持っている。

「——っ」

犬の悲鳴と若者たちの笑い声を聞いて、由里は息を呑む。

彼らが犬を弄んでいることは、傍目から見ても明白だった。犬の怯え切った様子と身体の状態を見るに、既に何度か殴られているのだろ

う。このまま放っておけば、犬はそのままなぶり殺しにされてしまう。そして、若者たちがそれをやめるつもりが無いことも、見ていてよく分かった。

あまりの痛ましさに、若者たちを止めようと由里は咄嗟に彼らの方へと足を踏み出す。その瞬間、由里はここで起きた事件のことを思い出していた。

46年前、若者たちが不可解な死を遂げた事件だ。少なくとも由里は、あの事件が最殊羅によるものだったと確信している。その原因は何だったのか。

由里は、当時のテレビニュースの記憶を掘り返す。

若者たちの遺体が発見された現場で、木箱に詰め込まれていた犬が、警察に保護されている映像が流れていた。

一見、両者の関係は不明確だがそこに最殊羅という存在を加えると認識は自ずと変わる。

そこまで考えて、杞憂であつて欲しいと祈りながら由里は若者たちに近づいて行く。

距離にして、200mといったところだろうか。逸る気持ちに従つて小走りに駆けるが、流石にこの年齢ともなると短距離とはいえ少々きついものがある。それでも、由里は足を止めようとは思わなかった。

「ちよつと、君たち——」

ここまで近づけば声が届くだろう、と思うところまで来て若者たちに話し掛けようとしたとき、変化は突然起こった。

湖面が前触れも無く飛沫を上げ、水中から現れた巨大な存在が若者たちに襲い掛かる。

その巨大な何かが撒き散らした水を頭から被り、由里は咄嗟に身を屈めてやり過ごす。上から落ちてくる水が途切れ、恐る恐る目を開けると、若者たちがいた場所は目を覆いたくなるような惨状と化していた。

木に叩きつけられて首があり得ない方向に曲がっている者、《それ》が持つ細い脚に胸を貫かれている者、まるで食いちぎられたかのよう

に上半身が無くなっている者——。

それを目にした瞬間、由里は思わず口元を抑えて込み上がる吐き気を堪える。あまりの事に思考を停止しかけるが、そこに佇む巨大な存在を見て、何が起こったのかを理解する。

「最珠羅……」

由里はその巨体を見上げて、そう溢す。

毒々しさを感ずる極彩色の羽を持ち、先の曲がった尾と紫色の眼をした巨大な昆虫型の怪獣。蝶と蛾に加えて蜂のような特徴は、禍々しさと美しさを同居させていた。

最珠羅は器用に足を動かすと、呆然としている由里の前に迫る。紫の瞳は由里を見下ろし、彼女の表情を克明に捉える。

由里は、まるで圧迫されているかのような感覚を抱いていた。一歩でも下がれば、殺されてしまうのではないかと錯覚する。それほどに、由里は眼前の水の守り神に圧倒されていた。

最珠羅が由里を見下ろしたまま鳴き声を上げると、辺りの木々が騒めき、湖面が波紋を描いて揺れる。

自分の根本——ありていに言えば、命そのものが今にも脅かされようとしている感覚に内心震えながら、尚も由里は最珠羅を見上げ続けた。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせながら、由里は目の前の巨大生物を観察する。

インフアント島のモスラからはあまりにかけ離れた、禍々しい特徴は当時から特に変わるところが無い。しかし、その大きさは全く違っていた。

由里がざっと目測した限りでは、当時の倍以上というところだろうか。翼、胴、脚、頭に至るまで、何もかもが大きくなっている。それが一層、由里に圧迫感を与えることに繋がっているのだろう。

思考に耽りかけたところで、由里は現実に意識を戻す。

最珠羅から意識を背けないようにしながら、由里は周辺の様子を確かめる。

——最珠羅は若者たちを襲う時、一對の羽を持つ成虫の姿で水中から姿を現した。46年前に最珠羅は、この場所から幼虫から成虫へと変態し、大空へと舞い上がった。今回も再び幼虫から活動を開始したと仮定するには、その証明たる繭の存在はどこにも見当たらない。

ふと、先程彼らに囲まれていた犬がどうなったのかと、姿を捜す。由里が見る限りでは、犬はどこにもいないようだ。最珠羅が若者たちを襲った直後に、遠ざかっていく怯え切った鳴き声を由里は耳にしていた。少なくとも、この場からは逃げ果せたのだろう。

ただ、あの傷と人間たちから受けた仕打ちのことを考えれば、犬がトラウマを持ってしまったのは確実だ。それに、遠目からではあるが、傷の具合を鑑みるにこのまま放っておけば死に至ってしまう。そのことだけが心配だが、今の状況ではどうしようもない。

「……………」

由里はもう一度、視線を最珠羅の方へと戻す。

いつの間にか最珠羅からは威圧感が感じられなくなり、その代わりに由里をじっと観察するかのように彼女を見つめていた。

それだけで、やはり自分は下手をすれば殺されていたのだと由里は確信を得る。

ここに來て初めて、由里は護国聖獣の恐ろしさというものを実感していた。

若い頃には終ぞ感じることも無かった、神と呼ばれる怪獣の脅威。当時から、聖獣たちがそういう存在であることは知っていたが、実際にそれを体験した今、それは魂に刻み込まれたと言っても良い。

最珠羅は後ろに下がり、由里から距離を取ると双翼を上下に動かし、身体を宙に持ち上げる。羽ばたきによって周囲に風を巻き起こしながら、最珠羅はみるみると高度を上げていった。

やがて由里が首を真上に向けるほど高く飛び上がると、ゆっくりと加速しながら南の方角へと向かって移動を始める。

「まさか」

由里は最珠羅がこれからどこへ行き、何をしようとしているのかを

自ずと理解する。

先日の千年竜王のように、何れかの場所を襲撃しようとしているのでは無い。あれは明確に、倒すべき敵を見定めて向かおうとしている。

そして、最珠羅がこれから戦おうとしている敵は――。

「ゴジラが、現れるっていうのね」

5年前、東京に突如出現したゴジラは日本各地に大きな爪痕を残している。法律には明記されていないが、実質的に首都として機能していた東京を完全に破壊。一時期は日本という国家が崩壊しかけるまでに至った。それでも生き残れたのは、官民共に形振り構わず復興に全力で当たったからなのだろう。

ゴジラは日本を混乱に陥れた後、4年間に渡って世界各地に出現し、国際情勢にも深刻な打撃を与えるに至った。

世界のあちこちに出現したゴジラだったが、中でも被害が深刻だったのは紛争などが行われている戦闘地域だった。一度戦闘地域に姿を現すと、両方の勢力を襲撃・蹂躪し、皆殺しにしてしまうという事件が多発。生存者がゼロという、常軌を逸した事態にまで発展していた場所もあったそうだ。

その後、ゴジラが襲撃したニューヨークやデトロイト、バンクーバーなどでも、迎撃に向かったアメリカ軍やカナダ軍は殲滅されている。都市部での被害は、やはり大きなものだったが、軍が特に被害を受けていたのは同様らしい。

そんな暴れ方はまるで、戦争そのものやそれをもたらすものを憎んでいるようにも見えた。

尤もそれは、由里の思い違いであるのかもしれない。それでも、彼女にはあの怨霊がそういった妄執で動いているように見えて仕方が無かった。

「ゴジラが現れる場所は……」

由里は懐からタブレット携帯端末を取り出し、インターネット上の地図ページを開く。

最珠羅が向かった方角は南。そして、今までにゴジラが出現した場

所の傾向としては、戦闘地域が多かった。

ならば、両者が敵対する場所はある程度見当が付く。

「八重山列島……。この辺りで、ぶつかるともしれないわ」

それは偶然か必然か、艦娘隊による大規模な対深海棲艦作戦が行われている地域だった。

由里の情報が確かなら、そこには鳴川光樹や白瀬拓海の両名もいる筈だ。

「——最珠羅が現れたのは、特生防衛軍がとつくに察知しているだろうから……。警告はしておいた方がいいでしょうね……」

兎に角、この場所で起こった事件は警察と軍の両方に連絡をしておかなければならない。現場検証にも協力することになるだろう。

他に出来ることと言えば、つい先ほど自分が目にしたことを文章として纏めて記録すること。自分が目にし、耳にし、肌で感じ、考えたこと——それらを未来の人々に残し、事実という名の記憶を受け継いでいくことだ。

今を生きる人々に伝えるには、由里はこの何十年という時間の中で知ってはならないことも知ってしまったている。それに、世の中の出来事ニュースを伝えるのは他の人間にも出来ることだ。

ならばこれから先の時代、自分が死んだ後に生きる人々に向けて、何らかの記録を残せないかと由里は考える。何百年という時間が経って、記憶が風化してしまったとしても構わない。今、自分の目にしたものを未来の人々に伝えることが、由里の目的だ。

だからと言って、自身が関わっている人間やこれから関わることになる人間が、どうなっても良いというわけではない。無事でいて欲しいと思うのは、偽りのない気持ちだ。

「まあ、影からこそそと覗いてくる連中には分かりっこないと思うけど」

由里は独り肩を竦めながら、警察や軍へ通報すべく手にした携帯端末から各所へ電話をかけた始める。

空を飛んで、どんどんと遠ざかっていく最珠羅の後ろ姿を見つめながら、由里は己がすべきことを、改めて胸の内に刻んでいた。

彼の者、守り神也

されど常に人を守ること、能わず
彼の者守るは、ヤマトの水也

池田湖畔、古碑文より

Task 06 八重山列島の戦い・傷跡

《敵艦隊旗艦、泊地棲姫の撃破を確認した。以後は、防衛海軍の上陸部隊が引き継ぐ——》

巡洋艦“するが”に乗る光樹から、全員へ向けて通信が入る。その声を聞いて、拓海は溜め息を吐きつつ背もたれに身を委ねた。

「……皆、お疲れ様。今から“あさぎり”がそっちに行くけど、周辺を警戒しつつ戻って来てくれ」

《榛名、了解しました。皆さん、戻りましょう》

無線の向こうにいる榛名からも安心した様子が伝わり、拓海は思わず頬を緩める。

敵の抵抗は、もう後が無い状況に追い込まれているだけあつて苛烈なものだった。しかし、それに対する艦娘の攻略部隊は空と海の両方で、質と量による攻勢で終始圧倒していた。特に、赤城たち第1航空戦隊や大和たち第1戦隊の活躍が目立った。

その傍らで、榛名以下第1独立遊撃艦隊や翔鶴がいる第101独立防衛艦隊も、堅実に敵を沈めていた。泊地棲姫に対しては、翔鶴と瑞鶴が攻撃機に爆装、榛名と伊勢が三式弾を装填し、友軍と共に最後の攻撃に参加。その時には、既に丸裸も同然の状態にされていた泊地棲姫は、成す術も無く撃破されていた。

榛名たちの損傷は至って軽微なものだが、度重なる連戦で疲労が目に見えており、ぎりぎりのところだった。中々、各員への負担の大きい作戦だったと拓海は思う。

《白瀬さんも、お疲れ様です。ご無理、されていませんか？》

「いや、大丈夫だよ。寧ろ榛名たちの方が心配なくらいだ」

彼女たちの戦闘による疲労に比べ、拓海はずっと椅子に座って画面を睨んでいただけのようなものだ。戦闘中も作戦に大きな変更は無く、榛名たちのサポートに回っていたくらいだ。

最後まで戦い抜いた榛名たちを、拓海は本当に凄いと思う。

《私は問題ありません。他の皆は——駆逐艦の子たちが特に疲れしているみたいですから、戻ったら先に入渠させてあげてもいいでしょ

うか》

疲労を感じさせず、榛名は自分よりも駆逐艦を優先するように、拓海に進言する。疲れているだろうに、と拓海は思いつつもそれは口にせず、榛名の言葉を受け入れる。

「……分かった。榛名も、その後にはちゃんと入っておくんだ。神通と、伊勢も」

《はい。それと提督、油断なさらないでくださいね。あのヲ級やり級が、また現れないとも限りませんから》

《神通、気持ちは分かるけど目が座ってるわよ……》

石垣島の西での遭遇戦のことを持ち出し、神通は静かな声に戦意を滲ませながら答える。いつもとは違って剣呑な雰囲気を出す神通に、伊勢が若干引き攣ったような声で呟いた。それでも否定はしない辺り、伊勢の方も思うところはあろうだ。あれだけ航空戦で翻弄されたとなれば、仕方が無いのかもしれない。

神通が言っていることも、あながち間違っではないだろう。作戦前に兼続と話したヲ級flagship艦隊の“消滅”のことを思い出す。疑問点は多すぎるが、万が一ヲ級たちが生き残っている可能性もある。警戒するに越したことはない。

「榛名、どうした……？」

《いえ……。どうにも寒気がして……》

榛名からの返事が来ず、拓海が声を掛けると彼女は、不安を訴えた。疲れが出て来たのだろうかとも思ったが、榛名の声音はそれとは微妙に違うように思える。

その正体を確かめようと拓海は榛名に尋ねようとする、突如として艦内に警報が鳴り響いた。

「なんだ!？」

突然の事態に戸惑いつつ、ディスプレイに目を戻すと『するがから全艦艇へ通信』という表示がされていた。その文字を見て困惑しかけたとき、艦内のスピーカーから緊迫した状況を知らせる放送が流れた。

《鳴川光樹だ。作戦参加中の艦娘隊の全艦艇に、緊急退避を命ず。繰

り返す、全艦艇に現海域からの緊急退避を命ず。現在、巨大生物と思しき二つの影が艦隊へ向け、接近中。撤退支援は、防衛海軍巡洋艦しなの〃以下、同艦隊が行う。艦娘隊は、艦娘を回収後、速やかに現海域から離脱せよ―――

〃あさぎり〃は合流ポイントへ急行し、榛名たちの回収作業に当たった。

作業が済み次第、海域を離脱しなければいけなくなったため、艦娘の入渠と艀装の修理は非常態勢下で後回しとなった。

後部格納庫内は、落下の可能性のある物を固定し、作業員などの非戦闘員や艦娘たちの緊急の避難場所とし、〃あさぎり〃は戦闘態勢へと移る。

それに伴って、多大な電力を消費するCROCSは省電力モードへと移行。非戦闘員も同然な拓海と兼続も後部格納庫へと移動していた。

「白瀬さん、二つの影って……」

合流して全員の無事を確かめた後、拓海は榛名にそう声を掛けられた。

無線で話した時と変わらず、榛名は不安そうな様子を見せている。それを見て、拓海は海中にいう二つの影と何か関係があるのかと考える。

「榛名」

「白瀬さん？」

手を握られ、榛名は驚いたように拓海の顔を見上げる。

彼女の手の平からは小刻みに震えが伝わってきて、怯えているのがよく分かった。いったい、何に怯えているというのか。心当たりがあるとすれば、それは一つしかないだろう。

「怖いのは、光樹からの無線を聞いてからか？」

榛名は凶星を突かれたように目を見開いて、胸元で空いている方の手を握り締める。

息が詰まったように暫く硬直すること数秒、榛名は伏し目がちで頷いた。

「……はい。巨大生物という言葉を聞くと、どうしてもあの姿が浮かんでくるんです」

「ゴジラのことか」

「……………」

榛名の無言を肯定と受け取り、少し離れた位置にいる艦娘たちを見渡す。それから榛名の元に視線を戻すと、震えを抑えるように彼女の手を自分の両手で包み込んだ。

「白瀬さんは、怖くないんですか」

「え……………」

榛名の言葉が不意に胸を打ち、拓海は言葉を失う。

皆も怖がっている。榛名と同じだ。だから大丈夫だ――

そんな言葉を掛けようとした矢先だった。

確かに、怖いことは怖い。自分が乗っている艦が、迫り来る巨大な生物によつて沈められるかもしれないのだ。そう思うことは、元々民間人であつた拓海にとつて当然の感覚と言えた。

しかし拓海のそんな思いとは裏腹に、榛名は彼に言葉をぶつけた。

それは、この世界に来てから恐らく、一番長く一緒にいたであろう榛名だからこそその言葉だった。

「白瀬さん……。何だか、嬉しそうです」

その言葉を聞いた瞬間、拓海は意味が分からず榛名をまじまじと見つめる。

そしてその意味を理解しようとしたところで、拓海は今までにない猛烈な吐き気と頭痛に襲われ、うずくまるように倒れた。

暗転

海上では、“あさぎり”からの報告を受けて防衛海軍の駆逐艦が一

隻、撤退援護のために護衛をしつつ、周辺の警戒に当たっていた。

その駆逐艦もソナーで二つの物体を捉え、周辺に警戒を促した直後だった。

巨大な波しぶきと共に現れた二つの影が、揉み合うようにしながら駆逐艦に衝突。艦橋ごと叩き潰された駆逐艦が、爆炎を上げて沈没していく。

駆逐艦が沈んだ後も二つの影は互いに押し合っていたが、両者は一旦距離を取り、海に浮かびながら睨み合いを始めていた。

片方は黒く巨大で、怨念を孕んだ白い眼で敵を睨むゴジラ。そして、もう片方の海に浮く生物は、《4枚羽》の最珠羅だった。

ゴジラに相対した最珠羅は、海に浮きながら、トビウオのような外見から本来の二枚羽の姿へと変身していく。

それを睨みつけながら、ゴジラは怨念を吐き出すかのように吠え猛るのだった。

暗転

“するが”のオペレーターینگルームでは、光樹たち司令官が情報の処理に追われていた。

ゴジラの鳴き声が辺り一帯に響いた直後から、艦娘を乗せた各艦からの緊急報告が、作戦指揮を担う光樹たちの元に一気に集まってきたためだ。

艦娘を乗せた艦は“するが”含めて6隻で、戦隊単位でも20個ほどはあり、各司令官から集まってくる情報はとてもでは処理しきれない。足りない手を補うために、三笠も予備端末をつかって情報収集に当たらなければならないほど、部屋の中は混沌とした状況になっていた。

「三笠、そちらの状況はどうだ」

「はい。駆逐艦“あさぎり”、“さきざり”、“ゆうぎり”も同様の状況です。各艦に乗る艦娘計22名……、全員に精神的な異常が見られる

……と」

隣に座る光樹に尋ねられ、三笠はたった今まで集めた情報を端的に彼に伝えた。それを聞いて、光樹はやはりと言わんばかりに顔をしかめ、自分の顎を撫でていた。

「この艦に乗る艦娘たちの情報収集は終わったが……、同じだ。ゴジラと最珠羅の巻き添えを食わないところまで退避した直後に、これだ」

上げられてくる報告はどれも、程度の差はあれ「艦娘が錯乱状態に陥った」というものばかりだった。艦装を身に着けたまま、辺り構わず叫びながら砲弾を撃ち散らす者、泣き叫ぶ者、気絶する者——。一連の騒ぎで、格納庫に被害が出た艦も出ていた。

三笠も口では直接的な表現はしなかったものの、事態は重く受け止めていた。

作戦参加艦娘、総勢105名。情報は全て集まり切っていないが、状況からして全員がこの異常に見舞われていると想像するのは容易だった。

「これはやはり……」

声を潜めて三笠が尋ねると、光樹は小さく首肯して呟いた。

「まず間違いない、ゴジラの声だ」

「光樹君……」

「三笠は何ともないな」

険しい表情をより険しくさせながら、光樹は断定的な言い方で三笠の方を見る。その顔から、事態の深刻さに彼が一番頭を悩ませていることが窺えた。

「……はい。——私は、他の皆とは違いますから」

三笠は答えながら、胸元に針が指すような痛みを覚えていた。ゴジラの咆哮によるものではない。初めての痛みでは無いにしても、やはり慣れるものでは無かった。同時に、慣れるべきものでは無いとも感じていた。

そんな三笠の沈痛な面持ちを見て、光樹は今までの表情を崩して彼女から視線を外す。

「……………すまない、気を悪くしたなら謝る。元はと言えば——」

「提督、それ以上はいけませんよ」

ぼつの悪そうな様子の光樹を遮り、彼が口に仕掛けた言葉を言わせなかった。二人きりならいざ知らず、この場では憚られることを言いかけていたのは、三笠の目にも明らかだった。

「だが——」

「光樹君。いくら貴方でも、その先を言ったら軽蔑します」

それは今の三笠を形作っているものであり、同時に彼女が一生抱えていかなければいけない痛みだった。たとえば、その原因が光樹にあつたとしても。

「三笠は、本当にそれでいいのか？」

彼によつて生み出されてから、何度聞いただろうか。それほどに、光樹が三笠に対して罪悪感を持っていることが、彼女にはよく分かった。だから敢えて、その質問をされる度に三笠はこう答えてきた。

「はい。——それが、私にとっての代価です」

暗転

「ぐ……………」

痛む頭を押さええながら、拓海はゆっくりと瞼を開いた。

一番初めに目に入ったのは、自分の両足と灰色の床。背中感触は硬く、そこで漸く自分が壁にもたれかかっていたことに気付く。見覚えのある床と耳に伝わる周囲の喧騒を聞くに、「あさぎり」の後部格納庫であるようだ。

「そうだ、俺は気絶して……………」

時間がどれほど経ったのかは分からない。しかし、直前に榛名から言われた言葉を聞いて気絶してしまった事を思い出すと、途端に胃の辺りがむかつきを訴える。気絶の原因は、間違いなくそれだろう。

「嬉しい？ 俺が……………」

気を失っていたことで幾分落ち着いたのか、拓海には幾分か考える余裕は取り戻せていた。

あの時、本当に自分はそんな顔をしていたのか。していたのなら、何故そんな顔をしたのか。答えを求めて頭を回転させる度、頭痛が波打つように訪れる。

これ以上考えるのは無理かと諦め、拓海は漸く床から視線を外して顔を上げた。

短い期間ではあるが、見慣れた格納庫の風景が視界に入り、行き交う乗組員たちから聞こえる声が入り始める。

「そっち！ 翔鶴と瑞鶴は!？」

「精神安定剤を投与して眠らせました!」

「全員の艀装機能ロック、完了しました！ 艦内に“脱走”した雷と電の両名は、現在追跡中!」

「神通と伊勢は取り押さえました!」

「早く安定剤をこっちにも回せ!!」

「その瑞雲の！ こっちはいいから伊勢に付いてろ!」

「ヴェールヌイは!？」

「艦中央部の甲板にて発見！ 気絶していたそうだ!」

「安定剤、底を尽きました!」

「ちやんと探せ!」

「元々数置いてなかったんだ、仕方ないだろ!!」

「こんな事態予測できるわけないだろうが!」

飛び交っていたのは、怒号に次ぐ怒号。混乱し騒然としている様子に、拓海は理解が追い付かず、ただ困惑することしか出来なかった。

青い顔をして床に眠らされている翔鶴と瑞鶴。男二人掛かりで抑えられながら正気を無くしたように暴れる神通。何かをうわ言のように呟きながら嗚咽する伊勢――。

見知った顔の少女たちが、何故こんな状況に追い込まれたのか。それを拓海に教えてくれるような余裕を持った者はいなかった。現に、こうして拓海が目覚めたことに誰も気づいていないことがその証拠だ。

「そうだ、榛名は……………」

先程から榛名の姿が見当たらないことに気付き、拓海はのろのろと立ち上がって格納庫内を見渡す。

雷と電、それにヴェールヌイが艦内の別の場所にいるらしいのは聞いた。暁と龍驤、それに龍鳳と島風の姿も見当たらない。連装砲ちやんたちが、主を見失っておろおろとしながら彷徨っている。翔鶴と瑞鶴が担架に乗せられ、何処かへ運ばれて行く。

心なしか重い足を引き摺り、周囲に目を配りながら榛名を探すが、やはり見つけることは出来なかった。

「おう、目が覚めたか」

艦娘たちの艀装の保管スペースに近づくと、そこで作業していた男が顔を上げ、拓海に声を掛けてきた。彼は専属でこの艦に乗り込み、艦娘たちの艀装整備を一手に引き受けている。今もちようど、艀装の点検をしていたことは、辺りに置かれた工具や油まみれの恰好から見てよく分かった。

「こんな時でも…………大変ですね」

「事が事だからな。よりにもよって、全員艀装を身に着けてる時だったもんだから、無理にでも引き剥がすしなくては。——て、お前さんはぶつ倒れてたから分かんねえか」

男は肩を竦めながら、足元の工具を拾い上げて艀装の点検作業に戻っていた。数が数だけに、今は少しでも時間が惜しいのだろう。

邪魔をしたかもしれないと思い退散しようとしかけ、拓海は彼が整備している艀装が榛名の物であることに気が付いた。

「それ…………榛名の、ですよね」

「ああそうだ。あの嬢ちゃんなら艦娘用の寢室に連れていかれた筈だ。寝てんのか起きてんのかは知らねえ。事情はまあ…………勝手に耳に入るだろうからそいつは後回しにして、早く行つてやんな」

話はそれまでだと言わんばかりに男は無言になり、拓海を追い払うかのような素振りを見せる。彼の気性からして、そんな態度を取るのは拓海に気を遣つてのことなのだろう。

拓海は心の中で礼を言つて頭を下げつつ、その場を離れた。

格納庫の2階部分には、艦娘のための寝室が設けられている。その寝室の前に立ち、拓海は扉をノックし、音を立てないようにしながら拓海は中へと足を踏み入れた。

「榛名……入るよ」

部屋の中は、全員分の三段ベッドが窮屈なスペースに押し込まれただけの、簡素なもの。地上の鎮守府などに比べると、当然スペースに余裕が無いので窮屈になりがちだ。他の艦娘を載せた艦も大体似たような作りで、大抵はどの艦から不満の声が上がると聞く。『あさぎり』もそんな艦の一つだが、それはまた別の話だ。

拓海は薄暗くされた部屋の奥、榛名が寝ているベッドへ足を向ける。

三段ベッドの下段で、榛名はまるで何かとうなされるように苦しげな表情を浮かべながら眠っていた。

「無事……とは言いやいか……」

あの整備員の男の話を聞いた時点で何となく予感はしていたが、榛名も他の艦娘たちに近い状態にあるようだ。

「俺が、嬉しい……」

榛名の寝顔を見つめながら、拓海は彼女の言葉を反芻する。いつの間にか、思考を阻むような痛みは訪れなくなっていた。そして拓海はそれを、その意味をはっきりと自覚する。

「——は。最低だな、俺は」

もう、彼女に話すと決めた筈なのにこの有様だと、拓海は自分を嘲るように嗤う。

ゴジラが現れてその戦いに巻き込まれ、自分が死ぬことを望んでいたかのようにだと。いや、事実そうなのだろう。

心が、理性が、身体が、拓海の全てが真実を打ち明けることを拒否している。そして同時に、迷いも生じていた。

本当に、榛名に話してもいいのかどうか。ある意味で、他人の手には余る問題を榛名にまで背負わせてしまうことになる。今の自分と

榛名の関係が、果たしてそこまでのものかどうなのかと。

「……榛名は、どうなんだ？」

眠っている榛名の横顔は、まるで自分の鏡映しその物のように見えるた。

Task 07 想いは果てず

『彩水』

白瀬彩水は幼い頃から、何でも無いような、ありふれた兄のその一言が好きだった。

転んで痛かったとき、友達と喧嘩して悲しかったとき、兄と一緒に遊んでいるとき。

置いて行かれそうになったときも、兄はいつの間にか立ち止まっては、彩水の歩調に合わせて歩いてくれていた。

歳は一つしか離れていなかったが、不思議なことに喧嘩らしいことは一度も無く、過ぎして来た。

ねだれば、お菓子を少ないお小遣いで買ってくれたし、勉強も見てくれた。

近所や学校でも、特に仲が良い兄妹として知られていて、彩水としても自慢の兄だった。

物心付いた時から、兄とはいつも一緒だった。彩水が泣きだせば駆けつけてくれたし、それが当たり前のことだと、当の彩水も心の何処かで思っていた。

けれど、兄が小学校の高学年くらいになった頃から、一緒にいる機会も段々と減っていった。彼がサッカー部に入ったからだ。

そこから2年間、兄はサッカーへ打ち込み続け、弱小だったチームも強くなっていた。

彩水は試合には欠かさず応援に行き、それでも彼の背中を追い続けた。

その頃からだろうか、彩水の心には今までにない変化があった。

それは“痛み”だった。兄がいつも傍にるのが当たり前だった時には感じることも無かった痛み。

いや、それは以前に一度だけ感じたものだった。確か、兄が失恋したという話を母経由で聞いた時だっただろうか。母は小悪魔のようにニヤニヤと笑い、兄は顔を羞恥で真っ赤に染めながら打ちひしがれ

ていたのを覚えている。その時に感じたものと、どこか似ていた。しかし彩水は、それでも意図的に考えないようにしていた。

——自分がいつの間にか抱いていた、兄——白瀬拓海への想いを。

拓海がサッカーを始めたことで、彩水は彼と一緒に過ごすことは自然と減っていった。いつの間にか自分を置いて歩き始めた兄に、彩水は寂しさと焦りを覚えるようになった。

どうにかして彼の気を引けないかと思案しているうちに、彩水は中学生へと上がる。

きっかけは、そんな頃だった。

夏休みのある日、彩水は自宅マンションのリビングで、クラスの男友達から借りたアニメのDVDを見ていた。元々はその友達が「面白い」と言っただけで一方的に貸し付けられ、友達付き合いの一環で仕方なく——といったところだ。

欠伸を噛み殺しつつアニメを見てみると、スポーツバッグを提げた拓海が帰宅してリビングを通り掛かった。

『彩水、それ何?』

『教えてあげない』

『そっか』

その時は、自分に構ってくれなかった腹いせにつれない態度を取って見たが、拓海の反応は薄かった。

しかしその1週間後、彼は凄い勢いで件のアニメに付いてあれこれと聞いて来たものだから、流石の彩水も反応に困ってしまった。話を聞いているうち、同じ部のアニメ好きから彩水の見ていたアニメの内容を聞き出して、こっそりとDVDか何かで見ているのだろうかということ、簡単に想像出来た。

最初はそのことに戸惑いこそしたが、兄と一緒に過ごせる時間がまた増えるかもしれないと考えると、彩水は積極的に今まで見て来たアニメや漫画を勧めるようになった。

ただ、拓海の声が聞きたかった。笑顔が見たかった。振り向いてほしかった。そんな気持ちで、彩水はアニメや漫画、ライトノベルに手

を出すようになった。それらが好きだったかどうかわざいば、はつきり言つて好きではなかつたが嫌悪するものというわけでも無かつた。ただ、兄とまた並んで歩きたい――。彩水にとっては、そのための道具に過ぎなかつた。

やがて兄妹が高校生になつた頃、あのブラウザゲームが口コミで爆発的に流行るようになっていた。

旧日本海軍の船が擬人化されたゲーム……という認識しか彩水は持つていながつたが、クラスの男子たちの間でもよく話題になつていたのは覚えてゐる。18歳以上でないとゲームが出来ないらしかつたが、それだけ聞くと如何わしいモノにも思える。実際、彩水はそんなものだと思つて、さほど興味を持つていながつた。

そんな時期に、拓海もそのゲームにはまつてゐることを、彩水は程なくして知ることになる。

拓海が彩水に語るのは、パソコンの画面に表示されている「榛名」という少女であり、彼はその子に夢中になつてゐた。その時点で、彩水にとつては実在しない筈の女の子に拓海を奪われたような気持ちになつてゐたのに、両親の前ではそれをおくびにも出さなかつた。

彩水は、そんな拓海の状態にも苛立ちを覚えたし、画面の向こうの少女にも内心嫉妬してゐた。

どうして振り向いてくれないの。

どうして気付いてくれないの。

どうしてそんな顔で笑つていられるの。

私はこんなにお兄ちゃんが好きなのに。

「榛名」のことを語る兄の姿を見てから、彩水は気付かないふりをしていた気持ちに気付くようになってゐた。同時にそれが、抱いてはいけない感情だということにも。

たつた15年ほどしか生きてゐない少女は、その恋心に酷く悩まされた。

倫理的にもこの国の法律的にも、実の兄妹が結ばれることは有り得ない。それでもその道を選ぶのなら、他の全てを捨てる覚悟が必要か

もしれない。

知り合いが来るかもしれない図書館は避けて、彩水はネットで目に付く記事を探しては悩み続けた。

余りにも重すぎる悩みを一人で抱え込もうとするが、それも限界を迎えようとしていた。

虚構の少女によって気付かされたとは言え、10年以上積み重ねて来たその想いは、彩水には簡単に諦めることなど出来なかった。

そんな彩水の心の葛藤に、両親も何となく気付いていたのだろう。両親は拓海の誕生日の直前、彼が部活に行っている時を見計らって彩水に本当のことを告げることにした。

拓海と彩水は血が一切繋がっていないこと。彼が養子であること。彩水に真実を告げる時の両親の顔は、悲痛なものだった。ずっと言うべきか迷っていたらしく、養子になった経緯までは話してもらえなかったことから、何か大事があったのは察せられた。

勿論、彩水にとっては衝撃的な事実だったが、何処かで納得出来ることもあった。

時々近所のおばさんから、彩水と拓海が似ていないと言われたこと、年が近い割に喧嘩は少なかったこと。——拓海を好きになつてしまったことにも関係はあるのだろう。

拓海がその事を知っているのかと聞いたら、両親は口を揃えて「知らない」と言っていた。

何でも、彼が養子になったのは物心が付く前のことだったらしい。拓海が養子であることを話すかどうかは、ある時期からずっと悩んでいたが、機会を逸していたと言う二人を、彩水は責めることなど出来なかった。

或いはもつと早く知っていれば、こんなに悩むことは無かったのかもしれない。けれど、泣きそうな顔になっている二人を前にしていると、そんな思いも何処かへと消え去っていた。

しかし事実を知っても尚彩水は、両親に対して拓海への気持ちを話すことは無かった。

そんな事があつた後、彩水はまるで何事も無かつたかのような顔で義兄と過ごし、彼の誕生日を迎えた。

その日は珍しく授業が早く終わり全ての部活が休みになつていたため、彩水は久しぶりに拓海と二人で下校した。まだ夕方前で両親は仕事が終わつておらず、帰宅してからも暫くは彩水と拓海の二人きりだった。

拓海からは誕生日のプレゼントはあるのかと聞かれたが、彩水は曖昧に笑つて誤魔化していた。結論から言えば、プレゼントはある。しかしそれが何なのかは、実行に移すまで拓海には悟られないように、彩水は慎重に動くことにしていた。

事前に準備を完了した彩水は、拓海を待たせている彼の自室へと赴いた。

部屋に入った彩水を見た瞬間の拓海の顔は、驚きと困惑で固まつていた。それは無理も無い事だろう。長い時間を共に過ごしてきた妹が、恥ずかしさで火照つた顔で、しかも下着姿で現ればそんな顔にもなる。

声が出せない拓海はただ、近寄ってくる彩水を呆然と見つめていた。起きている事態に頭が追いつかないのが傍目にも分かるほど、拓海は動揺している様子だった。

しかし彩水は、拓海のような様子を気にしないふりをしながら彼の手を取り、ベッドへ座らせた。抵抗は無く、拓海はすんなりと彩水の誘導に従つてしまう。

『——私ね、好きなの。お兄ちゃんが』

その言葉を口にした時の段々と凍り付いていく拓海表情を、彩水ははつきりと覚えている。彼の表情を見て彩水は、兄妹の間に血縁が無い事を知らないのだと確信した。

けれど、その事実を伝えることはしなかつた。舞い上がっていたのもあるのだろう。彩水はその事伝えなくても、きつと大丈夫だという根拠の無い自信を胸に抱いていた。

そうして彩水は拓海を押し倒して、心の赴くままに彼を求めたのだった。

その日から、彩水と拓海の関係は変わってしまった。

彩水が望んでいた恋人になることは無く、拓海は彼女を突き放すようになった。

拓海は家にいる間は彩水を避けて自室にこもりがちになり、件のゲームと勉強に逃げるように打ち込むようになっていた。

話し掛けようとしてもあからさまに無視されるようになり、言葉を交わすのは精々が朝と夜の挨拶だけになった。

彩水の行いがどれだけ拓海にダメージを負わせたかは、明白だった。彼は、彩水と血の繋がりが無い事を知らず、実の妹として接している。そんな相手を一時とはいえ受け入れてしまったことに、拓海は苦しんでいる様子だった。

両親は彩水と拓海の間は何があったかは終ぞ知ることは無かったが、それでも二人の関係が悪化していることだけは感じていたようだった。しかし原因を聞きだそうにも拓海は口を開かず、彩水は「プレゼントを受け取ってもらえなかった」と言うことしか出来なかった。両親に打ち明けるだけの、余裕も勇気も持ち合わせてなどいなかった。

結局彩水と拓海の関係は修復されることは無く、ただ悪戯に時間だけが過ぎ去っていった。

彩水は何とか拓海と仲直りをしようとするが出来る筈も無く、そんな妹を前にした拓海が敵意と罪悪感で一杯になっていることが、余計に彼女の心を傷つけた。

もしあの時、先に血の繋がりが無い事を告げていたら。自分の逸る気持ちを抑えて、この恋心を伝えていたら。

初めからそんな風に伝えて拓海からの返事を待っていたら、彼は自分の気持ちに応えてくれたのだろうか。

ただ無為に過ぎていく日常の中で、彩水はそんなことを夢想するよ

うになっていた。

けれども、自分がしたことへの後悔は無い。ただ待っていたら、拓海はどこか遠くへ行ってしまうのではないか。そんな気がしていたからだ。

彩水のそんな想いとは裏腹に、その日は訪れた。

彩水が高校3年生へと進級し拓海は大学へと進学した後も、二人の関係に修復の兆しは見えなかった。

拓海は自宅を出て大学近くのアパートへと引っ越してしまい、彩水は受験生となったこともあってお互いが会う機会自体が、ほぼ皆無となっていた。

そんな状況になって、彩水の気持ちは諦めるどころか寧ろ募っていく一方だった。

それでも、拓海と会うことが無くなったわけではない。彩水は数少ない拓海と会える時間を利用して、もう一度気持ちを伝えようという決心をしていた。

今度は、周りに誰がいても構わない。純粹に、その想いをぶつけようとしていた。

しかし、そんな想いは叶うことは無かった。

同じ年——彩水が高校3年生に進級し、拓海が大学生になったばかりの、2015年5月5日。

アメリカ合衆国ウエーク島を謎の津波が襲い、島に多大な被害もたらされた。

滑走路や建物のいくつかが破壊され、現地に滞在していた人々にも死者・行方不明者が発生していた。

行方不明者の中には日本人の名前もあり、情報はアメリカを通してすぐさま日本に伝えられた。

謎の津波の被害はウエーク島だけに発生したこと、南鳥島を始めとする近隣の島々では津波が観測されなかったこと、日本人行方不明者

が二人となつてゐること――。

その行方不明者の名前は鳴川光樹と、その友人で大学の同級生である白瀬拓海だった。

1ヶ月に渡る捜索が行われたが結局見つからず、二人は死亡した可能性が高いと、それぞれの家族に伝えられた。

拓海が死亡した可能性が高いと言われた彩水のショックは、相当なものだった。

何とかその事実に向き合おうとしている両親に対し、彩水の方は現実を受け入れることが出来なかった。

学校にも行かず引きこもりがちになり、食事もまともに採らなくなつてしまつていた。

クラスの担任や友達が心配して様子を見に来てくれたがそれに応じる気力も無く、一言も話さないままだった。

そんな状態のまま更に1ヶ月が過ぎて、現実には耐え切れなくなった彩水は両親が出掛けている合間を見計らつて、行動に出た。

いつもなら心身共に疲弊した彩水を心配して、父か母のどちらかが必ず家において彼女の面倒を見ていたが、その日は仕事上外せない急用で家を出ていた。夕飯時には帰つて来ると両親は約束してくれたが、彩水はそんな二人の帰りを待つことは無かった。

ふらりと自室を出た彩水は、覚束ない足取りで台所に向かい果物ナイフを手を取つた。

『もう、嫌』

誰もいない台所で一人呟くと彩水は何の迷いも無く、果物ナイフを自分の首の動脈に突き立てた。最後の力を振り絞つてナイフを引き抜くと、そこから血が濁流のように溢れ出す。

彩水は薄れていく意識の中でただ拓海のことを思い浮かべながら、台所の床へ崩れ落ちた。

白瀬彩水は、死んだ。

目覚めは最悪だった。

鳴川彩水にとって、前世の自分の夢を見ることはそう珍しいことでは無い。かといって頻繁に見るわけでも無い。

しかしその夢の終わりはいつも、自分が自分の首を刺して死ぬというものだ。おまけにナイフを刺した時の感覚から、死ぬ時の血が抜けていくような感覚までしつかり再現されているものだから、気分が悪いどころの話では無い。

「こういう時に限って、あの子が視たものまで入ってくるんだから」

彩水が支配下に置いている千年竜王キングギドラからは、時折彼女が寝ている間に視覚情報の共有が起こる。

情報は千年竜王から彩水への一方通行で、意図していないものだ。

一日分の情報が丸々と彩水の頭の中に入って来るため、共有が起こった日の朝は決まって酷い車酔いをしたかのような感覚で目が覚める。おまけに共有は不定期で予測が付かないが、それでも二日三日分の情報が丸々と送られないだけ、まだましというものだろう。あまり多くの情報を貰っても、脳が焼き切れてしまうだけだ。

彩水が出来ることと言えば、情報が欲しい場所の付近に千年竜王を忍ばせておくくらいのことだ。そうでもしなければ、何のために悪酔いをしたような気持ち悪い感覚を味会わなければならない。

「ま、その甲斐はあったのかな」

夢の所為で気持ち悪さはいつもの倍だが、それに見合う成果はあった。

八重山列島近海に潜ませていた千年竜王の眼から、拓海が所属している艦娘隊の戦いの様子が伝わって来た。

父である鳴川光樹も前世での義兄だった拓海も、何とか作戦を成功させることは出来たようだ。拓海の乗っている艦に危険があれば助

けようとも考えていたが、その心配は無用だったらしい。

拓海が危機に陥ると、警告を飛ばしてくるように千年竜王には教え込んでいるから、それが無かった時点で大丈夫だろうとは考えていた。それがこうして映像の形で現れ、安全を確認出来ただけでも僥倖だ。

尤も千年竜王はいつも拓海がいる場所の近くに忍ばせているので、どのみち彼に関しては安全が保障されたようなものだが。

それでも、幾つか気になる部分があった。

「あのヲ級は生き残ってるし……………。あのヘンな艦娘……………」

千年竜王を通して見た艦娘には、彩水も見覚えがあった。その艦娘が横須賀にいた頃、何度か顔を合わせたことがある。

「峯風ちゃん……………。何でそこにいるの?」

彩水の記憶が正しければ、峯風という艦娘は他の姉妹艦と共に宿毛湾で轟沈した筈だ。少なくとも彩水は、父である光樹からそう聞いている。現場に居合わせた三笠の話からも、それは確かだ。

そう聞いていた筈なのだが、千年竜王が視ていたのは紛れもなく峯風だった。

彩水は艦娘隊の内情に詳しいわけではないが、それでも峯風を始めとした第1世代の艦娘は、事件を境に運用されなくなっていると聞いている。

何らかの事情があるのだろうか、彩水には推測のしようが無い。

ただ、拓海たちを苦しめたヲ級の艦隊を一人で撃破した峯風の姿は、明らかに異常だった。

石垣島周辺での艦娘隊の動きから、それに絡んでいるのが誰かは予想が付いた。

「お父さん、何なの? それ…………」

かつての知り合いに生氣というものはまるで無く、機械仕掛けの人の形のように佇んでいた。動きはなまじ人間と遜色ないだけに、それが余計に見る者への嫌悪感を与える。

「……………まあ、私には関係の無いことなんだけど」

そう呟いて思考を打ち切ると、彩水はベッドから起き上がって寝巻

を脱いで手早く着替える。

父親が軍人ということもあつて家は広く、それは彩水の部屋も例外では無かつた。前世のマンションのリビング並の広さはあるだろうか。一人娘に与える部屋にしては広すぎるが、その分物の置き場所には困らない。

勉強机と本棚だけでなく、自分専用のドレッサーを置くことも出来る。

壁掛け時計を見ると、針はまだ朝の5時を指している。母はまだ寝室で寝ている時間だ。

彩水は母を起こさないように気を配りながら身支度を整えると、音も立てずに家の玄関を出た。

「——もう、帰って来ないかもしれないね」
10年以上過ぎた家を見上げ、彩水は思わず感傷に浸つてしまふ。

「ごめんね。それから、今までありがとう。お父さん、お母さん」
家に向かつて頭を下げると背を向け、彩水は目的地へと向かうべく歩き出した。

彩水は旅装姿で荷物を詰め込んだドラムバックを肩から提げ、右手には禍々しい色を帯びた石を持っている。

それきり彩水は、自分の家を振り返ることは一度も無かつた。

目的地へと向かう彩水の目は、見る者が見ればまるでこれから死に行くように思えただろう。それ程までに、彼女の目には暗い色が宿っていた。

「もう、何処にも行かないでね。お兄ちゃん」

何故だろう。

アレの存在を感じる度に、身体を内側から搔き筆られるような悪寒を覚える。青白い光の束が作り出すキノコ雲は、あの日の記憶を呼び覚ます。雷鳴のようであり、暴風とも地響きとも思える咆哮は、己の何か大切な物を奪い取ろうと身体の芯を震わせる。

目には見えない。目にする事が出来ない。目にしたくない。そう思うのに、ソレは唐突に訪れる。初めてこの目で見るまでは、そんなことなどなかった。

否、艦娘としての知識を蓄える上で、ソレの写真を目にする事は時折あった。

いくつものソレと同類の写真を見ても、何も感じることは無かった。勿論、恐怖を覚えなかったわけではない。ソレの存在を目の当たりにした時とは、まるで種類が違うものだ。

アレの方が、その同類よりも何倍も怖い。当時、何となくそんな感情を抱いたことを今になって思い出す。

長姉が逝った。次姉も、妹も海の底へ消えた。

自身も最後は十分な燃料を持ってないまま、空を相手に奮戦し力尽きた。

そしてあの街に振り下ろされた、理不尽な光を見た。

それを目にしても何も出来ないまま、やがて長い眠りに就いた。

——それから、私はどこにいたのだろうか？

大切な姉妹も仲間も、守るべき人々も守れず、私は何をしていったのだろうか？

——私は、何をしているのだろうか。

どちらが現実で、どちらが夢なのか。

アレの存在は、己という存在を揺るがしてくる。曖昧にしてしま

う。

——私はいつたい、何なのだろう。

窓から差し込む光に、榛名は思わず目を細める。最初に視界に映ったのは、真つ白い天井だった。

いつの間には自分は眠っていたのだろうと思いつつ、榛名は首を動かす。

視線の先には、天井からベッドを囲うように吊り下げられたカーテンレールと、真つ白いシートが敷かれた、ベッドが3台ほど。首を反対の方へ向けければ、天高くから降り注ぐ初夏の光が窓越しに見える。目覚めたばかりで、気怠さが残る体を起こす。

榛名の向かい側にも、同じように4台ほどのベッドが並んでいる。自分の寝ていたベッドを含めれば、8人は入れるだろう。実際、1台のベッドを除けば他は全て、誰かが使っていた痕跡が残っていた。そこで初めて、榛名は自分が病院にいるらしいことに気が付く。

「私は……」

記憶が確かなら、つい先程まで「あさぎり」に乗っていた筈だ。何故、と眠気がまだ残る頭で考える。

「白瀬さんが、倒れて」

それから。それから——。

そうだ、声が聞こえた。おぞましいあの声を、確かにこの耳は捉えていた。記憶が無いのは、その後からだ。

そう考えると、何故陸の病院で眠っていたのかにも得心はいく。

「私は、また……」

ゴジラの声で倒れてしまったのだろう。これで、二度目になるのだろうか。

最初は、南鳥島で敵のジャミングと包囲を切り崩した時だった。

「あの声は、まるで——」

口にしかけたとき、榛名の膝元から規則的な寝息が聞こえた。

視線を下すと、この1ヶ月強で見慣れた人物が榛名のベッドに寄り

掛かり、疲れたように眠りこけている。

「白瀬さん？」

今や榛名の司令官でもある、白瀬拓海。榛名のことを好きだと言う青年が、静かな寝息を立てていた。その顔はまるで幼い子供のように、榛名のざわついた心を鎮めてくれる。

“あさぎり”で巨大生物の接近を知ったときも、まるで子供のような顔をしていた。

初めは、拓海にとっては架空の存在であつたはずの怪獣が見られると喜んでいるのではないかと思つた。しかしそれも、拓海がまるで何かを拒絶するように倒れたことで、思い違いだつたと分かつた。

なら、あの子供のような顔は何なのだろう。

「まるで、殻に閉じこもっているみたい」

拓海がずっと抱え込んでいる何か。彼の妹が関わつていけると言うが、それ以上のことは何も聞けていない。ただ、横須賀で鳴川彩水と出会つたときの表情からすると、二人の間に決定的な出来事があつたのだろう。

あんなにも、拓海を頑なにさせてしまうような何か。それをもし耳にしたとして、いったい何が出来たのだろうか。

「ごめんなさい……。もつと、貴方のことを知っていれば……」

少しは、この優しい司令官の肩の荷を下ろすことが出来たのではないだろうか。そう思うと、榛名は自分を責めたくなくなってしまう。しかし、それは時間が解決に導いてくれることを祈るしかない。二人は出会つてからまだ日が浅いのだ。

「これからは、貴方のこと、もつと教えてください。私も、教えてもらえるように頑張りますから」

ベッドに置かれた彼の左手を、そつと撫でてみる。

ごつごつして大きくて、それでいて繊細な手の平は、彼が歩んできた人生そのものだ。色んなものに触れてきただろうその手で、彼は何を感じたのだろうか。

触れられても嫌ではない、その手で何を思っていたのだろうか。

拓海の手に触れているうち、不思議とそんな気分させられる。

「あら、榛名ちゃん、起きた?」

「ひゃん!」

榛名は思わず、上擦った声を上げて咄嗟に自分の手を引っ込める。顔を上げると、奥の出入り口から悪戯っぽい表情をした三笠が顔を覗かせていた。

「ごめんね、驚かしちゃった?」

「い、いいえ。榛名は大丈夫です……」

「そう?」

榛名の驚きようが面白かったのか、三笠はくすりと笑い病室に入る。

まさか見られていたのかと思うと、身体が熱くなるのを感じるが、榛名はそれを誤魔化すように笑って三笠を迎えた。

「お邪魔……だったかな?」

榛名のベッドに近づきながら問う三笠に、榛名は慌てたように首を振る。寧ろ、こうして彼女と話が出来ること自体、珍しく思えるくらいだ。所属も違う上、特に仲がいいわけでもない。機会があるのは、精々お互いの司令官が関係したときくらいのものだ。

「えっと、お久しぶりです……?」

「何で疑問形? けど、そうよね。直接会うのは、白瀬さんの昇進祝い以来かな。1週間とちよつとね」

その場にいるだけで華やぐような笑みを湛えながら、三笠は答える。言葉にしてみるとさほど長くはないが、榛名にとっては長い一週間だったようにも思える。

「三笠さんは、どうしてここに?」

「ちよつと、皆の様子を見に他の病室も回ってたの」

「他の病室? 皆……? そういえば、この病院って……」

幾つかの疑問が漸く頭に浮かんできて、榛名は首を傾げる。そういえば、この病院どこなのだろうか。窓の外を見るに、呉や横須賀ではないようだ。

「佐世保防衛軍病院だよ。二日前、作戦海域にいた榛名ちゃんたち艦娘全員が倒れて、ここに運び込まれたの。大変だったんだから」

「全員、ですか？」

榛名の右手側、拓海の左隣に椅子を置き、座りながら三笠は首肯する。

「ええ、全員。作戦に参加していた艦娘は、合計105名。状況が状況だったから、鎮守府じゃなくて、こっちに運び込まれたの。榛名ちゃんたちの部隊もね」

「でも、防衛軍病院に艦娘用の施設は……」

そこまで口にして、榛名ははっとする。

艦娘たちは普段なら、各鎮守府や泊地などの工廠や入渠施設で、深海棲艦との戦いによって生じた負傷や武装の修理を行う。陸地での多少の怪我也、入渠で対応出来るようになってる。

入渠を行わず、普段は人が使う病院に運ばれたことを考えると、あの程度の想像はつく。

「榛名ちゃんたちは、損傷以外の理由で運ばれたの。言い換えると、榛名ちゃんと同じ理由……になるのかな」

「それって……」

三笠の言葉に嫌な予感を覚えて、榛名はその先の言葉を口にするこゝとが出来なかった。

榛名と同じ理由。それが意味するところは、一つしかない。

「精神的な理由によるもの、ね。榛名ちゃんはもう、分かっているんじゃない？」

三笠の、見透かすような目を向けられて榛名はつい目を逸らしてしまふ。

「他の皆も、ゴジラの声を……」

「そうなるかな。でも、南鳥島の時は何故榛名ちゃんだけが倒れて、今回は全員だったかについては、何も分かっていないの」

「何も、ですか？」

「ええ」

何も分からない。

その言葉に、榛名はどうしようもなく引つ掛かりを覚える。

何故、自分だけが。そのことを思うと、胸に何かが突き刺さったよ

うに錯覚する。

「……そうね。一度目に倒れたのは多分、榛名ちゃん自身が無意識に抱えていたものなんじゃないかって思う」

「私自身が抱えていたもの、ですか？」

「ええ。けれど二度目は、まだ何も。皆が皆、貴女のように何かを抱えていたとは思えないの。でも、その場にいた全員が倒れたわ」

「全員……」

三笠の言葉にも、引っ掛かりを覚える。何故、ゴジラの声で全員が倒れるような事態になったのか。

「倒れたのは、艦娘だけですか？」

「ええ。司令官や各艦の乗組員は大丈夫だったって」

それを聞いて、榛名はますます困惑を覚える。その場にいた面々の中で艦娘だけが倒れることなど、有り得るのだろうか。

「他の子たちは、何と？」

榛名の問いに、三笠は暫しの沈黙を挟む。

「そうね……。ゴジラの声を聞いた時のことは、何も覚えていないか、上手く思い出せない。そんな状況みたい」

「それは、三笠さんも？」

「私は……」

三笠は言葉に詰まったのか、口を閉ざしてしまふ。

ゴジラの声は、あの時あの海域にいた誰もが耳にした筈だ。艦娘だけが影響を受けたと言うのなら、三笠も例外ではないだろう。そう思っ、榛名は三笠の次の言葉を待つ。

「——そう、ね」

「他の子たちの様子も見てたって言っていましたけど、大丈夫なんですか？」

「いいの。その方が、少しは気が紛れるかなって思ってたところもあったから。ごめんね？ 二人きりのところ、邪魔しちゃって」

「そんな、とんでもないです」

茶化すように微笑む三笠に、榛名はそんなことは無いと首を振る。

ゴジラや拓海のことと色々と考えがちになっていただけに、三笠と

の会話は幾分か気分転換になっていた。尤も、話の内容はそれほど明るくは無いのだが、それでも気持ちを整理するのに役立つていた。「いいの、いいの。正直、榛名ちゃんたちのことは羨ましいって思ってたから」

「羨ましい……ですか？」

「ええ。正面から向かい合おうとしているあなたたちが、私には羨ましく思えるの」

「でも、三笠さんは鳴川少将と、その……」

時々耳にする噂や、実際に鳴川光樹と三笠が話している様子を見るに、二人は恋人や愛人のような関係に見える。その当事者である筈の三笠がそう思うというのは、どういうことなのだろうか。

「何て言ったらいいのかな。同じものを分かち合っているという意味なら、そうね。でも、結局そこ止まりなの。恋人とはとても呼べないかな」

「どういう、意味ですか？」

「どうもこうも、その通りの意味だよ。——だから、拓海君と榛名ちゃんが羨ましいなって、そう思ったの」

「え……」

どこか遠くを見つめるように、三笠は悲しげな笑みを浮かべていた。それでいて、何かを期待するような眼差しを、拓海の方へ向けている。

「結局拓海君には、さん付けで呼ばれたままだったな」

寂しそうに、三笠はぽつりと呟いた。その横顔を見ると、また違う何か突き刺さるような感覚に襲われる。

「もしかして、三笠さんは——」

榛名の言葉を遮って、三笠は首を横に振る。

「榛名ちゃんが想像している通りなら、それは多分、違うよ。仮にそうだったとしても、私はそんな資格、当の昔に無くしちゃったよ。それに……」

「それに？」

「今の私に生きる意味なんて、無いから」

何故そんなことを言うのか、などと軽々しく口にすることは出来なかった。

三笠の過去について、榛名はあまり多くを知らない。しかし、言葉の端々から何か辛いことがあったことは感じ取れたが、はたしてそれを聞いてもいいのだろうか。

拓海も、今のところ自身の過去について話すのを拒んでいる。受け入れがたい、何かを。三笠もそれを抱えているのだろうかと思うと、聞くに聞けない。

相手の心に土を付けずに聞き出す方法を、榛名は持ち合わせていなかった。

「何も、聞かないの？」

沈黙する榛名に、三笠は不安げに問う。

その不安は、問われることへの恐怖なのか、それとも問われないことへの期待なのか。あるいは、その両方か。

「ええ。三笠さんが自分から話すまで、私は何も聞きません。私、こう見えて耐えるのも得意ですから」

両手に握り拳を作って、榛名は意気込んでみせる。

聞いても話してもらえないなら、話してくれるまで待つしかない。三笠のことも、それから拓海のこと。押しして駄目なら、引いてみることも肝心だろう。

そう考えていると、三笠は不意にくすりと小さな笑いを溢した。

「そっか、ありがとう。そういえば、貴女はそんな子だったね。辛抱強いつていうのかな。呉の最期のときも、南鳥島のときも榛名ちゃんは一人になっても頑張ってたね」

三笠の表情から暗い色が消えて、幾らか明るくなったように見えた。その様子に、榛名も安堵する。

「私は、皆を守るために自分ができることを、ただだけですから」

「強いんだね、榛名ちゃんは。艦娘かどうかは関係なく誰かのために悩んで、最後まで戦える……。私とは、真逆ね。私は、自分のことばかりなもの」

「いいえ、私だって三笠さんと同じです。守れる誰かを守れないのは、

もう、嫌ですから」

——あの時、金剛お姉さまたちの傍にいたら。

——あの時、もつと空を舞う敵機と戦えていたら。

この身体では無い頃の記憶と後悔は、今も榛名を苛み続けている。それ故に、ゴジラの声を聞いた時、あの日の記憶が呼び起こされるのだろう。

「そうね……。自分の手が届く限り、守りたいものを守りたいと思うのは、自然なこと。……ねえ、榛名ちゃん」

「はい、何でしょうか」

「たとえば守りたいものに裏切られることになっても、貴女はそれでも守り続けられる？」

「それは——」

三笠に正面から見据えられ、榛名は答えるのを思わず躊躇う。

彼女はいつたい、何を言っているのだろうか。

覚悟を問われているのか。それにしても、こちらを試しているようには見えない。ただ純粹に、切実に何かを問われているような気がする。一瞬揺らいだ彼女の瞳を見て、それは理解出来た。

「そう、よね。すぐには、答えられないよね。ごめんね、可笑しなこと聞いて」

「い、いえ……」

三笠は何かを諦めたように笑って、拓海と榛名の頭を撫ぜる。

「貴女には信じるものがあるから、きつと最後まで立ち続けられるんだと思う。国があり、家族があり、友がある。信じている限り貴女はきつと、何者も通さない。でも、そうじゃなかったら？ 背後にいる誰かから刺されることになっても、それでも貴女はその人を守る？ それだけ、聞きたかったの」

「三笠さん……」

榛名にはそこまでの自覚は無かったが、確かにそんな部分はあった。国、家族、友、そしてそれらがある幸せな明日を榛名は願っている。そのためなら、最後の最後まで戦える。

しかし、守りたい誰かに裏切られるということまでは考えたことが

なかった。今この場で三笠に言われなければ、それを知らないまま榛名は戦い続けていただろう。

艦娘となつてまだ日が浅い榛名が、三笠の問いに答えられないのは無理もない。

「ごめんね、折角起きたばかりなのに、長居しちゃって」

「そんな、こちらこそお時間をいただいて——」

「いいの。少し、話してみたかっただけだから。それじゃあ、私は提督のところに戻るわね」

そう言うのと三笠は帽子をかぶり直して立ち上がり、出口の方へと歩いて行く。その背中は先ほどまでの弱々しい少女のそれではなく、一人の艦娘軍人のものに見えた。

ふと、三笠は帰り際に振り返つて、榛名に視線を向ける。

「榛名ちゃん。誰にでも、話したくない過去の一つや二つはあると思うわ。私みたいにね。けれどね、それを知りたいのなら覚悟をして。貴女が頑張るだけじゃ、何も知ることなんて出来ない。それが、辛くて重い過去であるほどね。だから、もつと貴方のことを知っていれば、なんて言葉、拓海君には絶対言わないでね」

それだけ言うと、三笠は笑みを浮かべて手を小さく振り、病室を出て行く。

彼女の言葉に、今度こそ榛名は何も言うことが出来なかった。

「あれ……。榛名、起きてたのか？」

暫く呆然としてしていると、傍で眠っていた拓海が身動きをして、瞼を擦りながら頭を上げていた。

「白瀬さん、おはようございます。その、聞いてましたか？」

「聞いてたって、何が？」

「そ、そうですか。それなら、良いです」

不思議そうに首を傾げる拓海を見て、榛名は安堵する。

今までの発言を聞かれていたら、恥ずかしかったり気まずかったりで、顔を合わせられない。

もつとも、今もあまり顔を合わせたくはないのだが、榛名はその気持ちをぐつと飲み込んだ。あまり、拓海に心配事を増やしてほしくは

無かったからだ。

「そっか。ところで榛名、もう体の方は大丈夫なのか？」

そんな榛名の想いを知ってか知らずか、拓海は気遣わしげに声を掛けてくる。ゴジラの声で倒れたことを聞いているのだろう。

実のところ、三笠との会話で“自分自身が抱えているもの”が何かは分かった。それが何なのか分かっていれば、幾らか向き合い様はあるだろう。

しかし、もう一つの何かの正体が榛名には分からない。ただ、あれはまるで誰かに呼び掛けられているように思えてならなかった。

それでも、この確証の無い不安を拓海に伝えるのは憚はばられた。だからこそ精一杯の笑顔で、こう言うしかない。

「はい、榛名は大丈夫です！」

Task 09 歪んだ心

佐世保で榛名が目を覚ましてから二日が経った7月1日、拓海は第1独立遊撃艦隊の面々を連れて、呉に来ていた。

呉の街は未だに、先日の被害の爪痕が目立っていた。鎮守府の方は仮復旧の目途が立ったようだが、復旧はまだまだこれからというところだろう。

そんな呉に来たのは、拓海に会いたいという人物がいるから会ってくれないかという、光樹からの伝言に従ったことだった。

「やー、ごめんね？ 急なお願い聞いてもらっちゃってさ」

呉鎮守府の駐車場で、拓海の前を歩く茶髪で白い司令官服を着た女性に、気安い調子で話しかける。

「いえ、名前を聞いて驚いたものでしたから。でも何故、熱海さんが案内を？ ここには何度か来ているのですが……」

肩にかかる長さの髪を後ろで縛り、制帽を被るその女性は、熱海鈴音大佐。舞鶴鎮守府所属、第4艦隊の司令長官を務めている。

背丈は拓海より10センチほど低いが、均整のとれた体をしている。よく整った顔で目は釣り目気味、鼻は高くも無く低くも無いが、美人と言える。

年齢は拓海より一回り上だと思われるが、相応の落ち着きを持った女性だ。堅そうに見えて、その実意外と話しやすく、好感が持てる人物だった。

「これから会う女性は、私たちとしては十分警戒しなくちゃいけない相手ってことさね。そいつが君に変なことを吹き込まないか。逆に、君がそいつにうっかり機密情報まで漏らしてしまわないか。その監視役ってことよ」

「鎮守府の司令長官自ら、やらなきゃいけないことなんですか」

「ま、軍にも色々事情があるってことさね。君には早いかもしれないけど」

気安い調子はそのままに、拓海は鈴音に話をはぐらかされてしま

う。

話しやすいのは確かだが、仕事に関わることとなると口が固い辺りは、根は真面目なのかもしれない。

「詮索はそこまでしておけよ、童^{わっぱ}。汝がそれ以上踏み込むのなら、こちらとしても実力行使に出る用意はある」

鈴音の左隣、拓海の左前から顔を向けて凄む少女は、艦娘の敷島だ。敷島型戦艦1番艦であり、三笠の姉にあたる。

身長は鈴音よりやや低く、見た目は妹の三笠とよく似ている。ウェーブがかかった長い黒髪は鈴音と同じように結わえられ、服は黒い軍服のような上着を羽織っていない点を除けば、ほとんど三笠と同じ装いだ。

それでいて目付きは狼のように鋭く、人を寄せ付けない威圧感がある。

敷島は右手をスカートのポケットに突っ込み、何かを取り出そうとする仕草を見せていた。

「やめなさいな、敷島。このくらい、いつものことでしょ？ 元々、あの女は私が一応受け持つてるんだし、仕方ないさね」

「仕方なくなどないだろう。だいたい、鈴音が余計なことを言わねば良かった話だ」

「そうなんだけどねえ。敷島も、その言い方だとまるで私たちが何かしているって言ってるようなもんよ?」

「なっ、ずるいぞ鈴音!」

「てへ、ごめんごめん」

敷島の行動を咎める鈴音に対し、敷島が抗議の意思を示し、鈴音がそれを逆手に取って今度は敷島をからかう。嵌められたことに気付いた敷島は顔をほんのりと赤らめて、鈴音に詰め寄り、それを鈴音はわざとらしく舌を出して笑う。

傍から見ると実の姉妹のようなやり取りに、拓海は苦笑いをしながら、そつと胸を撫で下ろした。

敷島から向けられた威圧感、あまり心地の良いものではない。しかし、そんな彼女を鈴音が弄ぶことによつて、拓海は救われた形と

なっていた。

「何というか、凄い方たちですね。白瀬さん」

「まあ、な」

冷や汗を掻きながら、拓海は左隣を歩く榛名の言葉に同意する。

親しみやすい雰囲気や纏う女性と、実直な少女。まるで正反対の二人だが、傍から見ると互いをよく信頼している。

三笠と光樹が支え支えられるような関係なら、敷島と鈴音は対等な相棒のようなものに思えた。

「こうして見ると、敷島さんって三笠さんによく似てるな」

「ええ、瓜二つです。私が、金剛お姉さまと間違われたのもよく分かります」

後ろ姿を見ただけなら、三笠が髪型を変えたのかと思うほど、よく似ている。纏う雰囲気や目付き、佇まいは全然違うので、すぐに別人だと気付くことは出来るだろう。

そういう意味では、榛名と金剛も同じようなものだと思っただけだ。拓海は思っている。

「そうかな？ 榛名は榛名だって、俺はすぐに見分けられたけど」

「ふえ……」

拓海が当然とばかりに言うと、それを聞いた榛名が急に押し黙る。何か変なことを言ったのかと思えば隣を歩く榛名を見ると、彼女は顔を赤くして俯いていた。

それが照れているのだと気付くと、拓海も途端に気恥ずかしくなり、つい視線を逸らしてしまう。

どこを見るべきかと迷い結局前を向くと、凍て付いた目をした敷島が立ち止まって振り返り、拓海に向かって取り出した拳銃を突き付けていた。

その殺気に当てられて拓海は思わず足を止め、それに気付いた榛名も立ち止まり、困惑した様子で敷島の方を見ていた。

「敷島、さん？」

「我の前で、その名を口にするなよ、童」

「三笠さん、のことですか……？」

水のように冷たい殺気に唾を飲みながら、誰のことを言っているかを考え、拓海は三笠の名前に思い当たる。しかしそれで、何故敷島に殺気を向けられるのか、全く分からない。

「二度は言わんぞ。次に口にすれば、貴様の脳天に穴を穿つことになる」

引き金に指をかけ、真つ黒な銃口が拓海に向けられる。

ふと拓海の脳裏に、以前にもこの呉鎮守府で銃に向けられたことが過る。確か、磯貝風介という男だった。あの時も、その男に殺意を向けられていた。

しかし、拓海が今直面している殺意は、全く別の種類のものだった。嫉妬でもなければ、恐れでも憎しみでもない。これは「怒り」だ。たった一つの感情で、ここまで凍り付くような殺意を向けられたことは、拓海にとって初めてのことだった。

「でも、姉妹なんじゃ……」

辛うじて言葉を絞り出すと、敷島の殺意が更に鋭くなる。圧倒された拓海は、それ以上言葉を発することが出来ない。榛名も拓海と同じように、呆然とその場で固まっていた。

「それがどうした。私の前でその女の名を口にすると、余程命が惜しくない見えるな」

「じゃあ、何で——」

拓海の声を遮るように銃声が聞こえ、直後に耳元を銃弾が掠めている。そこで初めて、拓海は自分が撃たれたのだと気が付いた。それでも傷一つ付いていないということは、今の発砲は敷島の警告のためにならざる外したということだ。

「くどいぞ。死にたくなければ、その口を閉じていろ」

「ちよつとー、敷島？ 先、行つてくれる？」

不意に、拓海たちよりも少し先で立ち止まっていた鈴音が、どこか間延びした声で鎮守府の本庁舎を指さし、敷島に話しかけた。

その声に敷島は一瞬呆けたような顔をしたかと思うとすぐに表情を戻し、引き金から指を放して拳銃を下す。

「承知した。先に庁舎で待っている」

そして溜め息を吐き、拳銃を仕舞うと踵を返して、鈴音の傍を通り抜けて行った。

鈴音は敷島が本庁舎へ向かったのを見届けると、拓海たちの方へ振り返って手を合わせた。

「やー、ごめんね。うちの子が悪いことしちゃったよ。今、警備兵の所に行かせたから、それで勘弁してね」

「それはその、お気になさらず……。こちらこそ、すみません。聞いてはいけないことを聞いてしまったみたいで」

拓海が謝ると、鈴音は大丈夫だと言わんばかりに首を横に振った。本庁舎の方を見れば玄関前で敷島が、慌てた様子の警備兵に対して何やら話をしている様子が目に映った。

鈴音がわざと軽い調子で言うことで、敷島に事後処理をさせたのだろう。

「三笠のことね。敷島はその事に関しちゃ、誰にでもああさね。他の子たちを先に工場へ行かせてて良かったよ。怯えられたら、後々支障があるし」

榛名以外の艦娘たちは、呉鎮守府に到着した時点で既に別行動となっている。これから会いに行く人物のことを考えれば、別行動の方がいいだろうという鈴音の提案だった。

工場行きという指示を与えただけで、実質敷地内での自由行動を認められたような形だ。

「あれは本気で、殺されるかと思いました……」

「榛名の方は大丈夫？」

「その、大丈夫じゃなかったです……」

「ま、それが普通の反応さねえ」

拓海と榛名の反応に、鈴音はさも当たり前前のように頷いていた。敷島の、あの殺気だった様子は初めてではないのだろうか。

「熱海大佐、敷島さんは以前にもあんな風になったことが？」

「ま、一度や二度じゃないさね。けどあそこまでの殺気は、三笠の話を振られたときぐらいかな」

「それ以外で殺気を放つことがあるんですか？」

「やー、私と敷島もそこそこ付き合いが長いからね。色々あるってことさね。けど、今大事なのはそこじゃないよ」

拓海の指摘に鈴音は一瞬苦い顔を浮かべてから、それをすぐに誤魔化しつつ本題へ話を戻す。気になることではあったが、何か事情があるらしいことを悟りつつ、拓海はその話題を追及することはやめた。

「それで何故、敷島さんは三笠さんの名前を聞いてあそこまで怒って――」

敷島の殺気から感じ取った感情を、拓海は口にする。あの時彼女が抱いていた感情は、ほぼ間違いなくそれだという予感がある。しかし何故、三笠の名前を聞いただけであそこまでの怒りを露わにするのか、拓海には知りようのないことだった。

「へえ、あれだけの殺意を向けられて、意外と冷静なんだね、君」

鈴音は驚いたような表情を浮かべ、それから面白そうな表情に変えて拓海を見やる。

そんなにおかしいことを言ったのかと思いつつ、榛名はどう思ったのか確認しようと隣に視線を移す。

拓海に無言で問われた榛名は、鈴音からも視線を向けられ、戸惑いながらもそれに答えた。

「その、私は突然のことで見ていることしか出来なくて……。白瀬さんに言われて、やつと今納得がいきました」

「ん。素直でよろしい。普通の人は、あの状況であそこまで冷静に物事を考えられないものだよ。大抵、困惑したり混乱したりするものだと思うね。艦娘の子たちでもまあ、そこまで考えられないさね」

「そう、なんですか？」

まるで自分が普通じゃないような言われ方に、拓海はただ困惑するしかない。いったい何故、ここまで驚かれなければならないのだろうか。

「――と、また話が脱線したね。それで三笠のことだけど、敷島が何であそこまで怒るか、想像はつく？」

「それは、全く……」

「敷島がああなったのはね、ある事件がきっかけなんだよ」

「事件、ですか」

「そう。2年前に起きた、宿毛湾泊地襲撃事件は知ってる？」

拓海がその事件の名前を最初に聞いたのは、この世界に飛ばされてきた時だ。南鳥島で、榛名から聞かされていたことを思い出す。

その後も司令官になるための勉強中にも、自分で調べていた。

2年前の2046年、反攻作戦ために宿毛湾泊地に第1世代の艦娘たちが集められていた。当時の戦力で、およそ9割程度だったと記録されている。

作戦開始のため、各部隊の艦娘たちが出撃しようとしたところに、敵の大艦隊が襲来。空母ヲ級を主力とした、新種を含む敵艦隊に一方的に泊地ごと蹂躪され、艦娘は敷島と三笠を残して全滅したとされている事件だ。

「その顔は、知ってるって顔ね。ま、横須賀で一度は教えられてるだろうし、そのくらいは当然さね。で、その泊地にはね、敷島と三笠の姉妹艦がいたの。——敷島型戦艦の他の姉妹艦の名前は、分かる？」

「確か、朝日と初瀬——ですよね」

「そ。朝日はその時、横須賀について無事だったんだけどね。もう一人の方……、初瀬は襲撃の際に撃沈されたの。最初のきっかけは、それさね」

「え——」

鈴音の口から述べられた事実には、拓海は言葉を失う。

宿毛湾泊地襲撃事件では、艦娘隊内部でも公表されていない事実が多い。敵がどの程度の規模だったか、自軍の戦力の程度は知ることが出来たが、被害の全容が明らかにされていないのだ。

特に、大佐以下の人間で知る者は拓海の知る限りおらず、当時各部隊を指揮していた司令官は昇進や転属などで、簡単に会えなくなっていた。

「その時に私も、あの場にいたんだよ。敷島の司令官だからね、あの子と一緒にいた。それはもう、酷い有様だったよ。辺りは火の海で、海が真っ赤になるほど血がたくさん出て、あちこちに肉片が飛んで。初瀬も、海に出ようとするところをやられてね。頭は粉々に吹っ飛ん

で、手足も千切れたり変な方向に曲がったり、壊れた艤装が胴体に突き刺さったり」

「——ッ」

初瀬がどんな艦娘だったかは分からないが、鈴音の語る光景がありありと目に浮かぶようで、拓海はその凄惨さに眉を顰める。

榛名も、あまりのことに口元を抑え、酷く狼狽えた顔で絶句したまま、鈴音の話を聞き続けていた。

「三笠は襲撃が終わってから、その事を知ってね。私と敷島のところに来て、『初瀬お姉ちゃんはどこですか』って。足元の遺体が初瀬だつて教えたなら、もの凄く取り乱してたね。大切な姉妹だから、当然さね。敷島も泣きながら、必死であの子を宥めてた。その後、色々あつてね」

「色々……ですか」

拓海の知る限り、落ち着きがあつて華のあるあの少女が、感情を酷く揺れ動かされるほどの出来事。当時の三笠が、そして敷島がどれほど辛かつたのか。拓海には、はかり知ることなど出来ない。

「そ。一時期、三笠は精神的におかしくなつてしまつてね。何とか立ち直つただけど、その立ち直り方が問題だった。敷島はそれに激怒して、今では絶交状態さね。それ以来、三笠の話をすると、あんな風に威嚇するようになったの。私に対してもね。だからまあ、あの子の前では三笠の話はしないように、お願い出来る？」

「——はい。肝に銘じておきます」

「ん。物わがりの良い子は好きだよ」

拓海が応じると、鈴音は満足したように微笑んだ。

しかし、三笠の過去にそんなことがあつたのは、拓海にとって意外なことだった。事件に巻き込まれたことだけは知っていたが、まさか姉妹間の関係が途切れてしまうほどのことだったとは、想像していなかった。

「——三笠さんの立ち直り方が問題だった、と言っていましたけど、何があつたかは聞いても良いですか？」

本当ならこのまま話を続けるべきではないのだろうが、最後に一つだけ気になつて、拓海は鈴音に質問を投げかける。

「それに関しては、私の方から話すことじゃないさね。ただまあ、未だに色々引き摺ってるみたいだからね、あの子は。それが、敷島を余計に怒らせてるんじゃないかとは思うね」

「あ、それで——」

鈴音の話を聞いていた榛名が、何かを理解したかのようにぽつりと呟いた。

「榛名、どうかした？」

「い、いえ。大丈夫です、白瀬さん」

「はあ……」

いったい、何に気付いたのだろうか。気にはなったが、大丈夫だと言う榛名を拓海はこれ以上問うことはしなかった。

そんな二人の様子を見ていた鈴音が、何かを察して口を開く。

「なるほどね。榛名は三笠のそういうところ、見たんだね。そ。あれが三笠の現状さね。今はどうか、支えになるものを見つけて立っているような状況。——白瀬も、三笠には気を付けなさいね」

鈴音からの警告に、拓海はただ困惑することしか出来なかった。

そもそも、拓海には思い当たる節が無い。本当に、榛名は三笠の何を見たのだろうか。

「すぐに白瀬にも分かる。あの子は、支えになるもの、継げるものを見付ければ、簡単に寄り掛かってくる。心を許せる相手なら、誰彼構わずね。昔は、そんな子じゃなかったんだけど。今のあの子の精神状態は、余計に質が悪いさね」

「そんなに……ですか」

「うん。だからまあ、あそこまで歪んだ人間関係を作り出してしまったんだろうね」

「何の、話ですか」

「さてね。——君もそうなる前に、心の整理を付けておいた方がいいよ。今の君は、早く死にたがっているように見えるから」

思ってもみなかった言葉に、拓海は咄嗟に後ろへ後退る。

今、目の前にいる女性は何と言ったのか。いや、それは聞こえていた。そうではなく、何故こちらを見透かすようなことを言ったのか。

まるで、知らないうちに自分の全てを知られているような感覚がする。それが、拓海には気持ちが悪くて仕方がない。

「なん、で……」

「——知ってるのか、って？ や、私は何も知らないよ。ただ、そんなんじゃないかって思っただけ。君が、こちらに来てからここに来るまでの言動を観察していれば、私にはそのくらいの想像はつくってことさね。情報の整理と観察、これらは私の仕事と特技だからね。隠したって無駄よ」

拓海は、自分が元々この世界の人間では無いということ、その後に関く鈴音の言葉を前に唾を飲み込む。

「貴女はいつたい、何者なんですか」

「私の所属に意味はないさね。それに、これから君が会う女性も、君がどこからやってきたのかくらいは、推測してると思うよ」

拓海は、何も言い返すことが出来なかった。否定すべき要素は何処にも見当たらない。それら全ては、拓海にとって事実だった。

「さて。これ以上の雑談は相手を待たせちゃうからね。早く行くようにしましょうか。ごめんね、いじめちゃって。だから、そんなに怯えた顔をされるとお姉さんも流石に傷つくさね」

「ああ、いえ……」

鈴音は腰を屈めて上目遣いで謝るが、拓海としてはどの口が言っているのだという思いでいっぱいだ。

拓海の中で、鈴音は第一印象とは裏腹に得体の知れない人物という認識が、出来つつあった。

振り返って本庁舎の方へ歩き出す鈴音の後を行ながら、拓海は隣の榛名の様子を窺う。

拓海の視線に気が付いた榛名は、彼を安心させようと笑みを浮かべるが、ぎこちなさが消えていなかった。

そんな重い空気の中、拓海たちは鎮守府本庁舎の中へと入って、これから会う人の元へと行くのだった。